

[ウマ娘×TOUGHシ
リーズ] オグリ家と宮
沢家との日常シリーズ

日常系好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※この作品は「ウマ娘シンデレラグレイ」と「TOUGH」シリーズの高校鉄拳伝説龍を継ぐ男とのクロスオーバー作品となります。

『怪物』オグリキャップと『灘神影流現当主』宮沢熹一、片親同士の二人が『もしも、幼少期に宮沢静虎とオグリのお母さんとの結婚により兄妹となったら?』という概念の下で今まで私が書き溜めていた文を少しだけ書き直す形で投稿させて頂きます。

時系列はバラバラの短編、更には『二人が兄妹となり、幼少期にタマモクロスと出会っていたら?』『等の追加の概念も混じった物となりますが興味のある方が居ればお付き合いの程、宜しくお願い致します。

※時間軸としてはシングル開始時期に龍を継ぐ男関連の話がスタートぐらいです。

※基本的には主人公であるオグリキャップ、キー坊の掛け合いをメインに。

※恋愛色はキー坊とオグリに対して僅かばかり向ける者が居るといふ程度です。

目次

高校鉄拳伝時の宮沢家の朝 | 1

NEO宮沢熹一も悪くない? | 5

二人の少女と中山レース場、宮沢家の墓

参り事情 | 8

ベルノライト初めてのお宅訪問 | 12

迷惑叔父さん登場 | 16

ラーメン屋「幽玄」へ行こう | 22

タマは…無いな | 28

彼女が走ったその先に | 35

宮沢家に鬼の子供達がやってきた

39

尊鷹おじさんに聞こう! | 43

ベルノライトの女子会と靴選び | 48

日下部寛吾、お母さんと会う | 54

オグリと悪魔を越えた悪魔おにぎりおじ

さん | 60

キー坊と北原、出会う | 67

人喰いポメラニアン登場 | 71

奇人&キンちゃんと神戸で会う | 77

父の日編 オトン達を覚醒させろっ!

83

彼岸の夢 | 89

リキちゃん、オグリにお祝いをする

97

風のミノルと土(ダート)のイナリの話

お蔭	177	お母さんは息子が心配	297
“奇跡の子”と“怪物”を繋ぐは悪魔の	167	光見えぬ者達の社会貢献	283
実在した!!	167	稲妻龍、ハワイに出没注意	272
驚愕! 極楽岳に潜むと言われた天狗は	160	宮沢熹一 中央を歩く	257
タマとキー坊	151	肉切包丁の黒い煌めき	248
皇帝とスーパーカーとウサギさん好き	139	八重桜と金髪猿	237
鯨と弾丸	133	由美子叔母さんに会おう!	224
タイ・バンコクを堪能しよう	133	機械のチカラ	213
灘・“真”・神影流について	122	“見土” “聴雷”	204
北原、メジロアルダンの生き様を知る	113	灘の食法を体験しよう	197
		191	
		灰色のオッドアイが“怪物”を見抜く	182
		オグリと気になる人差し指	

アクマ・オウジ・オグリ	—	311
かしまし！ カサマツガールズ登場		
329		
オグリ・ラツシユの謎を追え	—	345
二人の瞳が白いキャンバスに写す物		
367		
盆の暮れに戻る者達	—	381
皇帝とジンギスカン	—	398
しだれた桜とコンプリート・ファイター	—	414
拳術館とタマモクロス	—	424
神戸の夜景に煌めく二つ名	—	434
オグリキャップ 灘を回る	—	451

ウマ娘の歴史を聞こう	—	468
電車で旅してみよう	—	480
回転寿司屋へ行こう	—	491

高校鉄拳伝時の宮沢家の朝

“此処”は神戸の宮沢家が住まう団地の一室。

今の時間は食卓の準備を進める母と、手伝おうとしたら『私がやりますから』と言われ、シユンとした表情でテーブルで新聞を読んでいる父との “二人だけのひと時” である。

「あら、もうこんな時間？ 熹一ったらまだ寝てるのかしら」

「あきまへん、熹一はもう高校生 一人で起きれるようになった」

「ふふつ ハイハイ、ところでオグリは？」

「あの子はいつも通り早くに起きて走り込みを終え今は風呂です 全く…熹一もあの勤勉さを少しは見習って欲しいわ」

「そう…静虎さんもいつもありがとう 子供の頃からあの子の日課に付き合ってくれて」

「いえ、オグリはもう私では練習相手にも……（サツ）」

“少し褒めただけで照れて新聞で顔を隠してしまう” …結婚して大分経つというの
に変わらない初心^{うぶ}さを見せる夫を前にして妻は穏やかな表情を見せていると……

「あつ、お母さんおはよう シャンプーがそろそろ無くなりそうなんだけど…お父さんはどうしたんだ？」

「それがね聞いてよオグリ、静虎さんつたら……」

「だああああ！ アカン、遅刻や遅刻!! 何で親父もお袋もワシの事起こしてくれへんのやつ!!」

「熹一、朝から大きな声を上げない! ご近所さんに迷惑でしょう!」

「うぐつ! お袋…スマン」

「せや熹一、お袋の言う通りや オグリは登校時間を考えて走り込みを終えとるつちゆうにお前ときたら…」

「すまないお父さん、少し席を詰めてくれないか？」

「お、おうつ…これくらいでええか？」

「ニヤニヤ）鬼みたい怖い親父がタジタジとは、娘つちゆうのはおつそろしいのお」

「キー坊もおはよう そろそろ登校時間だろう、大丈夫か？」

「があああ! せやつたわ! お袋、飯よそつてくれや!!」

「もう準備できてるわよ 喉に詰まらせないようにゆつくり食べなさい」

「イヤ、お袋…ワシ、ホンマに急いで………ハイ」

「うん、宜しい」

「外では喧嘩ばかりのキー坊も家ではお母さんに敵わないんだな」

“二人だけのひと時” はあつさりと終わりを告げ、いつも通りの宮沢家の今日が始まったのであつた。

オマケ

その頃の灘カルテツト

「チチチツ」

「うむ、鳥達よ…ありがとう オグリ達は無事に学校へ向かったようだな 折角、久しぶりに日本へ帰って来たのだ…今日は宮沢家にお邪魔して皆を驚かせてみようか」

“バトル・キング” 宮沢尊鷹!!

「た…助けてく…(ボゴンツ)」

「フンッ、お前のようなクズ…殺すにも値しない さて…これでこの神戸のゴミ掃除はあらかた終わったな…どれ、今日は久しぶりに甥と姪でも可愛がつてやりに行くとするか クククツ…」

“悪魔を超えた悪魔” 宮沢鬼龍!!

「せ、先生…急な来院だつていうのに施術して頂き、ありがとうございますっ！ お陰様ですっかり腰が良くなりました」

「エエのよお、北原さんもそろそろいい年なんやからあまりムリせんといてね…さて

と、今日はこれから何も無ければ、キー坊とオグリ達の所へなにか差し入れでも持つて行つてあげようかねエ……」

〃宮沢家の常識人〃 宮沢由美子!!

「もう、おじいちゃん あんまりくつつくのはセクハラですよ!?!」

「なんじやい、老い先短いワシを邪険にせんでくれや! 家ではオグリ達が居るんで色々な事をガマンしとるんじやから、ちよつとくらいエエやろ?」

〃美人親子への悪影響の塊〃 宮沢金時!!

本日の宮沢兄妹の帰宅後、この面子が一堂に会する事となるのである……。

NEO宮沢熹一も悪くない？

様々な思惑が絡み合い、二人の兄妹が悲しいすれ違いを起こし、それでも最後には晴れやかな顔で笑いあえた二人。

そして今までのケジメを付ける為、熹一はオグリに断髪を頼み彼女はそれに応えた。結果として彼女の知る宮沢熹一に戻った、戻ったのだが……

「……」（じーっ）

「どうしたんやオグリ、まじまじと人の頭見て…切り残しても見つけたんか？」

「いや、今まで色々あつて気付かなかつたがキー坊の長髪姿も悪くなかつたなと思つたんだ」

「なっ!!? けつたいなこと抜かすなや! ワシからしたらあんなん黒歴史つちゆうヤツやん!!」

「それはそうなんだが長い間一緒に暮らしていてキー坊が髪を伸ばしたのを見た事が無かつたから新鮮だな」

「それお前…まあ、せやつたな」

「それにこの前クラスの友人から借りた漫画で言っていたんだ 『普段は近くに居すぎ

て気付かなかつた異性の意外な魅力にドキドキ」だと」

「かあーっ…ウチの妹に何読ませとんねん で？ なんや、オグリはワシにドキドキしとるっちゆうんか？」

「いや、そこまでじゃないんだが…キー坊と私は血が繋がってないのだろう？ だからキー坊を僅かばかりでも “そういう風に” 見てしまうのは私がキー坊を “兄さん” として見れていないんじゃないのかと思つてしまつて…」

「…確かにワシは親父おとんともオグリ、お前とも血が繋がつたらん でもな親父おとんの事は心底かっこええと思つとるし、ワシとお前のお袋おかんの事もめっちゃキレイで優しくて大好きや タコさんウインナーもぎょうさん作つてくれたしな」

幼少期の熹一は周りの色とりどりのお弁当を羨み、母に頼むと力強く頷きその後、彼の弁当には当時希望した “タコさんウインナー” を必ず入れてくれたのだ。

「ああ、そうだったな お母さんはキー坊のお弁当にはいつも入れてくれてたんだつた」
 「そしたらお前もマネしだしてしばらく食卓はタコがたこさんの…つて今はええわい つまりワシが言いたいんわな、家族っちゆうのは “そういう風な” 思い出を共有できるとる間柄なんやと思つとる」

「親父おとんの時と同じでワシがこの世で妹と呼べるのはオグリキャップ、ただ一人や 心配する事あらへん」

「そうか…私たちはちやんと“家族”なんだな」

「せやせや しつかし、オグリもそんな事考えるとはお年頃かのお」

「何を言ってるんだ、私だつて色々考えて（グウ）」

「そのタイミングで腹鳴らせとるようじゃまだまだやの よっしや！ 難しい話はここまでにしてなんか美味しいモンでも食いに行くか」

「!? 良いのか？」

「懐にある汚い金をオグリの為に使つてキレイにしたるんや 着いてこい！ お兄ちゃんは何でも奢つたる!!」

「分かった！ 待つてくれ、キー坊!!」

二人の少女と中山レース場、宮沢家の墓参り事情

中山レース場に到着してはしゃぐオグリキャップとベルノライト。

微笑ましい日常の一コマである。

「見て見てオグリちゃん、あのターフビジョンすごい大きい！」

「ああ、本当だ。来る途中で食べ物屋さんも充実していたし本当にすごい所だな中山レース場は」

そして笑顔の二人を遠目にみる尊鷹と六平

「オグリのあんなに楽しそうな顔を見れるとは…それだけでも帰国した甲斐があつたというものだ」

「いきなり幽霊みたいに現れやがって、携帯持つてるなら連絡しろって昔つから言ってるだろ」

「押しかけてすまないな銀次郎さん、風の噂でオグリの事を聞いたら居ても立っても居られなくなつたんだ」

「お前の神出鬼没ぶりは出会った頃からだろ、気にすんな…いや、やっぱりしろ。しかし…世界を股に掛ける名トレーナー、バトル・キングと呼ばれたお前の姪がオグリキャッ

「プとはな…アイツの独特な走りはお前が教えたのか？」

「いや、オグリのスタイルは私の弟と暮らして身に付いた物だ。私がした事と言えどもに会って土産物を渡すか習得した武術をあの子の前で披露した位だな」

「ああ…お前が俺達の前でたまに見せた人外染みた動きか、道理でな。俺もトレーナーとしての手腕を魔術と評された事もあったがお前の存在も大概だったよ」

「尊鷹おじさんは本当にすごいんだぞ。視界の端に居たと思つたら一瞬で距離を詰められるし、夏はスイカをきれいに蹴って四等分にして私たち家族に振る舞ってくれたんだ」

「え？ 蹴って？ 切ってじゃなくて？ オグリちゃん、その人本当に人間？」

宮沢家の居間にて

「これを押して…なにっ 動かへん！」

「違うぞお父さん、これは長押ししないと動かせないんだ」

「帰ったでー…つてお袋おかん、あの二人は何やつとんのや？」

「あら煮一、お帰りなさい。静虎さんったら尊鷹さんにタブレットの使い方を見せて貰ったから新聞の為に買って買ったらしいんだけど、まだおぼつかないみたいだね…そうしたらオグリが最近友達に習ったからって教えてあげてるみたいなの」

「はーっ、ご苦労なこっちゃ。オグリのお人好しは親父おとん譲りなんかのお」

「ふふつ　ところで熹一、お墓掃除はどうだったの？」

「おうつ　バツチリや！　特に墓石に関してはワシの顔が映り込むくらいピツカピカに磨いてきたわい！」

「あら、そうなの　なら…後はもち米は足りてるし、おはぎ用の小豆も買い足さないとな今年のお墓参りもオグリの分を考えてたくさん用意しないと」

「それなんやけど、お袋…お袋が良かったらなんやけどな…」

「？　どうしたの熹一」

「今年の墓参りはお袋も一緒に来てくれんか？」

「！」

「お袋が毎年ワシや親父おとんに氣い遣つてワシ等の後にお参りに来とるのは知つとる…けれど、ワシ等にとつては生んでくれたお母ちゃんも、育ててくれたお袋おかんも同じくらい大切な人やから…そない氣い遣つて欲しくないんや」

「熹一…」

「いや！　もちろん、お袋おかんの氣持ちが一番大事なのは分かつとる　ただオグリも最近は氣にしとつたように思うたし、ワシも親父おとんもお袋おかんの事をだ、大好きやつちゆう事を伝えたかつただけで…」

「…ありがとう、熹一　そうね、そろそろ喜恵さんにも逆に不義理な事をしてるように

思っていたし、今年から私も参加させて貰おうかな」

「そうだ、指を一点に集中してそのまま動かしてくれ」

「一点…一点に集中を…」

「しやあつ！ 親父喜べや！ 今年から墓参りはお袋も同時参加じゃあつ！！」

「なにつ（バキイ！ ホンマか熹一！）」

「お父さん、力を入れ過ぎだ！ タブレットが貫通したぞ！！」

「うあああ（PC書き文字） 何やつとんねん親父！！」

「…当分の間、新聞は紙のままね」

ベルノライト初めてのお宅訪問

しばらくの間、その少女は宮沢家の玄関前を行ったり来たりしている様子であったが遂に意を決したようで、おそるおそるインターホンを押した。

「おじやましま〜す…」

「いらつしやいベルノ、よく来てくれたな」

「うんっ 『うちに遊びに来てくれ』 って言われた時には驚いちやったけど、誘ってくれて嬉しいよ」

「本当なら家族を紹介したいんだが生憎、皆出掛けてしまっていてな…今、家にはキー坊しか居ないんだ」

「キー坊って…オグリちゃんがいつも話してるお兄さんだっけ？」

「そうだ 宮沢熹一、TKGとかいう格闘大会で決勝まで進み、ハイパー・バトルでは遂にお父さんを超えた強い男なんだ」

「TKG…？ あっ！ “TKG”!? 昔、クラスで話題になってたからそれ知ってるよー」

「TDKだっけ…？ 主催者が子供の頃にお父さんとキー坊に酷い事したヤツだからあ

まり真剣に覚えてなかった」

「そ、そうなんだ…それにしても格闘家って……」

『なんだか恐そうな印象があるなあ…』ベルノは思わず自身の口から出そうになった一言を飲み込みむも、その雰囲気を感じ取ったオグリは彼女が言いたい事に気付いた様子であった。

「? キー坊はとつても優しいよ お父さんの教えをしつかり守って強いだけじゃない優しい男に…」

「オグリく、玄関先に友達足止めして何べちやくつとんねん 早よお居間までご案内せえや」

「ひゃあつ!？」

「あつ、キー坊…長髪に鬼龍おじさんのに似たコート…その恰好はどうしたんだ?！」

オグリとベルノの前に現れた熹一の姿は彼が嫌悪し、封印してきた「NEO宮沢熹一」の物であった。

「外出るにも無駄に顔が売れとるから変装や変装 本当なら再びこんな格好するなんて死んでもゴメンなんやが、その最悪な気分のおかげで表情筋も死んで丁度エエんじや」

「そうなのか? 私は相変わらず格好良いと思うんだが?！」

「んかあつ やめーや! けつたくそ悪い!！」

「今のは朝昇さんのマネか？ なかなか似ているな」

「おー、朝昇も今こつちに居るつて連絡貰つてな、ヨツちゃんと一緒に飯食いに行く事になったんよ」

「〃ヨツちゃん達と〃飯〃!?! なあキー坊、良かったら私達も…」

「アホウ、お前はともかくその可愛らしいお嬢さんを面識の無いむっさい男共の群れに突っ込ませる気か あー…ベルノさんやつたけ？」

「ひゃ、ひゃい！」

「悪いんやけどワシは今から出掛けるんで、お茶やらお菓子は居間に用意しとるからな
本当ならアスリートつちゆうんで宮沢家特製スペシャルライスでも振る舞いたかつ
たんやが堪忍な…つてもうこんな時間やないかい！ ほなな、ごゆっくり！」

「何ていうか…すごい人だったね（でも、コート越しでも分かる鍛え込まれた身体…長
髪の間から覗く憂いを帯びた瞳…話し掛けられた時に感じた包容力…何て言うか…）」

「（ガタガタガタガタ）」

「!?! どうしたのオグリちゃん!?!」

「な、何てことだ…その昔、お母さんの手によつて封印された〃宮沢家特製スペシャル
ライス〃 キー坊、復活させるつもりだったのか…」

「え、えつと…大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ…ご飯なら私が作るからベルノは居間でゆっくりしててくれ」

「そんな、大丈夫だよオグリちゃん！ 私も手伝うから」

「そうか、ありがとう 今日ほど煮を作ろうと思っていたんだ」

「知ってる！ それ名古屋の名物料理だよね？」

「ああ、味に関しては前にお父さんが泣きながら全部食べてくれたから安心してくれて良い、材料はお母さんが用意していたから早速取り掛かるう」

「うんっ！ あ、オグリちゃんあのね…」

「どうした？ ベルノ」

「お兄さん、格好良い人だね！」

「！ ああ、キー坊は格好良いんだ」

迷惑叔父さん登場

リムジン、一般人からすれば一度は乗ってみたいと思える高級車も状況によつては絶対に乗りたくない存在へと変貌する。

実質、この車内に居る珍しくも険を放つオグリキャップの母とその母を気まずげにチラチラと覗き込むオグリ、その原因である「一人の男」に視線を送っていたのだった。「オグリ…私達は『ウマ娘』いざとなつたらアンタと私でドアを蹴破つて脱出するからね」

「うん…けどお母さん、私は大丈夫だと思ふけど…」

「ククク…やはり静虎の嫁は随分と気が強いな。だが安心しろ、俺は『男には試練を女には愛を与える』のが流儀だ。間違つてもお前達親子に危害を加えないと約束しよう」

「それはどうも 久しぶりにお会いしたけれど相も変わらず静虎さんと同じ顔で静虎さんが言わない事を仰るのがお上手ですね」

「いや、お母さん 鬼龍おじさんだぞ？ あんまり邪険にしたら可哀そうじゃないか」

「ふんっ…オグリの言う通りだ お前達のような良い女を閉じ込めているあの狭い鳥籠

から出してやっているのだから感謝の言葉一つでも欲しい位よ」

「私達にとつてはあの家で十分満足しているのでお気遣い無く、そもそも、いきなり家に行つて来て辺りを見回すなり、外に停めてあるリムジンを指差して『良い所へ連れて行つてやる』なんて怪しさしかありません。オグリが付いて行かなかつたら…」

母の頭を抱えた様子に流石のオグリも申し訳なさを覚えていた…。

「ごめんなさい、お母さん…でも鬼龍おじさんは確かに悪人だと思うが、おじさんなりに私達を大切にしてくれているのは信じられるんだ」

「それは分かっているけど、この人の場合やる事がいつも極端で外からトラブルを持ち込んでくる所為で宮沢家の男の人達がどれだけの迷惑を被つたか…」

「はっ、面と向かつて俺に對し言いたい放題とは、やはりお前達親子は最高だな！ちなみに伝え忘れたが、この車内は電波遮断されているから連絡は取れないと思え」

「ほら見なさい！オグリ、多少の怪我は覚悟の上でこんな車降りるよ!!」

オグリ「待つてくれお母さん！鬼龍おじさんはトレーナー業をやつてると聞いたしその為の車なんじゃないか？」

「その通り、流石はオグリだ、と言つてもトレーナー業は俺が手掛けている事業の一つでこの車は用途に分けて使っている、というのが正解だな」

「あなたがトレーナーをやっているのは知っています、実績を上げている事も…」

「フンっ 現役の頃に俺と出会っていたら、お前を更なる高みに引き上げていただろうな」

「…その可能性も、あったかもしれないね」

「お母さん？」

「オグリ、トレーナーの適正と人間的な相性はイコールでは無い事をアンタも競技者になった今、感じているでしょ？」

「いや私は…でも、周りでそういう話を聞いた事はあるよ」

「例えば…私の場合、静虎さんが熹一にしている様な指導を受けたとするとまず断念するか、やり遂げたとしても二度とこの人の指導は受けたくないと思うのは間違い無い」
「でも、私だったらきつと耐えきって、継続して見せるよ」

「そうね、アンタならきつと出来る けれど静虎さんと結婚したいかって言われるとどう？」

突如振られた話題にオグリは熟考し、そして決断を下した。

「お父さんと結婚………うん、考えられないな」

「は——っ 今の言葉、録音して静虎に聴かせてやったら爽快だろうなっ！」

「鬼龍さん、私にとつてはアナタが『そういう相手』だって言いたいんですよ？」

「くくく その気丈さ、惜しいな 静虎の妻でなければ本気で口説いている所だ」

「生憎ですが、私は多情な男より一途な男の方が好みですから」

「そうだぞ鬼龍おじさん、いい大人なんだからお母さんの事は諦めてくれ」

「ふんっ オグリよ、俺は悪い大人だ…が、それでお前等が傷付くのであれば諦めてやるよ…ふむ、着いた様だな」

「…結局、アナタは私達をどこに連れて来たかったんです?」

「降りれば分かる 着いて来い」

「お母さん…ここは——」

「お肉の直売所…?」

「お前等の家を見回した時に鍋とすき焼き用の器材を確認したからな 俺が奢ってやろうと思って此処へ連れて来たんだ オグリよ、たらふく肉を食わせてやるぞ」

「本当か!? ありがとう——」

「いえ、確かにお肉がまだ足りないとは思っていましたがアナタに奢って貰う謂れはありませんので私達で購入します」

「はっ 生憎だがこの店はお前らの手持ちでは到底足りないぞ 大人しく俺に奢られるがいい」

「…何が望みですか?」

「何、お前等の夕飯に俺も招待して欲しいだけだ 静虎と金時に俺の財力を見せてつけて

やろうと思つてなあ」

「何ていう理由……」

「お母さん、私も財布は置いて来てしまったから今回は……」

『目の前の男に借りを作つてしまふ』苦渋に満ちた母親の顔を確認し、鬼龍は勝利を確信した笑みを浮かべる。

しかしその時——

(店の自動ドアが開く音)

「何だオグリ、お母さんと一緒か それに鬼龍まで……こんな所で会うとは奇遇だな」

「尊鷹おじさん！ おじさんこそどうしたんだ、ここはお肉屋さんだぞ！」

「この店のマスターとは昔から懇意にしているな 最近、この辺りに猪が出ると相談を受けて必要数狩り終えたので肉を届けに来たんだ」

「！ あの、尊鷹さん……そのお肉を安く分けて貰う事つて出来ますか？」

「別に構わないが……何だ、結構な量になるが牡丹鍋にでもするのか？」

「はい！ よろしかつたら尊鷹さんも夕飯をご一緒にいかがですか？」

「おお、それはありがたい 迷惑で無ければ是非ともご一緒させて貰いたいな」

「小声）お母さん、すき焼きの材料しか無いけど大丈夫なの？」

「小声）ええ、味噌と生姜はまだたくさんあるから大丈夫」

「鬼龍、お前は何しに此処へ？ 二人が良ければになるがお前もこの後、夕飯をご馳走になるか？」

「いや俺は…これから、用事があるんだ」

「そうか しかしお前立派なリムジンに乗ってるな 急ぎの用事で無ければ二人を家まで送って行ってやれ ” 男には試練を 女には愛を与える ” のがお前の流儀だもんな」

鬼龍「ふんっ 当たり前だろう…」

ラーメン屋 “幽玄” へ行こう

「なあタマ、ラーメン屋へ行かないか？」

オツチャン

「…アレか？ 最近のお前の行きつけで店長の名前とたまに姿を表す店員がやたらと気合いの入っとる…」

「ああそうだ この前、家のポストにこのトツピング無料券が入っていて二名までと書いていたから良ければタマも一緒にと思ってたな」

「…んん？ いや待てや！ この券明らかに手書きやん!? どう考えてもお前とお前のアニキ宛でウチはお呼びで無いやろ！」

「いや、そんな事は無いだろう タマも邪険にされるどころか、よくサービスして貰っているじゃないか」

「あのオツチャン、付き添いで行ったウチが何度も『小食です』って説明しても仏頂面でラーメンに具材追加してくんのはホンマ、なんなん？ まあ無料タダやし文句を言った事は無いけどな…」

「多分、タマとキー坊の話し方が似てるから親近感が湧いているんだろうな」

「ちよちよちよちよーい!! 言うに事かいてキー坊アとウチの喋りレが似てるなんて冗談

キッツいわー、上品さが天と地程も違うやん?」

「…変わらなくないか?」

「オグリイ! お前、たまには気い利かせんとホンマに友達失くすぞ!!」

「すまない、タマ…それでラーメン屋だが、その…どうする?」

「…しゃーない、この流れでオグリ一人を行かすのも後味悪いし、ウチも付き合うたる」

「ありがとう、タマ!」

「ほな、行こか…ラーメン屋 幽玄」

ここうして向かったラーメン屋 幽玄、そこで行われたのはオグリによる食事という名の『蹂躪』とそれを微笑ましそうに見る店長の姿であった。

(もっ もごもご) ぷっ)「覚吾さん、おかわりを頼む トツピングは全部乗せでな」

「ううん ドンブリごと行くとは、いつ見ても圧巻な食べっぷりだ 分かった、直ぐに作

るから待っていなさい」

「オグリ、お前まだその食い方やつとんのか 親父とお袋からやめるよう前から言われ

とったやろ?」

「って普通にキー坊も来とるんかーいっ!!」

「タマ、お前も相変わらず声がデカイのお キャンキャンキャンとポメラニアンか」

「ああん!? お前、誰がポメラニアンやねん! 昔馴染みの年上やからつて会う度に兄貴風吹かしおつて、しまいにはいてこますぞ!」

「…訂正するわ 凶暴さで言つたらむしろチワワやな」

「上等やん…表出ろ! 町内一周で決着ケリ付けたる!!」

「おうつ、腹ごなしには丁度工工な お前も芝に行つてから随分と活躍しとるようやが、ワシも灘神影流の現当主としてウマ娘にも負けんつちゆう事を教えたるわ」

「よつしや言うたな!? 静虎のおつちゃんには悪いがキツチリ完勝したるさかい、吐いた唾飲むなや!! …あ、騒がしくしてすんません ウチ等、先に帰りますんで」

「タマとワシの分は先に払つとくんぞ その…今日も、美味かつたです」

「……ありがとう また、いつでも来なさい」

「いや、何で毎度自然とキー坊が払う流れになつとんねん!」

「何言つとんのか 妹分の面倒見んのが兄貴の務めやさかい、当たり前やろ」

「キー坊、お前…ホンマそういう所やぞ まあ、これで女からモテへんのが笑えるんやけどな」

「うっさい! 早よ行くぞ!」

「ちよ、待てや! ごちそうさまです! オグリも早目に切り上げるんやでー!」

二人が店を出るとすっかり静かになった店内、残された店長とオグリとの間に気まず

い空気……は流れない物の、店長は少しだけ齒切れ悪そうに出来上がったラーメンと共にオグリに話を切り出した。

「おかわり、お待ち（ゴトツ）……あの二人は仲が良いのかい？」

「うん タマは昔こつちに越してきて私とキー坊と出会ったんだけどウマが合うのか、たまに三人で遊びに行くんだ」

「私も君達のレースを見せて貰っているが彼女は強いな アスリートとしては小柄ながらも高い瞬発力を持った脚質と決して勝ちを諦めない執念……ある意味、己の命を顧みない姿勢に私も世界中を回っていた時の頃を思い出すよ」

「そう言えば……覚悟さんも格闘家だったね」

「熹一に敗けて憑き物が落ちた今、こうして店を構えているが存外……悪くない気分さ」
「覚悟さんも、よくお父さんの言っている『与える側』に成れたんだな」

「そうだな……だがオグリ、君に比べれば私などまだまだだ」

「そうなのか？」

「純粹に走ることに特化したウマ娘の中でも、君の走りには言葉に出来ない『清廉さ』がある……未だに私の心にある汚い物を君が一瞬で溶かしてくれていると感じるんだ」

「……私はそんな事を考えて走っていない けど、覚悟さんに元気を与えているなら良かったよ」

「うん、君はそのままが良い。ただ、私にとってそう感じる事が出来た女性は君が。二人目」でな…今度こそ、伝えておかねばと思っただけなんだ」

「覚吾さん、それってキー坊を生んでくれた…」

「いや、すまないな…急におじさんの感傷に付き合わせてしまつて。おかわりも冷めてしまつたし、作り直そうか」

「いやいいよ、覚吾さん達が私を想つて作つてくれたんだ。頂いてからおかわりを頼む」
「そうか…ところでオグリ…その…君が良ければで良いんだが…」

「? 何だ、覚吾さん」

数多の戦場を渡り歩き、修羅場を経験してきた「拳聖」日下部覚吾…現在、彼にとつて未だかつてない緊張が走っており、その姿を彼の元弟子である4人「幽玄死天王」がバックヤードで固唾を飲んで見守っていた。

「なあ春草、覚吾さん、今回こそオグリに言えると思うか?」

「大観…まあ、『宮沢熹一と夫婦になつてくれないか?』なんていきなり言つても普通は無理だと思ふよな」

「無理なら無理であの子はきつと引きずらねえし、その時は変わらず俺達はあの子を推し続けるだけよ…大蛇はどう思う?」

「いや待て馳、材料がそろそろ尽きそうだ。トラック運転してる金城に急ぐよう連絡を

入れてくれ
しやあ——
〔湯切り〕

タマは…無いな

此処は都内の喫茶店、一つのテーブルに向かい合つて座るのは今世間を賑わせている
“怪物” オグリキヤップと“白い稲妻” タマモクロス。

『美人の多いウマ娘だから』という理由では説明できない程にタイプの違う整った顔
立ちをした二人が顔を突き合わせるもその表情は神妙そのもの、果たして彼女たちが話
している内容とは……

「最近、キー坊がモテているかもしれない」

「藪から棒に何やねん あの世界振られマンがモテとるとかありえへんやろ」

「いや…最近、女性関係のゴシップ記事に振り回されてうんざりしてしまつたらしく、外
へ出る時はよく変装するようになったんだ」

「ゴシップ…ウチの相手のコミちゃんも巻き込まれたけつたくそ悪いアレか ぞ？」

キー坊がたまにツラ被つて外出てんのはウチも知つとるけど、何でそれがモテに繋がん
のや」

「あの姿を見た知り合いやクラスメイトが『カッコイイ』、『影があつてステキ』と言つて
いるのを耳にした」

「…それ聞いてオグリはどない思ったんや?」

「キー坊は確かに格好良いが本当の格好良さはそんな表面的な所じゃ決して無いと思っただ」

「まあ…確かに口を開けば下らん事ばつつか喋るわ、デリカシー無いわでロクな男やないが、同時に噛めば噛む程味が出るおかしな男ではあるな」

「そうだろう! 流石タマだ、分かってくれるか!」

「イヤ、褒めとらんし…! しかし出会った頃から振られ続きのアイツがキヤーキヤー言われるとは驚きやな」

「そうだな、私が思い出す限り……」

「『ワシな! 大きくなったらおかんとケツコンする!』」

「『ごめんなさい、熹一君 私は静虎さんと結婚しているからそれは出来ないの』」

「『そ、そんな…ワシ、ふられたんか』」

「『キーボー、元気だして(ナデナデ)』」

「うん、初めて振られたのはお母さんにだな」

「ぶはっ! それアレやろ! オグリのお袋さんがキー坊を君付けしとった頃やろ!」

「腹振れるわ…」

「あの頃のワシにとつてお袋は『キレイなお姉さん枠』だったんじゃ オグリも余計な

事思い出さんでエエわ」

「お？　ようやつと来たか “NEO宮沢熹一”」

「キー坊、今日はその恰好なんだな」

謂れないゴシップ記事の所為で最近は変装に凝り始めて変わった形のグラサン、祖父譲りのニットキャップにアレンジを加えるなど等、様々な方法を試していた熹一であったが今回彼が選択したのは長髪のカツラ、Vネックシャツ、叔父である鬼龍が愛用している物に酷似したコートという “NEO宮沢熹一” スタイルであった。

「まあな、なんやかんやでこの姿が一番バレへんねん　後タマ、その名前で呼ぶのはやめえや　ワシの機嫌がメチャクチャ悪くなるぞ」

「あー、スマンスマン　まあ、確かにまじまじと見たら割とイケてる方やな」

「何やねん、今日は用事があるつて言うんで時間作つてわざわざ来たつちゆうに　馬鹿にするだけならワシはもう帰るぞ」

「待つてくれキー坊　今日、私達は訊きたい事があつてキー坊を此処へ呼んだんだ」

「おー、そやそや　笑つてスマンかつた　ま、ウチの隣にでも座つてや（ポンポン）」

「…つたく、お前等じゃなけりやホンマに帰つとつたからな　で？　ワシの何を訊きたいんじゃ」

「うん、キー坊…」

「お、おう……」

未だかつてない程、神妙な顔をした妹に数多くの戦いを繰り広げてきた格闘家としての本能が警鐘を鳴らし、熹一は居住まいを正して話を聞く体制に入ったのだが……

「最近、好きな人はいないか？」

「……………は？ はあっ!?! いきなり何を言っとんじやいオグリ!!」

妹の口から出たあまりに突拍子もない言葉に仰天し、危うく座っていた椅子から転げ落ちそうになってしまった。

「いやな、最近のキー坊はキレイどころに囲まれてるやろ？ ほなら、エエなど思う人が居てもおかしくないと思うんや」

「タマまで何を言っとんねん…いや、昔ならいざ知らずワシもエエ大人やぞ そない浮ついたこと……」

「例えばベルノなんてどうだ？ この前、新しいシューズを一緒に買いに行っただろ」「アレはオグリのシューズを買いに行く、”ついでに”ワシのも選んで貰っただけやんしつかし、ベルノちゃんの詳細の豊富さと気遣いは大したモンや 学生の頃のワシやったら間違い無く惚れとるわ」

「ウチの相方のコミちゃんはどうや？ 報道写真で満更でもない顔しとったやないか」

「コレも『灘の整法と活法』を教えに行つた際にすっぱ抜かれただけや！ それにあん

な美人が近くに居たら：男ならお前、表情筋ガツチガチやぞ！」

「…これは尊鷹おじさんから聞いたんだが、ジャパンカツプで私とタマに勝ったオベイユアマスター…：彼女が帰国する時に二人で何か話していたらしいじゃないか」

「ソレこそお前等に勝った『尊鷹の教え子の一人』に話聞きに行っただけやんかつ！ちゆうか、尊鷹居たなら出てこいや！あの姉ちゃん、ワシに尊鷹の事しか訊いて来んかつたぞ!!」

「そうか…：そうだったのか」

「（イヤ…：おかしいやろ 昔のキー坊なら目の色変えてプロポーズしに行く面子ばかりやぞ?）」

「せや 分かってくれたか、オグリ」

「（今まで女に振られ続けた人生…：格闘技に全てを捧げてきた青春…：何より、子供の頃からずっとそばに居た美人のお袋さんと妹のオグリキャップ…：!）」

「タマ、お前も分かつたやろ?」

「（今のコイツの精神状態は限りなく静虎のオツチャンに近いっ…：!）」

「…：タマ、どないした?」

「しやーない…：ここはウチが一肌脱ぐ」

「な、なんやのん…：」

「キー坊、ウチと付き合ってくれへんか？」

「えっ？ タマ!？」

「おうっ この前、隣町に出来たお好み焼き屋やろ？ 奢つたるさかい、遠慮せず食えや」

「クソボケが——つ（スリツパ殴打）!!!」

「灘神影流 “弾丸すべり”！ お前何すんねん！ 一瞬、鉄山のオツサンかと思つて思わず人前で灘の技使うてしもたやないか!!」

「せっかく！ ウチがお前の中の “雄” を呼び覚まそうと恥を忍んで告白まがいの事まですしたつちゆうのになんやその対応は!! こんな師匠なら一升瓶で殴り掛かつて来るぞ!!」

「いや『 “雄” を呼び覚ます』つてお前はワシにとって妹分やぞ!? タマだけは無いわっ!!」

「オグリを前にして屈辱の極みやろそれはーっ!! もう許さへん!! ○の穴に手え突っ込んで奥歯ガタガタイわしたる!!」

「待てやタマ！ 女の子がそんな言葉使うんやない!!」

「こんな時だけ女の子扱いすんなやボケ——つ!!!」

“ウマ娘のトップアスリート” と “古来より受け継がれてきた暗殺術の現当主”、店

内で繰り広げられる“超人達の喧嘩”を尻目にテーブルから離れなかったオグリは一人、安堵のため息をついていた。

「（キー坊に今、好きな人はいない…）だったら私はまだ、キー坊の一番の妹でいられるな（グウ）」

今回の悩みで最近は食欲も僅かばかり減退していたのだが杞憂だと分かると彼女のお腹は音を鳴らし始めた。

「あの…お客様」

そこへおずおずといった様子でこちらへ近付いて来た店長らしき人物が現れたのでオグリは注文をしようとする……

「すまない 急にお腹が空いてしまって、何か頼んでも良いだろうか？」

「出て行って頂けませんか？」

「……………ごめんなさい」

深い謝罪の後、オグリは二人を連れて店を後にしたのだった…。

彼女が走ったその先に

日が昇り始めた朝の冷たい空気を吸っては吐き、吸っては吐きを繰り返しオグリキヤップ足を動かし続ける。

今日も自分の足は動き、自分の望むままに動くのを確認し、動ける事に感謝して、彼女は目的地も定めないままに宮沢家から出たその身を風にさらし続ける。

しばらくすると自分が見覚えのない場所に來た事に気付いたが彼女にとってソレは何時もの事で特に気にする様子もなく、普段通り近くの交番にでも道を聞きに歩を進めるとその途中で小さな公園を見つけた。

常であれば気にしない場所に何故か心動かされて彼女が立ち寄ると其処には一人の「隻腕の外国人」が佇んでおり、それは彼女にとって懐かしい人物であった。

「ひよつとして… “ミハイル” さんか？」

「君は… オグリ」

…しばらく二人は見つめ合う。

その間お互いはい思い返していた、もう10年以上も前になるだろう自分たちの出会いを。

「まだ、故郷お家に帰れてなかったんだな」

「そう言う君は…もう、すっかり走れるようになったんだな」

「ああ、お父さんとお母さんとおジイちゃん、それにキー坊の…『家族』のおかげでね」
「キー坊か…ハイパー・バトルは私も見たよ　あの強いお父さんに勝利した姿をね…本当に、立派になった」

「あの時は二人とも、とつても辛そうだった　見ている私達もそうだったけど、『それがきつと…格闘家って生き物なんだね』って言いながらお母さんが手を出るまで握りしめていたから、私も決して目を逸らさなかったんだ」

「そうか…君もお母さんも強い人なんだな」

「そんな事ないよ　お母さんはともかく私は昔、ミハイルさんとお父さんの戦いを見てなかったらきつと…目を逸らしていたと思う」

「あの時は、まだ子供だった君達に凄惨な戦いを見せてしまつて…本当に済まない」

「ううん、ミハイルさんにも理由があつたんだつてお父さんから聞かされて当時から納得していたし、私もキー坊もあの経験があつたから、だれにも負けない位、与えられる人”になりたいて思えたんだ」

「…それならばもう叶っているよ　私も君のレースは見ているんだ…随分と、元気を貰っている」

「そうなのか　でも、私はまだ満足しないぞ」

「…それも確か、君のお父さんの教えだったね」

「うん、『勝つても驕つてはいけない、負けても卑屈になることはない』あの時のお父さんの言葉は今でも私達兄妹の心に残っているからな」

「道理で元気を貰えるわけだ…あの日、君達に会えたのは私にとって幸運だったのだな」
「…お父さんが殴られた事は少しイヤだったけど、ミハイルさんがあの日、キー坊や私とお絵描きしてくれたり砂のお城を作ってくれたのは私にとつては良い思い出なんだ」

「そう言ってくれて、ありがとう　では…そろそろ行かないとな」

「ミハイルさん、どこへ行くんだ？」

「いや、国で私関係のゴタゴタが片付いたと連絡を貰つてね　ようやく『家族』に会えるんだ」

「そうか…良かったな」

「国を発つ前に君に会えるとは、この幸運を神に感謝せねばな…さようなら、オグリキヤップ」

「ああ、ミハイルさんも元気だな」

公園を出た二人は別れの言葉と共に互いに背を向けて歩き出した。

そしてオグリキヤップは歩を徐々に早め、遂には走り出す。

交番で聞く筈だった道の事も忘れてどこまでも、どこまでも駆ける、胸に湧いた不思議な充足感をその身に抱えて。

「オグリ、お帰り 今日遅かったの？」

「ただいま、キー坊 あのね、今日……」

妹が久しぶりに見せた “屈託のない笑顔” に熹一の表情は自然と崩れ、彼女の話す言葉が静かに聞く事にした。

宮沢家に鬼の子供達がやってきた

「こんにちはーっ！」

「お、お邪魔します」

陰りの無い笑顔が眩しい女性と坊主頭に眼帯を付け、顔中が傷だらけながらもあどけなさが僅かに残り、整った顔立ちが印象的な男性が宮沢家に来客していた。

「優希ちゃん、龍星君いらっしやい 静虎さん達はまだ戻らないけどゆっくりしていい」

「いや、大丈夫ですよお母さん 下宿先の由美子さんからオジさん達の様子を見に行ってくれて言われたけど、私はお母さんが見れただけでも満足ですから」

「いやいや優希ちゃん、そういうわけには行かないだろ…あつ、コレは由美子さんから皆さんへって渡されたお土産です どうぞ」

「あら、これはどうも 由美子さんつたら本当に静虎さんの事が大事なのね」

「ええ、『姉からしたら弟なんて幾つになつても弟やからねえ』だそうで 俺には…良く分からないですけど」

「龍星君……」

育った家庭環境の影響か、来て早々に落ち込んだ様子を見せる龍星にオグリのお母さんがなんと声を掛ければ良いか考えあぐねていると……

「グイツ）こら龍星っ！ お母さんの前で辛気臭い顔なんてするな!!」

「アタタタツ！ 優希ちゃん、いきなりヘッドロックはやめてっ！」

「ふふっ 相変わらず二人とも仲良し姉弟だね」

「いえ……母親は違いますけどね」

「小倉優希」と「長岡龍星」、鬼龍の数多く居る子供である二人は息もピッタリにウンザリとした表情を見せた。

「そもそも……私は母親が子供の頃に蒸発して施設暮らし、それでも頑張って生きてた矢先に男に襲われそうになるわで散々ですよ あの時、現れたお母さんがアイツを蹴り飛ばしてくれてなかったら私、今頃どうなってたか……」

「ゆ、優希ちゃん!! その話はちよつと、色々……」

「何言ってますか！ あの時のお母さん、本当に格好良かったんだから！ ウマ娘の法律なんて、この際忘れて胸張って！」

「あの時程、私もすっかり宮沢家の一員になったんだなって思った事は無かったけれど……優希ちゃん？ この話、静虎さんには……」

「いや、流石にオジさんには言ってますよ で、私の身の上を聞いて鬼龍アイツの娘だっ

「かっただから由美子オバさんの整体道場を紹介してくれて…本当に感謝してるんですよ？」

「由美子さんが快く引き受けてくれたから良かったけど、優希ちゃんが楽しそうで本当に良かった」

「俺も母が亡くなつてから鬼龍が父親だと知って色々あつて…その後、静虎さんと出会つてしばらくの間皆さんのお世話になり、今は由美子さんの所へ…でしたね」

「オグリも弟が出来たみたいで楽しそうにしていたし、もつと居てくれても良かったのに」

「い、いえっ！ 日を増す毎に熹一さんと静虎さんの目が据わってくるあの状況はちよつと…」

「まったく、あの二人はもう…それで由美子さんの所へ行つて、今じゃ坊主頭に眼帯まで付けちやつて、向こうで一体どんな生活してるの？」

「いや、頭は優希ちゃんに何ですがそれ以外はまあ…本当に、色々あつて」

「男の子だからつてあんまり無茶しないでね 私は鬼龍あの人の事は好きじゃないけれど、アナタ達二人の事は大事な親戚だつて思つてるんだから」

「お母さん…」

“母に捨てられ”、“母に先立たれた”二人へ急に浴びせられた母性。

各々が感じ入っているとその母性を一身に受けて育った一人娘が宮沢家へ帰宅した。

「お母さん、ただいま……ん？ 何だ優希と龍星、来てたのか？」

「オグリ、お帰り！ この前のレース見たよ、凄かったね」

「オ、オグリさん!!? お久し……お久しぶりです!!」

「ありがとう、優希 龍星はどうしたんだ？ 顔が赤いぞ」

「あら……由美子さんの所へ行ったのは、二人だけの所為じゃないみたいね？」

龍星の急な変化を訝しむ娘と違い、全てを察した母は微笑みながら娘の分のお茶菓子を用意する為、立ち上がることにしたのだった。

尊鷹おじさんに聞こう!

かつては世界中を回り、数多のウマ娘を指導した実績と超一流の格闘家でもある宮沢家の長男「宮沢尊鷹」今、彼の目の前には中世的な美しさを持つ一人の女性トレーナーがおり、真剣な様子で尊鷹を見つめていた。

「奈瀬文乃さんと言ったか…私の過去を知りたいと?」

「はい、かつて僕の父や六平さんと肩を並べた伝説のトレーナー「バトル・キング」宮沢尊鷹 近くに来ているとお聞きしたので是非、お話をと思ひまして」

「ふむ、ならば君のお父さんに聞くのが一番だと思うが 私と彼は決して浅い中ではな
いからな」

「いえ、その…父からは抽象的…と言いますか、尊鷹さん自身の現実離れた逸話しか聞いた事が無かったもので」

「…そうか 私も昔から己の心に従って生きて来た身だ 他人にどう見られているのか、深く考えて来なかつたからな…分かつた、私の昔話で良ければいくらでも」

「ありがとうございます 父からの話で真つ当に聞く事が出来たのは「トキノミノル」、
「サンデーサイレンス」の2名だけでしたので…」

「トキノミノルか……懐かしい名だ　出会った頃は私の弟を思い出させる気性難なウマ娘だったけど、思えば彼女の有り余る才とそれを十全に発揮できない苛立ちに共感して、私は家の事を忘れて『トレーナーになってみたい衝動』に駆られたのだろうな」

「そうだったのですね……しかし、貴方と共に伝説を作った彼女も足を病み、今は何処に居るのかも……」

「いや、悪くなった足は私の左足で何とか持ち直してな　あれ以降、私に気を使っているのか随分としおらしくなっちゃったよ　つい先程会った時も淑女の様な立ち振る舞いに磨きが掛かり、驚いている位だ」

　そう言いながら尊鷹は義メカ、フット足となった自身の左足を指し、朗らかな笑みを浮かべた。

「えっ?」

「サンデーサイレンス、彼女も強いウマ娘だった……周りからの低評価など物ともせず文字通り、『命尽きるまで戦い抜いた』……昔は修業中の私の前に姿を現してくれていたが、最近では『自分に良く似た娘を見つけたから応援したい』と言って去っていったな」
　そう言いながら尊鷹は虚空を見つめる、まるで、今現在も『何かが視えている』かの様に……。

「えっ!?!」

「いや済まない、私の話だったな、では……」

「ソソオーおじちゃん、風船とつてくれてありがとう」

「ほら、オグリ 二度と離すんじゃないぞ」

「うん! あのね、おじちゃん」

「どうしたんだ?」

「こんなに高くとぶなんて、おじちゃんウマ娘なんですよ? なんでシツポが頭に

あるの?」

「ははは、オグリは賢いな 実はわたしは『ウマ息子』だったんだよ」

「ほんとっ!? すごい、初めてみた!!」

「鷹兄: オグリに嘘教えんでください この子は純粋やからすぐに信じてまうわ」

「オグリは本当に純粋で綺麗な走りをするだろう? それはこの頃の心根が今も変わっていないという証左と言えるのだろうか」

「(写真を交互に見せてきて矢継ぎ早にオグリキャップの話をしてきた) ……はい、仰る通りですね」

「尊鷹おじさん! 日本に帰って来てたんだな」

「オグリ、その喋り方は…?」

「おじさんの真似なんだが…やっぱり、変かな?」

「『いや、そんな事は無いが…』」

「『キー坊はお父さんを尊敬しているが、私が一番尊敬しているのは尊鷹おじさんだからな イヤなら、やめるけど…』」

「『女の子の喋り方としてはどうかと思うが…それもまた、オグリらしさだ 嬉しいよ…ありがとう、オグリ』」

「『！』 そうか！ だったら私、これからもこの喋り方にするぞ！』」

「そして、これは私と熹一の闘いの際にオグリが初めて “領域” を目にした時の映像で…」

「(タブレットまで使って説明しました…)」

突然始まった “姪っ子自慢” を延々と聞かされ続けた奈瀬トレーナーが頭痛を覚え始めた頃…突如一羽の鳥が飛んで来るなり尊鷹の肩に止まった。

(チチチチツ)

「…なにっ!？」

「! ど、どうしました?」

「いや、済まない…今、鳥達が鳴き声でオグリが近くに居る事を伝えてくれてな 悪いが、私はこれから姪の所に行かせて貰う」

「……はい どうぞ、自由こ」

「ありがとう、ではー！」

「……………」

言うや否や尊鷹の身体はまるで鳥のように宙を舞い、奈瀬トレーナーの目の前から瞬時に消えたのだった…。

しばらく取り残されて呆然としていると彼女の担当ウマ娘である“スーパークリーク”とかつて米国最強の暗殺部隊に居ながらも様々な要因で転がり落ち、現在は同僚の他3人と共に奈瀬のサポートに回る事となった“ナーガ”シヤノンの二人が駆け寄ってくる。

「トレーナーさーん 良いお話聞きましたか？」

「アレが伝説のトレーナーね…私たちの前職にもあんな動きをするヤツ見た事なかったけど…」

「うん…父が言う程には人間だったけど、父が言うよりも訳の分からない人だったよ……………」

ベルノライトの女子会と靴選び

宮沢家へ遊びに来たベルノライト、彼女は現在恐怖に若干震えながらも目に前に居る眼帯坊主頭『長岡龍星』にカタログを開きながら靴の説明を行っていた。

「成程…靴の選び方一つでここまで動きが違うのか、ベルノさん、ありがとうございます」

「い、いえ お役に立てたのなら何よりです…」

「大丈夫だぞベルノ、龍星は見かけが少し恐くなってしまったが変わらず良い奴だからな」

「オグリさん…俺、そんなに見た目恐くなりました?」

「うん、結構なものだぞ」

「……………」

憎からず想っている従姉からの率直な外見批判に龍星が落ち込んでいると、その空気を壊すように熨一がノンキな声を上げながら封筒を持ってやってきた。

「オグリー、ハワ〜イで撮った写真、現像したんで持って来たぞ」

「ありがとう、キー坊 あそこは日本だけだな」

「ええねん、律儀にツツコまんでも　しつかし、カナツチのお前がよくプールなんて行ったな？」

「いや…あの時は、教えられてなかったから…」

「ご、ごめんねオグリちゃん　私がちゃんと知ってたら…」

「何、気にすんなやベルノちゃん　オグリから楽しんでたって話は聞いたし体を休めんのも立派な修行やしの、両方出来てハッピーハッピーやん」

「…はいっ！　ありがとうございます、お兄さん」

「……ひよつとして熹一さんって、女性と付き合った事無いタイプですか？」

「いきなりなんやねんお前は　モテまくった青春時代過ごしたからって馬鹿にしくさってからに、そもそもお前は何で宮沢家みやざけに来とるんや」

「いえ、お母さんから由美子さんへ料理のおすそ分けがしたいって言うんで俺がお使いに来たんですよ」

「ソレ、別に優希ちゃんでもエエやろ　正直に言え、オグリに会いに来たんやろ？」

「ちよっ！　それ、わざわざ本人が居る前で言います!？」

熹一からの突然の暴露を受けて目に見えて狼狽えだし、急いでオグリの方に視線を向けるも…

「うわあ！　この時のオグリちゃんのほつぺたりスミたーい」

「本当だ なかなかお目にかかれない料理ばかりで気分が高揚していたみたいだな」

「な？ 聞いたとらへんやん？ 仲の良い女子の間に居る男なんて空気みたいなものや」

「実感…こもってますね」

「だからお前はいちいち…もうエエわ オグリ、ワシにも写真見せてくれや！」

「ん？ ああ、いいぞ」

「えっ!? オグリちゃん、それはちよつと…」

「…うん、二人ともイイ笑顔しとる 写真撮ってくれた六平のオッチャンに感謝やの」

「あ、あの…お兄さん、その写真…わ、私たちのみ、水着が……」

「あ、セクハラやったか!? スマンのお、デリカシーなくて…でもベルノちゃんも流石ア

スリートやな、キレイな体しとるで」

「ひゃあ！ い、いえ…そ、それならそれで別に……」

「（この状況、タマさんが見たら『クソボケがー』って殴り掛かって来るだろうな……）」

「どうした龍星？ 何か達観したような目をしているが…」

「いえ、何か悔しいんで熹一さんにはしばらく教えないでやろうと思っただけです」

「…どういう事だ？」

オマケ

キー坊とベルノの靴選び

「おうつ、エエのうつ！ 前の靴とは重心の掛かり方が雲泥の差やつ！ オグリのついでとは言え、ワシの靴も選んでくれておおきになベルノちゃん」

「良いんですよ、お兄さん オグリちゃんだけじゃなくお兄さんも、足を使う大事な仕事」をされてるんですから、私の知識がお役に立てて何よりです」

「……いや、ホンマに感謝してんねんで？ 家で専門的な事を一番知つとるのはお袋おかやけどそれでも、オグリに合ってる靴」なんてモン、中々見つけられんでな……その点、ベルノちゃんには頭が上がりゃんわ」

「……私は、オグリちゃんと比べたら、弱い」ですから、だからこうやって知識を蓄えておいて、いざと言う時にそれで誰かに頼って貰えるのが嬉しかったり……なんてっ！」

「友人の兄」に対して思わず溢してしまった自分の弱気……それを覆い隠そうとベルノは言葉尻を務めて明るくした。

「……格好エエなあ、ベルノちゃん！」

「……えっ？」

「世の中何でも『積み重ね』や、ワシなんか学生の頃、勉強に関してはマジメに授業受けて家でも二時間勉強しても成績はビリケツやったんよ、でもベルノちゃんはワシよりも頭がエエ、強くなるやり方を自分でちゃんと分かっるとるんや、コレ、ホンマに凄い

事なんやぞ?」

「そ、そう…なんですか?」

「今のベルノちゃんは自分が弱いつて自覚しとるんやったら、もつと強くなれるつて事
“ やん ワシ、尊敬するでっ!”」

「…お兄さん」

「参ったのお…ワシが学生の頃やったら、こんなエエ子絶対にプロポーズするんやけど
なあ…」

「えっ!? お兄さん、それって…」

「まあ昔のワシは今以上にアホやったからな ベルノちゃんみたいな子、見向きもせん
わなっ!」

「…そう、でしようか?」

「おうつ、せやせや さて…今日は付き合つてくれたお礼やし、何か甘いモンでも食べに
行こか?」

「そ、そんな…いいですよっ!」

「“頭使うと甘いモン欲しくなる” …ワシでも知つとる事や 若い内はエンリョせんと
年上にたかつてエエんやぞ?」

「ふふふっ…はいっ! それなら遠慮なく奢つて貰っちゃいますから!」

「良い返事やつ！ ほなら行こか、ベルノちゃん！」

「分かりましたっ！ お兄さん！」

こうして熹一とベルノの靴選びは終わり、次は甘い物を求めての散策が始まる。

そしてそれはベルノにとつてオグリと同じくらい信頼できる相手が生まれた瞬間でもあった。

日下部覚吾、お母さんと会う

かつては世界中を回り、血と硝煙と振るつた拳で上がる悲鳴を聞いた。

今はかつての弟子達と共に一件の店を構え、油と湯気と奮つた麵で上がる感謝の声を聞いている。

私の名は『日下部覚吾』 訳あつて今はラーメン屋『幽玄』の店主だ。

今、私の目の前にはある意味で珍しい客人が来ている。それは……

「ぷはーっ！ 久しぶりの一人飲み、美味しい！」

「チャーシューお待ち……良い飲みっぷりですね」

「あ、あら……ごめんなさい覚吾さん 久しぶりに家族みんなが家にいないからお邪魔させて貰つたのにお恥ずかしい所をお見せして……」

「いえ、お気になさらず しかしお酒に強いですね それもやはり、人より耐性が強いウマ娘故ですか？」

そう、彼女はウマ娘であり、今世間を賑わせている『怪物』オグリキャップの母親だ。そして……

「いえいえ、弱い子は本当に弱かったりしますが、私は嗜む程度ですよ でも……静虎さん

は中々付き合ってくれなくて、結婚したての頃は金時さんが秘蔵のお酒を振る舞ってくれたんです」

そして彼女は灘神影流の先代当主、宮沢静虎の妻であり…

「熹一も最近の母の日には『おかん、飲み過ぎたらアカンぞっ！』って小さいけど高いお酒をプレゼントしてくれたんですよ」

現当主の宮沢熹一…私と私が愛した女性^{ひと}である喜恵さんとの間にできた息子の義母だった。

「…それは、良かった しかし貴女も二人の母とは思えない程若々しい オグリさんから昔は競技者だったと聞きましたがそのお蔭ですか？」

「いえ、競技者と言っても私は早くに膝の不調を抱えてしまったのでそのまま…それが子供の頃のオグリにも引き継いでしまったのか、苦勞をかけてしまって…」

「しかし、貴女と静虎さんの按摩で今は思い通りに走れる脚になったとオグリさんは笑って言っていましたよ」

「…あの子がそう言ってくれるのがせめてもの救いです 熹一も昔からオグリを支えてくれて、血は繋がらなくても本当の兄妹として、あの二人は仲良くやっている…それが私には一番嬉しい」

『血が繋がらなくても』

この言葉に私の心は重さを増し、目の前が僅かばかり暗くなり始めた時——

「覚吾さんのお蔭なんですよ 熹一の優しさを形作つたのは静虎さんだけけど、あの子が静虎さんの優しさを受け入れられる器を作ってくれたのは覚吾さんと喜恵さん、二人のお蔭なんです」

一瞬で、目の前が晴れた気がした。

「小さい頃から苦労続きだったオグリと熹一、お互いが支え合つてこれた理由に……恩人の一人に改めて感謝をと思つて、今日は来ました」

そう言つて一礼する彼女に私は……

「私は……熹一あの子が生まれているのを知つておきながら、自分が父親である事を名乗りもせず……ただ、貴女達夫婦やオグリと楽しそうに笑う熹一を眺めるしか出来なかつた男なんです」

情け無い言葉を吐く事しか、出来なかつた。

「しかも私は貴女達が愛してくれていた熹一と本気の立ち会いまで……」

「ウマ娘と違つて男……取り分け『格闘家』は殴り合いでしか分かり合えないのには『本当に不器用な人達なんだな』とは常々思つてますよ 静虎さんとの時も気が気じゃありませんでしたし」

「それは、本当に申し訳ない……我々のような人種は走りで物事の優劣を決められない

物で……」

「だから、私もオグリもあの時は信じて見守りました。熹一が覚吾さんを超える強い男になってくれるんだって」

その言葉に私は上を向き、年甲斐も無く溢れ出しそうになる涙を堪えながら理解した。

この女性ひとに育てられた熹一に破れたのは必然であり、同じく育てられたオグリの走りに私が救われていたのもまた、必然であつたのだと。

「覚吾さんもまだ気にしているのかなと思つて……はいっ！ コレで水に流しましょう」
「これは……」

そう言つて彼女が来店時から提げていた鞆から取り出したのは小振りながらも上等な酒だった

「喜一からの……母の日のプレゼント」です 『おともも飲まんし、おかんが誰かに振る舞つたれや』ですつて」

「そう……だったんですか」

「父の日が終わつたら静虎さんも多分来ると思うので、その時は今度こそ喧嘩しないでくださいね？」

「はい……その時は是非、男二人で話し合いたいと思います」

「ええ…あら、いけない！ 閉店間際だからって持ち込みしちゃいましたけど大丈夫でしたか？」

「は…はははっ！ 構いませんよ では、早速開けましょうか」

娘であるオグリキャップを思い出させる、少しだけ間の抜けた反応に私は久しぶりに、本当に久しぶりに笑いを上げて彼女からの酒を受け取った。

「なあ、春草 宮沢静虎ってヤツは良い嫁さん見つけたんだな」

「ああ、あれ程の良い女は中々お目に掛かれないだろうな 大観…男は『ああいう女』にモテてこそだぜ」

「大蛇よお…オグリが勝つ度にやってる『食べ放題パーティー』だが、食材をさらに奮発しなきゃならなくなっちゃったじゃねえか」

「馳、そんな事は気にするな…真の母の愛を見せて貰った礼と思えばいい しかし、金城はこんな時に出掛けてるとは運の無いヤツだ」

オマケの宮沢家

同時刻 都内 某焼き肉店

「キー坊、肉が良い感じだ ひっくり返すぞ」

「おうっ！ 秘技、十連返しじゃい!!」

「熹一、野菜が足りひんぞ もっと注文せい」

「おとんは草食系気取つとらんと、もっと肉食えや」

「いや二人とも、バランスが大事なんだぞ? (山盛りの焼き肉と焼き野菜)」

「お、おうっ」

「せ、せやな…」

「…お母さん、『今日は一人で行くから』って言ってたけど、大丈夫かな?」

「ああ、それなら心配あらへんわ」

「せや、熹一の言う通りや」

「我が家で最強なのは、お袋おかんやからな」

「うん、それもそうだったな」

オグリと悪魔を越えた悪魔おにぎりおじさん

——多分、私としてはこれが初めてなのだろう。

「おい、オグリ　ここからは草木が更に多くなる　虫に気を付けろよ」

「大丈夫だ鬼龍おじさん　合宿ではよく森の近くに行くからな、お父さんお手製の虫除けはいつも持ち歩いているんだ」

目の前にいる叔父、〃宮沢鬼龍〃と本当の意味で二人きりになったのは。

今朝の事になる。日課のランニング中に偶然鬼龍おじさんを見つけたのだが、この人には珍しい疲れ切った顔をしていたので心配になりつい、声を掛けてしまった。

するといきなり……

『ドライブに付き合ってくれ』

と、誘われてしまったのだ。

私としては別に誘いを断る理由も無かったし、早速おじさんの持つ高そうなスポーツカーに乗り込んだのだが、するとあれよあれよという間にランニングをしていた市街地があっさりと過ぎ去って行き、辺りを見回しても林しかない田舎道へと連れて来られた。

そうして到着した森林地帯を私は着の身着のままのジャージ姿でおじさんと共に歩いている、というのが現状だ。

「フンっアイツ静虎のお手製とは…年頃の娘に与えるんだから匂いはちゃんと大丈夫なんだろうな？」

「ああ、そこはお母さんとキー坊が口を酸っぱくして言っていたから大丈夫だと思っ
私は別に気にしないんだが…」

「ウマ娘というのは鼻が良いからな、同性の集まりでわざわざマイノリテイ少数派になる必要などない」

「……My海苔？」

鬼龍おじさんは頭がいい。

たまに私に分からない言い回しで喋る時があるが、すぐに意味を教えてください。

「ああ、〃仲間はずれ〃という事だ」
ほらな。

「しかし…お前は危機意識が無いのか？ 俺のいきなりの誘いに即答して周りがほぼ木しかない、こんな場所に連れて来られたんだぞ」

「家族にはおじさんの車に乗る前に連絡したから問題ない いや…ずっと着信やメールが届いてたのが怖かったけど、〃ここ〃に来たら電波が悪いのかすつかり途絶えてし

まったな」

「この場所は『昔ながらの風習を尊ぶ、靈驗あらたかなる聖地』らしいからな　神を愚弄する俺からすれば文明に取り残された、ただの田舎にしか過ぎん」

「…でも私は好きだな、ここ　たまにお父さんや由美子おばさん、尊鷹おじさんが教えてくれる、ダムに沈んだ『故郷』^{ふるさと}　つてこんな感じだったのかな？」

そうだ…この場所に居ると何故か落ち着く。

宮沢家の人達が教えてくれた今は無き『故郷』^{ふるさと}　…行った事の無い私にもそう感じられる程にきつと、ここにはその雰囲気が残っているのだろう。

「……ふんっ　『アイツ等』　揃いも揃ってお前に感傷を語るとはな…あんな田舎での思い出など、碌な物じゃ無かっただろうに」

「だったら、鬼龍おじさんは何故この場所に私を連れて来たんだ？」

私はそう言つて鬼龍おじさんの目を真っ直ぐに見る。

そうすると普段は皮肉や悪態ばかりしか付かないおじさんの口から素直だと思える言葉が聞ける事は、今までの経験で分かっていたからだ。

「……都会に居ると煩わしい物ばかりが目につく事がある　『敵を作ったほうが人生退屈せずに済む』が俺の生き方だが、それでも疲れる時はあるんでな　たまには…敵の居ない所で休みたいと思つただけだ」

「そうか なら私はおじさんの敵じゃないから大丈夫だつて事なんだな？」

ハッキリ言うのと、私の家族は鬼龍この人が持ち込んで来るトラブルのあまりの多さに辟易し、姿を見かければ敬遠している所があるのだが…私自身は不思議とこの人の事が嫌いではない。

おじさんが私達に向ける親愛は間違ひ無く本物であると常に感じてはいるし、悪い人ながらも悪い人なりの「純粹みんなに生きようとしている姿」に、好感すら持つているくらいだ。

…それを家族みんなに言ったら『鬼龍、許さん!!』という空気になつてしまったので二度と言うつもりは無いけれど。

「……まあ、お前は純粹バ鹿だからな 俺の傍に居る事を特別に許してやつてるのさ」
「むっ！ バ鹿とは失礼だぞ、おじさん」

すっかりいつもの鬼龍おじさんに戻つてしまった事に私が頬を膨らせていると、いつのまにか開いた道に出たようで目の前には……

「田んぼが、広がっているな」

「作り方も今時、機械を使わない手作業とはご苦労な事だな…何だ？ てつきり、一面の

田畑に腹でも鳴らすのかと思つたら違うようだな？」

「おじさん、流石にそれは私をバ鹿にし過ぎだ……」

またしても飛んで来た悪態に私が文句でも言ってもやろうとおじさんの方を向くと

……

「…ん？ どうした、オグリ？」

今まで見た事が無いくらい優しい表情をした「宮沢鬼龍」が、そこに居た。

「…やっぱり、鬼龍おじさんとお父さんは双子なんだな 今、そっくりな表情かおをしてるぞ」

「……フンっ！ 下らない事を言うなオグリ！ 虫酸が走るっ!!」

まずい…私の言葉でおじさんの機嫌を損なってしまった…どうすべきか考えていると、すぐに救いの（？）主が現れた。

「オグリ…？ あんらあく「オグリキャップ」かい!？」

「う、うん そうだが…」

「アタシら、アンタン活躍テレビで見とつてね！ 会えるなんて運が良いよお！ ほらあ皆、「オグリキャップ」がここに来てっぞお！」

どうやら私とおじさんとの会話で農作業中のお母さま方に気付かれてしまい、私達は取り囲まれる事となってしまうのだ。

「なんよお ほんに、真っ白でめんこいかわいいねえ（ナデナデ）」

「ど、どうも…」

「お、おいオグリ…見つかっただのはお前だろう 何で俺まで取り囲まれてるんだ」

「こつちも良い男よお ホレこの胸板、カツチカチねえ！」

「はうっ ま、待て！ オグリ、何とかしろ!!」

年齢を感じさせない圧倒的な力強さに、私とおじさんは為す術もなくもみくちやにされてしまった。

米農家の人達つて凄いいんだな…。

「……おじさん、大丈夫か？」

「……あ、当たり前前だ 俺を誰だと思ってる」

「あれまあ…ごめんねえ お詫びになるか分からんけど、私らが作った米で何かご馳走してやっから」

「だ、だったら… “おかかのおにぎり” を頼む そこに居る私のおじさんの好物だと昔、聞いたんだ」

「そうかい！ アンタ、いっぱい食べんのは知ってるからねえ 用意するから待つてなよ」

「…尊鷹か由美子あたりが喋ったのか ふんっ…生憎、今の俺の好みは鯉節から白トリユフをたっぷりとふりかけたキャビアに変わったんだよ 残念だったな」

「この山奥で用意できるわけないだろ 昔の好物でガマンしてくれ、鬼龍おじさん」

こうして本日、私たちはお母さま方が丹精込めて作ったお米で握られた色々なおにぎりを堪能し、再び“自分たちの戦うべき場所”へと帰っていったのだった。

ちなみに、家に帰ったら家族にとっても怒られて、少しだけ…シヨンボリした。

キー坊と北原、出会う

「初めまして、になるんかのお 北原さん」

「君は…宮沢熹一か」

「…顔が売れるつちゆうのも困りもんやな、今度から変装でもするか？」

「あ、いや失礼した 俺…私はオグリさんを担当している…」

「エエねん、保護者のおとんと違ってワシにはタメ口で構わんよ そもそもアンタ、ワシより年上やん？」

「…：分かった オグリの担当、北原穰だ」

「おうっ！ 改めて、ワシは宮沢熹一…妹のオグリやダチからはキー坊呼ばれとる」

「知ってるよ、これでも格闘技のテレビは観ててな 君の活躍には年甲斐もなく憧れすら感じちまった」

「ソイツは光栄やな…：つてちやうねん そんな話しをしに来たんやなかった」

「…何だ？」

「あ…：北原さん 済まんかった！」

「!?？」

「いやな、アンタの事はオグリから聞いたたり写真を見せて貰ったりして知つとつたけども『なんやこのヒョロいオツサンは』やら『おとんと比べたらタフさが足りんわっ!』やら勝手ながらアンタの事、正直認めておらんかったんよ」

「…まあ、君等親子からすれば俺がそう見えるのも仕方がないか」

「じゃあけど、昔おかんから聞いたんじや 『ウマ娘は人間との信賴關係でどこまで限界を超えて行ける』つてな」

「…そういう言い伝えは、確かにあるが それがおグリと俺にも?」

「せやな アニキとしてはちいと悔しい思いもあるんやけど、脚の悪かったオグリが今は自由に走れて、更には自由を超えた先を一緒に歩いて行ける相方に会えたのは素直に嬉しいんや」

「…ありがとな 君みたいな男にそこまで言つて貰えるとは本当に光榮だ」

「けどなつ アニキ」つて立ち位置だけは譲らんぞ! オグリはワシのこの世でたった一人の妹やからな!」

「それなら心配要らないさ オグリにとつて君はいつだつて『自慢の兄さん』なんだからな」

「おおつ! なんや、嬉しい事言つてくれるやんつ!! せつかくやし、飯でも食いに行かへんか? ワシの昔馴染みにもアンタを紹介したいねん」

「そ、それはひよつとして… “人喰い義生”にも会えたりするのか!?」

「おうつ! ヨツちやんだけとは言わずワシの知つとる格闘家皆にアンタと会わせたるわっ!!」

「マジかよ…最高じゃ無いか!」

「せやろつ! 今日とは思いつきり騒ごうやないか!!」

オマケ

宮沢夫妻

「……………」

「静虎さん、心配ですか?」

「いえ、熹一も…もう立派な一人の男です オグリの担当となつとる方に『挨拶に行く』と言つた手前、失礼な真似は…………」

「そう言いつつも随分とソワソワしている様子ですよ」

「こ、これは その…………」

「熹一^{あの子}は今まで『自分が一番オグリを守つてやれる存在なんだ』って思っていたから新しく現れた“トレーナー”に嫉妬してましたからね」

「はい…オグリがカサマツに行つた時ですら目に見えて機嫌が悪くなつてしもうて…」

まったく、お恥ずかしい限りです」

「それでもあの子なりに色々考えた結果、何がオグリに必要なか気付けたから今日は挨拶に行っただんですから静虎さん…信じてあげましょう」

「仰る通りです…ワシもまだまだ子離れが出来ていなかったようで…」

「ふふっ けどもし、本当に失礼な事をしてきたらその時は…目いっぱい叱っちゃいましょう だって、あの子が幾つになっても私達はいつまでも“親”なんですから」

「…はいっ！ そうですね!!」

人喰いポメラニアン登場

人は、ウマ娘は生きるために食べるのではない、己が目の前に出された料理に感謝し、其処にある幸せを享受して己の力と為す、故に食べるのだ。

今現在、積みあがる皿を生み出している彼女にとつての「食事」とはそういうものであった。

「モグモグモグモグ……ゴクンツ）うん……パリパリの皮がとても美味しかったな 北京ダックをおかわりだ」

「くうくっ！ いつ見てもオグリちゃんの食いつぶりは気持ちが良いなっ！ うちの道場生にも見習って欲しい位だぜっ！」

「うちのエクササイズ部門にもウマ娘の子はいるけれど、オグリちゃん程の食欲の持ち主はお目に掛かれないからね 払いは俺が持つからいくらでも食べてくれよ」

「＼ヨツちゃん＼も＼クロちゃん＼も相変わらずオグリには砂糖菓子のように甘いのお……そんな事言うたらコイツ調子に乗ってこの店の食材全部食ってまうぞ？」

「何言ってるんだ、キー坊 オグリちゃんに一番甘いのはお前だろ？」

「フツ……それはそうだろう キー坊が喧嘩三昧に明け暮れてた時も、いつも後ろを付い

て来た可愛い妹なんだからな」

「キー坊は昔から自分より強そうな人を見かけたら喧嘩を売っていたんだ。それを止めるのは家族である私の役目だからな」

「…あの頃は帰ってから親父おとんに殴られるよりもお袋おかんに叱られる方がキツかったから……だからつちゆうて付いて来たオグリを責めるワケにもいかんし、窮屈な青春時代やったわ」

「ほらな？」

「うんっ！ 学生の頃は喧嘩ばかりだったキー坊だけど、昔から変わらず優しいのは知ってるよ」

「アホウ……二人ともワシをイジる為にお前に話を振つとんじやい 律儀に付き合つたる 必要ないやろ……」

事の起こりはオグリキャップのトレーナー、北原穰の希望で宮沢熹一の戦友との食事会が企画されたのだが、呼び出された“人喰い義生”こと高石義生と“灘心陽流当主”、黒田光秀の二人がセツティングした中華料理店へ向かうと、其処には何故か何故かオグリキャップと彼女の友人であるベルノライトも来ており、理由を尋ねると『オグリちゃんの近況も知りたかったから』と言われ、そのまま食事会が始まったのだった。

そして現在会話に入れていない北原とベルノはというと……

「(うおおおおっ！ マジで生の“人喰い義生”じゃねーか！ 身体のおちこちから覗く傷の多さが半端ねえ！ 後でサイン貰えるかな…?)」

「(な、何で私がこんな所に…!? オグリちゃんが『友達とご飯を食べに行くから一緒に来ないか?』って誘われたから付いて行っただけ、お兄さんや北原トレーナーはともかく明らかに只物じゃない二人組と会っちゃうし、訳分かんないよ…(…)」

違う意味で言葉を失っていた…。

「ベルノちゃん、悪いの。うちのオグリアホッが面子も言わずに誘ったんやろ? 堪忍な…」

「い、いえっ!? お気遣い無く…」

「つたく、ヨツちゃんの所為やぞ? 年頃の娘っ子にそんな凶悪な筋肉見せつけおつてからに…早よ、しまえや」

「お、おうっ！ ベルノちゃん、だっけ? 悪いな…すぐになんか着るからよ…」

「す、すいません！ 着る前に筋肉で刺さった刃物を抜くって技…見せて貰って良いですか!」

「キタハラはいきなり何を言ってるんだ? あんなのヨツちゃんが痛そうなだけで何も面白くなかったぞ」

「オグリ！ お前、見たのか!! どんな感じで抜いてた!」

「…なあキー坊、オグリちゃんのトレーナーさん…ひよつとしてヤバい人なのか?」

「いやクロちゃん、ワシもようけ知らんのやけど…オグリが信頼しとるならまあエエかな、みたいな」

「わ、私もあんな北原トレーナーの姿は初めて見たので…意外な一面を見ました」

「そうなんだ…それにしてもベルノちゃん、俺達が考え無しにオグリちゃんを誘ったから今日は来る事になっちゃったけど、大丈夫?」

「はいっ、お話しされてる皆さんの空気がとっても柔らかかったのでもうやく慣れて来ました」

「そら良かったわ 何やかんやでワシ等のような格闘家とベルノちゃん達のようなアスリートじゃ水…ちゆうか、空気が違うからな あんまり会わん方がエエのかと思つとつたんじゃ」

「いえ…確かに最初はちよつとだけ怖かったですけど、段々皆さんが…お兄さんみたいな人達なんだなって思えてきて、その…」

「…ベルノちゃん 今、キー坊って彼女居ないんだよ」

「えっ!?! そ、そうなんですかつ!?!」

「何やのんクロちゃん! ワシの事いきなり攻撃しよって!! ワシの事嫌いになつたん!?!」

「いや…むしろキー坊をサポートしようと思つただけだ」

「モテる奴の考えは訳分からんわ！ どうせワシの周りに居る異性はお袋おかんと妹オグリしかおらんちゆうにつ!!」

「いや、タマちゃんも居るだろ?」

「じゃあけど、アレはもうお前“妹分”やん? 女として見るのはむしろタマに失礼やんケ」

「……ベルノちゃんがキー坊の事、どう思ってるのか俺にはまだ良く分からないけど、キー坊は“こういう奴”だから…後それとね、うちの道場フィットネスもやつてるから良ければ友達でも誘って一度、是非」

「あ…パンフレット? どうも、ありがとうございます(ちやつかりしてる人だなあ…)」
こうして各々が会話に花を咲かせていたのだが、店側の食材不足で敢え無く本日の食事は終了となった。

「…まだ少し、お腹に余裕があるな」

「しやーない、いつものラーメン屋“行くか?”」

「! それはいい考えだ 北原とベルノもどうだ?」

「あ、はいっ! ここ、背中に『北原 穰へ』でお願いします…え、何だ? ラーメン!」

「私はお話ばかりでほとんど食べれてなかったし、付いて行こうかな」

「北原さん、今度のラーメン屋もとびきり強い格闘家が経営しとんのや 行くやろ?」

「えっ！ マジかよ!? だったら、行こうかな…」

「俺達はこれから夜の部の仕事があるから、お先に失礼させて貰うよ」

「おうっ！ じゃあなオグリちゃん！ 北原さんもうちらの団体の試合、絶対に見に来てくれよな!!」

そう言い残すと、久しぶりに昔馴染みの兄妹に揃って会えた事に満足げな顔を浮かべた二人は夜の街へと消えていったのだった。

「なあ、キー坊？ 次はタママも誘ってどこかへ行きたいな」

「せやな、機会があつたらな」

奇人&キンちゃんと神戸で会う

「〃奇人〃、朝昇さん…TDKの準決勝を観て、感動しました お会いできて光栄です
(ガシツ)」

「はいっ、北原穰さん…オグリちゃんのカサマツ時代のトレーナーですね キー坊から
あなたのお話は聞いていますよ、よろしく(ガシツ)」

「(うおおおお…：関節技の達人、朝昇に握手して貰えるとは…感動だ！ 指とか変な方
向に曲がってないよなっ!?)」

「北原のオツチャン…：何自分の手え見てニヤついとんねん、ハッキリ言つてキモイぞ？」
「タマちゃんも久しぶりですね 芝に行つてからの活躍は私も聞いてますよ 頑張つて
いるんですね」

「まあな！ 普段は海外に居る朝昇サンにもウチの評判が届くとは光栄なことちゃ！
けどな…：ウチの大躍進はまだまだ続くでえ!!」

「…：タマちゃん、兄弟子のボクよりも朝昇さんとの距離、近くない？」
「しゃーないやろ 〃キンちゃん〃 体格に恵まれへんかったタマからすりや、朝昇みた
いな同タイプにはシンパシー感じて当然やん」

「モグモグ」そうだぞ、キンちゃん 南京町の豚まんでも食べて元気を出してくれ」
「……あんがとなオグリちゃん 年下の子に慰められるとは、ボクつてば未だにメンタル弱いなあ（モグモグ）」

「おいオグリ、ワシにも豚まんくれや 今、手荷物持つて両手が塞がつとんねん」
「分かった ほらキー坊、あーんしてくれ」

此処は神戸、熹一とオグリキャップが幼少期から育ち、友人にして宿敵でもあるタマモクロスと出会った思い出の場所である。

オグリのトレーナーを務めていた北原穰が『彼女達の育った環境を見てみたい』との希望を受け案内する事となったが、その際に偶然帰国していた『朝昇』こと朝田昇と世話になっている拳術館の掃除に来ていたタマモクロス、彼女と共に居た兄弟子に当たる『人間凶器』金田長英に出逢い、こうして神戸の街を歩く運びとなっていた。

「なあ、タマモクロス…あれつて『兄妹の距離感』で、良いんだよな?」

「北原のオツチャン、別に他の皆と同じタマ呼びで構へんよ いや、ウチが子供の頃からあの二人は『あんな感じ』やったし、ウチにも弟妹おるけどあれ位普通やで普通」

「ボクとの戦いの後もお父さん達と一緒に涙目で包帯巻いてたし、ホント仲の良い兄妹ですよ」

「ちよちよい、金田の兄さんには師匠の代わりにウチが看病してやったやろ」

「いや…タマちゃんの看病はオカンっぽさがあって、*「妹っぽさ」*は無かったんよ……」
「クソボケが——っ!!」

兄弟子の心無い一言に怒ったタマが常に持ち歩いているスリッパによるツツコミを行っても、食らった本人である金田は平然としていた。

「じゃあつけど…タマちゃん、威力が足りんからもつと強く打ち込んで貰って良いよ」

「アホウ 兄弟子に、ましてやツツコミに本気出すウマ娘なんかおらんやろ ウチは鉄山師匠と比べたらお優しい女やさかいな」

「(いやいやいや…今、タマのスリッパから凄い音出てたぞ? やっぱり鍛えた空手家つてのは半端じゃねえな)」

「本当に凄いですよね、北原さん あの耐久力は巻き藁を巻いたバットで顔面を叩く等の修行で培われるものらしいですから」

「いつ!? 顔面を、バットで…?」

「せや、ホントは恐怖感を払拭したいって理由でウチもやりたかったんやけど、師匠と金田の兄さんから珍しく本気で止められてなあ…」

「ウマ娘の選手つてのは顔が命な所もあるからね それにボクも師匠も分かってたんよ…タマちゃんは気概だけで言えば間違い無く*「拳術館最強」*だから、あの鍛錬は意味を為さないってね」

「に、兄さん…師匠…：…ありがとうございますっ!!」

「……………これ、ウマ娘の競技者が見せるワンシーン、だよな？」

「いや北原、私と競い合ったヤエノムテキの所もこんな感じだったとキー坊が言っていたぞ」

「おうつ、せやな　ワシもたまに他流派との交流はやるが、この前に行った金剛八重垣流のヤエノちゃんは、溢れ出そうな獣性を武道によつて戒める事が出来る、良い武術家や」

「…その話を聞くと、なんだかお父さんみたいなウマ娘なんだなヤエノムテキって」

「ハイパー・バトルでワシは確かにおとんを武術家として超えたが、人間としてはまだまだだよ　近い世代に居るあのヤエノちゃんとならワシはまだまだ高みを目指せると思うねん」

「……………そうだな　でもキー坊、私だつて一緒に高みを目指せるんだぞ？（ペシペシ）」

「わあつとるって、オグリと一緒にワシはどこまでだつて強くなつて見せるわいっ！

せやからシツポでワシのケツ叩くのやめてくれんか？　痛いねん…………」

オグリと熹一の強く結ばれた信頼関係、それを北原は何とも言えない表情で見ている。

「……………」

「元担当として、複雑な気分ですか？ 北原さん」

「いえ、朝昇さん…それもあるんですが、オグリが強い理由を知る事が出来て今日は本当に、この神戸へ来れて良かったなと思っっているんです」

「今の担当はあなたの叔父である『魔術師』六平銀次郎 たとえ中央トレーナーの資格を得ても超えるには高すぎる壁でしょうね」

「それでも、あの兄妹を見て改めて決心しました 私は必ず中央へ行き、オグリと『あんな関係』になるんだと」

「…それは結構 でしたら、私がああなたの勉強のお手伝いをさせて頂いても宜しいでしょうか？」

「えっ!? それは……」

「以前からキー坊に頼まれていましてね これでも私、東大法学部を卒業して司法試験も合格している完璧な人間なんですよ 勿論、北原さんが良ければになりますよが…」

「いえっ! 是非お願いします!!」

「…最初から完璧な人間なんて居ない 完璧を目指し続ける姿勢こそがその人の人生を輝かせる事を私はキー坊から教わったんです やつと彼に恩返しが出来そうだ」

「おーいつ、北原さん! タマ達これから道場に行くちゆうんで此処で解散になるから、ワシ等の実家の道場も掃除に行きたいねん 付いて来てくれるか!？」

「私とキー坊でやるから手伝ってくれなくても良いんだが、ただ北原に私達が育った場所を見て欲しいんだ…良いだろうか？」

「…いやっ！ 俺も手伝うよ!! 二人の思い出の場所連れて行ってくれっ!!」

「でしたら、私も行きましようかね 寺で修業した身の上として北原さんにはまず掃除の仕方を教えてあげましよう」

「げっ!?!」

神戸の晴れやかな空の下で笑う兄妹の後を、肩を落とした一人の中年と楽しそうに啜う奇人が付いて行ったのだった…。

父の日編 オトン達を覚醒させろっ!

「…プロテインのミルク割、お待ち（ゴトツ）」

「…ありがとうございます（グイッ）」

此処はラーメン屋「幽玄」、父の日を迎えた宮沢家の長、宮沢静虎は家族から祝いの品を受け取り…それと同時に家族からの催促を受けて愛息、薫一の実の父親である日下部覚吾との話し合いを行う為、この場所へと赴いていた。

「…ミルクは成分無調整、低温殺菌された物……お見事です」

「いえ…あなたの好みは娘であるオグリさんと、そのお母様から聞いていましたので」「なにっ!? あのと二人から…?」

以前は拳を交えた事によってお互いの想いを汲み取りあった二人であったが、静虎からすれば愛する妻と娘が目の前に居る男と自分の好みを語る程の仲になっているという事実には驚愕し、己でも意図しない闘気を発散させてしまうのは致し方ない事と言えた。

そして、その闘気を運悪く浴びてしまった哀れな犠牲者が此処に一人…

「(こ、怖ええ……何でこのラーメン屋に「宮沢静虎」が来て、店長と臨戦態勢に入っ

るんだよ!? 店長の方は平然としてるし、やっぱりタダ者じゃないんだな……」

オグリキャップの元担当、北原穰である。

彼は以前、オグリ達にこの店を紹介して貰ってから味と店長の雰囲気を入り、すっかり常連となっていたのだが今日に限っては来店すべきではなかったと体を震わせながら後悔していた…。

「…はっ！ 申し訳ありません、北原さん 私が未熟なばかりに不快な思いをさせてしまい……」

「い、いえっ！ 大丈夫ですよ、宮沢さん むしろこれが一流の格闘家の圧なのかとか、感激していたくらいですから……」

「す、すいません……（シユン）」

「宮沢さん…見た目は怖いんだけど、こういう所を見せるから警戒心が薄れるんだよね…不思議な人だぜ、ホント）」

「……」気分を害されたなら謝罪します しかしご安心ください、あなたの奥様もオグリさんもあなたを大切に想うが故、私に美点や好みを語ってくれたのです 何卒勘違いの程、なさらぬように」

「…日下部さんも重ね重ね申し訳ありません 私自身、この様な激情が己の中にあつたのかと恥じ入るばかりです」

幼少期から格闘に明け暮れていた堅物二人と一般人の中年一人、何とも言えない空気が、辺りを立ち込め始めた頃にそれを破るのは意外にも一人の中年の言葉であった。

「何と言うか……お二人とも、不器用なんですね?」

「なにっ!？」

「いや……だって、そうでしょう? お互い普通に話したいだけなのに、『この人はどんな言葉を求めてるんだろう』とか『この言い回しは相手を不快にさせないだろうか?』なんて牽制しあってるのが傍から見ても分かるんで何ともじれたい、と言うか……」

「いえ、北原さんの言う通りでした……どうにも場の空気に緊張してしまい、立ち合いの感覚で臨んでしまっていた様です」

「はい……オグリさんのトレーナーさんの仰る通り、私も自分が思っている以上に平静を保っていませんでした……本当に、ありがとうございます」

「いやいやお二人とも、頭なんか下げなくて良いですって! それに、私はオグリの担当と言つても今は……」

「何を仰いますか 私の娘は『自分を見出してくれた凄い人なんだ』とあなたの事を今でも尊敬しているのです 御自身を卑下するような真似はよして下さい」

「熹一もあなたの事は『話していると場の雰囲気や和らげてくれるエエ人なんや』と褒めていたのですが、その意味にお恥ずかしながら今……気付きました」

「あ、あははは……それは、どうも」

本人としては見たままの事を言っただけで明らかに自分より格上であろう格闘家二人に心からの賞賛を受けているというこの状況、北原の脳は驚きと喜びで、店長が宮沢熹一を呼び捨てにしているという事実を忘れてしまう程には仕事を放棄させていた。

「北原さんのお蔭ですっかり私も緊張が解けましたので、良ければ私のつ、つ、つ、妻から頂いたお酒でも一緒に如何でしょうか……」

「……………はいっ！ 私で良ければ付き合いますよ!!」

『結婚して長いだろうに未だに『妻』って呼ぶの恥ずかしいのかよ、この人』という言葉葉を飲み込み、北原は大人の対応で静虎の誘いに快諾した。

「それではグラスは……宜しければ、裏に居る私の元弟子達もご相伴に預からせても良いでしょうか？ 宮沢さん」

「はいっ、構いませんよ！ そうなつて欲しいと熹一とオグリからは酒の肴になる物をプレゼントとして、たくさん貰つて来ましたので！」

「ありがとうございます おい、お前達！ 宮沢さんのお許しが出たぞ!!」

覚吾の一声と共に裏で待機していた『幽玄死天王』である犀の大観、疾風の春草、颯の観山、大蛇の武山が瞬時に静虎達の前に現れた。

「なあ、春草 俺達も参加して本当に良いのか？」

「覚吾さんと宮沢静虎が許可してくれたんだから構わないだろ。しかし『父の日』ね…俺もこの飲み会が終わったら、久々に家族サービスでもやるか」

「今は日本に越して来てんだろ? 家族には会えるうちに会つとけよ疾風」

「馳…今から『男達の時間』なんだ、そういう湿っぽい話は後にしろ。前回の奥さんの時は上等な酒をただ眺めているのは苦痛だったんでな、今日はこの『大蛇』の名の通り、たらふく飲ませて貰うぜ」

「(えっ…!? 何だこの人等、いきなり現れた…つてかビジュアルがスゲエ! 妖怪かよっ!?)」

突如現れた四人に北原が慄いているのを無視するかの如く、客もおらず閉店間近の幽玄を当の店員達が飲み場へと瞬く間に変えていった。

そして完成されたスペースの中央で音頭を取るのと言わずもがな、店長である『日下部覚吾』である。

「よしっ! 準備は整ったな!! それでは…本日の今日、この日を祝つて…:」

「『『『』』』』 乾杯っ!! 『『『』』』』」

「ガチャツ) 店長、配達が終わったが一体何の騒ぎだ?」

忘れ去られていた幽玄最後の弟子『金城剣史』が到着した事により、再び乾杯の音頭を取り直す事となったのであった…。

オマケの宮沢家

「キー坊…お父さん、大丈夫だと思うか？」

「心配すんなや、オグリ 親父も…親父も良い大人なんやし、顔突き合わせていきなり喧嘩とまでは行かんやろ」

「そうよオグリ、熹一の言う通り この前、覚吾さんと話した時に私思つたのよ あの二人は絶対に相性良いんだって」

「…お袋もおかんこう言つとる ワシ等に出来るのは滅多に飲まん親父がへべれけになつとる所を家に帰すつて仕事だけや」

「あら？ その仕事はお母さんが行くわよ 静虎さんが酔つ払うなんて面白くてかわいい所、滅多に見られないんだから独占しとかないとね」

「お母さん…」

「ホンマ、ワシ等のお袋には敵わんなあ……」

彼岸の夢

「——ここは、海か？」

オグリキャップ。彼女はふと、目の前に砂浜と海以外……何も無い空間に自分が居る事に気付く。

「私は確か……カサマツの練習場で走り込みを終えて……ご飯をお腹いっぱい食べて眠くなってきたから、そのまま自室で横になって……そうか！ これは夢なんだなっ！」

段々とハッキリしてきた意識の中で彼女は今までの自分を行動を思い返し、さらには自分の顔を引っ張ってみたい、つねったりして痛みを感じない事に気付いた結果、この状況を自分の頭が見せている『夢の中』であると結論付けた。

「まずいな……少しだけ仮眠をと思ったけど、大分深く眠り込んでしまったようだ。早く起きて午後の練習に戻らないと……」

夢と自覚した以上は早く目覚めなければと彼女が砂浜を全力で駆け抜けるも夢の世界からは抜け出せず、意図せずして午後のランニングが夢の中で始まったのであった。「ハッ、ハッ、ハッ……流石は夢の中だな、いくら走っても疲れが全然来ない……むしろ、気分がどんどん上がって行くぞ」

「それはそうさ、ここは天国だからね」

突如、自身の横から聞こえた声に驚いた彼女が振り向くと驚愕のあまり足は止まり、ランニングを中断する事になってしまった。

彼女が足を止めるのも無理はないその相手とは……

「あ、アイアン木場?!」

「やあ、久しぶりだね オグリキャップ」

かつてオグリの父、宮沢静虎と兄、宮沢熹一と死闘を繰り広げた伝説のプロレスラー、アイアン木場が其処には居た。

「な、何でお前が……いや、昔キー坊も、TKG」の決勝が終わってお前に会ったと言つたし、『ここは天国』って……私は死んでしまったのか!」

「TDK」だよ 私主催の大会名も碌に覚えてないとは……相変わらず私の事が嫌いなようだね」

「当たり前だ! 私が子供の頃にお父さんの闘う姿を見る羽目になったのは国へ帰れなかったミハイルさんを騙していたお前の所為なんだからな!!」

「……ミハイルか、懐かしい名前だ 彼は元気でやっているかい?」

「ああ、この前の早朝ランニング中にたまたま会つたんだが、今度国へ帰れる事になったらしい 嬉しそうにしていたよ……って違う!」

昔を思い出し、彼女からすれば珍しい「怒りの感情」を露わにしていたのだが、目の前に居るアイアン木場からは生前のような獐猛な覇気は感じられず、穏やかに話しかけてくるものだからオグリにしてはこれもまた珍しく「感情が迷子になる」という状態に陥っていた。

「そもそも私は何で死んでしまったんだ!? キー坊程じゃないが私だって「タフなウマ娘」って言われているのに……」

「キー坊の時と同じさ 君も「愛」を全うして……いや、「その途中」を走り抜けて来たから今、ここに居るんだ」

「『愛』って……昔、天国でお前がキー坊に言っていた「憎しみも恨みもない境地」の事か? 私はそんな事、意識した覚えは無いぞ」

「君は少し前にジュニアクラウンを制しただろ? その時の心境さ」

「それこそ違う……あの時の私にあった気持ちは『負けたくない』って気持ちだけだったから」

「その『負けたくない』には競った相手への「純粋な感謝」しかなかったからさ 君達アスリートに比べて、我々格闘家がそこまでの心境に至れるのは……それこそ「命懸けの相手」くらいだからね」

「……お父さんとキー坊、そして……ガルシアの事か」

「ウマ娘」という存在は基本的に競い合う事を重視し、争いには興味が無いものだが……君はその中でも特に純粋な様だ。他者に対しての妬みや嫉みがほとんど感じられないのさ。」

オグリはこの言葉に思わず黙ってしまう。

それは目の前に居る男の突然の賞賛に対して感じ入った……などという事では一切無く、新たな怒りが湧き出て来たからである。

「……妬みだの嫉みだの、私は確かに一緒に走った相手にそんな事は考えてはいないけれど……嫌いな相手だって間違いなく居る……アイアン木場、お前みたいな奴だっ！」

「……改めて、君が私を嫌っている理由を聞かせてくれないか？」

「ああっ！ まず、私にとってこの世で一番大切なのは『家族』だ！ お前は自分の勝手な都合で家族であるお父さんとキー坊に迷惑を掛け続けた!!」

「……そうだね」

「次に自分の家族に対しての扱いだ！ 『キバシン』はキー坊のお蔭で今では私達とご飯に付き合ってくれるまで仲良くなれたが、『キバカツ』はお前の教えの所為で今でも我が家にちよつかいを掛けてくるからキー坊が嫌そうな顔をしているのが見えていて辛い!!」

「活一郎……今でも私の教えを守っているのか」

「まあ、キバカツはこの前、私の従弟の姫次に成敗されたから良いんだが…何より、私がお前を嫌っている一番の理由だが……」

「…何だい？」

「お前が死んでしまつて、お父さんとキー坊を悲しませた事が、本当に許せないんだつ
!!」

「……つ!？」

「キー坊の泣いた所は小さい頃からさんざん見て来たし、私も見せて来たけれど、お父さんがあんなに悲しんでいる姿を見たのは初めてだったから…そんな表情をさせておいて二度と謝れもしないお前の事が許せないんだつて思つたんだ!!」

今までずつと言いたくても言えなかった思いを爆発させたオグリは普段見せている敬愛する叔父、尊鷹の真似” という仮面も脱ぎ捨てて、一人の少女として目の前に居るアイアン木場に言い放つた。

「私はお前の事が嫌いだ! 大嫌いだ!! 勝手に死ぬなつ!! テレビでお前の姿が映る度にお父さん達に悲しい顔をさせるなつ!!」

「……………」

「…これが、ずつと私がお前に言いたかつた事だ やつと言って、満足した」

「…やつぱり、ずるいんだな 宮沢家の男達というのは」

「…いきなり何だ？」

「私はね、自分の父のように、強くなれば妾だった私の母や本妻のような『良い女』が手に入るのだと信じて疑わなかった…だが、現実は違った」

「当たり前だろう お前は確かに強いんだらうけどお父さんやキー坊と比べて全然優しくないなかつたんだからな」

「だからこそ君の母…そして今では君を含めた『二人の良い女』に愛されている宮沢静虎とキー坊が心底、羨ましいのさ」

「……お前の話はこれで終わりか？ だったら私はそろそろ帰りたいんだが」

「ああ…小さい頃は足も碌に動かず、キー坊の後ろに付いて来た子供の成長が見れて満足だ 今まで、引き留めてしまつて済まなかつたね」

その言葉と共にアイアン木場の姿は徐々に薄れていく。

「アイアン木場、最後に良いか？」

「…何だい？」

「言いたい事を言つてすつきりしたから、もう私はお前の事が嫌いじゃ無くなつたようだ」

「…そうか 君の心残りが無くなつたのなら、何よりだ」

そう言い残し、男の姿は完全にオグリの目の前から消え去つた。

そして次の瞬間には――

【今年で※※※※※※の※回忌となりましたが、彼の雄姿をもう一度ご覧ください】

「……………ん？ 私は、寝ていたのか？」

「おい、起きたかオグリ！ 昼飯食べて寝てたら全然起きないからな、心配になって医務室にベルノと一緒に運んだんだが……………」

「うんっ！ 軽い検査はしてもらって異常なしって言われたけど……………このまま目覚めないなら病院へって思ってたんだよ」

担当トレーナーである北原稜と友人であるベルノライトの二人が安堵した表情で目覚めたオグリの前に居たのだった。

「キタハラ、ベルノ……………心配を掛けてしまつて済まない 何か……………長い夢を見ていた様なんだが、どうにも思い出せなくて……………」

「起きてくれたんなら、それで十分さ」

「トレーナーさんの言う通りだよ どこか調子の悪い所つてない？ あつたら念の為に病院で見て貰わないと」

「大丈夫だよベルノ 私は元気だし、もし調子が悪くてもその時はお父さんに診て貰うから」

「あれ？ オグリちゃんのお父さんってお医者さんだっけ？」

「いや、違うんだが 私のお父さんは……」

【素晴らしいですね “アイアン木場”の技の運び方は正に芸術的だ 彼を超えるプロレスラーは今後、現れるのでしょうか?】

「やべっ! (プツツ)」

オグリの視線が点けていたテレビの“アイアン木場特集”に向けた事に気付き、北原は慌てて電源を切る。

理由を尋ねた事は無かったがアイアン木場の話題が出ると彼女の機嫌が目に見えて悪くなってしまい、自然と話題にすら出さないと暗黙のルールが出来上がっていたのだった。

「小声）トレーナーさん、何でテレビ点けっぱなしにしてたんですかっ!？」

「小声）す、すまん…オグリは嫌ってるようだが俺個人としては大ファンでき、寝ている間までなら大丈夫かなと思っ…」

「いいよ、テレビを点けてても」

「えっ!?! でもオグリ、お前…」

「そうだよオグリちゃん、大丈夫なの?」

「…うん、良いんだ二人とも 何故だか分からないけど、もう私はアイアン木場の事が嫌いじゃなくなったらしい」

リキちゃん、オグリにお祝いをする

「(な、何で俺は今こんな状況になつてるんだ……?)」

オグリキャップの担当：否、今度から「元」担当になる事を自身で決意した北原穰は現在、オグリと来た定食屋で恐怖に震えていた。

『ダイヤの原石が「今の」己の下に居ては決して磨かれない』という事を自覚して相棒との別れを決める覚悟を見せた男が今：歯をガチガチと鳴らし、胃は重さを増して吐き気が込み上げ、目の焦点は合わなくても誰が彼を責める事など出来ようか、何故なら現在、隣に居るオグリと彼の目の前に居る人物とは——

「オグリ……また、背が大きくなつたか？ ちゃんと飯食えてるなら何よりだ」

「「リキちゃん」、久しぶりだな リキちゃんは最後に会つた時より少し痩せたな ても、元氣そうで安心したよ」

「関東道城会系新藤組の現組長」新藤力丸……いわゆる「ヤクザ者」が突如現れて自分達が据わっている席の隣向かいに腰掛けていたからだつた。

「……つたく、相変わらざるの「リキちゃん」呼びかよ オグリよ、前々から思つてたがお前はキー坊の影響を受け過ぎじゃないか？」

「キー坊は気に入った人に愛称を付けるからな　それはつまり『良い人』だって事だから私も做つて呼ぶ事にしてるんだ」

「…『良い人』ね　そいつは間違つても『人殺したヤクザ者』に言う言葉じゃねえんだが、その所…分かつてんのか？」

「ヒイツ!!」

先程まで穏やかな調子から一変し、剣呑な気配を放つ力丸に北原は意識を手放しそうになるも、当のオグリは気にしていない様子であった。

「リキちゃん、ここは『皆が楽しく食事をする場所』なんだ　恐がらせる様な事はやめてくれ」

「…初めて会った時から思ったが、お前等兄妹の肝の据わり様はなんなんだ？　俺達の仕事は人を怖がらせる事だつてのに、まるで風に吹かれた柳みてえな顔しやがつて」
オグリ指摘を受けてあっさりとした気配を霧散させた力丸は呆れた様子で彼女に疑問を投げかける。

「別に…私が子供の頃、お父さんの腕を切ろうとしたヤクザのおじいさんから始まつて、その後も家族絡みの荒事は頻繁あつたから…慣れただけだよ」

「お前等の家も、色々大変だったんだな…それでもキー坊は『ハイパー・バトルを優勝』、お前も今度はカサマツから『中央ヘデビュー』　表の世界の花形に成れたんだ、大

したもんさ」

「私はまだまだこれからだよ それにキー坊のハイパー・バトル優勝に関してはリキちゃんが紹介してくれたお蔭でもあるだろう？ あの後連絡が取れなくて私達も心配してたんだ」

「…あれから俺も色々あつてな、大分稼がせて貰ったが命取られそうになった所をお前等の叔父に助けられたり、その後も綱渡りばかりの日々で生きた心地も無かったよ」

「叔父つて…鬼龍おじさんの事か？」

「ああ、そうだが…まあ、今では“そこそこの立ち位置” っつてヤツに収まつてな ようやくお前のデビュー祝いに来れたつてワケだ」

「…そうだったのか 私もあの時はキー坊とお父さんが血が繋がつてない事を知ったり、ガトリングで撃たれたお父さんの看病をお母さんと一緒にやって、銃を向けて来た相手をおジイちゃんと一緒に締め落としたりと色々あり過ぎたけれども、リキちゃんも大変だったんだな」

「…いや、十代の頃に潜らせるべきじゃない修羅場に巻き込まれて悪かったよ お前のお袋さんも含めてだが本当に、済まない」

「そんな事ないぞ 朝昇さんにも久々に会えたし、アメリカ本場のハンバーガーもお腹いっぱい食べれたから良かったよ」

「お、オグリつてとんでもない経験してたんだな……」

淡々と、しかし懐かしむ様に当時の壮絶な経験を振り返る相方に北原が若干、引き気味になりつつも遂に力丸に対して会話を行う覚悟を決めた。

「あ……あの、オグリはもうすぐ私の手を離れてしまうとは言え、私の担当なんです
中
央へのデビュー祝い」とは言え、この子に関わるのはやめて頂きたいのですが……」

「……………(ギロツ)」

「ヒエツッ！ す、すいません!!」

「……オグリ、いい担当さんを持って良かったじゃねえか」

「うんっ、キタハラは本当に良い奴なんだぞ キー坊とも仲良しだしな」

「キー坊の方は『お前が認めたから』信頼してるって事なんだろ つくづく似た者兄妹
だ……おい、北原さんだったな」

「ハイッ！ 何でしょうか!!」

「アンタの言う通り、俺のような日陰者がコイツ等に関わるのは今日限り終わりだ 安
心してくれ」

「えっ!?!」

「そんな……リキちゃん」

突然告げられた『絶縁宣言』に北原は驚き、オグリは哀しみの表情を見せる。

「そんな顔してくれるなオグリ　そもそも俺達の接点なんて　〝入院していた親父繋がり　”でしか無かったんだ　俺の親父が死んじまった時点で縁を切るべきだったのに遅すぎた位だよ」

「そ、そうだったんですか」

「ああ、北原さん　でなきやキー坊やオグリコイッみたいなきレイな奴らに汚れちまった俺が近づいて良い道理なんて無いからな」

「そんな事言わないでくれっ！　リキちゃんは汚れてなんか……」

「汚れてるんだよ　本当はヤクザなんかになりたくなかつたし、親父もそれを認めてくれてたのに……親父を死なせた奴を恨んで殺つた時点で俺はウス汚い世界に入っちゃまった」

「……………」

「でもなオグリ……そんなウス汚い世界に居る奴等にとつちや、お前等みたいなの　〝まつすぐ、キレイに生きてる存在”　つてのは憧れなんだよ」

「リキちゃん……」

「中央に行く……つていうのも裏を返せば利権絡みのゴタゴタに巻き込もうとする奴等に目を付けられるリスクが高くなるつて事だからな　其処は蛇の道は蛇つて事で俺が陰ながら手を貸そうと思つたのさ」

「あなた、オグリの為に……ありがとうございます！」

力丸の本心を知り、北原は思わず深々と頭を下げていた。

「北原さん、こんな人前で頭なんざ下げする必要ない 俺がオグリに出来るデビュー祝いなんて、これ位のものだしな」

「いえ、ですが……」

「それによ……俺、実は子供の頃から『ウマ娘』ってヤツらが好きだったんだ」

「えっ？ そうだったのか、リキちゃん？ 今まで一度もそんな事……」

「当たり前だ、ウマ娘本人に面と向かってそんな事言えるかよ……恥ずかしいだろ」

「それはやはり、先程の『まっすぐ、キレイに生きてる』という所が、ですか？」

「まあな 皆が皆そうじゃないってのは百も承知だが……昔、親父が元氣だった頃に中央のレース場に連れられてよ 其処に居た連中がキラキラ輝いて見えて……本当、キレイだったんだ」

「中央……今度、私が行く場所か」

「オグリ、お前ならきつと其処で輝ける 何せ初めてキー坊と一緒に居たお前を見て、荒んでた俺の心に『子供の頃』を思い出させてくれたんだからな」

「……ありがとう、私は走るよ リキちゃんの想いも背負って、中央で戦ってくるから」

「ああ……そうしてくれ それじゃあな、長々と居座っちゃまって悪かった お前等兄妹の

事は「陰ながら」応援してるからよ」

そういう残すと力丸は席を立てて店から去り、来る前と変わらない空気感がオグリと北原の間に戻った。

「何ていうか…不思議な人だったな　「悪いんだが優しい」、「みたいな」

「リキちゃんは出会った頃からあんな感じだったからな　私は「義理堅い人」だって思ってる」

「そういうもんか…さて、俺達もそろそろ店を出るか」

「分かった…いや待てキタハラ、これは…」

店を出る為二人は立ち上がったのだが、そこでオグリが手に取った伝票を見てある事に気付いた。

「見てくれ、キタハラ　伝票にリキちゃんからのメッセージがある」

「なっ!?　いつの間に…『この店はウチの系列だから今回に限り無料で飲み食いさせてやるよ』　成程、道理で都合よく現れたワケだぜ…」

「リキちゃん…本当にありがとう　このお礼は、私の走りです」必ず返すからな」
そして今度こそオグリ達は店を後にした。

もう二度と会う事はないであろう友人と交わした約束を胸に携えて…。

風のミノルと土（ダート）のイナリの話

「…女将さん、この煮物美味しいのお！ 味がしつかり染みとるわっ」

「ありがとう、キー坊 グラスがそろそろ空きそうだけどお代わりはいる？」

「せやな、もう一杯貰います」

とある小料理屋で宮沢熹一は一人料理をつまみながらグラスを傾けていた。

その中身は勿論ノンアルコールでもう成人して酒は飲める物の“常在戦場”を己に課している身として彼は外では極力飲むのを控えていたからである。

すると店のドアが開いて待ち合わせた人物の姿を見かけたので彼は人懐っこい笑顔を向けながら声を掛けたのだった。

「おうっ、北原さん 勝手に始めてて悪いのお 中央の試験も近いっちゆうに急に呼び出して悪かったな」

「いやキー坊、ありがとう 朝昇さんに“効率的な勉強方法”ってヤツは教わったんだが、久しぶりに本気で勉強するとどうにも頭が痛くなつてな…」

「せや、オベンキョーで頭が痛くなるのは分かるわ…せやから“息抜き”っちゆう事で声を掛けたんや 勿論、アルコール抜きでな」

「言いたい事は分かるがキー坊…こんな『良い雰囲気のお店』で一滴の酒も飲めないのは辛すぎだろ」

「いや、悪いのお　ワシもゆつくりできる場所なんて親父おとんも良く行つてた『ここ』位しか知らんのや」

「えっ!?!　『宮沢静虎の御用達』なのかよ、この店!」

「はい、お客様がお望みであればプロテインのミルク割も出来ますよ」

驚く北原に美しい女店主は微笑みを浮かべてメニューを差し出した。

「は、ははっ…ありがとうございます　おお、どれも美味そうだな」

「せやろ?　ワシのお袋おかんにも負けん位、ここの料理は絶品なんじや」

「ふふっ、キー坊のお母さんも良くウチの店を利用してくれてるんですよ」

「そうだったんですね　なら、まずは季節のお通しをお願いします」

「なあに北原さん　酒は無くとも気持ち良く酔わせたるから安心せえ　もう一人呼んどるからな、そろそろ着く頃や」

「な、何だよキー坊　まさか『キレイ所』か…?」

「アホウ、ワシに女つ気なんぞ期待すんなや…『格闘家』じゃい　ホレ、北原さんも前に会いたいつて話しとつた…」

「いや、待てよキー坊　それって……」

北原の声を遮るように店のドアが開き、「その人物」は姿を表した。

「よお、久しぶりだなキー坊　『灘と幽玄の大将戦』は海外でだが観させて貰ってな、また俺が倒すに相応しくなったようで嬉しいぜ」

「おうつ、ミノルさんも相変わらざるのエラソーな態度でワシも安心したわ」

「か…『風のミノル』じゃないか!？」

かつては灘神影流と祖を同じくした覇生流体術の元・師範代『風のミノル』こと鈴木ミノルが傲岸さを含む、爽やかな笑みを浮かべていた。

「ハイパー・バトルの宮沢静虎との戦い観ました！　お会いできて光栄ですっ!!」

「キー坊から話は聞いてるぜ、オグリのカサマツ時代のトレーナーだろ？　しかしよ…出会い頭によりにも依って俺の『負け戦』を語るとは…アンタ、中々面白いな」

「あつ…いや、すいません!」

「北原さん、ミノルさんはおちよくつとるだけや　見てみい…言葉と裏腹に顔はニヤついとるやん」

熹一の指摘通り、ミノルはイタズラが上手くいった少年のような茶目つ気を含んだ笑顔を見せており、北原は胸を撫で下ろしていた。

「ま、マジだ　良かったあ…」

「悪いな、『宮沢静虎』に『鬼龍』…奴等に負けたのは思う所もあつたが、今は気にし

ちやいないんだよ　なんせ、お蔭で俺はまた更に強くなっちゃったんだからな」

「ポジティブさも変わつとらんようで何よりや…で？　今日は連絡が付いたんで呼び出したんやが、そもそも何で日本に戻ってきたんや？」

「おっ！　聞いてくれたか、嬉しいね　実はな…俺、少し前に「中央のトレーナー資格」を取つてたんで自分の修行と並行して勉強の為に海外回つてたんだが、それが一区切り付いたんで帰つて来たのよ」

「なにつ!?!　「トレーナー」やて!?!」

「しかも「中央」の!?!」

熹一と北原が驚くのも無理はない、格闘家として名の売れているミノルの突然の「中央トレーナー就任」に店内の空気は一瞬で騒然となったのだ。

「良いね良いね二人とも、その顔！　話を洩つた甲斐があつたぜつ!!」

「いや…中央の資格なんてT大合格以上の狭き門だつてのに格闘家をやりながら…?」
「しゃあけど、ミノルさん…何でまたトレーナーの道を？」

「まあ、それなんだが…実は俺が出て行つた「覇生流」にな、一人のウマ娘が居ただよ名を「イナリワン」やる気と才気は俺も認めていた逸材よ」

『イナリワン』と彼女の名を呼ぶミノルの声は誇らしげに弾んでいた。

「気性は激しい奴だったが、其処はウマ娘らしく殴り合いにはとんと興味を示さないで

“走る事”に夢中な奴だった」

「……つまり、ミノルさんは彼女の為に中央の資格を？」

「北原さん、そこがちよいと複雑だな。詳しい理由は省くが覇生流の高弟共……特に“狐面を被った4人”はキー坊の使つてる灘神影流を目の敵にしてんのよ」

「成程、分かつたわ。ミノルさんがワシ等を潰せず流派を抜けたんで、代わりに白羽の矢が立ったのがそのイナリっちゅうワケなんやな？」

「ご明察。坊主憎けりや袈裟まで”なんて言葉があるが、事もあろうにアイツ等今度『宮沢家の長女であるオグリキャップを潰せ』とイナリに命じやがつたんだ」

「ほおう……せやつたらワシ等、灘の者が”直接”挨拶に出向かんなあ……」

“妹の危機”を聞いた熹一は瞬時に空気を戦闘態勢に切り替えたのだが、ミノルがそれを止めた。

「おいおい、キー坊……話しは最後まで聞けよ。隣にいる北原さん……ビビツちまつてるぜ」
「……………（ガタガタガタガタ）」

「す、スマン！ 北原さん、大丈夫か!？」

「お、お、おうつ……大丈夫だ」

「……つたく、話を戻すぞ。俺も久しぶりに覇生流に戻つてその話を聞いたら流石にムカついてよ、狐面4人の顔にお得意の“風当身”ぶちかました後、イナリを連れて逃げて

やったのさ」

「か、風当身!! あの手当身かよっ!」

「あちやく、そんな絶縁どころかお尋ねモンやんケ 大丈夫なんか?」

「大丈夫なわけねえだろ 取り敢えずイナリの事は俺と同じく昔、覇生流を抜けて今は大井でトレーナーやってる、榊原龍子」さんに預けて湧いて来た追っ手を片付けた後、海外にトングズラしたんだからな」

唐突に始まった壮絶な話に北原は更に体を震わせ、熹一は呆れ顔を見せるもミノルの口は止まらない。

「でよ、龍子さんの息子がアメリカに居るつてんで世話させてやろうと俺もハイパー・バトル振りに渡米する事にしたんだ そしたらな、その息子の太郎ってヤツが勉強してたのが何と……」

「アレやろ 『中央トレーナーで俺も折角だから資格取っちゃまうか』 違うか?」

「何だよオイ! 一番いい所を言っちゃまうなんてキー坊、お前ホントに関西人か?」

「生憎、ワシは神戸人や 相手のオチ待ってやるほど寛容やないんや」

「マジかよ……そんな簡単に中央の資格を取っちゃまうなんて……」

熹一とミノルが軽口の応酬を繰り返して横で北原はシヨックを受けていた様子を見せていたが、それに気づいた熹一がフオローを入れる。

「ミノルさんはこんな軽く言つとるが本人がエライ努力家でな、基本的に自分の為に頑張つとる人が、〝ここまで〟やるのはそんだけイナリつちゆう子を大切にしとるって事なんや 北原さん、アンタがオグリの事を想つてくれとる様にな」

「き、キー坊…」

「オイオイオイ キー坊、なに勝手に人を感動路線に巻き込んでんだよ」

「なんや、ミノルさんはその子の事が大切やないんか？」

「…俺は基本的に自分が強くなる為なら吐き気を催すヤツにだつて頭を下げる でもイナリは違う、〝伸びるヤツが環境で潰される〟なんて我慢がならないつてだけだ」

「な、北原さん？ ワシはミノルさんのこういう所がメツチャ好きやねん」

「〝傲慢さは優しさの裏返し〟…誰が言つたかその通りだな ますますファンになつちまつたよ」

「悪いが俺はその方向性でのファン獲得は望んでないんだよ しかし良いのかキー坊？

俺はまだ経験が浅いつて理由で中央では太郎のサポートを任されたが、〝ウチのイナリ〟がお前の妹、オグリに挑んで来るんだ…覚悟しとけよ？」

「何かと思えばそんな事かい、心配いらんわ」

熹一はそう言うのと北原の肩に腕を回し、ミノルに宣言する。

「ワシ等の希望、〝宮沢家のオグリ〟には六平のオツチャンと今度から中央に行くこの北

原さんが付いとんじゃい!! ミノルさんこそ覚悟せえよ!？」

「い、いやキー坊…俺はまだ試験も受けてないんだが……」

「そいつは面白え…その時はよろしくお願いされてやるぜ! 北原さんよ!!」

その後、己の担当バを語りながら白熱する男共を横目にしながら小料理屋の女店主は微笑みを浮かべて彼らが注文した料理の準備をしていた。夜はまだまだ長い…。

オマケ

イナリ、オグリとベルノと出会う

ある日、イナリワンは快晴の空の下、中央の学園の高みに立ち、通りがかったオグリに宣戦布告をする。

「やあやあやあ! お前えさんが、灘のオグリキャップだな!! あたしは、元・覇生のイナリワン!! 超えるべき相手の面あ拌みに来てやったぜい!!!」

「うん、キー坊からお前の事は聞いてるぞ。しかし…わざわざそんな高い所に立つて昼間だというのに寒くないのか?」

「…それに『拌みに来た』って、私達がここを通らなかつたらどうしてたんですか?」

「べらんめえちくしょう! いきなり何でい、二人掛かりで!! 糀を思えばこの身に吹く風なんざ屁とも思わねえし、お前えさん等がここを通るのはミノル兄さんの『ミ

ノルノート”の情報通りだから問題なんざねえ!!」

「まだミノルさんはノートを使っているのか。そろそろタブレットに移行した方がいいぞ」

「私が使っているのでおススメを紹介しましょうか？ 覚えると情報の取り出しがラクになりますよ」

「があああああつ！ 会って早々にミノル兄さんの”ごだわり”にケチ付けるたあ、”粹”じゃねえ奴等め!! お前えさん等の顔、しっかと頭に刻んだかんなつ!!!」

これがオグリが後に中央で”三強”と呼ばれるイナリワンとの初会合であった。

北原、メジロアルダンの生き様を知る

「今だっ！ そこだブル！！ 仕掛けろっ！！」

「いけるよっ！ そのタイミングで、巨岩返し、ネ！！」

現在、観客の歓声と興奮と熱気が支配するこのドーム場にて男、北原穰は周囲の者達と変わらぬ熱量を持つて目の前で繰り広げられる「総合格闘技の試合」を隣に居る「本日の相方」と共に酔いしれていた。

「……っしやあー！！ 決まったーっ！！ 巨岩返しでフィニッシュだあ！！（ゴツ）」
「あうっ！」

そして応援していた「ブル・マツダ」のフェイバリッド、巨岩返しでの決着に彼のテンションは最高潮に達し、思わず振り上げた腕が隣に居た相方の腕を殴ってしまったのだった。

「うわっ!? わ、悪い、エンゾウ、さん！ 痛くなかったか!?!」

「うん、大丈夫だよ北原さん、ボクにはこんなの、痛くない、んだからネ」

そう言つて微笑みを浮かべた男はかつてTDKで熯一と闘い「凶犬」と人から恐れられた格闘家、笹川エンゾウであった。

「そうか、確かエンゾウさんは“無痛症”だから……って違う！ 痛くないからこそ何か不調って無いのか!? いや……ホントに済まない」

「……ボクは本当に大丈夫 北原さん、キー坊とオグリの友達だからとつても優しいんだネ」

「なっ!? い、いや……俺だつてトレーナーの端くれなんだ、これ位の心配普通だつて」

T D Kでの戦いを経て“心の痛み”の理解を深め、人間として成長したエンゾウは北原の心遣いに満面の笑みを見せる。

そんな姿を見て最早、彼の事を凶犬などと呼ぶ者は誰もいないであろう。

「……しかしな、エンゾウさん 今日付き合ってくれてありがとう キー坊が“ブル・マツダ”のセコンドに入るって言うんで招待券貰ったんだが……まさかアンタみたいな有名な格闘家が着いて来てくれるとは思わなかったよ」

「キー坊とオグリの二人から『絶対に喜ぶから会ってくれ』って言われたら、ボクが行かない理由はなないヨ」

「そうか……あの二人にも本当に感謝しなきゃな」

元担当とその兄の気遣いを知った北原は年甲斐もなく溢れ出した涙を隠すように頭の帽子を深く被り直す、すると彼の視線に白魚のような美しい指とその指が持つ見るからに上品な刺繍が施されたハンカチが飛び込んで来た。

「あの…深く感動なされていられる様子でしたので、宜しければこちらをお使いください」
「お、お氣遣いどうも！ いえっ、別に泣いていたワケでは…っつて、えっ?!」

目の前に居るであろう女性に言い訳をすべく顔を上げた北原はあまりの驚きに涙が引つ込む事となる。

それもそうであろう、彼女はあの――

「め、メジロアルダン?!? どうして此処に?!」

「あら? 私のお事を存じでしたか はい…私の名はメジロアルダン まだ未熟ながらもメジロ家の一員を務めさせて頂いております」

中央においても名門と名高いメジロ家のウマ娘「メジロアルダン」、見た目はさながら深窓の令嬢といった彼女がある種の血生臭さを漂わせたこの場に姿を表していたからである。

「北原さん…ボク、ウマ娘の選手はあまり知らないけどこの子って有名なの?」

「エンゾウさん、トップアスリートである事は間違いないんだが、俺が驚いてるのはそこじゃなくて……」

「ふふっ、『なぜこのような場所に居るのか』ですよね? 私、実は子供の頃から体が弱く…病室で過ごす事が多かったのですが、そんな時にテレビで観ていた格闘家の方々に「憧れ」を抱きまして…自由に歩けるようになった今は観戦を趣味にしているのです」

「そうなんだ　なら、ボクの事も知ってるよネ?」

「はい、存じ上げていますよ　笹川エンゾウ様ですね　貴方様と宮沢熹一様の試合を観て、私は深い感銘を受けましたので」

「えっ?　キー坊とエンゾウさんの試合って言うとは…」

「ええ…これは後から聞いたお話になりますが、宮沢様はあの試合で『例えこの身が朽ちようとも生きている限り　『闘いたい』』という覚悟決め…文字通りご自身の　『命を懸けて』　闘い抜き、一度はその命を失ったのです」

「『あの時のキー坊』はとっても怖かった　しかも、ボクの所為でキー坊が死んじゃったって思った時はもつと怖くなったんだヨ…」

「共に競った相手、残される者、自分の将来…そのように失う物を飲み込んだ上で　『最後までやり通す覚悟』に私は堪らなく　『惹かれて』　しまったのです」

「そ、それは一体どういう…」

疑問を投げかける北原とそれを眺めるエンゾウにアルダンの事情は分からない。

彼女の脚は担当の医師からいつ砕けるかも分からない　『ガラスの脚』と診断を受けていた事など。

しかし、これだけは理解できた。

見るからに上流階級の令嬢らしさが分かる見た目など所詮、彼女の　『器』にしか過ぎ

ず…その中身は彼らの想像を絶する“覚悟”に満たされているという事に。

「昔、私の入院中にとあるプロレスラーの方とお会いしました。その方は癌により余命いくばくもなく、全身に痛みが走ろうともいつも明るく団体の方々と娘さんと笑っていて…ある日、思わず訊いてしまったんです『怖くは無いのですか?』と」

「…その彼は、何と?」

「はい、『俺はプロレスを愛してるからさ』と一言だけ…その時に私も思ったのです『この人のように私も自分の人生を掛けるに値する“何か”を見つけない』と」

「それが…アルダンにとっては“走る事”なんだネ」

「その通りです。ウマ娘に生まれたからには…生まれた家の為…等という外付けの理由はなくまで補強でしかなく…私は私の思うがままに“走り抜きたい”のです」

「そこまで言う」とアルダンは先程までブル・マツダが試合をしていたリングに視線を向ける。

「其処に居たリング近くで談笑をしているブルと熹一、そして何時の間にか彼らの傍に居たオグリキャップが視界に入ると彼女の目の奥には“熱”が籠っていた。

「私が“心から尊敬する方の妹”…立場としては挑まれる形になりますが、私の全身全霊を傾けるに相応しいお相手の一人。受けて立ち、必ず勝利して見せます」

「…その結果が“アイアン木場と同じ”になっても、きつとアルダンは後悔しないんだ

ネ」

「はい、エンゾウ様の仰る通りです　私はむしろ彼のように、この世に己が一瞬を『永遠に刻みたい』のですから」

「…あなたが『その覚悟で来る』以上、きつとオグリは尚更『負けたくない』と思いますよ」

「そう思ってくれている相手だからこそ、私も全力で競いたいと思えるのです　では北原様、笹川エンゾウ様、本日は私のお話にお付き合いくださり誠にありがとうございます　ます」

「えっ？　エンゾウさんはともかく何で俺の名前まで…」

「失礼ながら周囲の情報を家の者に調べて貰いましたので　先程も申し上げた通り、私は宮沢熹一様の『ファン』ですから」

「は、ははは…そうですか」

「はい　今はリング傍に居るお二人にも宜しくお伝えください…それでは」

清楚な外見からは想像もできない行動力に慄く北原にメジロアルダンは見ると安心するような微笑みを浮かべた後、会場を後にしたのだった。

「北原さん、ボク初めて知ったよ　『ウマ娘』って凄いなだネ…」

「いやいや、エンゾウさん…あの娘もきつと『特別』だよ」

試合での興奮を突如現れた「強烈な個性」に上書きされてしまった二人は彼女の伝言通り、オグリキヤップと宮沢熹一の居るリングへと足を運ぶことにした…。

オマケ

キー坊とオグリ、気付く

「ブルさんっ！ さっきの技の運びは見事なモンやつ!! また腕を上げたのぉ!!」

「うんっ！ 相手への攻め手を確実に封じる動きだったぞ!! ナイスファイトだった!!」

「何だよキー坊にオグリまで…そんなに褒めてくれるなって 俺は二人に教えて貰った事を忘れずにやっただけだよ」

かつてはうだつの上からない総合格闘家であった「ブル・マツダ」。

彼は熹一とオグリの指導によって心身ともに磨かれて再起を果たし、今回の試合も危なげなく勝利できたのだが…突然の二人から褒めちぎりに困惑していた。

「いやいや、良いモンは良いって言うんがワシ等の流儀やからな せやろ、オグリ？」

「キー坊の言う通りだ 今日娘さんとお孫さんも観に来てくれていたんだらう？ 控室に案内していたから、親子水入らずで会ってくるといい」

「そ、そうか！ なら、二人には悪いんだが…俺は先に行かせて貰うよ」

二人に多少の疑念を感じつつもブルはオグリの誘導に従い、控室へと向かつていった。

そしてブルの姿が視界から消えた事を確認した二人は「スイッチ」を切り替える。

「オグリ……気付いとったか」

「ああ……さつきから視線は感じていた 私とキー坊にだけ向けていた物だが」

「……せやな 敵意が無く、もう気配も消えたとは言え……ブルさんを巻き込む事になるかもしれないからこの場合は離れて貰ったが……何やろな、この感じ……」

「私には身に覚えのない感覚だったが、キー坊は「アレ」が何なのか分かるのか?」

「おうつ、多分やが……「果し合い」の感覚と「尊敬」がない交ぜになったみたいなものやな」

「そうなのか?」

「ワシ等はどうにも普段の行いの所為か初見の相手にはどこか「嘗められとる所」あるやん?」

「失礼な話だな 私もキー坊もふざけてなんかいないというのに」

「まあ、その話は今はエエねん いや、明らかに初見さんの気配やったのにワシ等の事を嘗めとらんつちゆうのは……お前、アレやぞ」

「……「強敵」という事だな?」

「せや、標的はワシかお前か……どっちにしろ相当の強者ツワモノや 戦やるとなったら気合入れんとアツサリとやられてまうな」

「標的は私だとしても恐らくはレースになるだろうから、注意をしないとな」

「タマやベルノちゃん、親父おとんやワシもおる 練習おとんやったら何時でも付き合うで」

「ありがとう、キー坊！ 私は絶対負けないぞ！」

新たに感じた「強敵の気配」に兄妹は気を引き締め、そして合流した北原達の口から語られた強敵の正体である「メジロアルダン」の名を聞き、二人は決意を新たにすることであった。

灘・真・神影流について

此処は朧山に居を構える「灘・真・神影流」の本道場。

「「「セイツ!! ハアツ!! フンツ!!」」」

そこに居る門下生は多種多様な人種：その中には「ウマ娘」も少数ながら在籍しており、日夜心身の鍛錬に励んでいる。

「よし！ 午前の部はここまでだ!! 休憩とする!!」

「「「はいっ！ ありがとうございました！ 師範代!!」」」

門下生達は声を揃えて師範代に礼を言うが、当の『師範代』と呼ばれた少女は少しだけバツの悪そうな表情を見せた。

「いや、私は父から活法しか学んでいないし 何より今は「中央の選手」なんだ：ロクに此処には来れていない上、君達に教えられるのは基礎くらいだから「師範代」はやめてくれないだろうか：？」

「何言ってるんだよ、「オグリちゃん」に教わるなんて滅多に無いんだから俺達も気分が上がっちゃまうって！」

「中央での活躍は知ってるけど、それでも合間を縫って顔を出してくれるんだから感謝

してゐるんですよ」

「ソウダソウダ！ メツタに出来ないキーク坊ケンセイよりも有難いくらいなんだカラネ!!」

「…宮沢さんって “先生呼び” すると機嫌悪そうにしてませんでしたっけ？」

「知った事か！ 『ワシ、もつと世界を見て回りたいんや』 なんてしよつちゆう海外に行つてはアホ面と現地の土産物を引つ提げて道場に顔出すあんな男に気を使う必要なんて無いっ!!」

口々に自分への労いと創始者である兄、 “宮沢熹一” への罵詈雑言を吐き始めた門下生達に “オグリキャップ” は複雑な表情をする他なかつた…。

「……やつぱり、道場に顔を出すのは走るよりもずっと疲れるな」

「お疲れ様 それでも 『みんなが喜んでくれるなら』 って理由で来てくれてるんだから、当主であるキーク坊よりも立派だよオグリ」

「いや、 “和香ちゃん” …キーク坊だつてちゃんと考えあつての行動なんだ」

「いえ、我々も分かつてるんす 『一子相伝の技をみだりに広めたくない』 という考えの下、普段は “健康体操” の延長線上での活動していますが当主が認めた方へのみ “心・技・体の個人指導” を行う事はね」

「うん、 “万次さん” …問題はキーク坊に認められる人が中々いないという事なんだが」

「ねーっ、 “私の所の門下生” まで入れてあげたのに誰もキーク坊のお眼鏡に敵わないん

だもの」

「仕方ないっすよ、和香さん キー坊は数々の強敵達と闘い、間違いない今現在…この世における『最強の格闘家』なんすからハードルが上がって当然っす」

午前の部の指導が終了し、休憩室のちゃぶ台にグツタリと体を預けていたオグリに声を掛けたのはかつて熹一が修行の為、道場破りを行った石心空手の元館長『宮下和香』と和香の父である前館長を果し合いの末に自殺にまで追い込んだが熹一との闘いで己が妄執から解き放たれた格闘家『新堂万次』。

その二人が互いの壮絶な過去を感じさせない程の穏やかな笑みをオグリに向けていた。

「…二人とも、前より話す雰囲気柔らかくなったか？」

「んー…まあね お世話になったキー坊の力になりたかったから門下生を連れて道場の門を叩こうとしたらさ…」

「今までの贖罪の意味も込めてキー坊の下で修業させて貰おうとした私と鉢合わせたんだ 最初の頃は気まずかったっすね…」

「でもね、私も万次さんが『格闘家として純粋な人だった』っていうのはハイパー・バトル予選でのキー坊との闘いで理解はしていたし…無駄に意地張るのにも疲れちゃったんだ」

「…和香さんからそう言つて貰えて、私の中に在つた重荷が少しだけ軽くなつたような気がして…その後は少しずつ話す機会も増えて、今では普通に話せてるっス」

「そもそも私等キー坊の力になりたくて集まつた同士なんだから、私は『経営面』で…万次さんは『実技面』で協力してたら自然とこんな距離感になつちやつたんだよね」

「…そうか、それは良かった」

かつてのわだかまりが払拭されて笑いあふ二人にオグリも自然と顔がほころぶ。

「…まあ、経営のノウハウは黒田さんに相談して灘心陽流みたいに活法を取り入れたフィットネスを中心にしたら思いの外…特にレースで故障の多いウマ娘に流行つちやつたからさ、やっぱりこれも『格闘興行の衰退』を感じて複雑な気分だよ」

「昔から競い合いなら『ウマ娘のレースを観る方が健全』って風潮でしたからね　そう言つた意味でならアイアン木場の功績はやっぱり凄いつスよ」

「ちよつ、万次さん!?　オグリの前でその話題は…」

「大丈夫だよ和香ちゃん　もう私は『アイツ』の話題を出されても何とも思わなくなつたから」

オグリの地雷ワードに反応した和香は慌てて万次の口を塞ごうとするが、当のオグリがケロリとした表情をしていたので胸を撫で下ろし、そのまま話題を続けることにした。

「そ、そうなの…？ えーと、どこまで話したっけ…そうだ、それでも、強くなりたい
 “って人は一定数居てさ、この道場の評判を聞いて来てくれたのは良いけどホラ…此
 処って言っちゃ悪いけど、山奥の僻地”じゃない？」

「うん、幽玄の人達が建ててくれたから使わせて貰っているが…ハッキリ言つて一般の
 人からすれば利便性は最悪だな」

この道場を手作業で作り上げた幽玄の面々が聞けば無言で泣きそうな…しかし、純然
 たる事実をオグリは言い切る。

「だからさ…オグリとキー坊の実家である神戸の道場を、第一支部”にして師範を静虎
 さん、管理人を奥さんに任せて、都内に作つた、第二支部”を静虎さんの姉である由美
 子さんをお願いしたんだよね」

「第二支部の方は鬼龍の子供達が定期的に顔を出していると聞いたんで、私も邪魔しま
 したが…いや龍星君と姫次君、でしたか…あの二人はかなり強いっスね」

「龍星はお父さんに鍛えられて組技の練度が更に上がつていたし、姫次の方もキー坊の
 再指導のお蔭で大抵の相手なら組ませる前に無力化できると聞いていたからな、万次
 さんが褒めてくれたのなら相当な物なのだろう」

「…はい、しかも聞いた話では二人とも『今は、色々と、忙しいから修練の時間が中々
 取れない』との事で…持つて生まれた、血の強さ”に驚くばかりっス」

「あの二人は向上心の塊だからな。それに、傍で見ている由美子おばさんや優希に情けない所は見せられないといつもより張り切っていたんだろうし、万次さんもタイミングが悪かったね」

「……その話を聞くと、ただの『思春期の男の子』って感じがしてなんか親近感湧くつスね」

「だよね……何より、『オグリがそう言ってるから』言葉がスツと心に入って来る感じ……不思議だな」

「?」二人とも、私はただ自分の思った事を喋っているだけだぞ?」

「……『そんなオグリ』が定期的に顔出してくれてるからかな……私達の居る本道場じどうじょうも支部の人達も、当主のキー坊でさえも『灘・真なみ・真まことの神影流かみかげりゅうを失くさないようにしたい』って思えてるのは」

「そう……なのかな?」だとしたらみんなの役に立てて私も嬉しいんだが……」

和香がしみじみといった様子で掛けられた言葉に表情は変わらずともオグリの耳は忙しなく動き始める。

「うわっ! 照れてるんだ、オグリってば可愛いなあ……」

「な、何だいきなり! それを言うなら和香ちゃんだつて昔、キー坊に『カワイイ、結婚したい』って言われていたじゃないか!?!」

「えっ!? あんな昔の話を引つ張り出しちゃう!? いやいやオグリ、キー坊あのバ鹿つてその場の勢いでとんでもない事言いだすのは私よりアンタの方が付き合ひ長いんだから分かつてるでしょ?」

「確かに…キー坊にそういう所があるのは私も知ってるが、和香ちゃんあの子は本当に可愛いんだし…私はてつきり二人が結婚するものとはかり思つてたんだぞ」

「うーん…実はねオグリ、キー坊つて『意外とモテてる』の…気が付いてた?」

「…前にタマともそんな話をした事があつたが、本当だつたんだな」

「そうなの、何て言えば良いか…普段はそうでもないんだけど『肝心な所でビシツと欲しい言葉をくれる』つて言うのかな? 一言で言えば『人たらし』でさ、アイツの事良くなつて思う子が意外とたくさん居たんだよ、ホント…」

『オグリみたいだよ』という言葉を飲み込んだ和香に、先程まで静観を決め込んでいた万次が力強く頷いて同意する。

「分かります、和香さん! 私も含めてキー坊と闘つた者達の殆どは、『自分の事を好きになれた』んす それと同時にキー坊の事が好きになつちまうのは当然っすから!!」

「…まあ、男の人の方が割合多いのは仕方ないとしてもさ、女の子の方は皆『そう思つちやつた相手』に自分の想いを伝えられなかつたんだ 何でだか分かる?」

「……………分からない 教えてくれないか?」

「うん…キー坊の傍にはある女の子が居てね 言葉にしなくてもお互いがお互いの事を大切にしているっていうのが見てて伝わってきちゃって、『自分はキー坊この人とそんな関係にはなれないな』って自然と諦めちやっただ」

「キー坊の傍にそんな女性ヒトが…：…そうか なら、お父さん達が心配していた灘の跡継ぎの方も問題ないな」

和香の言葉により『大切な兄の “一番の妹” で無くなるかもしれない』という思いが湧き出してしまい、オグリは言葉と裏腹に気分は落ち込んでいったのだが、それを見かねた和香が慌ててフォロー（？）を入れる。

「いやいやオグリ！ だいじよ…大丈夫、なのかな？ その子とキー坊って別に付き合ってるわけじゃないし、お互い恋愛感情の “れ” の字も見せてないから、ある意味健全で私達も安心しているっていうか、ヤキモキしてるっていうか…：…ですよねっ!? 万次さん!!」

「そうっすね…相性的にはお似合いだと思っすけど 当の本人達が “今の関係に満足” してるんで外野がとやかく言うのは違うと思っすで…：…とにかくオグリは安心して良いと思っす」

「そうか…：…ありがとう、二人とも しかし気になるな、一体誰がキー坊と…：…タマ…：…優希…：…ベルノ…：…カサマツの子達は付き合いが浅いか…：…」

恐らくは答えが見つからないであろう問いの為に思考状態へ入ったオグリが今まで出会った女性の名をブツブツと羅列し始めた事に言いようの無い危機感を覚えた和香と万次は話題を変える為に大きな声を張り上げた。

「いやっ！ それにしてもキー坊、今回は何処まで行つたんだらうね!!」

「何言つてんスか和香さん！ 第二支部にちよつかいを掛けて来たメキシコ人を龍星君達が懲らしめたら本国に居るマフィアに泣きついたから『ワシがとつちめたるわ』の一言で出掛けて行つたんじゃないっスか!!」

「…そうだったな お父さんと鬼龍おじさん、たまたま支部に来ていた尊鷹おじさんまで付いて行つたんだった」

「うん、そうそう この調子じゃ “また” 現地で新しい弟子候補連れて来ちゃうよ」

「何だかんだで本道場は “寄る辺を失つた実力者達の溜まり場” になつてしまつたんで基本、皆キー坊に遠慮無い口を利きつつも感謝と尊敬は忘れてないっスからね」

「うん、みんなキー坊を好きで居てくれるから私もみんなが大好きなんだ」

思考を中断し、会話に入つたオグリを見て安心する二人であつたが、今度は突如開け放たれたドアから現れた “4人の宮沢家の男達” に驚く事となつた。

「おうっ！ 休憩室こゝな所におつたんか、オグリ!! 帰つて来たでえ!!」

「こゝら、熹一 神聖なる本道場でそないデカイ声を出すなや オグリもびっくりするや

ろ」

「フンツ！ コイツがそんなタマか静虎 戻って来てやったぞオグリ、土産の食い物も大量に用意してるから安心しろ」

「…どうやら疲れている様子だが済まない、オグリ 現地で身寄りを失くしたウマ娘に出逢つてな 社会的な身分は鬼龍が与え、活法は我々で施したのだが心がまだ弱つているのだ お前が話し相手になつてくれないか？」

「尊鷹おじさん…分かった 今すぐ行くよ」

「オグリ、ホンマにスマン…あの娘こな、帰りのテレビでお前の活躍観てすっかりファンになつてもうたんや 元気を、与えてやってくれ」

「キー坊…私を誰だと思つてるんだ 巷ではキー坊みたいになタフなウマ娘” って呼ばれてるんだぞ」

「…あんがとな ほな万次、和香ちゃん！ 帰って来て早々で悪いが、オグリワシの妹借りてく
でえ!!」

「はいっ！ オグリ”師範代”!! 頑張ってきてください!!」

「…ハイハイ その代わり夕飯は本道場こで食べて行きなさいよ ちゃんと”卵あり”の
すき焼き準備してたんだから」

「そいつは楽しみやっ！ 行くぞオグリ、早よあの娘こと一緒にすき焼き食べるようにせ

んとなっ!!」

「ああっ！ 行こう、キー坊!!」

「先程の疲れなど微塵も見せず熹一と共に廊下を駆けて行くオグリキャップを見て和香は思わず呟いた。

「やっぱり、あの二人って本当に『絵になる』なあ…」

鯨と弾丸

「せや……そのまま、ゆっくりでエエ 息を吸って同じ位の強さで吐くんや」

「スウー……ハアー……スウー……ハアー……」

有馬記念を終えた中山レース場の控え室で灘真影流創始者、宮沢熹一はとあるウマ娘に「気による施術」を行っていた。

施術される側である彼女の反応は当初、端正ながらも険のある顔立ちを歪めた胡散臭げなモノであったが「中央が認めた施術師」であり、熹一に対しての個人的な興味もあつたので治療を受けてみると血が流れていた頭部の痛みを直ぐに自覚し、同時にその痛みが徐々に……しかし確実に癒えて行く事に驚いていた。

「ゲートにぶつかつた時にできたモンやろうが、アドレナリンがドバドバで気付かんかつたやろ？ 歩き方で失血以外に血流が悪くなつとるのは分かつつたが……これで自然治癒の応急処置は完了や カットバン貼るから後で腕のエエ外科にでも縫つて貰え」

「……マジかよ、痛くねえ 前にアンタの闘つてる所をネットで観ただけ……明らかにワープしながら空中で蹴り合つてたり、見えない打撃なんて打つてるからよ……絶対に

『トリックだろ』って思ってたんだが、どうやら本^{ガチ}当らしいな　すげえよ、オッサン」
 施術を終えて熹一に礼を言った　「デイクタストライカ」は不適さを含みながらも人懐っこいような笑顔を向けた。

「オッサン」　つてお前…まあ、エエわい　後な、人には『気による施術を受けた』なんて無暗に言わんだけよ　『頭おかしくなった』　言われるのがオチやからな」

「…そういうモンか？　むしろオッサンのお蔭で頭の調子が良くなったんだけどな」

「こういうモンは、人前でやらん」のがミソや　そうせな、世の中ニセモンで溢れかえってまうからな」

「ふーん…だったらよ、今オレ達の前に居る、もう一人のオッサン」には見せても良いのかよ？」

「デイクタの指摘通り、彼女らの目の前にはもう一人、屈強な肉体を持つ男」が立っていた。

「オッサン」…オグリキャップといい、キー坊　ウマ娘つてのは礼儀知らずばかりなんスか？　コレ、忌憚のない意見なんスけど」

ネオ・プロレスラー「鯨山十蔵」、彼はデイクタの『オッサン』呼びに慥然とした態度を取りつつも内心、傷付いていた…。

「鯨山、お前の口から『礼儀』なんて言葉が出るとはのお。これ位の女の子からしたらワシ等なんぞ皆オツサンやん。いちいち気にすんなや、しよーもな……」

「あー……なんか悪かったな。煮一サン、鯨山サン……で良いか?」

「ワシはキー坊で構わんよ。で、デイクタか……鯨山はエエンヤ。『灘の活法を習いたい』言うんで今回連れて来ただけやし」

「『活法』……オグリのヤツがたまにやつてる変な整体だよな。最近、巷で流行ってるのは聞いてたが今日、実際に受けてみて確かに効果が凄かったのは認めるよ」

「せやろっ! 神戸と都内に支部があるんやが施術院も並行しとるんで御用の際は……」

「キー坊、何営業モードに入ってるんスカ。昔のストイックさは何処行つたんだよ」

「アホウ! ウマ娘への支援金貰つてもオグリの食費に対して雀の涙なんやっ!! ワシ等家族が貯金して引退、老後の事も考えんとアカンやろがいつ!!」

「……悪い、言い過ぎたっス」

未だかつて見た事が無い形相で詰め寄る煮一に引き気味で謝る鯨山にデイクタは破顔し、大笑いをする。

「ハーツハツハツハ!! オグリのヤツも大概『ブラコン』だと思つてたがキー坊、アンタも大概に『シスコン』なんだなっ!!」

「な……何やとっ!?!」

「オグリッ、中央で事ある毎にアンタの話ばっかで又聞きでも『うぜえ!』ってくらいなの。当のアンタも相当でもう逆に笑えて来たぜ…」

「…分かるぜ、それ ブル・マツダの特訓から始まって俺との試合の時も居たし、その後も付かず離れずみたいな距離感でよ、オグリが中央行ったら落ち着くのかと思えばトレーナーになれないからって施術師になって中央に入り込むんだ もうある意味、バ鹿だよバ鹿」

「マジかよっ! 〃世界最強〃の看板背負った男が 〃バ鹿〃 って…アホくせえなオイ!!」

「なんやねんお前等! 家族を大事に思つとるワシに対して辛辣過ぎやろがいつ!! 次からは教えんのも治すも金取んぞっ!!」

突然の二方向から来る『シスコン』呼びに熹一は二人に対し、まるで猿の様に威嚇のポーズを取った。

そんな 〃バ鹿丸出し〃の様子に二人は吹き出すも、しばらくすると落ち着いたよう度デイクタが熹一に対して謝罪をした。

「あー、悪い悪い でもよキー坊…アンタのお蔭でオレも 〃肚が決まった〃よ」

「俺もだよ… 〃再確認〃 っていうんすか? 覚悟決まったつス」

「…何を言つとんのや、お前等」

訝しむ熹一の目をしっかりと見ながら二人は示し合わせた様に宣言する。

「『最強』になる為には『バ鹿』になるしかねえ!!」

「なにつ!？」

二人の宣言を聞いた熹一は驚いた様子であったがデイクタと鯨山は互いに目線を合わせてニヤリと笑う。

「へへっ、だよな鯨山サン」

「若いのに分かってんじやねえかデイクタ 道は違えど互いに『最強』目指してんだ、バ鹿が本道ならこのまま突き進むだけさ」

「オレは『レースバ鹿』に!!」

「俺は『プロレスバ鹿』になっ!!」

年齢も、性別も、種族も違う二人の『バ鹿を目指す者』が今日この日を持って新たな友誼を結んだ瞬間であった。

「いや…なんやねん、この状況は……」

オマケ

「そーいや鯨山サンつてよ、何で今日はキー坊から活法を習おうと思つたんだ?」

「子供の頃から面倒見て貰つてたトレーナーの山本さんが最近、体の調子を崩しちゃまっ

てな キー坊に相談したら『なら自分で治せたら恩返しになるやん』って言われたから、折角だしと思つてよ」

「普段世話になつてるトレーナーへの感謝か：オレも小内トレーナーにたまには何かしてやるかな……」

「おうつ、そうしとけ 感謝なんて受け取れるんは相手が生きとるウチだけやからな」

オマケ2

「キー坊、そもそも今日はオグリ妹がG Iタイトル取つたのに何で本人の所に行かなかつたんすか？」

「アホウ、今日はタマとの戦いの“一区切り”だったんや 二人だけの時間持たせてやつて家帰つた時にでも盛大に祝つてやればエエねん：“タマの家族も”含めてな」

「…さつきまで『妹がー』とか五月蠅かつたヤツとは思えねえほど気い使つてやがる」

「“バ鹿”なだけじゃなく“優しさ”もなきや“最強”じゃねえつて事か：やつぱり難しいな、強くなるつて」

「ま、取り敢えずオレ等も身近に居るヤツ等に優しくすることから始めるかね：鯨山サ
ン」

タイ・バンコクを堪能しよう

「タマモクロス” やっ!!」

「オグリキャップ” だ」

「… 北原穰”、です」

「今回、ウチ等はなんと……」

「タイの ”バンコク” に来ているんだ！ 凄い街並みだな北原！」

「…ああ、そうだな」

「そんなワケでウチ等の前には…ジャジャーン！ テーブルいっぱい ”タイ料理” の数々や!! オグリんはともかく、ウチと北原のオツチャンには食い切れん量やで……」

「基本的にバンコクでは一屋台に付き一品らしいのだが、今回は私達が来店するという事で店長である奥さんが周りに声を掛けて用意してくれたそうだ 本当に有難いな」

「飯物、麺類、サラダ、スープの一つとつても調理法は様々で…これだけの量を準備してくれたんだからキー坊の人徳は本当に凄いよ」

「オツチャン、今此処におらんキー坊^{トアホ}の事なんか話題に出さんでエエわ」

———この瞬間、今まで謎のテンションで進行していた空気は打ち切られたのだが…

発端である話題を出した北原をタマが一睨みした後、再び続行する運びとなった。

「さて！　まずはこれから行こか、〃カオパッド〃：うん、コレはチャーハンやな」

「タイ米を炒めた物でパラパラ感と独特な味付けで癖になる一品だ：お代わりを頼む」

「オ、オグリ：他の物があるんだからまずはそれを食べようぜ　どれ、〃パツタイクン〃

ね：：見た目はエビ焼きそばだが：：：」

「あー：：コレはアレや　中央の食堂で食った事あるわ　麺が〃米粉〃なんやな」

「米粉特有のほのかな甘さと香辛料で味付けされたエビとの組み合わせが絶妙だな、い

くらでも食べられそうだ　後、これが〃プラパオ〃か」

「鯛の塩焼きが屋台で安く食べられるなんて：：日本で見かけるのは鮎くらいだしな

で、サラダの〃ソムタム〃が：：この青いのパイヤなのか!？」

「どれ：：成程な、青いやつやとしっかり野菜感出とる　口の中もサツパリして丁度エエ

わ」

「：：ん？　北原、店長の旦那さんがジムから帰って来たようだぞ　挨拶してきたらどう

だ」

「えっ!?!　ま、マジか：：あの、こんにちは！　ファンなんです!!　サイン貰っても良いで

すか!?!」

「マイ・ペンライ」
大 丈 夫 だ よ

見た目は若干、細身ながらも無駄のない筋肉が付いた身体の「旦那さん」から笑顔でサインを受け取る北原を横目に、タマはため息を吐きながら隣で食事を続けるオグリに話しかける。

「……『一回失明させた手前、ワシには会う資格が無い』ってなんやねん　そうでもせな
「止まらんかった」と思ったからやったんやろ？」

「……キー坊はそれが「逆効果」になつた事をずつと悔やんでたからな　今回のバンコク招待だつて私達の有馬記念のお祝いでもなければ顔を出す気は無かつたんだらう」

「ウチ等を祝う気なら直前でバックレて、こない「変な空気」にすんなつちゆうねん
北原のオッチャンと追いかけてる「ベルちゃん」にも悪いやろが……」

「チケット人数の関係で今回は二人も呼んだが……正直、今回はベルノに任せて良いと思
う　同性の北原や付き合いの長い私達じゃ多分、キー坊の本心は聞き出せないから」

「……ウチ等みたいなの「エエ女」に寄りかかれんとはホンマ、贅沢な男やなキー坊は」
そう言いながらタマは自分の傍に置いてあるジュースの瓶を掴むと、一気に呷った。

同時刻、雑踏から離れた街並みが一望出来る公園で宮沢熹一は一人、先程露店で購入

したミネラルウォーターを口にしていた。

「グイツ）……………」

「…お兄さん、こんな所に居たんですね」

「…ベルノちゃんか　ようワシの居場所が分かったのう？」

「はい、オグリちゃんから『キー坊は何かあると人気の無い所に行きたがる』って聞いて

…後は携帯のGPSアプリを使ったらこの公園かなって」

「アナログとデジタルの併せ技うちゅうヤツか…現代人らしくて、エエな」

「…普段通り」　自分に優しく微笑んでくれるも僅かばかりの陰りを見せる熹一に対して何とも言えない気分になり、ベルノライトは口を開く。

「…何があつてお店の前で突然、消えちゃったんですか？」

「……店長の旦那さん、ムエタイやつとつた　『ギャルアツド』　言うんやけどな、嫁さんも子供もおるのに更に危険なラウエイって武術始めたんや　前にも大怪我してリハビリも終わったつちゆうに家族からすりやそら、心配も心配で『止めてくれ』言うわな」

「そう…ですな」

「でもワシにも分かんねん　例え家族を泣かせようと『最強の道を諦めたくない』って気持ちにはな…せやから、ワシはアイツの目から　『光を奪った』んや」

「…えっ!？」

「…アスリート相手にシヨツキングな話で悪いの 活法で治せる範囲やったとは言え、逆にそれがギャルアットの闘志に火を点けてしまうてな……」

「生まれなく、なつちやっただんですね？」

ベルノの言葉に熹一は無言で頷く。

「『あの頃のワシ』はどうかしとった…ワケあつて『金の為なら何でもやる』なんぞ家族や親友にも嘘を吐いて悲しませ、自分で決めた事とは言え世の中の汚い場所ばつか見て来た所為かの」

「……………」

「普段通りのワシなら、『たとえこの身が無くなるうとも自分が決めた事は曲げない』つちゆう『当たり前』の考えを理解できとったのにお……」

「会わない理由はその時の自分を…思い出しちゃうからですか？」

「まあ…せやな ちなみにベルノちゃんに初めて会った時の格好が『そんな時のワシ』やっただんで？」

「そ、そうだったんですね…」

恐らくは今まで誰にも言わなかったであろう想いを吐き出し、纏っていた陰りが薄れた熹一に対し、ふと思いついた疑問をベルノは投げかけた。

「お兄さんは…何でその話を私にしてくれたんですか？」

「……ベルノちゃんの話しやすい雰囲気もそうなんやが、アレやな…前に自分の事『弱い』って話してくれたからや」

「えっ!? あの時は…」

「ベルノちゃんは自分の弱さを『自覚』して『改善する努力』をしとる 頭が良くても頭でつかちやない…そういう人になら話しても笑いもせんし、同情もせん 下手にオグリやタマ辺りに話すとアイツ等ウンザリする程、絡んで来るからの」

「えーと…それは……」

「…ま、困惑はさせたようやがそれは堪忍な お陰さんで気持ちちがスッキリしたわ」

「あつ…それなら良かったです」

「ホンマ…おおきにな せつかく海外に誘ったつちゆうに皆にイヤくな気分させて申し訳ないわ 今度は別の意味で戻りた無いが…エエ大人がそういうワケにもアカンしな、行くかつ!」

「だったら、直ぐに行きましょう! 用意してくれてる料理が無くなつちやいそうですし…」

すつかり元の調子を取り戻した熹一にベルノが店まで案内しようとする後ろを振り向くと、其処には何時の間にか彼女等を取り囲む『ガラの悪い男達』に溢れていた。

「…気配には気付いたが、話に割り込まんから放っておいたんや お前等、早う散

れ」

「*****&\$#—\$?!」

男の一人がベルノを指差して何かを喋っているが彼女にはその言葉を翻訳することが出来ず困惑するも、熹一の方は意味が通じたようで「笑顔を深めて」いく。

「良かったのお、ベルノちゃん コイツ等ベルノちゃんの事『海外でも通用する値千金の美人さんや』と褒めちぎつとるわ…」

「お、お兄さん…顔が恐くなってますけど…」

「ベルノちゃん、右端の『薄い所』をワシが穴開けるんでそつから逃げえや」

悪い意味で『この世の何処にでも居る連中』に熹一は頭のスイッチを切り替え、ベルノにこの場から離れるように促す。

しかし——

「大丈夫です 『こういう状況ではお兄さんの傍に居た方が一番安全だ』ってオグリちゃんやタマちゃん、六平さんも言っていましたから」

「？ オグリやタマはともかく、何で六平のオッチャンまで…」

「いえ、六平さんは『尊鷹相手に喧嘩で勝つ化け物なんざ絶対、囲つとけ』って…『囲つとく』の意味は分からないんですけど」

「いたいけな女学生に何言つとんじやい、あのオッチャンは…『そない関係』にならん

でもキツチリ守つたるわいっ!!」

「え…? そ、それに私もお兄さんが… 熨一さん がすごく強い人って知ってるから、何も心配してません!」

「…オグリ相手にもそうやけど、ベルノちゃんって 人をその気にさせる のがホント上手やのっ!! 名トレーナの資質あるわいっ!!」

おそらくは意識すらしていないベルノの言葉で熨一の心は火を点け直し、目の前の荒くれ共に向かおうとしたその時——

「ゴブラ・ソード」!!」

「ゴツ）*#*&*&*!」

突如現れた男が 変則のテン・カウ であるゴブラ・ソードを放ち、荒くれの一人をなぎ倒したのである。

その男の名は——

「ギヤルアツド」! 何でお前が来とんねん!」

「あんまりにもお前が俺のカミさんの店に来るのが遅いんで迎えに来たんだよ」

かつて熨一が一度は光を奪い、その後それ以上の光を与えられた ギヤルアツド・スワンパクティ が恩人に笑顔を向けていた。

「お前のお蔭で『戦こいしか自分には無い』って思い込みを解き放ってくれたんだ カミさ

んの屋台も…今、俺がやってるジムもお前の支援で形になってるんだ なら…「恩」を返さなきゃお前に足向けて寝られないだろっ!! (ボツ)

「…なんや、日本嫌いだったくせに日本人好みの言い回ししよってからにっ! 白髪交じりのオツサンが無理するんや…ないぞっ!! (ボムツ)

「言つてろっ! (ボゴツ) しかしキー坊…「あの娘」はお前のカミさんか? 器量も気立ても良さそうだな、安心したぜ!! (ガツ)

「ドアホウツ!! (バキツ) ベルノちゃんは妹の親友オゲリ ママダチじゃいつ!! ま、『器量も気立てもエエ』のはその通りやがのっ!! (ゴツ)

「なら、早く誰か良い人見つけて子供を作れっ!! (パアン) 俺のジム生と闘わせたい!!」
「ほっとけ…ってなんや、今の「シン・コブラ」やん!! ちゃっかり自分でも習得しよって抜け目ないのお (スパアン)」

「指導する側が弱いんじゃないからな (ガツ) 俺もまだまだ成長中さ」

笑顔で会話しながら悪漢達を瞬く間に片づけていく「達人」の戦いにベルノは開いた口が塞がらなかった…。

「ま、前にテレビで観た映像よりもスゴイ…これが熹一さんの「本気」…」

「いや、まだまだベルノ キー坊は「空眼の目付け」…領域ソウジにも入ってないし、使う技もギャルアツドの物ばかりだ 仲直り出来てはしゃいでいるんだろう」

「…つたく、〃エエ女の慰め〃よりも 〃男同士のバ鹿騒ぎ〃で元気になつとるんやから
…格闘家つちゆうのはホンマ、バ鹿ばつかりやな」

「…わあっ！ 二人ともいつの間に来たの!？」

突如現れて解説と愚弄を行うオグリとタマに驚くベルノであったが、当の本人達はど
こ吹く風である。

「ギャルアツドが『嫌な予感がする』とバイクで走って行ったから私が並走して案内した
んだ」

「…オグリちゃんもGPSを使ったの?」

「イヤ、ベルちゃん…あんまりにも迷い無く案内するもんでウチも気になって聞いたん
やが、オグリ^{コイツ}『勘』の一言で済ませよった… 〃引き寄せ合う惑星〃 つかちゆうの!」

「…惑星か スケールが大きくて何だか嬉しいな」

タマによる皮肉交じりのツッコミもオグリには通じず、むしろ機嫌が良くなっている
様子であったがベルノはふと、疑問に思った事を二人に尋ねた。

「…二人とも、北原さんって今お店で留守番してるの?」

「いや、お店の原チャリを借りて付いて来ていたんだが今は……」

「あー、あそこや 近くの木いに隠れて観戦しとる」

タマの指差す方へ視線を向けると、確かに北原は木陰から半分ほど身を乗り出して烹

一とギャルアツドの大立ち回りを食い入るように見ていた。

「キー坊とギャルアツド、二人の達人」の戦いを見れるなんて……くうー！ 付いて来て良かったぜ!!」

「…まあ、満足そうにしとるようやし アレはアレでエエんとちゃうんか?」

「うん 北原が嬉しそうで本当に今回は誘って良かった」

「…オグリちゃんが納得してるなら、それで良いけど」

しばらくの間、北原の様子を見て笑顔だったオグリが何かを思い出したかの様に表情を消すとベルノの方に向き直る。

「そうだベルノ さっき、キー坊の事を『熹一さん』と呼んでなかったか?」

「えっ!? そ、それはその……」

「ちよちよちよい、オグリん お前なに……」

真剣な表情でオグリに見つめられ蛇に睨まれた蛙の如く固まってしまったベルノを見てタマが口を挟もうとするが、直後にオグリが満面の笑みを浮かべてベルノの手を取る。

「今まで『お兄さん』呼びで少し寂しかったんだが、名前呼びになるとは…キー坊と仲良くなれたんだな! 本当に良かったよ、私も嬉しい!」

「う、うん…そう、なるのかな?」

「…なあオグリん コレ、いつも思うんやけど… 『地雷原』が分かり辛いねん ヒヤヒヤさせんなや」

「…そうなのか？ 二人とも済まない」

この後、悪漢共を全て片付けて店へ戻ったオグリ達は昔の事、今の事、これからの事を肴にタイ料理を楽しんで全員の臉が閉じるまで宴が続いたのだった。

皇帝とスーパーカーとウサギさん好き

「…ようこそ、中央の“生徒会室”へ 本来であれば“中央の施術師”としてだけではなく、他にもお仕事を抱えている多忙な貴方に対し私の方から出向くのが礼儀なのです が…何分、最近の仕事量が増えてしまった所為か生徒会室の場所から離れる事が出来ず、ご足 労頂く運びとなり…誠に申し訳ありません」

「いえ、お氣になさらず この学園の象徴の一人である“生徒会長”がご多忙であるという事はウマ娘、皆の為に頑張っているという事なのですから私の方から出向くのが“筋”という物です しかし会長…見たところ本当に体調が優れない様子だ 宜しければ時間の空いた時で良いので私の施術を受けては頂けないでしょうか？」

「それは大変有難い申し出です…必ず予定を空けて伺いますのでその時は是非 しかし、こうして直接お会いするのは初めてですがその身から立ち昇る“オーラ”…と申しますか雰囲気から感じる印象は正しく“質実剛健”…“静かなる虎”の異名通りですね」

「いえ、そのような…会長こそまだ若い身の上でありながら正に“皇帝”と呼ばれるに 相応しい覇氣をお持ちだ 貴女の『すべてのウマ娘に幸せを』という理念には私も共感

しているのです…貴女はきつと「死して後已まで」その歩みを止めない覚悟をお持ちなのでしょうが、「一念天に通ず」事を願っています」

「…宮沢静虎」さん、今日は貴方の様な素晴らしい方にお会い出来て良かった 本日、この場で出会えた幸運に心からの感謝を」

「『シンボリドルフ』さん、私のような年配者に対する多大な心遣いに此方こそ感謝致します 私の方こそ、今日貴女に会えて本当に良かった」

今まで「中央」という一つの場所に居ながらも今日というこの日をもって初めて会合した二人は瞬時に互いの高潔さを理解し、気付けばどちらともなく固い握手を行っていた。

そして、そんな二人を「どこか呆れたような目」で眺めるウマ娘美が一人、思わずとといった様子で声を掛けた。

「ドルフと静虎さん…ちよつと「固すぎ」じゃない？ もつとフランクに行きましようよ、やわらかくくね♪」

「スーパーカー」マルゼンスキー。生徒会室に居たもう一人の人物は目の前の「堅物二人」に快活さを含む朗らかな笑みを浮かべた。

「…いや、これは失礼した 年長者である上に高名な武芸者にして求道者に、私もいささか緊張していたようだ」

「…いやはや、私もただでさえ娘と年の近い女性と話すだけでも緊張するというのが、更にはそれが娘のこれから通う学園の“頂点の一人”と思うとその…お恥ずかしい限りです」

自身の言葉である種の“険”が抜けた二人にマルゼンは優しく微笑み、静虎に話し掛ける。

「ふふつ、屈強なおジサマの“カワイイ所”が見れて面白かったけど、そんなに緊張しなくても大丈夫よ　むしろ…こつちの方がある種の“負い目”はあるワケだし」

「…“限定的”とはいえ、一流の施術師としてこの中央で多大なる貢献をしてくれていた静虎さんの娘であるオグリキャップを半ば無理やりといった形で中央こちらに招いたのだ　謝罪の一つもしなければ私としては気が済まない」

「…構いません　つ、つ、妻とも兄である私の息子とも話し合って決めたのです
『オグリあの子が決めた事であれば家族である我々は応援しよう』と　ですので…その謝罪を受け取る訳にはいきません」

「そうですか…懐広いご家族の対応に、感謝致します」

「(ヤダ…“妻”ってワードに恥ずかしがっちゃって…この人、ホントにカワイイわ)」

静虎の言葉に二人のウマ娘は各々に感じ入ってそれ以上の言葉が出なかつた為、その場には“何とも言えない空気”が漂い始める。

するとそれに耐えられなかったのか静虎がしどろもどろといった調子で話を続ける。

「そ、その…オグリもですね、私個人としては息子である熹一のように『視野を広げるべきではないだろうか』といった思いもありまして、ですので、今回の中央へのお誘いは正直有難かつたのです」

「……でも静虎さん、娘を持つパパさん”としては色々複雑よね？」

「…はい、お恥ずかしながら、ですがオグリも良い子ではあるものの若干、世間知らず“な面もありまして、成長の為には私の個人的な感情は無視して皆さんの居る荒波に揉まれるべきだと考えています」

「……実は昔、私は貴方と御子息である熹一さんとのハイパー・バトルでの闘いを観させて貰った事があります」

「あつ！ ソレ、私も観たわつ!! お互いがお互いの事を大切に想ってるのが、殴り合“を通じてこつちにも伝わってきちやうんだもの：”アレ”のお蔭で私も格闘技に對する見方、ちよつと変わつちやつた」

「…マルゼン、私も同意見だ、そして静虎さん…その時に私は貴方という一人の男に無条件で“尊敬の念”を抱いた、そんな貴方が我々^{彼女}に對してそこまでの信頼を寄せてくれるのであれば此方としても全力を以ってオグリに惜しみない“試練”と“支援”を与える事を約束します」

ルドルフの真つ直ぐな視線を受けた静虎に最早「照れ」など微塵もなく、逆に同等の覚悟を伴った視線を返す。

「はい……『地獄を見せる愛もある』という言葉もありますが地獄というのは詰まる所、この現世」なのです であればこそ、オグリあの子には「己が望む地獄」を選んで貰いたい 貴女達が用意してくれたこの地獄が良き物である事を、私も心から望んでおります」

静虎が言葉を言い終わるとルドルフは目頭を押さえ、マルゼンは天を仰いでいた。

「……素晴らしい たまに此方に向いては無茶な要求をする前理事長であるお兄さんや トレーナーとしての手腕は素晴らしい物の性格に難があり過ぎるもう一人のお兄さんに比べて静虎さん……『人間性』という点では貴方はあの二人とは比べ物にならない方だ」

「……そうね そもそも、あの二人のお蔭で『益』も『不利益』も同時にやって来て仕事量が増えちゃうんですもの 本来、部外者である私も駆り出されて最近じゃ睡眠不足 よお……静虎さん、私も今度アナタの施術を受けても良い？」

「……はい、それは勿論 いやしかし、済みません……私の家族がとんだ御迷惑をお掛けしてしまつて」

「いえ……マルゼンも言っていたでしょう？ 『『益』もやって来る』と……それに今後は更なる『益』も待っているのですから」

「…それは今度この中央に来るオグリの事でしようか？」

静虎の言葉にルドルフは肯定の意味を込めて頷いた。

「はい…更には近々、腕の良い『新たな施術師』がこの学園に入ってくれます。これ以上の『益』は今現在無いと私は考えています」

「あつ！　『宮沢熹』さんねっ！　オグリの為妹さんに臨時で来てくれるんですもの、『美しい兄妹愛』って感じで素敵よねえ」

「あのアホウは全く…受け入れてくれた事には感謝しておりますが、何か問題を起こしたら直ぐに叩き出して頂いて構いませんので」

「いえいえ、ご安心ください　私としては決してその様な事にならないと信じておりますので」

「私の知り合いのウマ娘も神戸で熹一さんの施術を受けて『引退も考えていた不調が無くなった』って喜んでいたんだもの！　きっと中央こっちでも静虎さんに負けにくい人気者になつちやうわよっ!!」

「…お二人程の方が、そう言うのであれば」

満面の笑顔を浮かべる二人に静虎は怒るべきか喜ぶべきか判断が付かない複雑な表情をしていたのだが、ふとルドルフの方が表情を消して静虎に対し、とある質問をする。

「…折角の機会だから聞いておこうと思うのだが、静虎さん…最近この中央周りで出沒

する「ウサギ面の男」に心当たりは無いでしょうか？」

「……いえ、私には見当も付きません」

「それ、聞いた事あるわ 私たち「ウマ娘」が気性や法律の関係で暴力がダメだからって「ちよっかい」掛けてくる悪い人達を「寸止めのパンチ」で大人しくさせちゃう正義の味方の事でしょう？」

「まあ、恩恵を受けているのはウマ娘ばかりではないというのは聞いているが…それでも「不審者」である事には変わりないからな 一応の調査はしているが現れては煙のように消えてしまうので、ある意味「都市伝説」になっちゃってしまっているのが現状だ」

「と、都市伝説…ですか では…お話も終わった事なので私はそろそろ施術を待つてくれている方達の所へ戻りますね」

「ええ、今日は本当にお話しする事が出来て良かったです それと静虎さん、これは最後になりますか？」

「は、はいっ！ 何でしょうか……」

「もし、「ウサギ面の男」に会う機会があれば良いのですが…『私達ウマ娘の事をいつも守ってくれてありがとう、貴方のその「優しさ」に心から感謝しています』と伝えてくれませんか？」

「……はい、会えたのであれば伝えておきます それでは…」

その言葉と共に静虎は生徒会室のドアを閉め、この場にはルドルフとマルゼンの二人しか居なくなつた。

「…あんな言い方しちやつて、静虎さんも『見逃されてるのに』気付いたんじゃないの？」

「静虎あの人の施術を受けた者から聞いた話だが、『人の為す行為とは須らく『自己満足』ではない』らしい。本人がその行為を誇る事は美徳ではないと考えているのであれば、此方としても『あのような』言い回しにする他無いだろう？」

「その言い方、ちよつとだけ『シリウスシンボリ』つばいわね〜」

「フツ…たまには良いだろう。『心から尊敬する人』に出逢えたんだ。これ位の『私らしくなさ』も愛嬌の内さ」

「…そうね。『堂々とした顔でダジャレを披露する』よりは可愛げあるんじゃないの？」

「なっ!!? そ、そんな事は決して無いぞっ!!」

こうして本日の宮沢静虎の生徒会室訪問は終わりを迎えた。

後日、中央周辺に『ウサギ面の男』の他に『天狗面の男』と『猿面の男』が新たに出現する事になるのだがそれはまた今後…。

オマケ

「あ、覚吾さん…キー坊までお面を付けて何をやってるんだ？」

「なにつ!? ひ、人違い…いや! 猿違いやぞオグリ!!」

「…私の名は『竹神栖鳳』 人違いではないか?」

「そうか、栖鳳さん 先日、夢二からLINEが来てな『たまには鬼喰島に顔を出して欲しいですとお伝え下さい』だそうだ それじゃ、私は帰るから二人とも程々にするんだぞ」

「……………分かった」

「……………親父おとんから『暴漢に『幻魔』打ち込んだ』つちゆう連絡も来たし、ワシ等も今日は帰るか親父オヤジ」

タマとキー坊

「乾杯っ!!」

此処は「宮沢熹一」と「タマモクロス」の二人が住む場所から町一つ隔てた距離に構えるお好み焼き屋である。

其処で前述の二人、珍しくも「二人きり」でテーブルに座っていたのである。

「連日のどんちゃん騒ぎで疲れたやろ、タマ 前にも話した通り、この店はワシの奢りやけど……まあ、マツタリ行こうや」

「まったくや……こちとら「精魂尽き果てとる」つちゆうにウチの家族もキー坊、アンタの家族も毎日お祭り騒ぎでホンマ、シンドイで」

「しゃあけど、仕方ないやろ 有馬でのオグリとの戦いがお前の……「ラストラン」やったんやからな」

熹一の言葉で店内は静寂が支配し、鉄板で焼けるタネの音しか聞こえなくなった。

「……それこそ、しゃあないやろ? 静虎のオツチャンの活法のお蔭で今まで……だましましたしやって来たけど、ウチの身体では今以上のパフォーマンスはもう無理や」『今回

で「オグリんに勝てんかったら選手辞める」ゆうのは前々から決めとった事やしな」

「……引き際見極めんのも「一流の証」や オグリだつて悲しんどつたが、納得はしとる……勿論、ワシも含めてやで?」

「……で? ナーバスになつてるであろうウチを呼び出して二人きりになつた所で口説くつもりなんか? 相変わらず、スケベなやつちやなあ……」

「アホウ、ワシはお前が「これ位」の頃からの付き合いやぞ 今更そんな目で見れるか」
 そう言つて熹一は小指の先を指して「これ位」を表す。

「「そこまで」ウチは小さないわつ、このクソボケ——っ!」

「……おうつ、その調子や やっぱ、タマはその「キンキン声」やないとな」

「……つたく、ウチはアンタのそういう所がイケ好かんのや」

「そうか? ワシはお前のそういう所がオモロイ思うとるで」

自身でも感じていた精神的不調を見透かされた上でおちよくられた事に怒りはあつた物の同時に心が軽くなった事も自覚し、タマは椅子から立ち上がりかけた体を不承不承と言つた様子で元に戻す。

「……ウチもな、本当に『やり切つた』思うとんねん 間違ひなく肉体を全盛期^{カラダ}まで持つていったし、周りの支えてくれた皆に對しての不満なんて勿論無い……子供の頃にウチに走りのイロハを教えてくれた「おつちゃん」もこの前、病院行つたら静虎のオツチャン

の施術の甲斐もあつて……ようやつと峠を越えたんや 本当に、本当に……悔いなんて、無い……思うとるのに……」

「……………」

タマは瞳に滲む涙を堪えながら、時折つつかえながらも言葉を絞り出す。

それを煮一はただ黙つて聞いていた。

「ウチは我儘や……『まだ体が動いてる内は終わりやない』って思いが止められへんのやつ……………」

「幼い頃からの付き合い」であるタマモクロスにとつてオグリキャップという存在は「妹」……とまでは行かないまでも自身を「先輩」として基本的に後ろを走つていた存在である。

そんな彼女が「後輩」にも、支えてくれていた人達にも弱みを見せる事は出来なかつたのだが……目の前に居る男は彼女が弱音を吐く事の出来る数少ない「大人」の一人であつた。

「やつぱり……お前は「アスリート」言うより「格闘家」側なんやな、タマ ワシもそうやが親父、お前の師匠である鉄山のおつちゃんなんかは「お前の気持ち」が痛い程分かるわ」

「……………（グスツ）」

「しゃあけど、しゃあけどな…お前は有馬記念で“自分から”一線を引いたんや ほなら、どうすべきか”は分かつとるやろ？」

「…：…当たり前やろが、アホ 自分でも整理付けようとしてた所をほじくりくさりおつて…ホンマに性格悪いやつぢやな」

「知らんかつたか？ 格闘家つちゆうのは“相手のシンドイ所”見つけるのが上手いんや 可愛い妹分が傷跡を下手に縫い合わせようとしたら止めんのも一つの優しさやぞ」

「…：そうかい、ソイツはどうもアリガトさんやつ！（ガツ）」

タマが感謝の言葉を言い終わるや否や、彼女の脚は熹一に脛蹴りを放っていた。

「痛うくくくくつ！ 完全に調子が戻った様やな…それでこそや」

「わざと避けへんのも“優しさ”のつもりかい…：けったくそ悪いっ!!」

「何言つとんのや…：“このやり取り”がワシ等のいつも通りやろがい」

「ふんっ…：まあ、せやな」

場の空気から最初に漂っていた“重々しい物”は完全に消え去り、今では清々しい表情をしていたタマの口からふと…：不思議な質問が投げ掛けられる。

「なあ、キー坊…：もしも、もしもやで？ 『ウチ等が出会つたらんかつたら』どうなつとつ

たんやろな？」

「……なんや、SF本でも読んだか？ 急におかしな事言いおつてからに」

「…ウチの恩人である『おつちゃん』が元気な顔を見せた日の夜にな、変な夢を見たんや。そこでのウチは子供の頃にキー坊にもオグリにも会つとらんし、鉄山師匠の指導も受けとらん…せやけど『おおまかな事』はそのままつちゆう何とも言えん夢やった…」

「ほなら…ワシはタマ、お前ともオグリとも会えんかった…つまり『親父とお袋が再婚せんかった』つちゆう事かの…？」

「…せやな。そしたらキー坊はどんな人生を歩んどつたと思う？」

「そんなん…決まつとるやろ。親父を超えた『最強の格闘家』になつとるわいつ！」

「まあ…アンタはそう言うと思つとたわ……」

「しやあけどな…ワシは今の人生、最高やと思つとるで！ 親父とジイちゃんに加えて

お袋とおグリもワシの『家族』になつてくれて…タマ、お前とも親友になれとるんやからなつ！！」

「……ウチもな、さつき言つた夢見たらなーんか『物足りなかつた』感じなんや。『前あつたモンが無くなつた』ちゆうか…ともかく、ウチも今の人生を悪くないつて思つとんねん」

「当つたり前の事抜かすなやつ！ 直ぐにナーバスになりよつて、『夢の話』なんぞい

きなり言われても頭の医者やないんやから分かる訳ないやろがい!!」

「…それもそうや 〃万年振られマンのアホ〃にウチも何を話しとつたんやろ…アホく
や」

「何やと、コラ! せっかく、オグリと一緒に 〃バンコク旅行〃に連れてつてやろう思う
とつたのにお前の分のチケット売つ払うぞっ!!」

すっかり調子を取り戻したタマの軽口に乗つかる熹一の発言で気になるワードを
拾つたので彼女は質問をする事にした。

「…バンコク〃 ってタイのやろ? ギャルちゃんにでも誘われたんか?」

「……ニユースで有馬記念にお前等が出とつた事知つた様でな、〃お祝い〃だそうや」

「へえ、ええやん チケットは何人分なんや?」

タマの質問に熹一はその日偶然持ち歩いていたチケットを取り出し、枚数を確認す
る。

「…五人分、やな ワシは行かんからオグリとタマ…後の三人を選んでくれ」

「…いや、キー坊も行けや ギャルちゃんからすればウチ等の方が 〃オマケ〃やろ」

「ギャルアツドに関しては…一回失明させた手前、ワシには会う資格が無い」

「アホ抜かせ! 男が過ぎた事グダグダ引きずつとるんやないぞっ!! チケット寄越せ
やっ!!」

「お、おう……」

先程とは立場が逆転したようで、呆然としていた熹一の手からタマがチケツトをもぎ取った。

「……つたく、決めたわ キー坊はウチとオグリんの二人で引きずつてでも連れてく事にしたからな 当日は覚悟しとけや」

「な、なんやもう……そないピリピリすんなや、タマ」

「やかましいっ！ その腑抜けた顔ツラア便所で洗ってこいやっ!!」

「……………分かったわい」

恐ろしい形相で放たれた指示に顔を青くし、すごすごとトイレへ向かう熹一の背中にタマは思わず独り言を呟く。

「久々に格好エエところ見せたと思つたら、コレ”や”しやーない、あんな絶対モテへん男：ウチが十年経つても彼氏がおらへんかつたら、特別に貰つてやる事も考え……つて、こないな事考えるとは……ウチまたナーバスになつとんな」

そうして彼女は鉄板に放置され、最早”真つ黒になつた”お好み焼きを切り分けて口に運び、文字通りの苦い顔をするのであつた。

驚愕! 極楽岳に潜むと言われた天狗は実在した!!

日本に未だ残る秘境「鬼喰島」にその存在が確認されているという天狗の情報を求め、三人の若者が近くまで漁に出る漁船に乗せて貰い、大海原へと旅立った。

果たして彼等はその島にある「極楽岳」に居ると噂された天狗に会う事は出来るのだろうか!?

「いや、別に…普段なら近所のラーメン屋行けば会えるんやけどな」

「タマ…でも幽玄ラフメン屋が「休業中」の看板を掛けてから暫く経つんだ。連絡先も交換していなかったし心配になってしまっただけな」

「せやかてオグリんな、わざわざヒマな時にウチ等の予定揃ったからって『離島へ行こう!』なんていきなり言われても普通はビックリやで!」

「だけど、タマは今日も付いて来てくれたんだ…本当にありがとう」

「…そもそも、鬼喰島…やったか? 前にキー坊が一度行つたつきりの場所やろ? 今日は案内させよ思つて連れて来ても『ご覧のあり様』やん…」

「…うっぶ タマ、話し掛けんなや…気持ちワルう…」

「キー坊も船に弱いのに…付いて来てくれてありがとう 私は幸せ者だ」

「…鬼喰島はウマ娘であるお前等ですら本気で危険な場所や 前に来た時もワシ一人で 行つて正解やつたと思つとる…：案内は任せい」

そうして彼等は鬼喰島付近に到着したのだつたがなんと！ この島には船着き場が存在しないのであつた!! そこで彼等がとつた行動とは――

「よつしや、オグリ、タマ…：水着に着替えたな!？」

「大丈夫だキー坊! 〃浮き輪〃も準備万端だ!!」

「泳げんオグリんはそれでキー坊に引つ張つて貰うからエエとして、ウチは普通に泳ぐからな」

「おうっ! それでも足攣らんよう気い付けろや ほな、おっちゃん…：〃今回も〃連れて来てくれておおきにな! 行つてくるわっ!!」

「いや、ワシも今回は〃スターウマ娘〃を二人も乗せられて良かったよ 前と同じ様に2、3日は周辺で漁をやつてるから、無事で戻つて来いよ」

「ウチからも礼を言わせて貰うわ オッチャン、あんがとな!」

「本当に今日はありがとう、おじさん…：でも、心配はいらないよ 私たちにはキー坊が付いていてくれるんだからね」

笑顔で連れて来てくれた漁師に別れを告げた三人は遂に鬼喰島へと上陸したのでつた。

そしてジャージに着替え終えるとそのまま島の極楽岳へと足を踏み入れたのだが……
そこで彼等を待ち受けていたものとは——

「ブオオオ—— ブウオオオオ——」

「うわああああ（PC書き文字） “また” アブの大群が来おったわい!!」

「キー坊任せろ! お父さんお手製の虫除けを散布する!!」

「クツサ!! “獣道の臭い” と静虎のオツチャンが本気で考えたであろう “フローラルな香り” が合わさってホンマ、クツサいわ!!」

「前に来たときはここら辺で山蛭やまびるや毒草、噛んで来る虫に襲われたからな……ジャーン!

修験者用の “天狗下駄” を用意したで 勿論、三人分な」

「ここら、随分と長い “一本下駄” やな しかも折り畳み式に改造しとるあたりキー坊……
相当、この島に対してリベンジ狙ったな?」

「子供の頃にみんなで遊んだ竹馬とバランスの取り方はあまり変わらないのだろうか?
それなら大丈夫そうだな」

「カカツ!!……マジか なんや紐に足ひっかけた思たら苦無が飛んできたんやけど、この森ホンマに大丈夫なんか?」

「この先にある天空堂の師範代からすれば “害獣除けのトラップ” らしいわ 猪や野犬が近づかん様には言え、相変わらず殺意が高いのお……」

「猪か……この前、尊鷹おじさんが狩ったので作った牡丹鍋は美味しかったな」

「……方向感覚が狂う森だな キー坊の指示通りだから進んでいる筈なのに『同じ所を回ってる』ように感じてしまう」

「いやいや、ホンマにナビは大丈夫なんか? 『実は迷ってました』ゆうのはナシやで?」

「大丈夫や この森に入ってから聞こえとる 『法螺貝の音』に従ってるようなモンやからな……待てや、そこら辺の草の色が違う 多分、そのまま行ったら 『竹槍付きの落とし穴』が待つとるぞ」

数々の苦難を潜り抜け……遂に到着した天空堂で一人、待ち構えていた人物と彼等とは出会った。

その人物の正体は天空堂の実質的な管理人であり、真魔流体術の師範代 『安藤夢二』である。

「お久しぶりですね、宮沢さん 以前お会いした時よりも更に雰囲気洗練されているのが見て分かりますよ」

「夢二も更に腕を上げた様やな……気配の消し方や足運びは勿論やが身体を中心に 『芯』が出来とる 今のお前なら 『幻突』も打てるんちゃうんか?」

「……御冗談を あの技を放てるのはお師様の 『血』を継ぐあなた位の物でしょう」

「そんな事言いつつも、将来的には打つ気マンマンなんやろ?」

「…ええ、勿論 血は繋がっていなくとも、私とてお師様の『子供』のつもりですから」
 久しぶりに再会した二人の男の爽やかさを感じさせるやり取りに二人の少女が参入する。

「君がキー坊が話していた夢二か…突然押しかけてしまつて済まない」

「ウチ等の事は…修行一筋の生活みたいやし、テレビも観んやろうから知らんと思うけど……」

「存じていますよ 宮沢さんの妹である『怪物』オグリキャップさんと御二人の友人である『白い稲妻』タマモクロスさんですね」

「なんや夢二、知つとつたんかい こない場所なら電波も通つとらんやろ?」

「いえ、頻度は少ないですがネットを利用する機会もあるので…その時のニュースでお二人の事は知っていましたね 『有馬記念』を観た時など私も含め、天空堂の皆が目奪われてしまいました」

穏やかながらもハッキリとした口調で夢二に褒められた二人は照れくさそうに耳を動かす。

「日々真剣に鍛錬している人達にもそう言つて貰えるなんて、正直嬉しいな」

「キー坊と違つておちよくられんで褒められるんは…なんや、照れくさいなあ」

「はい ですので…今回皆さんをご案内するのは『私一人』となります この場所 天空堂は別に

「女人禁制」の縛りはありませんが、それでも皆に余計な「熱」を入れるのは本意ではありませんから」

「夢二：そう言うお前は良いんか？」

「私は問題ありません 何故なら「私の心を一番に動かす」のはいつだってお師様ただ一人だけですので」

夢二はそう言つて三人を本堂まで誘導したのであつた。

「……成程、今日此方へ来た理由は『お師様を探して』の事だつたと」

「せや、日下部覚吾：天空堂こつちでは「竹神栖鳳」やつたか 来てへんのか？」

「いえ：確かに少し前、此方に寄られましたが直ぐに天空堂この場所を発ちました」

「：覚吾さん すれ違つてしまつたか」

「そもそも何で天空堂この場所に寄つたんか夢二さん、聞いてらんの？」

「私ごときがお師様の事情に口を挟むなどとても：いや、待てよ 心当たりならあります、しばしお待ちください」

突如立ち上がった夢二は三人を本堂に待たせるも、暫くすると小さな小包を持って戻つて来た。

「何やコレ：（カサカサツ 振つた音で察するに「紙」っぽいのオ……」

「はい……お師様が去った後に普段瞑想されている洞穴でこの小包が見つかり、我々が開ける訳にも行かずそのままにしていたのです」

「まあ、こここの連中……特に夢二はあのオツサンの事を『神様』扱いしとるからのせやったら……『天罰』受けんのは息子であるワシ一人でエエか」

「……っ！ あなたまさか……」

夢二は熹一がやろうとしている事を察し、瞬時に手を伸ばしたが熹一は『幽玄のかわし』を使ってそれを防ぎ、小包の中身を確認する。

すると其処から現れたのは――

「おい……オグリ、タマ 『コレ』 って……」

「『ラーメンのレシピ』、だな」

「何であのオツチャン、こんなモン仕舞つとんねん？」

頭に疑問符を浮かべた三人を尻目に遅れてレシピを確認した夢二は『その内容に』驚愕していた。

「こ、これは……食材がこの『鬼喰島で採れる物』ばかりだ!」

「……覚吾さん、夢二達に自分が作ったラーメンを食べて貰いたかつたんだな」

「成程なあ……一旦こつち来て食材の下調べ終わったから今はあつちこつち回つとんのやな」

「親父おとんなら『不言実行の人なのですね』とか言うんやろが、ワシからすればただの『口下手』つちゆうヤツやで　ワシと夢二…　二人の息子』に心配掛けおつて……」

それまで尊敬する『お師様の想い』を知つて感極まつていた夢二であつたが、熹一の『二人の息子』という言葉を受けると限界を迎え…遂にはその瞳から涙が零れていた。

「本来であれば…お師様の私物を勝手に開けるなど、私自らの手で処罰する対象なのですが…今回に付き、不問とします」

「おー、こわつ…しゃあけど良かったな夢二　好きな人に『愛されてる』つて想われるのは幸せな事やからのう」

「夢二だつて覚吾さん…いや、栖鳳さんか　あの人の『息子』なんだから、ワガママはたまに言った方が良いぞ？　私だつて静虎お父さんには言う時があるからな」

「オグリんの『ワガママ』なんて静虎のオツチャンからしたらカワイイもんやないか　この前二人で話した時なんか、むしろ『もっと言つて欲しい』つて溢してたで？」

タマの発言に三人は…釣られて夢二も加わり四人が笑い声を上げ、本堂を暖かい雰囲気ですで満たしていた。

「……久しぶりに、大声で笑つてしまいました　御三方、本日はお越し頂いて本当にありがとうございます」

「修行続きで表情筋も硬くなつとつたし、丁度良かったやん　偶には『俗世に触れる』」

のもエエもんやろ?」

「ええ、ですが…それでも私は『未熟者』ですからね 人里に下りるには未だ修練が足りていません」

「栖鳳さんもそれを分かっているから天空堂てんくどうでラーメンを振る舞おうと思っただろうな」

「修行してる人達にラーメン…つてのが、あのオツチャンらしいけどな」

「立派であれど、極稀に見せる『愛嬌』も私があの方を慕っている理由の一つですから」

その後和やかな空気感での談笑の最中、『良い事を思いついた』とばかりに熹一が手を鳴らして夢二にとある提案をする。

「せやつ! 夢二、お前オグリと『LINE交換』せい!!」

「あー、パソコン使つとるつて言つとつたしな…つて! ウチは無視かい!!」

「お前でも別にエエけど、親父相手オヤジに連絡を中継する役目ならオグリの方がエエやろ?

ラーメン屋
幽玄の『常連』やしな」

「成程、そういう事なら私の方は問題ないぞ 夢二の方はどうだ?」

「確かに、先程のお話の通り『息子』であるならば我儘の一つも言うべきですね…その申し出、お受けします」

こうしてオグリと夢二とのLINE交換を終えた後、三人は歩き疲れもあつて天空堂

で一泊してから極楽岳を下り、海上で待機していた漁船に再び乗り込んで鬼喰島を後にしたのであった。

オマケ

—— 帰りの船上にて

「…帰る前にキー坊がやったという『修羅場くだり』、私もタマと一緒にやってみたかったな」

「いやいや…険しい断崖絶壁に凹凸のない場所を『ロツククライミング』やって高濃度炭酸ガス充滿の『危険地帯』を抜けた後はヘトヘトの所を『底なし沼』が待つとんやろ？ 話聞いただけでもウマ娘やからって挑戦する気起きひんわあ……」

「……あくまで、『ショートカット』での手順を言っただけやが…挑戦する気ならワシは…灘の技使つてでも、お前等の事止めるからな……うっぷ」

「あー、ハイハイ そもそもウチはそんなんやる気ないし、そないグロツキーで格好付けても締まらんで……」

「心配させてしまつて済まないキー坊……背中をさするから少しでも元気になつてくれ」

〃奇跡の子〃と 〃怪物〃を繋ぐは悪魔のお蔭

ある日、父である静虎へフランスでの護衛の仕事が入ったので『向こうのレース場を一度見てみたい』という希望を出したオグリキャップ。

娘の滅多にない「おねだり」に静虎は二つ返事で頷き、二人でのフランス旅行が始まった。

そして現在、首都パリの「ルーヴル美術館」から出て来たオグリ。

『レース場へは二人で行こう』という父との約束もあり、父の「仕事」の打ち合わせ中に空いた時間でせっかくだからと叔父である鬼龍が前から薦めてくれていた「芸術鑑賞」を堪能し、その顔は満足気であった。

すると美術館前で一人、キャンバスに向かっている自分とそう年の変わらない少女を見かけるも、何故か惹かれる物を感じ：気付けば足はその方角へと向かっていた…。

「…上手だな プロの画家なのか？」

「…ッ!？」

「驚かせてしまって済まない…いや、そもそも日本語は通じないか」

「いえ…少しなら、ダイジョウブ アナタの事もテレビで見た オグリキャップ…デ

シヨ?」

「うん、その通りだ 改めてさつきは済まない 君の描いた絵が綺麗だったからつい、声をかけてしまった…えつと…」

謝罪すると同時に自分は目の前に居る子の名前を知らない事に気付き、オグリは言葉を言い淀んでしまう。

すると少女はその様子が面白かったのか鈴が鳴るような声音で笑った後、自己紹介を始めた。

「私のナマエ、『マリア』 言います 絵を描くのはスキだけど、プロじゃないです」

「そうだったのか…しかしマリア、君の絵は凄いな 私の叔父が言ってたが『何も無い所から『美』を生み出すのは人が持つ最上の能力』らしいんだ だから私も君の事を尊敬しているぞ」

「…えつ?」

急に呆然とした表情を浮かべたマリアを見たオグリは心配になり、彼女に声をかける。

「だ、大丈夫か…マリア? 私が何か気に障る事でも言ってしまっただろうか?」

「いえ…違いマス、オグリ 私が小さい頃にミタ 『不思議な夢』に出てきた 『おじさん

』も似たような事、言ってたカラ…」

それからマリアはポツリポツリとオグリに対して語り始めた。

子供の頃に見た『世界はウィルスで滅び』、親ともはぐれて一人でパリを彷徨っている時に出会った『美術品を守るおじさん』の夢の話を…。

「私のパパもウィルスのせいで怪物になっちゃって…アツ！　『こつちの』パパは元気だよ！　その…『向こうの』パパとお別れする時とそのアトも私とイツシヨにいてくれたおじさん…もう顔も思い出せないけど、『日本の人』って事は覚えてタノ」

「そうか…だからマリアは日本語を覚える事にしたんだな」

「ウン、あの夢をミテから私も今まで出なかつた声が出せるようになったカラ…ケツキヨク『夢の話』だし、今もおじさんとは会えてナイんだけどね…でも、今日はヨカッタ！　お蔭でオグリとこうして話しができたんだモノ」

「ああ、私もこうしてマリアと話せて良かった　しかし…マリアの夢に出て来た『おじさん』は聞けば聞く程、私の叔父『宮沢鬼龍』に似てるな」

「エツ！　そんなの？？」

「うん　『絵は下手』だし、『とっても強い』し、『ぶつきらぼうだけど優しい』所は間違ひなく鬼龍おじさんだ」

「オ、オグリ…その人の写真ってアル？」

「あるぞ　待っててくれ、今携帯にあるのを見せるから…」

言うのと、オグリは持っていた手提げのカバンから携帯を探し始めた。

「此処では無い何処かの世界」で出会った恩人とマリアが再会するまで、あと少しであつた…。

オマケ

今回の静虎の「仕事」も無事に終わって約束通り、フランスでのレースを二人で観戦する事になったのだが…其処には「もう一人」、オグリと友人関係になったマリアの姿があつた。

「最終コーナー！」 「スワーヴダンサー」と「ミエスク」の一騎打ちだあ!! 勝利の女神は一体! どちらに微笑むのかっ!」

「スワーヴダンサーか…『雲の様に走り、抜き去る姿は風の如し』とは正にその通りだな、マリア」

「ミエスクだつて同じ芝が適正なんだカラ! 『諦めを知らない女傑』のスパートはこれからダヨ、オグリ!!」

「オグリとマリアちゃんはすっかり意気投合している様ですね 私の仕事の打ち合わせ中に二人は仲良くなった様だが…」

「そうナノ! 鬼龍おじさんにソツクリ」のパパさん! 私とオグリはすっかり仲良

しダヨー！」

「うん　　`不思議な縁`　　だけど、鬼龍おじさんが大好きな子と友達になれて良かったよ」
「`鬼龍が繋いだ縁`　　…か　　うくん…そうか……」

自身が幼い頃より一族に迷惑を掛け通しの兄のお蔭で紡がれた`縁`。

若干、複雑な思いを抱えつつも、愛娘の見せる笑顔を見て『まあ、ええやろ』と気分を切り替えた静虎は彼女等と共にレースの行く末を見守る事にしたのだった。

オグリと気になる人差し指

「いや、こんな所に新しく沖縄料理店が出来たとはな…紹介してくれたキー坊に感謝しないとな　さて…今日の仕事も終わりだし泡盛でも頼んじまうか」

「奢って貰っている立場ですから一杯だけ目をつむりますけど…トレーナー、指導者としての節度は守ってくださいね？」

「なに、キタハラなら大丈夫だろう　それよりベルノ、この『ジーマミー豆腐』というのは甘い物らしい　頼んだ料理が来たら、これだけ一緒にデザートで追加しよう」

現在、練習を終えたカサマツ所属のウマ娘であるオグリキャップとベルノライトは担当トレーナーの北原穰に連れられ、近所に出来た沖縄料理屋へと足を運んでいた。

担当の財布を慮り、厳選した注文量を店員の女性に伝えた後にワクワクと言った様子で二人と共に料理を待つオグリは気持ちを抑えきれないのかメニューを見直している。

「それは良いけどオグリちゃん…頼んでから結構な時間だし、そろそろメニューを閉じよう？」

「まあ…デザート一品くらいなら追加しても大丈夫だが、ベルノの言う通りだ　良い匂いもしてきたし、そろそろテーブルと俺等に目を向けとけ」

「…済まない二人とも、沖縄料理なんて滅多に食べないからか恥ずかしい所を見せてしまった」

そう言って少しだけションボリとした姿を見せるオグリに対し、二人が苦笑を浮かべていると遂にテーブルに料理が到着した。

「！ 待ち侘びたぞ、どれも美味しそうだな」

「…お待たせしました」

ようやく届いた料理の数々に目を輝かせていたオグリであったがふと、配膳している男の「爪」に違和感を感じてその姿をまじまじと見ると思い当たる事があったのか男に質問する。

「『研ぎ澄まされた爪』、『鍛え上げられた指』…そして『見事な出っ歯』 まさか君はキー坊が昔、話していた『人差し指のゲン』か？」

「あ——っ!! やっぱりバレちまった!! なるべく顔合わせたくなかったから接客には行きたくないって言ったのによ!! しかもなんだ『出っ歯』ってよお…そこは別に伝えなくても良いだろうが!! キー坊のヤツめ……」

オグリの指摘により突如、頭を抱えだしたこの男は『笹篠源内』。

琉球^首空手^里の一派『恩納流』の使い手であり、かつてはオグリの叔父である鬼龍から下僕以下の扱いを受けていた。

そしてオグリの兄である熹一と闘った後は敵でありながらも協力関係を結ぶという不思議な関係を築いた相手であった。

「えっ!?! オグリちゃん、この店員さんと知り合いなの?」

「いや…お互いの話し振りからして『キー坊の知り合い』って感じだが……」

「キタハラの言う通りだ この男の事はキー坊がお父さんの治療費の為に参加してたダークフアイト闇試合で知り合ったと私は聞いている」

「ダークフアイト…? 私は聞いた事ないけど、トレーナーさんは?」

「いや…俺も初耳だ 名前の響きからして『非法』な感じはするが……」

「…アンタ等、一般人には関係ない話さ 最後のハイパー・バトル日本予選にも参加したが、何だかんだでキー坊とつるむ事になって最後は鬼龍さ…鬼龍のヤツに足蹴にされるわで…ホント、散々だぜ」

そう言つてゲンは当時の事を思い出したのか己の後頭部を擦る。

その様子を見つつも並べられていた料理に何時の間にか口を付けていたオグリはゲンに対し疑問を投げかける。

「モグモグ」…それで、その後はどうしていたんだ? 今はこうしてお店をやっているという事は鬼龍おじさんの不良グループから抜けられたという事だろ?」

「いや、『不良グループ』ってよお…ま、あの後流石に『もうウンザリだ』って思つて

道場のある沖縄に帰ったんだよ。追手が来なかった所を見るに鬼龍アイツからの興味は完全に失せたって事なんだろうけどよ」

「パクパク）……それは良かったですね。でも、何でお店を地元じゃなくてカサマツ近くに開いたんですか？」

せつかく来た料理が冷める事に申し訳なさを感じたベルノはオグリに倣って食事を始めたが、ゲンの話になる部分を感じて質問を行う。

「それがよお、お嬢ちゃん……『語るも涙聞くも涙』って話でな。オグリの兄貴であるキー坊の生き様を見て俺なりに今までの人生を、悔い改めて、生きてたんだよ。そしてたらな、『アイツ』がやって来たんだ」

「……『アイツ』ってオグリの叔父の鬼龍って人ですか？」

続く北原の質問にゲンは頭を振り、体を震わせながらその人物の名を答えた。

「『鬼塚姫次』だよ！ よりもよって『鬼龍の息子』が俺の前に現れやがったっ!! しかも理由ワケを訊けば『キー坊師匠に言われて来てやった』とか偉そうな態度で流石、血は争えないと思つたねっ!!」

「……そう言えば姫次がしばらく前に顔を腫らしながらニンジンを届けに来た時だったか、『ちよつと沖縄へ旅行に行つてくるんで』と言つてたが……ゲンの所に行つてたんだな」

「ただでさえ鬼龍の息子なんて『厄ネタ』に関わりたくなかつたつてのに『キー坊師匠から基本の型練り直すなら此処で学べって言われた』なんて言われたらよ…キー坊師匠に認めて貰えてたような気がして、嬉しくなつちまつたんだ」

「姫次…『キー坊師匠の言う事なんて死んでも聞かよ』なんて言つてたのに、相変わらず鬼龍おじさんに似て素直じゃないな。それで、ゲンは姫次を鍛えてあげてたんだろ?」

「…『最初の内だけ』な。時間の掛かる部位鍛錬以外はあつという間に習得して、後は俺を小間使いみたいに扱いやがったんだ! 親父譲りのイヤな子供ガキだつたぜ!!」

親子二代に渡つて『下つ端扱い』されたという屈辱にゲンは顔を真っ赤にして姫次弟子への感想を吐き捨てた。

「…でもよ、修行中に料理を振る舞つてやつたら良い笑顔で『美味しいな、店開いたら来てやるよ』なんて言いやがつて。それで久しぶりに話でもしたかつたし姫次を經由して師匠であるキー坊師匠に相談したんだよ、そうしたら…」

「カサマツカサマツの近くにお店を構える事になつたんですね」

「お嬢ちゃんの言う通りだ。『こない美味しいならオグリにも食わしてやりたいのお、出資金ならワシが出したるわい!』つて言われてな…後は気付けば地元を離れて仲間と一緒にかサマツカサマツまで来ちまつた…」

「それは…なんだ、済まない。キー坊師匠のワガママに付き合わせてしまう形になつてし

まったな……」

「オグリちゃん……お兄さんの行動力が凄いよ ある意味でオグリちゃんの為にお店をプレセントしたような物なんだから」

「まあ……キー坊も有名な格闘家なんだし、今やつてる施術院も盛況だからゲンさんの店に投資して税金対策していると思えば別におかしくはない、のか？」

三人がゲンの店の成り立ちに各々の感想を抱いていると当の本人は照れくさそうに頬を掻いていた。

「まあ……そんなワケでよ、俺もオグリの事は知ってたんだ 最初こそ戸惑ってばかりだったが、俺が作った料理を『美味しい』って言われんのが嬉しくてよ 今では結構、悪くないって思ってたんだぜ？」

「そうか ゲンが満足しているなら良かった」

「それによ……昔、オグリの叔父さんである鬼龍から『人の顔色を窺って生きる』みたいな事を去りに言われたんだよ そういう意味じゃ、今の職業はピッタリだろ？」

「……そうか 鬼龍おじさんの『アドバイス』のお蔭でゲンが今の様な良い顔が出来ているのなら本当に嬉しいよ」

「小声）ベルノ 多分……それって『アドバイス』じゃないよな？」

「小声）トレーナーさん、指摘しないでおきましょう……オグリちゃんも店長さんも本当に

良い顔してるんですから」

「さて、折角来てくれたんだからな キー坊オキーナの要望通り、今日に限つての『食べ放題』だ！ 店の食材食い尽くす勢いで注文してくれよっ!!」

「い、いや！ ゲンさん、俺は嬉しいんだがその発言はちよつと……」

「そ、そうですよ店長さん！ お兄さんからどれだけオグリちゃんを食べるのか聞いてないんですか!」

「…えっ？ 俺は『満足するまで食わせてやってくれ』としか聞いてねえんだが……」

「…ありがとうゲン、キー坊 どれもこれも美味しそうで選ぶのに迷っていたんだ 食べ放題なら『全部』食べても良いんだな……?」

その後…用意されていた店の食材は全てオグリのお腹に収まり、店長であるゲンは放心した様子でオグリ達を見送ったのであった…。

オマケ

「おうっ！ やつとるようやな、ゲン!!」

「約束通り、食べに来てやったぜ」

ゲンの店に宮沢熹一と鬼塚姫次は爽やかな笑顔で来店した。

そんな二人に対して店長であるゲンはと言うと——

「聞いてねえぞ!? お前の『妹』があんなに食うなんてよお!!」

「ヒヤハハっ! ビックリしただろ? 俺も初めてオグリの食事を見た時は度肝を抜かれたぜ」

「…ワシはちゃんと『食材多めに用意しとけよ』って言つとつたやろ」

「ああっ! 用意したよ!! 『普通のウマ娘』が満足する量をなっ!! 巷じゃ『怪物』なんて呼ばれてるようだが食欲も半端ねえな……」

「食費は確かに掛かるが…オグリはそういう所も『かわエエ』やん?」

「出たよ、師匠の『妹鼻貞』…弟子である俺にもその優しき、分けてくんねえ?」

「イヤじゃ お前は龍星と同じく『恩を仇で返すと武術家としてレベルが上がる』みたいに思うとるフシがあるからのオ…今日みたいに飯連れて来ただけで十分やろ」

「…ま、俺も急に師匠が優しくしてきたら気持ち悪いからそれで良いけどね」

師匠と弟子との物騒な会話に若干、引き気味になりながらも『店長として』気持ちを切り替えて対応する事を決めたゲンは二人に注文を尋ねる。

「……それで? 今日のご注文は?」

「おうっ! せやな…この前オグリが『豆腐のデザートが種類あつて楽しかった』言うてたし、今日は『豆腐料理のフルコース』と行こかつ!!」

「ゲエーっ! 正気かよ!! オグリが居ないとアンタ本当に食に関して適当だな……食

い出がある豚とか行こうぜ!」

「なんや姫次、お前ケチ付けよつて 今日動物性より植物性のタンパク質摂りたい気分やねん」

「だからつてよお…限度つてモンがあるだろ!」

「なら、ワシだけ注文するからエエわい 代わりにお前は自腹で好きなモン頼んだらエエやん?」

「きつたねえなあ…おいゲン、俺も『豆腐料理のフルコース』だ 代わりに師匠コイツの分の肉は俺に回せ」

「お前なあ…師匠に対して『コイツ呼び』はないやろ」

「俺だつてお前より年上なんだ、いい加減『呼び捨て』はやめろ」

「オグリに呼ばれたら鼻の下伸ばしてそんなオッサンが凄んでんじゃねえよ 師匠アンタだつて俺に可愛げなんて求めてないだろ?」

「…つたく…最近の若いヤツは…」

同時に『オッサン臭いワード』を口にした事に気付いた熹一とゲンは懽然とした表情で押し黙り、それを見た姫次は店内に大声で『年相応の笑い声』を響かせたのであった。

灰色のオッドアイが“怪物”を見抜く

「さてオグリ、この絵画の“価値”……どう見る？」

「前に鬼龍おじさんが見せてくれたカタログでも同じ物を見たけど……“それ”と比べると周りの花の大きさやモデルの表情が違うな」

「……つまり、“贋作”って事だな？」

「そうなるな けど“天心”さん……モデルが笑顔だし、周りの花もそれを引き立てている“良い絵”だって私は思うよ」

「……この絵は素人目に見ても明らか“贋作”だが、描かれた年代とその国の背景を鑑みると名画を使って人民に対する癒しを目的とした物であるのが見て取れる つまり……当時の鑑賞者からすれば、お前さんの言う通り“良い絵”だったって事だ」

此処は骨董屋である“極楽地獄堂”。店長である“朧天心”の虹彩異色症オッドアイが映すのは対象の“外側”だけでなく、同時に“本質”をも見抜く卓越した審美眼を持つ。

そんな彼と“怪物”オグリキャップとの出会いは彼女の父である宮沢静虎が“仕事”の報酬で貰った骨董品の数々を処分する為、兄である熹一と共に偶々立ち寄った極楽地獄堂で鑑定を頼んだ事から始まった。

その折に天心はオグリと熹一を「一目見て」気に入り、店に骨董品が届くと二人：特にオグリに対して「鑑定」を頼むという間柄になっていた。

「…天心さん 何時も思うんだが、そこまで分かっているのに何で私達に「鑑定紛い」の事を頼むんだ？ 私やキー坊だって美術品の価値に関しては別に詳しくないんだぞ」「ははっ！ そんなの「見れば」分かるよ けど、まあ…俺の道楽にちよつと位付き合ってくれても良いだろ？ なんせお前等が持つて来た品を高値で取引してやったんだからさ」

天心の言った通り、彼が買い取り業者への仲介を行った事によってオグリ達は目が飛び出そうな金額を目の当たりにする事となったのだ。

「…天心さんのお蔭で都内に「灘の道場」を増やす事が出来たんだ 私達家族としても感謝はしてるよ」

「だろ？ 確かにどれも「良い品」だったが、仲介にも才能はいるからな」

「それなんだが…：…天心さん」

「ん？ どうしたんだ、オグリ」

ニコニコと笑顔を浮かべながらオグリが話す事を待っている天心。

オグリとしては目の前に居る男に『自身の考えは見透かされているのだらうな』という思いはありつつも、それでも聞かずにいられなかつた疑問をぶつける事にした。

「私達が持つて来た骨董品だが…あれの何割かは『贋作』だったんだらう？」

「やっぱり、お前さんには『本質を見抜く目』を持つてるな。今でも良いから中央のスター選手辞めて俺の弟子にならないか？」

天心の口から出た事実上の肯定にオグリは『やはりな』という思いで頭を抱えてしまった。

「持つて行く前に自分達でも調べたんだ…その内の幾つかに『違和感』はあつたが、天心さんが全部『本物だ』と言つてたからずっとモヤモヤしていたんだが…やっぱりか」

「さつきも言つた通り、お前等が持つて来たのはどれも『良い品』だった。俺はそれに『世間的な価値』を付与して高値に変えたんだ。これも才能…つてのもさつき言つたか」

「骨董屋というのは『そういう事』がまかり通る物なのか？」

「…結局な、人間つてのは『見たい物しか見えない』生き物なんだ。『贋作』だつてその人が心から信じてりや立派な『本物』さ。お前等兄妹だつて俺からすればちゃん和本物に『見えて』るんだからな」

天心の最後の言葉にオグリは思わず息が詰まつた…。

兄である熹一との血の繋がりが無いという事を彼に語つた事は一度も無かつたのに『それ』を見透かされていた事…そして、その関係を『本物だ』と認めて貰っていた事

に対してである。

「色々な『紛い物』を見て来た身としてはさ…お前等みたいなの『本物』同士が仲良くやってるのは本当に目の保養ってヤツなんだ これでも感謝してんだぜ？」

「待ってくれ、天心さん…：気持ちがいまいけない」

「まあ、聞けって 『偽物』って言葉はどうにも悪いイメージが付きがちだが、お前が鑑定してくれた絵と同じで 『当人が満足してるならそれは本物の『幸せ』』なんだ」

「…確かに、私は宮沢家のみんなと家族になれて嬉しいと思ってるよ」

「贋作ってのも大抵が『本物を超えてやろう』って気概で作ってる その結果、部分的には本物を上回る傑作が世に出るのも珍しい事じゃない」

「天心さんは…私達が『そう』だって言ってくれるのか？」

「それこそ、世の人間が付ける価値なんて様々だが…少なくとも俺はお前等の関係が『大好き』だぜ」

オグリはその言葉を聞いて大きく息を吐き出す。

自身がある種の尊敬を抱いている『鑑定士』の口から出た感想に安心したからであつた。

「…なんだか、とつても疲れたよ 世の中の美術品に心があるのなら、鑑定中はこんな気分なのかな？」

「どうだかな? 作者の魂が乗り移ったなんて言われてる品も珍しくないし…案外、人間が付ける身勝手な価値に怒り心頭かもしれないぜ?」

「ふふつ…だったら、これからはもつと大事に扱ってあげないとな」

「ああ、そうしてくれ 美品の方が鑑定士もサービスで褒めてやりたくなるからな」

天心のその言葉にオグリはツボに入ったのかお腹を抱えて笑い出す。

それを微笑ましそうに見ていた天心はふと、現在店に居ない「二人」の事を思い出した。

「そーいや…うち唯一の従業員とキー坊はどこまで行つてんだ?」

「お店に来るなり『美術品の搬送に人手が足りない』ってキー坊を連れて行つたが、場所が遠い訳では無いんだな?」

「ああ、近場だが物品が多いんでな…つたく、帰つて来たらラーメンでも奢つてやろうと思つてたのによ」

「! 天心さん『オススメ』のお店か!? 楽しみだな!」

「…お前にも奢つてはやるが一杯までだ その後はキー坊にでもねだれよな」

目を輝かせたオグリに天心がウンザリとした視線を向けていると店のドアが開いて熹一と従業員の二人が帰つて来た。

「オグリ! 天心さん! 帰つて来たでっ!!」

「天心さん、取り敢えず荷物は量も量なんで近場のコンテナに運びましたんで 後で確認よろしくっス」

「よしっ、戻ったな 取り敢えずラーメンでも…いや、待て キー坊、ちよつとオグリの隣に立ってくれ」

「な、なんやのん 天心さん…」

天心からのいきなりの指示に、熹一は困惑した表情を浮かべるも言われるがままオグリの隣に立つ。

「……うん やっぱりお前等は『良いな』」

「天心さん よく二人の事見てますけど、どういう意図なんスか?」

「せや 急にオグリの隣に立て言われてもワケ分からんぞ」

「いや、キー坊……天心さん曰く『傑作』らしいぞ」

「なんやオグリまで……まあ、エエわい」

納得はしてはいないし、聞きたい事も数多くあつた熹一であつたが妹の^{オグリ}満足そうな笑顔を見てそれ以上、何かを言うのを止めたのであつた。

灘の食法を体験しよう

「小内」さん、野菜はこれ位で宜しいでしょうか？」

「はい、静虎さん これだけあれば十分だと思われれます」

「…なんや、肉が足りんのオ 親父も小内トレーナーも『選手のために鍋を振る舞おう』言うならもうちつと、肉用意した方がエエンやないか？」

「何を言つとるんじゃ、熹一 栄養バランスが崩れがちになる “若い内”こそ野菜を取るべきやろ」

「私も…静虎さんと同意見です 担当であるデイクタストライカも野菜を敬遠する傾向にあるので…この機会に中央の施術師を務める静虎さんと熹一さんのお二人に是非とも、鍋の極意をご教授願いたいのです」

「小内トレーナーは喋り方がホンマ、カッタいのオ…ワシの事は『キー坊呼びでエエ』言うとるのに頑なに呼んでくれへんし」

「当たり前やろが熹一 小内さんの立場を考えれば軽々しく呼ばん様に己を戒めとるんじゃ、強制する必要はないやろ」

「…いえ、静虎さん 私も熹一さんには担当が負傷した際に治療をして頂いたので、出来

る限り彼の要望には応えたいとは思ってはいるのですが……何分、性分と言えば良いのか
気恥ずかしさが勝つてしまい……なかなか呼べないのです」

「……ま、小内トレーナーのペースでエエわい　六平のオツチャンや金剛八重垣流の師範
代からも最近と呼ばれとつたからこの際、中央の皆から呼ばれるのもオモロイ思つとつ
ただけやしな」

近所のスーパーにてカートを押しながら中央のトレーナーである「小内忠」と会話
をする宮沢静虎と熹一。

中央において『最近の選手は食生活で栄養をしつかり摂れているのか?』という議題
が出され、調査の結果『僅かばかりの偏りが見られる』との結果が出たので改善の為に
白羽の矢が立ったのは数多くの実績から中央への信頼が厚く、『灘の食法』を知る宮沢
親子であった。

尚、滅多に中央に顔を出さない尊鷹と宮沢親子と顔を合わせると必ずと言って良い程
トラブルを招く鬼龍は選考の時点で除外された。

「お二人とも道場の経営もあると言うのに、本日は誠にありがとうございます」

「いえ、私達の食法がお役に立てるのであれば喜んでお手伝いしますよ」

「親父おとんの言う通りや　それに、中央の娘むすめの好みもそれぞれやしな『まずはトップ層の好
き嫌いを知ろう』って事で小内トレーナーに声掛けたら二つ返事で来てくれて助かつと

るで」

「…今回は六平トレーナーと小宮山トレーナー、奈瀬トレーナーを都内の道場に呼び、食事会という名目での『会議』です。有意義なお話を出来ると思います、参加させて頂きました」

「いえ、ですが…皆さんからメモ書きは頂いているので買い出しならば私達だけで良かったというのにスーパ^ーまで着いて来て下さり、ありがとうございます」

「年配の方と女性ばかりの集まりなのです。私の様な『若い男手』が率先して動くのは当然ですし、それに…：今日はお二人ともゆっくりお話しをしてみたかったので」

そう言って自身の掛けている眼鏡を『少しだけ震える手』で直す小内。

2mはある体躯を猫背にし、少しだけ暗めで二十代とは思えぬ雰囲気醸し出す彼の仕草に熹一は吹き出し、静虎も眼鏡を直す。

「ぶははっ！ 何やアンタ！ タダ者^{モン}やない気配出しとる思うたら『緊張』しとっただけやったんか!？」

「熹一、失礼やぞ。ワシ等も格闘家として多少は世間に認知されとる身…『暴』の気配を僅かばかりでも感じさせてしまった己の未熟さを恥じる所や」

「い、いえ誤解です…お二人からはその様な気配は一切感じられず、むしろ『安心感』さえある程ですが、その…『憧れの選手』と会えたのが嬉しくて、つい」

小内は少しだけ慌てた様子で二人に弁明し、再び眼鏡を直す仕草を取る。

「なんや小内トレーナー アンタ…ワシ等のファンやったんか？ 格闘技とか観るタイプには見えんけどなあ…？」

「はい、仰る通りです しかし熹一さん…私が若い時分、たまたまテレビで観た『TDK』、その後の『ハイパー・バトル』でも貴方の活躍が鮮烈だった物で印象に残ってしまいました」

「…私達、親子の戦いも観ておられたのですね？」

「ええ…己の全てをぶつけ合い、認め合う二人の姿は輝いて見え…私は思ってしまったのです 『こんな光り輝く選手を支えられる人間になりたい』と」

「…で、今は『中央のトレーナー』か ワシ等の『親子喧嘩』にそう思ってくれとるのは嬉しい反面、なんや…むず痒いのオ…」

「私にたまたま『そちらの才能』が有った為、今の立場に居ますがお二人に対する感謝は忘れておりませんので 本日はこうしてお会い出来て光栄だと思っております」

そうして小内は僅かばかり口角を上げ…彼にとつての『笑顔』を二人に見せる。

「私達も武術家として未熟なばかりで未だ『戦わずして勝つ境地』に至らぬ身ですが…それでも小内さんの心に何かを残せたのであれば、それは大変喜ばしい事です」

「せやな…結局、親父おとんもワシも生まれついで『戦う人』や しゃあけど、ワシ等の戦つ

た道の途中で小内トレーナーみたいな「導く人」に影響与えられたなら……それって上等やん?」

「……私が現在、担当しているデイクタストライカも間違いなくお二人同様「輝く」ウマ娘です。彼女なら貴方達が見せてくれた物と同様の感動を世間に与えられると信じていますから」

「……ホンマ、エエ話聞かせて貰ったわ。デイクタもきつと喜んぶるな……おい、お前等「隠れとらんと早よ出てこいや」

熹一の突然の呼びかけに柵の影から姿を現したのは顔を真っ赤にしたデイクタストライカとそれを心配そうに眺めるオグリキャップの二人であった。

「……デイクタストライカ。何故此処に居るんですか?」

「いや……これはデイクタが灘の道場に興味を持ってくれたから私が案内しようと思ったんだが、途中でお腹が空いてしまいスーパで何か買おうと立ち寄ったらみんなが居たのでデイクタが隠れよう……」

「オグリイ! ンな事どうでも良いっ!! トレーナーこんな所で何をこつ恥ずかしい事言つてやがんだ!!」

「なんや、陰気な雰囲気反して「熱い男」やろがい。思春期言うても、もうちつとリスペクトしたれや」

「うるせえ！ キー坊も気付いてんなら無視しろよっ!!」

「それはムリやな ワシは何時だって『常在戦場』やし、気付いたら教えたるのもオモ口……『優しや』やん?」

「おい！ 今、『オモロイ』って言おうとしやがったな!? クツソ、ウゼエーっ!!」

熹一のからかいで更に顔を真っ赤にして怒りを露わにするデイクタを尻目に静虎とオグリはカートの中身を確認していた。

「これは…鍋の材料か お父さんごめん、今日は道場で何か用事があつたんだな?」

「何、気にするな 折角だからお前も友達誘って一緒に参加したらエエわ 『現役の選手』の意見も聞けたら丁度エエと思つとつたんじゃ」

「何の話なのかは見当が付かないが…分かつた お父さんとキー坊の役に立てるなら誘えるだけ誘つてみるよ」

その後、都内の道場にはオグリの誘いにより数多くのウマ娘が集まつての鍋パーティが開催されたのだが…『野菜が多めの鍋』に対し、数多く不満が集まつたのでやり直しが決定された。

「お父さん、やっぱり動物性のタンパク質を増やした方が良かったんじゃないか?」

「いや、しかし…人間は『本来、草食動物』というデータもある事やしな……」

「それ毎度思うんやが、親父の好みつてだけやろ? 年取つたら食えなくなるんやし、も

うちつと若い者モンに肉食モンわせたれや」

“見土” “聴雷”

「アンタがキー坊… 宮沢熹一… 覇生に居た時から話には聞かされてたが、見れば見る程『強そう』ってカンジには見えねえな 今闘ればミノル兄さんが勝っちゃうんじゃないか？」

「なんや、イナリワン… 言うたか… ミノルさんに負けず劣らず口の減らん娘やのオ、ガタイはエエようやが、小柄過ぎてこの前ヤクザ者が撃つてきた豆鉄砲を思い出すわ」

「ああん!? アンタその発言はミノル兄さんの前にあたしと闘りたいって事かい!!」

「おうコラ、キー坊! アンタが口喧嘩買うのは勝手やが… 『身長の話』はウチにも刺さるからそれ以上はやめとけや」

「おっと、今は引退したとは言え一線を走つてた『覇気』は健在のようだな タマモクロス… やっぱ、テレビよりも実物見た方が参考になるね」

「…お褒めに預かり光栄やな、『ミノル』さん キー坊から『静虎のオツチャンが昔世話になった』聞いたとつたし、礼の一つでもと思つとつたけど… なんや随分と気持ちが良い男やないか」

現在、会話により『嘲り』、『応酬』、『激昂』、『窘め』、『関心』が渦巻く虹色

の空気感を生み出された都内のファミレスで発生源となった「元・覇生流」の鈴木ミノルとイナリワン、「灘のオグリの関係者」である宮沢熹一とタマモクロスの四人が同じテーブルに座っていた。

そもその発端は熹一が『一度キッチンとイナリに会ってみたい』という要望からの集まりであつたがイナリの大井、中央の担当を務める「梶原親子」は用事が入り不在。

熹一側もオグリが急な遠征の為に来れなくなつた為、たまたま居合わせたタマに声を掛けた結果の面子であつたが、『覇生流にゴタゴタを持ち込んだヤツの関係者』と『妹と出掛けられる機会が無しになつた』不機嫌な二人が顔を合わせた事により、出会いの時点で一触即発。

残りの二人が「緩衝役」になるといふ地獄の様な状況が出来上がつていた。

「いや、そう言ってくれんのは当然だな 俺つてば天才の上、思慮深いからよ キー坊に倣つて『タマ』と呼ばせて貰うぜ？」

「構へんよ、ウチもその方が気楽でエエわ……つたく、キー坊もエエ年なんやしミノルさんみたいに「大人の対応」見せんかい」

「……せやな イナリ、出会い頭にスマンかつたわ」

「……あたしも別にアンタに原因があるワケでもねえつてのに絡んじまつて悪かつたよ」

「その通りだぜ、イナリ それにキー坊は『弱そうに見えて強い』ヤツなんだ 見たままの感想言っちゃあ、俺の評価も下がるだろうが」

「…分かったよ、ミノル兄さん あたしだって映像だけどキー坊の闘いは観てんだ 『アホ面引つ提げても強い』ってのは重々承知の上さ」

「なんやもう…結局、二人してワシの事バカにしとんのやないか」

「『NEO宮沢熹』の時は強そうな雰囲気出とったけど、同時に『近寄りがたい雰囲気』もあつたからな 結局キー坊は今の坊主頭で丁度エ言うこっちゃ」

タマのフォロー（？）に納得いかないという表情を浮かべるも頭を掻いて気持ちを切り替えた熹一は覇生の二人に話を振る事にした。

「…で？ 『覇生を抜けた者同士』、その後は何かちよつかい受けとんのか？」

「あ…あたしが大井に居る時も中央に移るって話になつてからも細々と嫌がらせは受けてたが、直接的なのはミノル兄さんが片付けてたんだ けどね、世話になつてる『姐さん』と『坊』にまで手が及んだ時は流石のあたしも我慢の限界つてヤツだよお…」

「なんや、カチ込みでもやつたんか？ 武術を修めるとは言えウマ娘『らしくない』事やるんやな」

「ソイツは誤解さ、タマ イナリは俺やキー坊と違つて根つからの『アスリート』だ俺も行ったが正に『爽快』の一言だったぜ」

「……まさか、親父もやったつちゆう、アレ、か!?」

熹一の驚いた顔を見たミノルが『待つてました!』とばかりに指を鳴らし、イナリが起こした偉業を語つて聞かせる。

「そのまさかよつ! 覇生流の秘儀、風当身」による天鳴大太鼓の連続50回叩き!!

覇生の山に「一週間の大雨警報発令」だぜつ!!」

「ま、マジか…親父も20回と聞いとつたが、倍以上」とは恐れ入つたわ」

「なんやキー坊? 太鼓叩くのにそこまで驚いてる所見るに:『バチがエライ重い』とかなんか?」

「ちやうわい、バチなんぞ使わず己の手から出した風圧、風当身」のみで大太鼓を鳴らす覇生の雨乞い兼、会得までの通過儀礼や」

「な、なんやて!? イナリ、アンタとんでもない事やるんやなあ……いや、静虎のオツチャンも人間で20回も鳴らすんやから大したモンや」

「…風当身あんな技スじゃ使い物モンにやならねえし、ウマ娘のパワーを使つても「センス」がなきやロクに数も打てねえんだが、習得しといて良かったよ、でもさ……」

己の偉業を誇る訳でもなくむしろ『悔しそうな気持』を隠し切れないイナリに疑問を浮かべた熹一とタマの二人にミノルが「補足説明」を入れる。

「イナリが連続で打ち込んだ風当身は「15発」なんだよ、そうすると、50発まで数

が足りないよな……？」

「なんや、ミノルさんも手伝ったんか？」

「いやいや、タマ 流石に絶賛成長中である天才の俺でも追加で静かなる虎に並ぶ〃20発〃で限界を迎えちまった するとよ……」

「成程のオ……それは、確かに〃偉業〃やな」

「キー坊……今回はオチまで言わず感謝してやるよ その通り！ 俺達の風当身に触発された〃門弟達〃が協力してあのイヤミつたらしい狐面4人の前で〃残り15発〃を打ち込んでやったのさっ!!」

そう言つて大笑いするミノルに釈然としない表情を浮かべるイナリ。

「けど、ミノル兄さん あたしは『覇生を抜けたけど、それでもここまで成長できた』つて事を見せつけてやりたくて〃50発〃つて宣言をしたんだ それなのに最後は兄さんや皆に手伝つて貰つちまったなんて、そんなの……」

「打った風当身の〃数〃が重要なんじやねえんだ、イナリ お前の〃泥臭さ〃が着いて行つた俺と見ていた門弟共の心を動かして保身ばかりのバ鹿共の鼻を明かしてやつたんだ！ これ以上に爽快な事があるかよっ!!」

「せやのオ……オグリやタマもそうやが、〃時代を動かす選手〃言うのは〃華〃があるイナリはまるで泥から咲くキレイな……タマ、あの花の名前なんやつたっけ？」

「…まったく、カッコ付けるなら最後まで決めんかい… “蓮の花” やろ？ 仏さんも座つとるヤツや」

「おうっ！ ソレやソレ!! イナリ、お前は人を動かすことが出来る立派な “華” を持つとる!! オグリの好敵手^{ライバル}として相応しい相手や思うとるでっ!!」

「ウチも引退してなんや寂しきみたいなモン感じ取ったが…イナリ^{アンタ}みたいな “強いヤツ” 見たら、もつかい『オグリと纏めて相手したい気持ち』になつてまうな」

「な、なんでい…アンタ等、急にあたしの事を褒めやがつて」

急に熯一とタマの二人から送られた賞賛に動揺し、しどろもどろといった様子になるイナリ。

そんなイナリの背中を叩いていつもの不遜さを含んだ爽やかな笑みを見せたミノルは再び大声で笑い出す。

「はっはっは！ こりやあ良い！ “畑違い” と “引退者” の心も惹いちまった!! 正しくお前は泥に咲く “蓮の花” だっ!! 決めたぜ、お前の “二つ名” ……」

そして “風のミノル” はイナリを指差し高らかに宣言する。

「“土^{ダート}のイナリ” だっ!! 適正も考えればピッタリだろ？」

「“二つ名” ……ミノル兄さんと同じ、 “あたしだけの” “二つ名” ……」

「ワシもエエ名前やと思うが…エエんか、ミノルさん？ 今は居らんトレーナー^{二人}に許可

も取らんと勝手に決めて」

「エエんやないか、キー坊……ウチもそうやけど、二つ名なんていくつあつても良いんやせやつたら自分が気に入ったモン使い分けるのも『アリ』やで？」

「…そういう『フアツション感覚』は流石女子やな　ま、本人が気に入つとればそれでエエか」

熹一とタマとの会話を尻目に当のイナリは体を震わせ…ついに我慢できなくなったのか天に拳を突き上げて『宣言』する。

「あたしはイナリ！　^{ダート}土のイナリだっ!!　待つてなオグリキャップ!!　中央の^{ツワモノ}強者共!!　正々堂々と真正面から勝負だっ!!　あたしは中央^{こじ}に在りと教えてやらあ!!」

こうして、店内での『選手宣言』を終えたイナリ達は他の客から『うるさい』と苦情を受けて店から退散する事となったのだった…。

オマケ

「…つたく、料理も食わんと店から追い出されるんは二回目やぞ…腹減ったわい」

「あの時はキー坊が悪いんやろが…アカン、思い出したら腹立って来たわ」

「いや、悪い…今日はせつかく誘って貰ったつてのにあたしの所為で…」

「へっ、気にすんなよイナリ　いつの世だつて声がデカイヤツは排斥されると相場が決

まってるんだ お前のレース見せて鼻明かしてやりやあ良いだろ？」

「み、ミノル兄さん…ありがとうよ」

元・覇生流の仲の良さを見て心が温まっていた熹一であったが一つ気になる事を感じ、イナリに質問する事にした。

「そーいや、イナリ お前の『狐面』やが…覇生を抜けたならいつまで付けてんのや？」

正直あんまエエ思ひ出無いやろ」

「あん？ この面は覇生のじゃねえやい あたしが小さい頃に今世話になつてる梶原の…姐さんと坊ぼんと夏祭り行つた時に買つて貰つた『思い出の品』さ 今じゃサイズが合わねえんで、衣装に取り入れてるんだよ」

「子供の頃の思ひ出つちゆうヤツか…分かるで ウチもオグリと初めて『かけっこ』した時のシューズは未だに捨てられへんからな」

「ワシも同じや 親父おとんがワシの為に用意してくれた『パワーちゃん1号』も…：久々に神戸の倉庫から引つ張り出すか」

「いやっ！ この流れで明らかに大事にしてない物挙げるとか空気読めて無さすぎだろうがっ!! ミノル兄さん、ホントにキー坊コイッ大丈夫なのかいっ!？」

「…まあ、杜撰なのは『強さ』とはあまり関係無いしな 話に聞いた限りじゃ、血の繋がった幽玄の当主も世界中フラフラしてたつて言うし…：案外、適当な方が良い時もある

機械のチカラ

快晴の空の下、平日で貸し切り状態となっていた運動場のグラウンドにて「オグリキヤップ」は降り注ぐ太陽にも負けず、とびきりの笑顔でとある相手との「駆けっこ」に興じていた。

その相手とは――

「ふう……また私が勝ってしまったぞ、
「デゴイチ」 本気を出せば私よりも早いんだから
気遣いなんて無用だからな」

「ワンツ！」

「何だ？ 走るよりも遊びたいのか？ いいぞ、来いっ!!」

「バウツ！」

オグリの声に応えるように嬉しそうな鳴き声を上げ、デゴイチと呼ばれた「犬」は彼女に駆け寄る。

しかし、デゴイチは通常の犬では考えられない速度で、あわやオグリの身体を「貫こう」かとも言わんばかりの勢いで向かって行ったのだが……まるで彼女の身体が「幽霊のように」すり抜けた事に驚き、辺りを見回した。

「!? (キョロキョロ)」

「こら、デゴイチ! いくら私がウマ娘だからって今のは勢いが付き過ぎだ! 幽玄のみんなから“かわし”を習っていないかったら今頃、大変な事になっていたぞ!!」

「…クウーン」

「うん、反省しているなら良いんだ デゴイチは“AI犬”だからな…最近まで“大変な場所”に居たんだし、力加減もまだまだ練習中なんだからそこまで落ち込む事は無いぞ」

「! ワフツ!!」

かつては“最新の軍事兵器”として身体の殆どを機械に置き換えられた軍用犬『D-51』、通称“デゴイチ”は悲しそうに顔を伏せていたがオグリの『気にしていない』という態度を敏感に感じ取り、今度は“普通”の速度で彼女の身体に向かつて行った。

「…ははは! そうだデゴイチ、“それ位”の強さなら大丈夫だ…こ、こら! 顔を舐めるな! くすぐりたいだろ」

「バウツ! ワウツ!」

そんな元・軍用犬と少女との触れ合いを少し離れた所で『引き気味』と『微笑ましそくに』という、各々が真逆の感想を抱いて眺める“二人”の姿があった。

「あの…“尊鷹”さん デゴイチちゃん、ですか? あの子が軍用犬って話は私も聞いて

てたんですけど……何て言うか、〝凄^い〟ですな

「そうだな、〝ベルノ〟君 私もこの〝義^{メカ・フット}足〟を手掛けた男に改造を施されたという話は聞いていたが、我々武術家では太刀打ち出来ない程の戦闘力を持っている事はその目で確認している」

本日、オグリの外出に付き合う事となった彼女の親友であるベルノライトと叔父である宮沢尊鷹が備え付けのベンチに腰掛けてデゴイチの感想を言い合っていた。

「熹一さん達よりも強いワンちゃんかあ……つて尊鷹さん！ 何で義足を外して会話してるんですか!？」

「いや、年頃の娘さんの前で申し訳ないな 最近、〝脚の調子〟が悪くなつてしまつて小まめにメンテナンスはしているのだが……そろそろ、限界の様だな」

ベルノの指摘通り尊鷹は自身の左足を取り外し、何処から出したか工具や油を使つてのメンテナンスを行っていたが付け直しても本人の納得が行く調子では無かつたらしく、不満気な様子を見せている。

「……私も中央に行つてから聞いたんですけど、尊鷹さんつて〝元・理事長〟さん何ですよね？ 左脚もその時に……?」

「いや、脚に關しては中央に入つて初めて担当した娘が『移植が必要になつた』という話が出て私が立候補したからだな 『彼女』の辛そうな顔をこれ以上見たくない』と言

う個人的な理由であつたが……私も活法を施し、担当した医者腕も良かったのだろうな……その後は問題なく過ごせているよ」

「……性別も種族も違うのにそんな事が出来るなんて、凄い話ですね」

「勿論、丸々取り換える訳ではなく、韌帯や諸々を部分的に交換したという物であつたし、私の脚もフールコン・フット 腿と呼ばれる特殊な物であつたからなのだが……それでも十分無茶ではあつたし、成功したのは正しく、奇跡」としか言いようが無い」

オグリの事を語る以外での人間味が薄い尊鷹が見せた『憂いと喜びの感情』にベルノは静かに息を飲んだ。

「その後が少々面倒でな、私は変わらずトレーナーとして活動したかつたのだが、理事が突然引退する事になつたので他に候補もおらず『彼女』を育て上げ、復活させた実績を持つ』という理由で一部の者から白羽の矢を立てられてしまつたのだ」

「……あれ？ でも、経歴を見ると理事になつた後も何人か担当はされてましたよね？」

「そうだな 『片足だから』や『理事になつたから』という理由など私を縛り付ける理由にはならない、雑務の殆どは私の秘書になつてくれた『彼女』に任せて私は私の心の赴くまま、好きにやらせて貰つたよ」

そう言つて朗らかに笑う尊鷹にベルノは遠い目をする……

「何と言うか……本当に尊鷹さんつてオグリちゃんが言つていた通り『自由』を愛して

いる人』なんですネ」

「ふっ…済まないが、褒められても何も出せないぞ…いや、待てよ？ ベルノ君は確かスポーツ用品に関しての造詣が深いとオグリや熹一から聞いたが…本当かな？」

「えっ!? そ、それは…普通の人と比べればって程度ですけど…」

『いえ、褒めてる訳ではありませんが』という思考に耽つていたベルノは尊鷹に振られた突然の質問に意識を戻し、慌てて質問に答える。

「何…今日は脚のメンテナンスに向くつもりであつたし、丁度良いと思つてな 私の脚やデゴイチの製作者である『ゴア博士』を君に紹介しようと思つたんだ」

「えーつと…お話の所々から察するに『軍事関係者』の方なんですよね？ 本当に私がお会いして大丈夫なんでしょうか…？」

「問題は無いだろう 彼が在籍していたエリア52研究所は国の証拠隠滅の為に爆破され、彼自身も国の裏側に関わつてしまつたお尋ね者…つまり、私と同じく『フリーな立場』という訳だな』

「いえいえ、問題あり過ぎますよ!! 私みたいな一般人が会つて良い存在じゃないですって!!」

「我々、宮沢家の者が国に殴り込んで諸々の『話し合い』は済んでいるからな むしろ国に代わつて我々が彼の問題行動を監視している立場なんだ ベルノ君に何かあれば

即座に「対処」する事を約束しよう」

「……………そこまで尊鷹さんが仰るのであれば」

拾った『対処』というワードに物騒な物を感じ、心から『行きたくないんですが…』という思いはあるも、同時に『これ程のすごい技術を持つてる人に会いたい』という思いも芽生えていたベルノは尊鷹の誘いに渋々といった様子で了承したのだった。

「いや、本当に安心してくれて構わないぞ 彼が医療用に制作した人型ロボットである「トダー」も私の妹である由美子の所に居るが問題無く同居していると聞いたし、同じく世話になってるデゴイチもオグリや龍星達に懐いているから一般人に危害は加えていないからな」

「す、凄いですね…宮沢家って でも、デゴイチちゃんは何でオグリちゃん達に懐いてるんですか?」

「それはデゴイチの「これまでの経歴」が関係しているのだが…オグリに関しては「見ての通り」さ」

そう言つて尊鷹はデゴイチと戯れるオグリに視線を向け、ベルノもそれに倣つた。

「よしつ、デゴイチ! 次はボール投げだ! それっ!!」

「ダダダッ)…:ワウツ!」

「ボールが地面に付く遙か前に先回りしてのキャッチとはやるな…:ボールも傷付いてい

ないし、合格だ！」

「ハツハツハツ…ワフツ!!」

「あつ…なるほど、分かりました」

「オグリの真つ直ぐぶつかつて来る『親愛』はデゴイチにとつても心地良いのだろうあの姿を見て『数多の戦場を渡り歩いた軍用犬だ』等と思う人間はいないだろうな」

その後、二人は遊んでいたオグリ達に声を掛けると皆で『脚とデゴイチのメンテ』、そして『ベルノの社会見学』の為にゴア博士の居る隠れ家研究所へと向かったのであった。

オマケ

都内、ゴア博士の隠れ家研究所——

「フオフオフオ Mr. 尊鷹…そろそろ来る頃だと思つたよ」

「流石に『製作者』ともなれば私が訪ねるタイムミングもお見通しか…脚のメンテナンスを頼むぞ、『ゴア博士』」

「久しぶりだな博士…今日は龍星達の代わりに私が来た デゴイチの定期診察も頼む」
「フオ! これは珍しい、オグリキャップじゃないか!? 相変わらざるの底知れぬ可能性を秘めた素晴らしい肉体だ! 君が良ければで良いんだが採血の一つでも……」

見た目は小柄な老人ながらも全身をほぼ機械で置換した見るからに『マッドサイエン

テイスト』と言つた風貌の『ゴア博士』はオグリを見るなり興奮した様子で彼女に駆け寄るも、それを阻んだのは尊鷹とデゴイチの一人と一匹であつた。

「グルルルウ……！」

「気が合つたな、デゴイチ　ゴア博士よ……オグリの^{私の}姪に手を出すのであれば、今此処に居る我々だけではなく鬼龍を含めた『灘の一族』全員を敵に回す事を忘れたのか？」

「い、いやっ！　ジョーク……ジョークさ!!　イヤだなあ……彼女にあるのはあくまで『一流のウマ娘のアスリート』としての学術的興味つてだけで邪な気持ちは無いんだ　ホントだよ？」

「尊鷹おじさん、私は別に構わないぞ？　健康診断みたいな物なんだろう？」

「いや、駄目だ　あくまでゴア博士に協力するのは『監視』の意味も込められている　実験動物扱ひされるのは恩義を受けた私達『灘の男達』だけで良い」

「……実験動物とは心外だね、君達程の優れた人材を私は知らないんだ　助けて貰つた借りもあるんだし、君達が嫌がる事は決してしないよ……でもさ」

そう言つてゴア博士は彼にとつて初めて出会うベルノライトに目を向ける。

「『彼女』はどういう意図で連れて来たんだい？　自分で言うのも何だが、私も『まともな人間』じゃない　一般人と会つても恐怖こそすれ、興味を持つてくれるとは思えないんだがね」

「ああ、それなんだが今回ベルノ君を連れて来たのは……」

尊鷹が言葉を言い終える前にこれまで辺りを見回した後、終始無言だったベルノは普段では考えられないスピードでゴア博士に近づき、その手を取る。

「凄い…凄いですっ!! その機械の手足、触ってみて分かりましたけど肌へのダメージが掛からないようにコーティングされてるし、動作への負担が体に来ない衝撃吸収の処置も施されてるっ!! 周りに並べられた靴にしても履く人種を考えて様々な種類を取り揃えてるし、掛けてある中敷きも見えた事が無い素材ばかりです!! ゴア博士!! 靴にはお詳しいんですか!」

「あ、ああ…如何せん個人で工房を営む事になった以上、一番の儲け頭は『ウマ娘関連の品』だからね…昔取った杵柄から、オーダーメイドで靴を作って生計を立てさせて貰ってるよ…」

「いえっ! どれもこれも履く人の事を考え抜かれた素晴らしい品ばかり見れて…私、本当に嬉しいです! 尊鷹さん、今日は連れて来て下さりありがとうございます! たっ!!」

「……尊鷹、彼女は一体?」

「オグリの友人だが…ベルノ君であればこの『靴工房』を気に入ると思つた私の考えに間違いは無かつた様だな」

「あんなに嬉しそうなベルノは滅多に見れないんだ　尊鷹おじさん、私からもお礼を言わせてくれ」

「バウツ！」

こうして本日、ゴア博士が営んでいる工房に常連としてベルノが加わったのであった。

オマケのオマケ

都内、灘真影流の施術院――

「由美子さん……また腰痛めちまつて、施術でも……うわっ!？」

「イラッシャイ」

「あら、北原さん久しぶりやねえ　『戸田亜』にビックリしたのん？」

「いや、戸田亜つて……『人型ロボット』ですよね!？」

「少し前に兄から送られて来てねえ　『医療用だから仕事を手伝わせてやってくれ』って言われたんで任せてみれば……気が利くエエ子でね、今では『宮沢戸田亜』として立派な我が家の一員なんよ」

「……何か、目の前にロボットが居るって変な感じですね」

「細カイコトハ気ニスルナ」

「こら、戸田亜！ お客さんに何て口聞くんや!!」

「済マナイ、ユミコ」

「まあ…取り敢えず、施術お願いします」

その後、北原種は全快した己の腰を擦りながら釈然としない気持ちを抱えたまま帰路に付いたのであった。

由美子叔母さんに会おう！

「オグリ、キー坊、よう来たね 待ったヨ」

「由美子おばちゃん、お邪魔します 元気そうで何よりやな」

「この前はデゴイチの散歩を任せてくれてありがとう、由美子おばさん これはお母さんが作った焼き菓子だが『宜しければ皆さんどうぞ』だそうだ」

「あらっ、これは嬉しいわあ！ 優希と龍星もオグリのお母さんが作った物は大好きやからねえ…今はデゴイチと散歩に行つとる二人が帰つたら有難く頂くわ」

「おばさん お母さんの料理を褒めてくれるのは嬉しいんだが、私もおばさんの作つてくれたお団子や草餅が大好きなんだぞ」

「はははっ！ ほんに、オグリは、おねだり上手」やねえ！ お土産にでも渡そ思うとつたけど、今から用意するさかい待つとつてな？」

都内に構える整体道場兼、灘真影流の支部の管理を任された宮沢家の長女である、宮沢由美子^{モリ}の家にオグリキャップと宮沢熹一が来訪し、現在はリビングに腰を落ち着けていた。

「つたく、オグリ…来て早々に食い物催促^{モン}すんのはやめえや おばちゃんもエエんやで

? オグリのワガママに応えんでも」

「何を言ってるんだ、キー坊 私に催促した覚えはないぞ でも…おばさんが用意してくれるというなら喜んで頂くつもりだ」

「せやで、キー坊 アタシもオグリが可愛い事言うんでついついあげてまうんよ さて…お菓子はこつちで用意するとして、お茶の方は…」

「用意デキテルゾ、ユミコ キーボー、オグリノ分ダ 熱イカラ氣ヲ付ケロ」

最近になつて宮沢家の一員となつた医療用入型ロボット「トダー」こと「宮沢戸田亜」が現れ、淹れたお茶をオグリと熹一の前に用意した。

「ありがとう、戸田亜 ゴクツ」 うん…丁度良い熱さだな」

「ズズツ)……確かに美味いが、由美子おばちゃん 何や、「ゴイツ」 エライ馴染んどるのオ」

「鷹兄イがフラつと来て置いて行つたつちゆう出会いやつたけど、支部道場こつちも参加者が増えて忙しゆうなつとつたし有難い助つ人よ 「日向ぼっこ」で充電いらすやしね」

「オグリ ソノ団子ハカロリー低メニ作ツテイルガ、オ前ノ摂取量ハ「異常値」ヲ超エテイル 食べ過ギニ注意シロ」

「モグモグ)……むっ!? そうなのかな? なら、帰りは長めにランニングをする事にしよう」

「…まあ、『デリカシーが無い』所は流石ロボットや思うとるけどね」

「分かるわ…ワシが前に会った『別の』トダーもそんな感じやったしな」

「人型ロボット」と「ウマ娘」という不思議な組み合わせにすっかり慣れてしまった二人は生暖かい視線で見守っていたのだが、熹一が本来の来訪理由を思い出して由美子に話し掛ける。

「せやった、由美子おばちゃん 悪いんやが『コレ』見てくれへんか？」

「何や…道場生の本道場から支部こっちへの『異動願い』やないの」

「さっきの会話でも『忙しゆうなつた』って話になつたつちゆうに申し訳ないんやが、一人でエエンや 預かってやってくれへんか？ 出来れば住み込みでな」

熹一に差し出された道場生のプロフィールは以前、彼がメキシコで身柄を引き取って日本でオグリのセラピーを受けた年若いウマ娘の物であった。

「アタシは別に構わへんけど、わざわざこんな形式で頼む辺りキー坊も『大人になつた』思えて嬉しいもんやねえ…」

「おばちゃん…ワシだつてもうエエ年なんや 仮にも『経営者』としてそこら辺はしつかりせなアカンと思うとんのやで？」

「…それもあるんやけどね キー坊がそう思えとるのもきつと『お母さんやオグリの為』なんやろ？ 静虎トラやおジイちゃんに育てられただけなら、もつと『粗忽者』になつとつ

た筈やかからな」

「なんや、否定できんのオ……確かにワシも親父が鬼龍に一時的に廃人にされた時、鬼龍への恨みよりも真つ先に『親父に代わつてワシが』オグリとお袋を守らなアカン』つて気持ちの方が強かつたわ まあ……結局、ワシの方が二人に『心を』守られてたんやけどな」

「……鬼龍の件もそうやね 何時までも悪ガキみたいに人様に迷惑を掛けとる鬼龍やアタシ達家族には優しかつたけど、心のどこかでずつと『自由に生きたかつた』思いが透けとつた鷹兄イを一つに纏め上げたのは間違いない、あの二人のお蔭や 静虎と家族になつてくれてホンマに感謝しとるんヨ……」

「噛み締めるようにオグリとその母への想いを語る由美子に熹一の視界は気付くとぼやけており」、それを誤魔化すように天井を見上げた。

「あ……なんや、おぼちゃん 最新型のロボットや若いモンと同居しとんに電灯を含めて内装のセンスが軒並み昭和やで? 忙しさに比例した蓄えもあるし、そろそろ改装したらどうや?」

「アタシは『こういうの』が気に入るとし、今のままでエエんヨ そんな事よりキー坊、今度支部に来る娘っ子は何で異動になったのか聞かせてくれんか?」

熹一が天井を見上げて少しだけ皮肉気に話す言葉の意図を理解していた由美子は

それ〃に気付かない素振りを見せて甥っ子に話題の変更を勧める。

「……おうつ、この子の事なんやが外国で出会った時に身寄りを失つとつてな　〃住んでた所の治安が悪い〃のと　〃年も若すぎる〃　つちゆうんでワシ等の責任で本道場に連れ帰ったが、心が弱つとつてのオ：帰国する時にオグリのレースを観せたら元氣出た様で、本人に会わせたら大分喜んでくれたんや」

「そら良かったねえ　オグリの走る姿はホンマ元氣を貰えるさかい」

「いや、聞いてくれやおぼちゃん　ソイツがとんだ　〃じゃじゃウマ娘〃でな！　元氣になつたら勝気な性格が前に出て『オグリのレースがテレビでしか観れないこんな山奥イヤー！』とか言うんやでっ!？」

「…随分と日本語が上手な子なんやね、アタシも　〃外国人〃や思て少しだけ身構えとつたんヨ」

「ああ、親が日系人だったらしくてな…つてそれはエエ　挙句ワシに『キーボーともあんまり会えないなんて『約束』と違うよ!』なんて言われたら…:コツチも近場に連れて来るしかない思うたんや」

そう言つて頭を抱える熹一に　〃氣になるワード〃を拾った由美子は疑問を投げかけた。

「なんよ、アンタ『約束』つて…　〃また〃女の子に『勘違いさせる様な事』言つたんやな

「いやろな?」

「いやいや、おばちゃん… “また” も “勘違い” も意味わからんって… “ただワシはあの娘が『オグリみたいな立派な選手になりたい』言うから『全力で応援したる』” って言うたんじや」

「… “成程、そら言い方悪いけどあんな “秘境” で身体鍛えとる生活ばつかしとんのがやったら『騙された』 思うのも仕方ないやろな」

「… あの娘も別に本道場の事を嫌つとるワケやないし、むしろ『新しい家族』や思つて好いとる位や。 しゃあけど、自分の “夢” への道筋がまるで見えん事に日々苛立つてんのも事実でのオ…」

「分かつたわ。 そう言う事情なら “アタシ達” も協力したろやないの」

事情を聞き終えた由美子は胸を叩き、笑顔で新たな同居人への受け入れを快諾した。

「ホンマかつ!? イヤ、おばちゃん助かるわ… 真つ先に神戸の支部を考えてたんやが、親父もハイパー・バトル以降に “仕事” の依頼が増えて道場を空ける事が多くなつたんで、お袋にこれ以上負担掛けんのも忍びなかつたんや」

「… 静虎も昔つから “本気で困つとる人” の頼みは無下にできん子やったからねえ。 ても、あんなエエ女性をこれ以上ほつたらかす様ならアタシの方からガツンと言つとくヨ」

「そらエエわっ！ そんな時は頼むで、由美子おばちゃん!!」
 「なんだ？ 二人とも話は終わったのか？」

用意されたお菓子を食べ終えて戸田亜と談笑していたオグリは熹一と由美子が穏やかな雰囲気になった事を察して会話に入ってくる。

「済まない…二人が真面目に話をしていた物だからどうしようかと思っていたら、戸田亜に話し相手になって貰ってたんだ」

「二人トモ オグリガ寂シソウニシテイタゾ」

「おや、悪かったねえ…オグリ」

「せやな 『あの娘』の受け入れ話はおばちゃんが了承してくれたんでこれで終いや」

「そうだったのか、それは良かった」

「キーボー、目尻二泣イタ跡ガアルゾ 何ガアツタ？」

「うるさい、ほっとけ！ オグリ、気にせんとお袋おかんに『話は終わった』つちゆう連絡せいで!!」

先程の涙の痕跡を戸田亜にデリカシーなく指摘され、顔を真っ赤にした熹一はオグリに実家への連絡を催促し、オグリは頭に疑問符を浮かべながらも指示通り携帯を取り出した。

「？ ああ、キー坊が大丈夫なら良いんだが…：…待ってくれ、お母さんからLINEが来

ていた」

「なんや? 帰りになんぞ『足りない物でも買つて来い』とかか?」

「……『突然だけど今から静虎さん、尊鷹さんと中国へ行く事になったけど二人ともお土産は何が良い?』だそうだ」

「!? 何があつたんや!?!」

「どうやら、要約すると……お父さんが急に『仮面を付けた集団』に襲われたから事情を聞くと、以前の仕事で中国の武術集団から恨みを買ったので『話を付けに行こう』という事になり、お母さんにも護衛が必要になったんだが……たまたま居合わせた尊鷹おじさんが『折角だから夫婦水入らずで旅行がてらに一緒に行くと良い、私が護衛に付こう』という話になってしまった……と、言う事らしいな」

オグリからの説明を聞いた熹一は目を覆い、頭の奥から来る鈍痛に耐えていた……。

「アカン……『ツツコミ所』が多すぎて頭が追い付かんわ」

「……鷹兄イなりに二人の仲を心配しての提案なんやろうけど、世界中回つてからなやもう『自由さ』が更に上がつとる気がするわ」

「いやいや、由美子おばちゃん……あのオツサン、自分で『夫婦水入らず』言うてんのに『一緒に行く』のがホンマ訳分からんぞ」

「でもキー坊 尊鷹おじさんなら二人が気にしないように『空気に溶け込む』くらいの

事はやりそうだぞ」

「オグリはオグリで尊鷹を何やと……いや、確かにソレ位やつても不思議やないなあ
の妖怪”は……」

“偉大なる長兄、宮沢尊鷹”に対して各々の思いを巡らせていた三人であつたが、空
気変えるように由美子が手を打ち、熹一とオグリに提案する。

「よしっ！ 今日には二人ともアタシちん家に泊まりい」

「えっ！ 良いのか由美子おばさん」

「こうなつたら、しゃあないわ “今日持ち込んだ話”もキー坊あの子等から同居人に直接説明
した方がエエやろ」

「……そうさせて貰うわ 悪いのオ、おばちゃん」

「それに今度来る子が “選手志望”なら丁度エエ子もおるしな なんせ……」

由美子が言葉を言い終える前に玄関が開く音が聞こえ、現在の同居人である “長岡龍
星”と “小倉優希”が買い物袋を片手に下げて “デゴイチ”と共に帰つて来た。

「ただいま、由美子さん デゴイチの散歩と夕食の買い出し終わりました」

「ただいまー！ ほらデゴイチ、足拭いてから上がつてね」

「ワンツッ！」

「お帰り二人とも、お邪魔させて貰つてるぞ」

「えっ!? オグリさん!? 熹一さんまで!!」

「うわあ、珍しい! 最近は良く支部こつちに来てくれるね」

「バウツ! ワウツ!」

驚く二人を他所に気配に気付いていたデゴイチは『よく来たな』と言わんばかりの嬉しそうな鳴き声を上げてオグリに駆け寄って行き、彼女から撫でられる手を気持ちよさそうに受け入れていた。

「せやった、龍星……お前サラつと『中央の資格』持つとつたな」

「え? いきなり何ですか、熹一さん 確かにこの前、そこそこ苦労して資格は取りましたけど……腹違いとは言え、弟の姫次が取っていて俺が取ってないのは悔しかったですからね」

「まだ十代やつちゆうに『鬼龍の子供』はどいつもこいつも頭エエのオ しかも取った理由が『弟への対抗心』なんやから大したモンや」

「いえ……別にそれだけじゃないですよ 人間の可能性を知れる『武術の探求』への興味は失われていませんが、それと同じ位『ウマ娘の不思議』にも興味を惹かれます 『人間とは違う彼女たちの力の源とは?』とか『相性の良いトレーナーとの『絆』で引き上げられる潜在能力ポテンシャルの謎とは?』なんて解明出来たら両者の可能性を広げる事が出来るんじゃないかとワクワクしますよ!」

熱弁する龍星を横目に熹一は『色々理屈を捏ね回しとるが、中央の“資格を取った一番の理由はオグリの近くに居れるからやろがい』という思いを感じていた物の、今回は“お願ひする立場”である事を意識して口には出さなかつた。

「…しゃあけど、姫次といい龍星お前といい見た目のインパクトが強すぎやろ　中央は良く受け入れたと思うわ」

「いやいや、今の理事長さんも幼いながらも尊鷹さんみたいに懐広いらしいし、そもそも鬼龍アイツを受け入れてる時点でそこに突つ込むのも野暮じゃない？」

「ゆ、優希ちゃん…それ、フロローなの？」

「ルーサー、細カイ事ハ気ニスルナ」

「ハハハ…ありがとう、戸田亜…あつ、熹一さん　戸田亜で思い出したんですけど、今度中央で『“トダーシリーズ”が何体か配備される』って話聞いてますか？」

突如、龍星から語られる衝撃的な話題に熹一は『AIの反乱』というワードが頭をよぎり、思わず聞き返してしまった。

「は!?!　何やその“トダーシリーズ”って、ワシは知らんぞ!?!」

「いえ、この前…理事長の秋川やよいちゃんと秘書の駿川たづなさんが支部ここに訪問に来たんですが、戸田亜を一目見て『驚愕!　技術革新を感じる!』と感動したらしく、前理事長である尊鷹さんを経由して“製作者込み”で中央へ来る事になったんですよ」

「…オイオイ、製作者” 言うのはアレか?」

「ハイ…『ゴア博士』です どうやらサポート科の技術顧問に収まる様で鬼龍も『俺が目を光らせておいてやる』とか言ってますけど、正直期待なんか欠片もしてないので俺も監視に回る事にします」

「…分かった 中央寄つたらワシも気を付けるし、親父おとんが中国から帰つて来たら伝えとくわ」

「えっ? 静虎さん、今海外なんですか?」

龍星の疑問に答えるように鍋を鳴らした由美子が現れ、本日の予定を説明する。

「今日から静虎トラと奥さんは『旅行中』やからキー坊とオグリはお泊りヨ 夕飯と布団の準備手伝つてな」

「ええ!? そ、そうだったんですね……」

「そういう事になったんで、今日はよろしゅう頼むわ 礼の一つに組み手位なら付き合つたるで」

「本当ですか!? 是非、お願いします!!」

「おうっ! お勉強ばっかで腕が鈍ってへんか確かめたるわ」

「オグリがこつちで泊りなんて初めてじゃない? 今日は朝まで話そっか」

「うん 優希とデゴイチ、それに由美子おばさんとも沢山話したいと私も思ってたんだ」

「ワンッ！」

手伝いの要請をしたというのに親戚同士の集まり特有の高揚感で一向に動く気のない「子供達」に由美子はため息を一つ吐くも……

「ユミコ、布団ノ準備ヲシテクルゾ」

「はいヨ、よろしくな戸田亜」

賑やかになった家の雰囲気は満足し、笑顔で夕食の準備に取り掛かるのであった。

八重桜と金髪猿

当時の私は未熟で——いや、今の私も決して立派であるとは考えていないが、それでも：“昔の自分”は己が心の奥に抱えた“火”を制御できていなかったという自覚がある。

“あの日”の私もウマ娘という身の上で『武術を習っているのはズルい』という話から始まり、実家の道場を愚弄された事によつて頭に血が上つてしまい、発言者達を“打ち据えて”しまった。

己が手に残る“昏い高揚感”と“衝動を抑えられぬ罪悪感”が発言者達から奪つたバットの冷たさに呼応するかのようになつて、私と私の心を蝕みながら川沿いを通つて帰路に就いていた時であつた、“彼”に出逢つたのは——

「なんや、こんな所にポロポロのウマ娘が居るやんケ　バットなんぞ持つて危ないのオ」
「……誰だよ、アンタ？」

“彼”は当時高校生であつたが平均より小柄な体格をしており、金髪に染め上げられた頭も相まって私からすれば『金色の猿』の様な印象を受けた。

「おうっ！　ワシは今、家族と東京観光しとる身やが……まあ、なんや『傷心中』言えばエ

エんかのオ……一人でブラブラしたかったんじゃ」

「…アンタがどこから来たのかなんて知らないし、興味もない　私に話し掛けるな、ブン殴られたいのか？」

「ホンマに血の気が多い娘つ子やな…拳句に歩き方からして『武術』も齧つとんのやろ？　ガス抜きしたいなら手伝つたるわ」

「オイ、『人間がウマ娘の相手になる』とか本気で考えてるワケじゃないよな？」

「生憎やが…ワシも最近『プロレスラー』、『ムエタイ選手』に負け続きでフラストレーション溜まつとんじやい　そんな時に人間、ウマ娘関係なく『武術を間違つた使い方しとるヤツ』見るとカッチーン来るねん」

そう言つて彼は私の前に立ち、見覚えの無い『武術の構え』を見せた。

当時の私は彼が己の地雷を踏み抜いた発言をした事と、曲がりなりにも武術家であった事に『殴つても良い相手』だと認識し、持っていたバットを投げ捨てて同様に構えを取る。

「なんや…得物バットなら使つてもエエぞ」

「バットレは私に殴り掛かつて来たヤツ等から没収しただけだ　それに…『武器を持つてると持ち手だけに意識が集中する』つて私の道場の師範代が言つてた」

「しつかりとした『実践派』の考え教えられとるやん…うっし！　来いやあ!!」

笑顔の彼からの誘いに私も釣られて頬が緩み、『純粋な闘争心』が己を包み込んだ事を自覚してその感情のまま彼へと挑んだのだった。

その結果だが――

「ピタツ）っ!? “寸止め”……? いや、今“どこから”打ち込んだ!?”

「お嬢ちゃんは自分が打ち込む時、拳や蹴りに意識が集中しすぎや せやから “意識外の攻撃” なんて技術ワッザに引つ掛かる……ま、ワシの練度もまだまだやから、あんまエラそんな事言えへんけどな」

「で、でも……アンタは私の打ち込みを明らかに “見切つて” いたじゃないか!?”

「確かにエライ速い打撃やったが、武術家の打撃言うのは『来ると分かっても躲せない』まで練り上げた物モノが本領や 曲がりなりにも子供ガキの頃から親父おとんに食らいまくつとるワシからすれば嬢ちゃんのは “速さ” も “恐さ” も無いわ」

私の放つた拳や蹴りは彼の身体を当たるか当たらないかのギリギリで躲され、逆に彼の攻撃はその全てが “寸止め” されるといふ当時の……いや、現在の私にとつても屈辱的な結果となった。

「くっ……もう一本っ!!」

「やめとけやめとけ、ただでさえ嬢ちゃんは “身体が出来上がってない” からリーチが足り取らんのや これ以上ワシの動きに付き合うとなるとワシの “妹分” みたいな貧

相なボデイになりかねんで」

「余計なお世話だ！ アンタだつて十分 “チビ” だらつ!!」

「なつ!!? 人が気にしとる事指摘しよつて!! ワシの “妹” と違つて可愛げない娘つ子やのオ!!」

「アンタの妹なんて知つた事か!! 大体、私に指一本触れずに負けを認めさせようつていうのが傲慢なんだ!!」

「しゃーないやろ! 触つたら力が入らなくなる掴み方: “関節技” も解禁できるが、君みたいなカワイ子ちゃんにそんな事したらワシ “最低野郎” になつてまうやん!」

「はあつ!! 『カワイ子ちゃん』とかどれだけ私を愚弄するつもりだ!!」

その後も私は怒りが冷めやらず、彼に突つかかつて行つたが当の彼は苦笑を浮かべたままそれを捌くばかりで結局: 本当に私に対して指一本触れる事は無かつた。

「……疲れた」

「……同じくや けど、会つた時よりも随分と “エエ顔” になつたようやな?」

「はあつ? 何を言つてるんだ」

「お嬢ちゃんの打撃見て何となく思つたんや、『ワシと違つて “闘う事自体” はそんな好きでもない娘なんやろな』つてのオ: やっぱ、ウマ娘だけあつて “走る方” が好きか?」

彼からの突然の問いに面食らつた私であつたが、問いの意味を暫く考えた上で答えを

出す事にした。

「……私が暴力を振るってしまふのは自分の心の中にある『火』を制御出来ないからだでも、アンタの事は一発も殴れなかつたのに今は不思議と気分が良い……多分、私は『強い奴に挑む』のが楽しいんだと思う」

「はははっ！　『そこ』はワシと一緒やな！　だつたら、お嬢ちゃんの言う『火』つてヤツをどうやつたら丁度良く治められるんかのオ？」

「……実家の道場で武術を続けてみる　今日、『火』が漏れ出したのも実家の道場を馬鹿にされたからなんだ　なら、道場に迷惑を掛けないように敬遠してた『精神修行』つてヤツもやってみるよ」

「ワシも武術が好きって言うより『親父が好きで武術やから好き』でやつとるトコあるからのお……エエンやないか？　その気持ちがあればきつと『間違つた道』には進まんと思うで」

「そつか……今日はありがとう　えつと、名前は……」

「せやつたな、お互い名前も知らんと鬭り合つとつたんや　ワシの名前は……」

彼が名乗ろうとした直後、私達から離れた場所を彼を呼ぶ声が聞こえた。

「キー坊！　こんな所にいたのか!!　探したぞ!!」

「つたくよお！　妹と妹分を俺に押し付けて東京をブラブラしやがって、そんなにギヤ

ルアツドが故郷くにに帰ったのが寂しかったのか!」

「ウチのせつかくの東京観光に水差すマネすんなや、キー坊! 家族への土産物モノをヨツちやんだけに持たせとらんと、アンタも早よ来いっ!!」

「タマちゃんもオグリもウマ娘やつちゆうに荷物持ちになつてくれとんのやからヨツちゃんはホンマ、エエ男やねえ」

「ハハハ、由美子さん 可愛い二人が『土産物選ぶ』って言うならコレ位当たり前つすよ」
「どうやら彼の『知り合い』だった様で、その内の二人はウマ娘だった。」

後にその『二人のウマ娘』を私は強く意識する事になるのだが、当時の私はそんな事になるとは露知らず彼に關係を聞いていた。

「…あれがアンタの言つてた『妹』と『妹分』なのか?」

「おうっ! 残りの二人はワシの叔母ちゃんと親友ダチや!!」

「で、アンタが『キー坊』か…覚えた」

「皆はそう呼んでくれんのやが、ワシの本名…も別にエエかつ! どうせワシはこれから『ビッグな男』になるんやからな!! そんな時にでもテレビで知つてくれればエエわいっ!!」

「ふふっ…何だよソレ、変なの」

「イヤ、笑うなや…ほな、今日は『ワシの息抜き』にも付き合わせて悪かつたな!! 武

術やっとなら、また会えるやろ!!」

「あつ、待つて……」

私の最後の呼びかけは「仲間達」の元へ向かった彼の耳には届かず、去つて行く彼等の姿が遠ざかるのを見ながら伝えられなかつた言葉を漏らす。

「あの『金髪猿』……私の名前、聞き忘れてるじゃないか……」

——それから数年の時が経ち……現在は中央の選手となつた私こと『ヤエノムテキ』は僅かに震える手を師範代から教わつた呼吸法を持つて鎮め、己の目の前に立ちはだかる会議室のドアの向こうに居るであろう彼……『宮沢熹一』との再会に心を躍らせていた。

その後、彼の宣言通り『TDK』、『ハイパー・バトル』での活躍で宮沢熹一は世界に名を知られる格闘家となり、自身も新たな流派『灘・真・神影流』を興して現在は施術師としてこの中央に在籍する事になつたのだ。

今度、彼主催で行う武術家達の『他流派交流会』でも我が金剛八重垣流の参加が決定し、師範代だけではなく私も彼に挨拶をする運びとなつたのだが……駄目だ。

久しぶり再会で緊張してしまい、彼が本当にドアの向こうに居るのか不安になつたのでドアにウマ耳を付けて中の様子を探ろうという不躰な真似をしてしまった。

「…キーク坊、静虎さんよ このオグリの“クセ”をどう見る？」

「六平のオツチャン：アレやな 『相手の隙見つけたら一気呵成に攻める』所やろ？ 観客的にはかなり “オイシイ” 場面やが、上位陣からしてもコレはかなり “オイシイ” わ」

「…我々、武術家達と違つて人目に付くのが仕事である以上は相手から “研究” されるのは当たり前 今まではそれで結果を出せたからこそ “怪物” の異名を冠するに相応しい選手と評価されていますが、今後の事を考えれば……」

「その通りだ、オグリはレースも食事も同様に 『相手から出された物を残さず平らげる』 傾向にある つまり、相手によっては仕掛けを… “毒” を撒かれる可能性もあるつてワケだな」

「なんや、そういう表現なら大丈夫な氣いしてきたわ なんせオグリの胃腸ストマックはワシ等の比やない位頑丈タフやし、毒程度なら問題無く消化できるつて事やん」

「せやな、ワシや熹一は果し合いで毒を受けても “総身退毒印” で何とか闘えるがオグリはそれすら無く動けるやろうし…いや、念の為にオグリあの子にも習得させた方が……」

「やつぱり、お前等にレースの話振るのは駄目だな すぐに “物騒な話題” に持つて行きやがる……」

……居る。 “お父様” である宮沢静虎さんとお話しされているようだ。

もう一人の声は：以前、師範代に紹介されたから聞き覚えがあった彼の妹であるオグリキヤップの担当トレーナー：六平銀次郎さんの物で間違い無いだろう。

「いや、居るのが分かったからといって：緊張の度合いが益々上がってしまったぞオグリキヤップへの『果し合い』を無視されて『火』が漏れ出しそうになってしまう、相も変わらず未熟者である私がそもそもお会いして良い相手なのか……」

状況から考えて『会うのが礼儀』というのは理解しているのだが、昔の彼に対する『無礼極まりない態度』を思い出して羞恥に震え：思考が堂々巡りに陥ってしまった私がドアの前で悶々としてしていると――

「ガチャ）なんやもう、さつきからドアの前で聞き耳立てたりブツブツ言うたり：『敵か？』」

「――つ!？」

彼、宮沢熹一が未熟者である私の放つ気配に気付いていた様で胡乱気な表情を隠さず、に会議室のドアを開けて確認に来た為、私としては『声にならない叫び』を上げる他なかった……。

「どうやった、熹一？ 敵意は無かったから放っておいたが……」

「いや待て、静虎さん コイツは確か……」

未だにシヨックのあまり赤面して言葉が口に出ないという『醜態』を静虎さんと六

平さん…そして他ならぬ「彼」に見られている現状に私は更にパニックに陥ってしまった。

『もう、消えてしまいたい…』 最早そんな事を考えていた私に彼は、宮沢熹一は――

「おつ！ 懐かしいのオ!? 昔、ワシが「東京行った時」に会った嬢ちゃんやる？ すっかり身体も成長して顔も美人さんになったな！」

「…へっ？ ハイ!？」

「昔と変わらない」人懐こい笑顔を浮かべて私との再会を喜んでくれたのだった。

「あ…せやった、こういう事言うと今のご時勢「セクハラ」扱いされるんやったわ 悪いな嬢ちゃん……」

「ヤエノムテキ……」

「ん？」

「私の名前は「ヤエノムテキ」です!! 「嬢ちゃん」じゃありません!!」

そして、私はと言うと…『変わらぬ私という存在を受け入れてくれた』という安心感で当時からずつと心に引つ掛かっていた『私の自己紹介が出来ていない』という思いを礼儀も情緒もなく彼にぶつけてしまった…。

「お、おうっ…じゃあ、ヤエノちゃんてエエか？ しっかし、此処に居るいう事は「中央

の選手”か……ホンマ、立派になったな」

「いえ、私は未だに未熟者で……そう言う貴方の方が余程立派になられ……」

「キー坊や」

「えっ？」

「ヤエノちゃんこそ他人行儀に “貴方” とかやめてくれや ワシの呼び名は知つとるやろ？ “キー坊” やってな」

「……押忍っ！ 改めて宜しくお願ひしますっ!! キー坊!!」

「なんや、言葉遣いはエライ堅苦しくなったが……こつちこそ宜しく頼むわ、ヤエノちゃん」

結局、昔と変わらない不作法を晒してしまった事に対しての自己嫌悪はあったのだが……キー坊の見せてくれた昔と変わらない優しさに触れて、私の緊張は無事解かれる事となったのであった。

肉切包丁の黒い煌めき

「ヒヤハハっ！ 大量大量!! 笑いが止まんねえぜっ!!」

「…無駄にテンション高^{たけ}いな、オイ 〃運転中〃 だろうが…事故ンなよ?」

「気にすんなよ、〃ブラツキーエール〃! こんな良い気分で運転してんだ、俺が事故るなんてありえねえって」

「…ったく、〃姫次〃 アンタが〃人参掘り〃にそこまでご執心とはアタシも思わなかったよ」

現在、鬼龍の息子の一人である〃鬼塚姫次〃は愛車であるハマーを駆り、後部座席に積まれた大量の人参に大変ご満悦といった表情を見せていた。

そして、そんな彼の隣に腰掛けて冷めた視線を向けていたのは若くして中央トレーナー資格を持つ姫次の担当である〃ブラツキーエール〃、整った顔立ちに少しだけ粗暴な雰囲気^{ガキ}が滲むウマ娘である。

「イヤ、俺も子供^{ガキ}の頃に〃色々〃あつてよ こういうイベント行事ってロクに参加した覚えもねえから無駄にテンション上がっちゃった」

「〃色々〃ってなんだよ…ま、チビツ子共にビビられてしよげるアンタが見れたのは

正直、笑えたけどな」

「あの時はお前が笑顔でファンサービスしてくれたんで助かったわ やっぱ、中央の選手”ってのは何だかんだで愛想良いな 今日誘って正解だったぜ」

「休みだからって、いきなり『人参掘りに行こうぜ』なんて連絡来た時は『コイツ頭に変なモンでも湧き始めたか?』とか思ったが…まあ、アタシもイベント事は嫌いじゃねえし、たまにはこういうのも悪くなかったよ」

二人が本日の成果と感想を語り合っているとパーキングエリアが見えたので休憩の為に一旦駐車し、時間も昼を回っていたのでフードコートへ向かう事にした。

「そもそも、今更だがアタシと年もそう変わらないアンタが、”車持ち”ってのも変な感じだな ハマーなんて外車、中古でも結構すんだろ?」

「ああ、あの車は俺が子供の頃ガキにちよつかい掛けて来た子悪党が今度は親戚に手を出そうとしたんで…ボコった後に、”感謝料代わり”に貰ってやったんだ」

「オイオイオイ…随分と物騒な話じゃねエか」

「コイツは”親父の”…つーか、”血筋チネのサガ”だな 程度の差はあれ、普段温厚な人ですら身内に手を出したヤツは無性にブチのめしたくなるんだよ…ああ、何食う?」

「アタシも大概、『血の気が多い方』って自覚はあるが”マジモン”はやっぱ違うな…よくもまあ、中央はアンタを受け入れたモンだ……ん? 地方限定の肉まんがあるじゃ

ねエか、腹もあんまり減ってないしアレにすっか」

姫次から語られる物騒な話を最早、〃普段通りのやり取り〃として受け入れていたブラッキーは気にする素振りも無く、フードコート近くの看板に貼られていたメニューを物色する。

「じゃ、限定肉まん二つ頼むわ……いや、俺だって、まさか受かるなんて思ってたつーか……『試験の難易度が激ムズ』って聞いたから『なら、挑戦してみっか』程度の気持ちで受けただけっつーか……」

「冷やかし目的で受けて合格したンなら蹴っちまえば良かったのによオ、何でアタシっという担当が付くまで残ってたんだよ？」

「……そりやお前、俺も最初は『ガラじゃねえ』ってバツクレるつもりだったけどよお……ブラッキー、〃お前の走り〃を一目見て気に入っちゃったからだよ」

「ハア!? ンだよそれ!! アタシは初めて聞いたぞ!」

「何っつーか……人間って『いつ死んじまうか分かんねえ』だろ? 俺はいつもそんな事を考えて生きてるから、〃その時〃が来るまで『やりたい事は絶対やり切ってやろう』ってのが人生の最優先目標にしてんだよ」

「……それが『アタシの担当になる』って事かよ?」

「自分で言うのも何だが、俺はロクな人間じゃねえ……そんな人間でも〃キラキラしてる

物^{モノ}には憧れちまうんだ さっさとバックレようとした「あの日」、走ってるお前の姿が「他の誰よりも」輝いて見えて：担当トレーナーになりてえなつて申請書出しちゃった」

生まれつき心臓の疾患を持ち、明日とも知れない己の命の使い道を常に考え、どう言い繕つても『自分は一人の人間を死なせた』という罪悪感を抱え続けていた鬼塚姫次という人間は普段、人前で被っている「悪党ぶつた仮面」を外して担当であるブラッキーエールに本心を打ち明けていた。

それを受けた彼女の反応だが――

「……………あのよオ！ 姫次、アンタ「自己評価」低すぎンじゃねエか!?」

「えっ!? そ、そうかあ?」

「アンタがなに抱えて生きてンのかなんて知らねエし、聞く気もねエ!! アタシがアンタを担当と認めてんのは『鬼塚姫次は「凄いヤツ」』って思ってるからなんだよ!! 次はその評価を下げる様な舐めた事抜かしやがったら張つ倒すからなっ!!」

姫次を叱り飛ばし、更には胸倉を掴んで彼の目を真つ直ぐに見据えていた。

「アタシが知ってるアンタは『いつだってヘラヘラ笑ってる自己中野郎』なんだ! それ
が今のアンタ：「アタシが信頼してるトレーナー」なんだよっ!! シヤキつとしなっ
!!」

「……ヒヤハ、ヒヤハハハ!! そうだよなっ!! あー、悪い悪い…マジで、らしくねえ
 “事言つてたわ、忘れてくれよ”

「ハッ! あんな “面白い姿” 忘れたくても忘れられるかつての、せいぜいアタシの心
 のみで楽しんで貰うさ」

「ま、言い触らされるよりはマシかね…オイ、もし誰かに喋ったら次の “オグリキャップ
 対策” はお前だけで考えろよな」

「ああんっ! そういやアタシ、アタシが初めてオグリのヤツと勝負するって時に親戚
 だって事隠してやがったな!? アレはどういうつもりだ!!」

「ありやあ、『舐めてた田舎者に粟食わされるお前が見たかった』からに決まってるんじや
 ん」

「チツクシヨウ! その “憎々し気な所”、流石アタシのトレーナーだ!! 詫びとして
 肉まんの代金はアタシ持ちで勘弁してやるよ!!」

「その程度なら別に構わねえつての…つたく、こう見えて俺だって結構な金持ちなんだ
 ぜ? もつと高い物ねだれよな」

「バアカ、アタシ等の関係に “そんな” 持ち込んだら白けンだろ 相方と遠慮せず言
 いたい事言い合えンのが一番の贅沢って頭イイ癖に知らねエのかよ?」

そう言つてブラツキーが姫次に見せたのは普段、彼女がレース勝利後に数多くのフア

ンを魅了する“輝く笑顔”であった。

“それに『目を奪われた』とは気恥ずかしさを感じて言い出せなかつた姫次であったが、代わりに普段よりも素直な気持ちで自分の“愛バ”であるブラツキーエールに向き合う事にした。

「おー、これでも感謝してんだぜ 何時だつて“俺の世界”を広げてくれるお前の存在にはよー

「ハハッ！ だったら感謝の一つに飲み物モンも奢りな、喋つてたら喉渇いちまつたんでよおー

「お安い御用だ 代わりと言っちゃなんだが、帰りに静虎さん達の所に人参お裾分けするんで手伝つてくれや」

「アアン？ 静虎つて…“オグリの親父さん”の所かよ、別にアタシは構わねエゼ」

「あの人達にも子供の頃ガキから世話になつてるし、息子である宮沢熹一は俺の師匠だからな 両親に恩を売つとけば油断して今度の“師匠越え”の勝率も上がるかもと思つてよ」

「……んな事言つて、アンタがあの子さんにボコられて帰つて来んの何回目だア？ アタシが知つてる限りじゃ両手の指でも足ンねエぞ」

「ヒヤハハハ！ 毎回俺にトドメ刺さねえ、あの人が悪いんだよっ!! 現在、この世で最

強の男である『宮沢熹一を超えんのが』俺の武術家としての最優先目標なんだからなっ
!!」

「…つたく『勝手にやつてろ』って言いてえンだが、あの兄さんも中央に来てから今や
オグリのヤツに負けねエくらい『人気者』だ あんまちよつかい掛け過ぎてファンに
後ろから刺されンじゃねエぞ」

「安心しろよ 子供の頃の経験上、『後ろから刺される事』には常に警戒してんだ
なへマはやらねえつての」

「だから、アタシが言いてエのは…つてもういい さつさと食い物買つて車に戻ンぞ」
「お、おうつ…分かったぜ」

『いつの時代でも変わらぬであろう男のバ鹿さ加減』に呆れ果てたブラツキーは姫次
との会話を打ち切り、止めていた足を再び動かして本来の目的地であるフードコートへ
と向かう。

そんな『愛バ』の不機嫌そうな姿を見た姫次は慌てた様子で彼女の後を付いて行く
のであった…。

オマケ

「あらっ！ こんなに沢山の人参…いつも何かある度にお土産ありがとうね、姫次君」

「いや、いいっすよ 俺も今日は調子に乗って掘り過ぎただけなんで、奥さんが喜んでくれんなら持つて来て良かったっす」

「姫次：今日も家には寄つて行かないのか？ 普段から良くして貰っている以上は此方としても、もてなしの一つでもしたい所なのだが……」

「イヤイヤ、静虎さんも俺みたいな“超危険生物”に気い使う必要ねえって 今日だつて立ち寄つたのは単なる気紛れなんだからさ 今は担当も付き合わせてるし、さつさと帰るよ」

「そう：：なら、今度来る時はお腹を空かせて来なさい そつちのお嬢さんとまとめてお腹いっぱいにしてあげるから」

「“心ある人”から受けた恩に報いるのは人間として当然の事だ 中央で何か困つた事があつて煮一にも頼れない時は私の所に来なさい……力になろう」

「あー……：機会があれば”頼むわ じゃあ二人とも、またな”

笑顔で親愛の情を向けて来る宮沢夫妻に対し、曖昧な返事で濁すと逃げるようにハマーを走らせる姫次に隣に座つていた彼の“相方”は口を押さえて必死に笑いを堪えていた。

「ククククク……：何だよアレ！ 何が“超危険生物”だつっーの!! 照れて親戚とマトモに喋れねエただの“甥っ子”じゃねエかよ!!」

「うっせえ、うっせえ、うっせーっ!! あの人達、俺がどんなに悪ぶっても『分かつてるから』って態度崩さねえから苦手なんだよっ!!」

「ククク…で？ それでもちよくちよく通つてンのはあの人等の事が『好きだから』なんだろ？」

「ちげーって！ 来る前にも言った通り宮沢熹一を油断させる『罠』だつて言つてんだろっ!？」

「いや…そもそもアンタの髪型一つ取つても、あの兄さんへの『リスペクト』が隠せてねえし…:…どんだけ師匠の事が好きなんだよ」

「だーかーらっ！ ちげーって!! あんな『バ鹿強いだけの甘ちゃん』好きなワケねーだろうが!!」

「あー、笑つたわ…ま、どっちでもいいけどよオ、今は随分と『不機嫌』だし…:…事故ンなよ?」

「余計なお世話だ、ブラツキーエール！ 気分最悪で運転しようが、俺が事故るなんてありえねえって!!」

宮沢熹一 中央を歩く

現在、中央の施術師を務める宮沢熹一は“とある目的を持って”歩いてきた。

その目的に歩く必要性は無かった物の、臨時で参加している仕事であるとはいえ部屋で書類を書いてただ患者が来るのを待つという立ち位置は彼にとって苦痛でしかなく、空いた時間での日課のトレーニングを済ませると本格的に暇を持って余してしまったので周辺を回る“トラブル探し”の為の散歩であったのだが：驚く位に“平和そのもの”な学園の様子に落胆が三割、喜びが七割であった。

「何事も無いのが一番やがホンマ、ヒマやのオ……周りの子達も困つてる様子は無いよ
うやし、ボチボチ親父おとんも待つとる施術室に戻るか……」

周囲のウマ娘達は何やらソワソワした様子で『自分を見つめている事』には気付いていたが何の用も無く女学生の領域テリトリーに居る自身に『警戒』しているのだろう』と結論付け、居心地の悪さを感じ始めたのでその場を離れようとした時であった——

「あ、あのっ!! 宮沢さん……ですよね?」

「……おうっ、何やこの前ワシが足の施術した娘こか その後の調子はどうや?」

「はいっ! お陰様で今は何の問題ありません!! 本当にありがとうございましたっ

!!

「そうか…会った時と比べたら、すっかりエエ顔しとるで　ワシも力になれて嬉しいわ」
 「い、いえ…そんな　あの…宮沢さん？　今日は何で…」

「いや、ヒマなんで散歩がてらに辺りを歩いとったが、お嬢さん方を警戒させたようやな　さっさと退散するんで勘弁してくれや」

「あの…別に私達『警戒してた』ってワケじゃなくて…『気になった』だけっていうか
 ……」

「あー、デリカシー無い男でスマンのオ　ワシもこんなんやが、施術は本気でやるから気が向いたらでエエんでまた施術室に来たってや」

「あつ、ハイ……」

勇気を振り絞って話し掛けてくれたであろうウマ娘がそう言ってしよげる姿に『やっぱりのオ』という気持ち湧きあがり、背を向けてその場を後にする熹一であったが、後方からの『もつとお話したかったのに…』という声や『宮沢さんの“アレ”、どうしたんだろうね?』という声が彼の耳に入る事は無かった。

「…熹一さん、 “こんな所” でどうしたんですか?」

「ん…ベルノちゃんか?　何や、 “サポート科” の近くまで来とった様やな」

しばらく熹一が歩いていると呼びかけられたので振り返れば、其処には妹であるオグリキヤップの親友であるベルノライトが大荷物を抱えて立っているのを確認する。

「いや、『何かないか』とそこら辺ブラついたたんやが丁度エエわ　ベルノちゃん、荷物持つの手伝うで」

「い、いえっ！　お気持ちは嬉しいんですけど、熹一さん……『今の状態』だと、ちよつと私には『刺激が強い』と言いますか……」

「ん？　『今の状態』って何や？　まさか『ゴア博士』……あの爺さんにセクハラでもされて気分が参つとんのか!?　ならワシに相談せい、すぐにとつちめたるからな!!」

「いえいえっ!!　ゴア博士は立派にサポート科の技術顧問を務めていますし、私も時々ですがお手伝いさせて貰って充実しているので何の問題もないですよ!!」

「……ホンマか？　ベルノちゃんが言うんやったら信用するが、何かあつたら親父おとんやオグリでも良いから、ちゃんと打ち明けるんやで？　ベルノちゃんは溜め込むタイプやからのオ」

その言葉を言い終わるやいなや、熹一はベルノが抱えていた荷物を瞬時に己の手元に移動した。

「えっ……あれっ!!　いつの間に……」

「ま、取り敢えずは『手元に溜め込んだ物』から引き受けたるわ」

「そ、そんな…本当に大丈夫ですって！」

「ベルノちゃんも力のあるウマ娘であると同時に『女の子』やからな 男みたいな物、
『可愛い子の助けになる』のが好きなバ鹿な生き物モンなんやし、ワシの自己満足に付き合っ
てくれや」

「だから、熹一さん…『今の状態』でそういう事言うと『刺激が強い』んですってば……」
その後、ベルノと共にサポート科に向かい、研究に没頭していたゴア博士を一睨みし
て問題が無い事を確認すると熹一はその場を笑顔で後にしたのだった。

しばらくするとサポート科から聞こえる『ベルノ氏！ 誰ですかあの『イケメン』は
!?!』という叫び声には彼が遠くに去った後なので当然ながら気付かなかった。

所変わって此処は運動場の裏手側。

其処には神妙な顔をしたイナリワンとヤエノムテキが熹一の前に立っていた。

「オイオイ、本当に『大丈夫』なのかい…?」

「安心せエ、中央此処に来る時に書いた誓約書にある『ウマ娘関連で起きた事故は自己責
任』つちゆう箇所は確認しとるし、『万が一』があつてもワシがお前に迷惑を掛ける事
は何一つ言わんと約束したる」

「イヤ、あたしが気にしてんのはそういう事じゃねえんだが……」

「ええから早よ来いや、さつき試しに見た威力やったら何の問題も無いわ」

「……なんだい、その言い方だと『舐められてる』みたいで腹立つじゃねえか……後悔すんなよっ!？」
 “風当身”っ!! (ボツ!)」

熹一の挑発に当てられてイナリノの掌から放たれたのは覇生の秘儀“風当身”という名の衝撃波。

ウマ娘の力で放たれた“ソレ”は熹一の腹部を直撃するも彼が苦悶の表情を見せたのは一瞬のみでその後、技を放った形跡が残っていたのは“風に靡く彼が羽織っていた上着”のみであった。

「……やつぱりのオ 初めてミノルさんから受けたヤツよりも威力はあるが、『相手を殺る気概が無い』から腹に張つとつた“気膜”を抜けとらんわ」

「当ったり前だろうが! アンタが『あたしの風当身を受けてみたい』ってリクエストに応えてやっただけで、殺す気で打ち込むなんてバ鹿な真似誰がするもんかいっ!!」

「……そういう『相手への気遣い』が強すぎる娘が多いから“ウマ娘の格闘家”はそないおらんねんや 最近、辺りも物騒になって来たし……皆、お前位の護身術でも覚えてくれればエエンやけどな」

「……そういう事であればキー坊、“次”は私が」

「おうっ! ヤエノちゃん、来いや!!」

続いて熹一の前で構えを取ったヤエノは一気に距離を詰めて手足を自在に操り、
 つて“彼の前で見せた物とは別次元の動きで打撃を放つ。

しかし、熹一も常人であれば目視出来ない“ソレ”を紙一重で躲し、時には相手から放たれる打ち手を直前で読んで止めるという離れ業を彼女に対して見せた。

「ハアツ…ハアツ…ハアツ…押忍っ!! ありがとうございます!!」

「ホンマ…強くなつたなヤエノちゃん こんだけ強けりやそこら辺の野蛮人なんぞ相手にはならんわい」

「いえ…昔と変わらさずキー坊に一撃も入れる事が出来ない未熟な私なんて……」

「何、その“悔しそうな顔”出来とる内は人つてどこまでも強くなれるんやぞ なんや

『堅つ苦しい美人さんになつた』思つとつたが、相変わらず可愛げある娘で安心したわ」

「び、『美人』!? 『可愛い』!?」

「あー…昔は“コレ言つて怒らせたの忘れとつたわ スマン、今の無しで頼む”

「い、いえ! “今は”別に、気にしておりませんので……」

「あたしは今、一体何を見せられてんだい…?」

バツが悪そうに頭を掻く熹一と恥ずかしそうに頭を下げるヤエノを見てついそんな言葉が口から出るイナリであつたが、そんな三人に声を掛ける“二人組”が姿を現す。

「なんだア? こんな裏手でゴチャゴチャうっせエから“イジメ”かと思つて来てみれ

ばよオ……」

「キー坊…だよな？ ウマ娘二人も侍らせて何やってんだ？」

「悪かったのオ、ブラッキー…心配で見に来たんやろ？ 後『デイクタ』…『侍らす』なんぞ危ない言い方すなや、お前はワシをクビにしたいんか？」

ブラッキーエールが周囲を見回して熹一の言う通りトラブルの有無を確認しに来ており、彼女の友人であり熹一の施術を受けた経験のあるデイクタストライカが呆れた様な視線を向けていた。

「心配っつーか、興味本位だよ イジメなんて『負け犬共のやる遊び』なら止める気だったのは確かだけどな」

「別にアンタがクビになっても…イヤ、小内トレーナーもオグリライバルも絶対テンション下がるし、施術の腕のいいヤツが辞めるのはオレとしてもフツツゼッターに困るな」

「…つたく、安心しな キー坊コイツの武術家としての『ワガママ』に付き合っただけで『問題』なんてひとつつも起きちやいねえやい」

「そうです キー坊の胸を借りた事で私達『武を修めるウマ娘』は新たな気付きを得て感謝している位なのですから」

「いやあ、ヤエノ…あたしや別に得るモンなんて何も無かったんだけどね……」

格式ばった口調で目を輝かせていたヤエノに一言物申したいイナリを見ていたブ

ラッキーが思い出したことがあったのか熹一に話し掛ける。

「そういや、兄さん 姫次のヤツなだけだよオ、『新しい技習得した』ってんで兄さん探して校内回ってんだ ウゼエから『いつも通り』ボコってアタシの前に連れて来てくんねエ?」

「任しとけ…その後メシでも食いに行くんか?」

「…そうだな この前『カサマツにある沖縄料理屋が美味えんだ』ってしつこかったから今日はそこに行くわ」

「『ゲンの所』か…分かったわい、顔と腹は極力狙わんとボコつといたる ほな、早速行ってくるわ」

そう言つて熹一は上着を翻してバ鹿弟子である鬼塚姫次討伐の為にその場を離れたのであった。

「…何だよ、兄さんの『あの格好』 印象がガラつと変わんじやねエカ」

「分かるぜ オレも最初別人かと思つちまつたよ」

「普段のダサイTシャツに坊主頭でヘラヘラ笑つてると『弱そう』って思えんのに『あの格好』で殆ど笑わねえと『歴戦の猛者』みたいに感じるんだから不思議なもんだよ」

「何を言ってるんですか、皆さん 『どんな姿』であろうとキー坊は尊敬に値する素晴らしい格闘家です」

彼女等が言った各々の感想も当然、熹一の耳に入る事は無かった。

「なんだい、随分と『血生臭い』じゃないか？ 格好といい、まるで『あの男』みたいだ」

「クンクン）…なんや、姫次には殆ど攻撃貫わずに成敗したんやが…：流石ウマ娘やな、氣い悪くさせたら謝るわ」

「ハハハ！ 何、安心しな！ 私も縁あつて『あの男』の指導を受けた身でね、血の匂いには特別過敏になつてるのさ 他のヤツ等じゃ氣付かないだろうね」

「そーいやアンタ、『鬼龍』の近くに居たのを見た事があつたのオ 確か名前は…：」

姫次への『指導』を終えた熹一が廊下を歩いていると突如、呼び止められたので振り返れば其処に居たのは叔父である宮沢鬼龍を思わせる『傲岸不遜』を絵に描いたような美女であつた。

その名は――

「『シリウスシンボリ』さ!! 尤も、鬼龍あの男とは現在、距離を置いているが…最近入った施術師が今日になって雰囲気ガラッと変わったもんで氣になつてつい、話し掛けちまつたよ」

「せやつた、外では偶にするんやが…『この格好』を中央の中ですんのは今日が初めて

やったわ 道理で皆ワシの事ジロジロ見る訳や、『不審者』やと勘違いしてもおかしくないな」

熹一はそう言つて改めて己の格好を見直す。

“NEO宮沢熹一”：長いコートを羽織り、長髪のカツラを被つて普段より表情筋が乏しくなつた自身の姿を見て自虐的な笑いを浮かべた。

「いや？ 随分と今日は女受けが良さそうな格好をしていると思つてな、普段からそうしていれば良いだろうに」

「…生憎やが、普段の『女受け悪い姿』が『本来のワシ』や こんな『悪魔が憑いた』ような格好、変装以外では趣味やないからやらんわ」

「ふうん…どうやら、あんまりその恰好に突つ込むのは『野暮』らしいから話題を変えるか だったら、何でもまた今日はそんな変装をしてんだい？」

「今日は『記者が押し寄せて来る日』やろ？ しゃあけど、中にはウマ娘やなくてワシ等『表の格闘家』に取材しようとするヤツもおつて、前にそれでウンザリしたからや」

吐き捨てる様に言い放つ熹一にシリウスは疑問を覚える。

「何だい、普段のアンタを見て勝手に『目立ちたがりのお調子者』と思つてたんだが…どうやら評価を改めなきゃいけないようだね」

「…学生の頃のワシ」はその評価で合つとるが、下手に有名になつた今じゃ身動き取

り辛くのお……何より中央（ここ）の主役はウマ娘（アンタ等）や 部外者が目立つなんてありえへんやろ」
 「……………ククク…ハハハッハッハ!! 成程な、 “ルドルフ”（会長サマ）の言う通りだ!! アンタは大した男らしいね!!」

「…なんや、会長さんがどうかしたんか?」

「いやいや、前にアンタの事をルドルフ（会長サマ）に聞いたら『我々ウマ娘の事を一番に考えてくれる素晴らしい男だ』なんて言ってたんだが、こつちとしても半信半疑だったもんでね、今日ようやく得心がいったってだけさ」

そう言つて笑い続けるシリウスに対して熹一は納得がいつてないような表情をするばかりであつた。

「会長さんもアンタもワシの事を評価しとるのは有難いが、ワシは妹（オケリ）がウマ娘で昔つからの付き合ひがあるから “そういう考え” を持つとるだけや それに此処（オケリ）に居る人間は皆、ウマ娘を大切にしとる人ばっかやぞ」

「何言つてんだい 最近、ウマ娘（私達）にちよつかい掛ける荒くれ共を親父さん達と一緒に人知れず片付けてる “正義のミカタ” がさ」

「……………何の事や?」

最近になつて近隣に出没する気弱なウマ娘を狙う “悪漢達”、そんな輩に熹一は協力関係にある宮沢静虎と日下部覚吾の “二人の父” と共に顔を隠して人知れず対応して

いたのだった。

それが中央助め先に知られている事に心が急速に冷え、熹一はシリウスの探るような視線をただ真つ直ぐに見返す。

「…いいね、その『眼』会長ママ ルドルフはアンタの事を『強さをひけらかさない人格者』なんて評したが、『自分こそがこの世で最強の生物』って自負があるからこそその道化振りなんだろう？ 『今の格好』だと猶更そう思うよ」

「…『男と女の関係』みたいなもんやろ 常にエエカツコしても無理しとる限り、疲れが溜まつて参つてまうわ なんやかんやでワシは『普段のお調子者』な自分を気に入つとんのや」

「いやいや、結果として『女受け』はすこぶる悪いようだが？」

「やつかましいわ！ つたく…鬼龍の教えを受けとつただけあつて良く口が回る娘つ子やな…で？ 中央は『ワシ等』をどう扱う気なんや？」

「…『私が今話すまでアンタは気が付かなかつた』これが『答え』さ」

『見逃されている』という現状に納得した熹一は軽く息を吐いて踵を返し、シリウスに背を向けて歩き出した。

「おや、私との会話は打ち切りなのか？ まあ、意地の悪い言い方をした自覚はあるが…私も含めて中央こゝに居る連中はアンタ等に感謝してるのさ これからも宜しく頼むぜ？

“正義のミカタ”さん”

シリウスの言葉に返事をする事なく、代わりに熹一は軽く手を振ってその場を後にしたのであった。

「キー坊、その恰好はどうしたんだ？ 中央では初めて見たぞ」

「オグリか……ジャーン！ “NEO宮沢熹一” 中央デビューやぞっ!!」

「……大丈夫か？」

「いや、素面で返すなや……傷付くやん」

「ああ、済まないな……思い返せばキー坊、何で自分の名前に“NEO”なんて付けたんだ？」

「何でって……そら、親父おとんに『ワシ、メツチャ悪くなったぞ』って伝えたくて……せやな、何で“NEO”なんて付けたんか自分でも分からんわ その場のテンションでついとしか……」

妹であるオグリキャップと会った事で“普段通りの自分”を見せる熹一であったが、直後にオグリから訊かれた『名付けの意味』を真剣に考えだし、再び“NEOの顔”になつてしまった。

「でも……お父さんは家に帰って『熹一が人間的に劣化してもうたわ』って落ち込んでいた

から、私もお母さんもそれで信じてしまつたんだ」

「言つちや悪いが、親父は純粹過ぎるわ……ま、そこが親父のエエ所でもあるんやけどな」

「うん、それは私もお母さんも思つてる。でも、キー坊を實際見たら『無理してる』つて私達も分かつたからあの時は本当に辛かつたよ」

「……家族にはホンマ、心配かけて悪かつたな」

「良いんだ。今はこうして家族の所に戻つて笑顔でいてくれるんだからな」

そう言つて笑顔を見せるオグリに熨一も笑顔を返し、和やかな雰囲気で作られ始めた頃に突如、二人の後ろから声が聞こえた。

「あつ！ 居た、居ました!! キー坊さーん……キー坊さん、ですよね?」

「なんや、たずなさんか? いつも言つとるが、ワシの事はキー坊だけでエエつて……」

「いえ、それより尊鷹さん見ませんでしたか!? 先程、『運動場の木の上に立っていた』つて目撃情報があつたんですが!!」

先代と現理事長の秘書を務める才女、駿川たづなが普段の彼女には珍しく慌てた様子で前理事長である宮沢尊鷹の行方を訊いて来た。

「……あのオッサン前理事長言うても今は『フリーの身』やん? 何をそんなに必死に探しとんのや」

「それが…本日は…先程、敷地内で見たから是非話しをしたい」と仰られたので急いで探しているんですが…心当たりありませんか？」

「…ワシも今日は色んな所ブラついたが、見かけとらんぞ 携帯はどうや？」
「何度も連絡してるんですが一向に繋がらなくて…全く、あの人は何時だつて自由に振る舞って本当に…」

たずながストレスのあまり「昔の顔」を覗かせ始めた頃、オグリは思い当たった事があつたのか二人の前で手を叩く。

「ポンッ」そうだつ！ さつき用務員室に『知らない小柄の職員さんが居る』ってクラスの子達が話していたから、ひよつとすると尊鷹おじさんの変装の一つである「土竜さん」かもしれない！ 二人とも行ってみよう!!

「エエ情報や、オグリ！ たずなさん、ワシ等も行くで!! いざとなれば「弾丸^{たま}すべり幻突」を解禁してでもあのオツサンを捕まえたるわいっ!!」

「うう…頼りになる甥っ子が居て私も嬉しいです…お願いしますねっ!!」

こうして最早UMA扱いされていると言っても過言ではない男、宮沢尊鷹の捕獲の為にたずなと共に「灘の天才二人」である宮沢熹一とオグリキヤップは彼が待つであろう用務員室へと駆けだすのであつた。

稲妻龍、ハワイに出没注意

ハワイ・オアフ島のホノルル空港に降り立ったオグリキャップ。

彼女の格好はアロハシャツとサングラス、首には花飾りであるレイを下げているという所謂「バカンスモード」に入っていたのだが、表情は有馬の決戦時を思わせる「必死」と言わんばかりの物であった。

それもその筈である、何故ならば彼女は現在——

「お父さん、しっかりしてくれ！ 空港に到着したからなっ!! 気をしっかり持つんだ!!」

「オ…オグリ、心配を掛けて済まない、ワシは…大丈夫や」

「ちよちよちよーい！ そない「グロッキーな状態」で言うても説得力ないで!? 静虎のオツチャン!!」

「静虎さん…この前、『中国へ行った』って話を聞いて克服したと思ってたんですが…」
飛行機嫌い、治ってなかったんですね

親友であり宿敵ライバルであった「タマモクロス」と従弟である「長岡龍星」と共にストレッチャーに乗せられた父、「宮沢静虎」に付き添って彼を運ぶ救急隊員と並走してい

たからであつた。

「皆……今回は折角ハワイに来れたというのに私の所為で済まない……調子が良くなるまで観光をして来るといい……」

「いや……お父さんを一人残して私達だけで楽しむ訳にはいかないよ　せめて私だけでも残っているからタマと龍星だけでも楽しんで来てくれ」

『お父さんを放つておけない』というオグリの強い希望により、結果としてタマと龍星の二人はハワイの空港に取り残される事となつたのであつた……。

「……龍ちゃん、静虎のオツチャン大丈夫やと思うか？」

「俺は今日、静虎さんの『仕事』の手伝いで付き添いだつたから『残るなら自分が』つて思つてたんですけど……活法の練度はオグリさんの方が俺よりも上なので、恐らく問題は無いと思いますが……」

「せやつた、『活法』ゆうのはオグリさんが宮沢家で一番上手いつてキー坊から聞いたつたわ　なら、これ以上の心配は無用やな」

「はい……しかし、タマさん　今日は本当にすみません……本来であればオグリさんと一緒にのバカンスを楽しみたかつたでしょうに、俺と一緒になつてしまつて」

「気にすんなや、龍ちゃん！　ウチが引退したからつてみんなが気が使つてくれるんはホンマに嬉しいんやで？　その上、今回は『ハワイへご招待』と来たもんや　家族には

土産物モノぎようさん買うてやらんとアカンなっ！（パンツ）

そう言つて笑いながら力強く背中を叩くタマに龍星は少しむせ込んでしまふも、彼女の笑顔につられて端正な顔に年相応の笑顔を浮かべる。

「ゴホゴホツ）：はいっ！ 俺も今日の手伝いを終えたら、『由美子さんや優希ちゃん達にお土産を』と思つていたので：折角ですから早目の品定めに行きましようか、タマさん」

「それでこそやで、龍ちゃん！ 頭エエつて聞いとるし、英語もペラペラなんやろ？ ホテルに荷物置いたらガイドは頼むでえ！」

「いえ：それなんです、静虎さんから事前の説明を受けていまして：今回は『こちら』の〃知り合いがガイドを買つて出てくれた』との事なんです」

「なんや、そうやつたんか？ ほなら、ウチ等はこのまま空港こゝろで持つとればエエんやな？」

龍星からの説明を受けたタマは辺りを見回したが、〃それらしき人物〃は見受けられず、場所を移動すべきかと考え始めた頃に二人の背後から、少女の呼び声〃が聞こえた。

「あの、おじちゃん〃：いえ、宮沢静虎さんと一緒に来られたんですよね？」

「：：そうやけど、お嬢ちゃんが今日のガイドさんなんか？」

「はい、私の名前は『マナ』って言います。昔、静虎さんにはお世話になって…今ではこのハワイで叔母さんと一緒に生活をしてるんです」

「あなたが…お初にお目に掛かります。今回、お世話になる長岡龍星と申しまして…隣に居るのは日本で『スターウマ娘』と呼ばれたタマモクロスさんです」

「タマモクロスさんの事は私が小さい頃に静虎さんから聞かされていましたし、有馬記念でのオグリさんとの手に汗握る戦いは叔母さんと一緒にテレビで観てたんですよ」

「そら、嬉しいわ。娘のオグリんだけやなくウチの事も宣伝してくれるんやから、静虎のオツチャンにはホンマ感謝やな」

「はい…えっと、龍星さんは静虎さんの親戚ですよ。雰囲気がつっても似ているので一目で分かったんですよ」

「えっ!? そうなんですか? よく『父親の方に似てる』とは言われるんですが…静虎さんに似てるって言われるのは初めてで…正直、嬉しいです」

「ホンマか、マナちゃん? こない『眼帯ボーズ頭』がホンマに静虎のオツチャンに似てるんか?」

「ちよつ…タマさん!?!」

「ふふふつ…はいっ! 見た目は確かにちよつと怖いですけど、『優しそうな感じ』が『おじちゃん』を思い出して…安心できるから声を掛けようと思ったんです」

朗らかな笑顔を見せるマナに龍星とタマが僅かに感じていた異国への緊張感も霧散し、その空気のまま彼女に今回のガイドをお願いするのであった。

「おじちゃん……」また「病院に運ばれちゃったんだ 大丈夫だといけれど……」

「心配あらへんって、マナちゃん！ 今、あのオツチャンには世界で一番カワイイ「娘」が付いとんのやから、あっちゅう間に元気になるわ!!」

「うん、ありがとうタマちゃん 今日のお仕事を頼んだ「メリー叔母さん」にはおじちゃん達の居場所を伝えておいたから、後は『二人のエスコートを続けなさい』って言われてるし、このまま観光を続けよっか?」

「俺としても丁度良いですよ 今日の俺の仕事の一つは『マナちゃんの護衛』ですからね …… 凶らずとも望む状況になった以上、二人の事は全力で守りますから」

しばらくハワイの街並みを散策してすっかり打ち解けた三人は今後の予定を話し合っていた。

「そーいや龍ちゃん、今更やけど…… 静虎のオツチャンが受けたつちゆう仕事の内容って何なんや?」

「それは私の方から説明するね、タマちゃん 私って今一緒に暮らしてるメリー叔母さんと血は繋がってるんだけど……ちよつと「複雑な関係」って言うか……「それ」を嗅ぎ

付けた人達がおじいちゃんの代からやっている事業に口出ししてきたらしくて、最近は暴力事件にまで発展しちやったの……」

「なんや、『南の樂園』言われてるハワイでも、下らんトラブル」って起こるんやなあ……」

「その時に私を守ってくれた『デューク』さんも怪我をしちやったから、どうしようかって話になって……そのデュークさん本人から『日本に居るセイコ・ミヤザワに頼んではどうだろうか?』って提案されたから叔母さんが依頼する事になったの」

「『ハワイアン・ブレード・スター』のデュークさん……ですね? 俺も『素晴らしいナイフ使いだった』と静虎さんから聞かされていましたから……怪我をしていなければ、仕事の後に手合わせをお願いしたかった位です」

「私としては周りに居る人達に迷惑を掛けるくらいなら、いっそ家を離れてまた『一人に戻ろうかな』って考えてたんだけど……それを知ったメリー叔母さんが『悲しそうな顔で怒ってくれた』から……結局、皆に甘えてハワイに居させて貰ってるの」

「その時」の事を思い出して嬉しい様な、悲しい様な表情を浮かべたマナを見てタマは鼻をすすり、龍星は呼吸を整えて瞳に『闘る気』を漲らせていた。

「ズズッ）……許せへん『想い合つとる家族』をカネの為に引き離そう』なんて人の皮を被った畜生やっ! 安心せえ、マナちゃん!! 静虎のオツチヤンは『そういう輩』

を絶対に許さへんからなっ!!」

「はい…タマさんの言う通りです 俺も同じ気持ちですし、〃金の動かし方〃であれば鬼龍父親から不本意ながら手解きを受けています…悪党共等が静虎さんの〃肉体的制裁〃で反省しない手合いであれば俺が〃社会的制裁〃を加えますから…安心してください、マナちゃん」

「あ、ありがとう…二人とも でも…龍星さん、顔が恐くなってるよ…?」

「…マナちゃん分かったやろ? 確かに静虎のオツチャンみたいに優しい所はあるんやけど、龍ちゃんって基本的に〃ヤバい奴〃なんやで?」

「そういう人道的な優しさはオグリさん、優希ちゃん、そして…タマさんみたいな〃良識ある同世代〃が居てくれるので俺は全力で、心のままに突っ走れるんですよ」

「あのなあ、いいかげん〃外付けのストッパー〃に頼らんと自分で止まらんと早死にするでっ。」

「その時はその時ですよ だって…俺は静虎さんを心から尊敬し、彼の薫陶を受けているとはいえ…〃悪魔の息子〃なんですから」

「龍ちゃんは頭工エんやけど、『付ける薬が無い』レベルの大バ鹿モン者やからなあ…」

タマの心底呆れかえった表情を見ても爽やかに笑い返す龍星を見てマナは『確かにおじちゃんとは違う』という思いはあった物の、同時に『おじちゃんと同じ 〃真っ直ぐさ

“を持つ人”だという安心感を覚え、今回の依頼が成功に終わるだろうという確信を持ったのだった。

「メリーさん…病院までご足労をお掛けして、申し訳ありません」

「調子は…というか、今回の“依頼”は大丈夫なのかしら、宮沢さん？」

「大丈夫だ、メリーさん 私の活法が効いてくれたようでお父さんは完全復活したよ」

「アナタがオグリキャップ……テレビで観ると雄々しきすらあったのに、実際に見ると随分とキュートなのね？」

「むっ！ 何を言ってるんだ！ 私なんかよりお父さんの方がずっと可愛いぞ!!」

今回の依頼主である“メリー”との会話でオグリキャップは彼女の持つ謎の逆鱗に触れられた為か、父である宮沢静虎の『可愛らしさ』を熱弁し始めた。

「そもそも、今回の体調不良だって飛行機内で握った手が私のだから効果が無かっただけで“お母さんの手”だったらお父さんは大丈夫だったんだ！ そんなお父さんにとっては可愛いと思う!!」

「お、オグリ…それ以上は勘弁してくれんへんか…？」

「アハハハっ！ 分かったわ…初めて会った時はそんな事思わなかったけど、アナタのお父さんもとってもキュートねっ！ でも、そんなアナタ達よりも私の“姪”の方が

もつと可愛いわよ」

「メリーさん…マナちゃんの『その後』は……」

「私達に気を使って塞ぎ込む事が多くなつたけど、バ鹿な子よ…『あの子が再び一人になる』っていうのは『私を再び一人にする』って事に思い至らないんですもの……」

「マナちゃん…か メリーさんはその子の事を大切に想つてるんだな」

「『血が繋がっているから』ってだけじゃこんな関係にはなれないわ 私もマナも『一人ぼっちは寂しい』って思いを共有する『仲間同士』ですもの…なら、お互い助け合わないとね」

「うん、『血の繋がりが重要じゃない』っていうのは…私も分かるよ」

「そうやな…オグリ メリーさん…マナちゃんを悲しませる事にならぬ様、本日の仕事…『全力を以つて』取り組ませて頂きます」

メリーの姪マナに対する想いを聞いた二人の心に灯がともつた所で、当のマナ本人が笑顔で手を振りながらタマと龍星を伴つて病院へ向かつていた。

「おじちゃん！ 久しぶりだね!! 元気になつた?」

「はいっ! お久しぶりです、マナちゃん!! オグリのお蔭ですっかり元気になりましたよ!!」

「オグリん、お疲れさん! 『浮かれたカツコ』でオツチャンの施術やったから大変

やったる?」

「…そうだ、すっかり自分の格好を気にしてなかった 病院の周りに下げてたレイの花
びらは落ちてないか?」

「気にしなくても良いんじゃないですか? 『お父さんの為に必死になる娘』を咎めるな
んで野暮な真似、 “南の楽園” には似つかわしくないでしょうし」

各々が会話に花咲かせていた頃、メリーが乗って来た車に積んでいたであろう “ウサ
ギの縫いぐるみ” をマナの前に持って来ていた。

「えっ? これ… “ウサピョン”? メリー叔母さん、どうして…」

「アナタの大好きな “おじちゃん” の知り合いだからって今日は初めて会う人ばかりで
気疲れしたでしょ? アナタのお母さんが作ってくれた “この子” も一緒に連れて
行ってあげなさい」

マナは受け取った “ウサピョン” しばらく見つめ、一回だけ抱きしめるとその後はメ
リーに優しい手つきで返却する。

「ありがとう、メリー叔母さん でも、これからおじちゃんと龍星さんは “お仕事” なん
だから、私もオグリとタマちゃんをエスコートする “お仕事” を頑張らなきゃ だから
…ウサピョンはしばらくお留守番ね」

「そう…マナもすっかり大きくなったのに、初めて会った時と同じ感覚で接しちゃった

わね……ごめんなさい」

「もうっ、ホントだよ！　ウサピョンは今でも大事な友達だけど、今日は同じ位“信頼できる人達”ばっかりで私、寂しくないんだから!!」

「OK OK……お詫びと言ってはなんだけど、今日の観光費用は全額こっちで持つわ“怪物”のお腹をいっぱいにしてあげなさい」

「えっ!?　メリー叔母さん、本当に良いの?」

「マナを久々に笑顔にしてくれたお礼も込めてよ　それに……アナタも信じてるんでしょ?　『この人達に任せれば今日の仕事は大丈夫だ』ってね」

「うんっ!　勿論っ!!」

その後の仕事の結果は二人が確信した通りの“大成功”であったが、オグリの食事に関する請求費を見たメリーが頬を引き攣らせながら『高くつき過ぎたわ……』と溢していたのをマナは聞かなかったことにし、成功を祝う会食場で大騒ぎするオグリ達と共に笑顔で乾杯の音頭を取ったのであった。

光見えぬ者達の社会貢献

宮沢家玄関前でオグリキャップの親友であるベルノライトは対応したオグリの兄である宮沢熹一から聞いた親友の近況に驚きの声を上げる。

「えっ？ オグリちゃんって今 “ハワイ” なんですか!？」

「おうっ、 “プール” やないで？ ホンマモンのハワイやぞ なんや… 休暇申請したとは聞いたったがオグリ、ベルノちゃんに行き先を話したらなかったんか」

「いえ… 『今度、お父さん達と出掛けるからお土産は何が良い?』とは訊かれたんですけど、まさかハワイとは……」

「オグリは昔っから言葉が足りんからな……今頃は飛行機の中やろうし、携帯も繋がらんから実家コッチに来たんやろ？ 遠出させて悪かったのオ」

「あつ… 大丈夫ですよ 今日、用事があつたのは “熹一さんの方” だったので」

「…ん？ せやったら、猶更悪かつたの… ワシの携帯番号教えとけばこんな手間掛けんでも良かったし、今からでも連絡先を交換… っつてその前に家ウチに上がってくれや、立ちっぱも疲れるやろ？」

「は、はい… お邪魔します」

「決まりやな…お袋^{おかん}！ オグリの友達来たんで、お茶を頼むわ!!」

「任せなさい、熹一 この前、姫次君達が持つて来てくれた人参で作った〃キャロットケーキ〃が冷蔵庫に残つてたし、それも出しちゃうからね」

現在、家長なき宮沢家を取り仕切る熹一の声が玄関に響き、笑顔で母がそれに応えるのであった。

◇◇◇◇◇

「……ごちそうさまでした お母さん、とっても美味しかったです」

「ふふっ、ありがとうベルノちゃん 喜んでくれて嬉しいわ」

「お袋^{おかん}の作る物^{モン}は絶品やからな、褒められるとワシも自分の事のように嬉しいわい……で？ ベルノちゃん、今日はワシに『何の用事』があつて来たんや？」

オグリの母から出された数々の創作料理に舌鼓を打つてすっかり、リラックス状態となつていたベルノに熹一は今回の来訪の目的を尋ねる。

「そ、そうでした……あの、熹一さん 最近、都内複数の託児所に出没する〃盲目の達人の噂〃つてご存じですか？」

「……いや 〃盲目の達人〃なら、昔の知り合いにおるが、連絡を取り合う関係でもないしのオ……何や、ソイツがその託児所でなんぞ〃悪さ〃でもしとんのか？」

「いえ、そういう訳ではなく……むしろ『そこにいる子供達と遊んでくれている』らしいで

す」

「なら、別にエエンやないか？ ベルノちゃん的にはどこら辺が引つ掛かるんや」

「はい、〃託児所〃というからには子供が…勿論、〃ウマ娘の子供〃も預けられている訳で…その子達に〃変わった走法〃を伝授しているという噂を耳にしまして…」

「ソイツは…〃微妙なライン〃やな 〃トレーナーやつた〃としても、若い娘つ子に変なクセ付けるのは褒められた行いやないし…」

「〃トレーナーでなかったら〃それこそ、大変な行いですので…噂の真偽を確かめたく、サポート科の人達と協力してその人物の情報を集めていたんですが…来訪した施設の職員さんに聞いた限りでは『正体が分からない』と言われ…目撃情報があつて尾行を試みるも、いつも『途中で見失つてしまう』という結果になつてしまつたんです」

「…真つ当な身体能力なら人間を超えとるウマ娘を撒ける技術ワザ持つとんのやつたら、ソイツは確かに〃達人〃やな…オモロイやん」

ベルノの口から聞かされた〃謎の達人〃の情報に熹一の胸は躍り、顔は自然と笑顔成形作つていた。

「…随分と〃楽しそうな顔〃してるようだけど熹一、アンタ今日はどうするの？」

「決まつとるやろ、お袋おかん！ ソイツが〃エエモン〃か〃ワルモン〃かワシがキツチリ、見極めて来たるわいっ!!」

「まったく、夕飯までには帰って来なさいよ　後、ベルノちゃんもしつかり守ってあげる事　出来なかつたら…帰って来た静虎さんとオグリも交えてのお説教だからね」

「……分かつとるつて、そない条件付けんでもベルノちゃんの事はキツチリ守つたるわい」

「熹一さん、協力してくれるんですね！　ありがとうございますっ!!」

「おうっ！　ほな、行こかベルノちゃん!!」

こうして本日、〃名探偵ベルノ〃と〃助手兼護衛の熹一〃による『盲目の怪人』の捜索が始まったのであった。

◇◇◇◇◇

都内の喫茶店に到着した二人はテーブルに座り、今後の展開を話し合っていた。

「…で？　ベルノちゃん、今日は何処を探索するんや?」

「はい、熹一さん　〃こちら〃をご覧ください」

そう言つてベルノがテーブルに広げたのは〃地図〃であり、そこには様々な色ペンで『盲目の怪人』が今まで回つた場所へのマーキングが付けられていた。

「おお、なんや…本格的やのオ」

「いえ、タブレットじゃ色々と不便なので…それで、見て貰えれば分かるんですが…実は都内の託児所にランダムで出現する訳ではなく、『決まったルートを周回している』の

を最近になって気付いたんです」

「…せやったら、次来るところに網張って人海戦術で捕まえられんのか?」

「流石に『疑惑』の段階でそこまで本気にはなれませんが、さすが、『タダ者じゃない』のは間違いないので…ルートが決まった以上、後は熹一さんにお任せしようと思いましつ」

「おうつ、任せてくれや それで、今回の『行き先』は…」

「はい、順当に行けば本日はこちらの託児所…『スーパークリークさんのご実家』に来ると思われませう」

ベルノが差した『予測地点』を見て熹一が不敵な笑顔を見せると、急に周りから『黄色い歓声』が聞こえ始めた。

「うおっ!? な、なんや…この店、アイドルでも来店しとるんか?」

「あの…多分、皆さん『熹一さんを見て』だと思っただけですけれど…」

「ベルノちゃんも冗談キツツイわ…今日のワシは『長髪のヅラしか被つたらん』で?

顔も普段に近いヘラヘラしたモンやし、女の子からキャーキャー言われるなんてありえへんって」

「いえ、今日のはちゃんとした変装よりも『隙のある感じ』で女性受けはむしろ良いというか…なんでもありません」

「大体……ツラ被っただけでモテるんやったら、ワシは学生の頃に髪伸ばしとったわ………うっし！ 気を取り直して行くかつ!! ベルノちゃん!!」

「探偵」の提示した推理を『ありえへん』の一言で片づけた「助手兼護衛」に一抹の不安を抱きつつも、ベルノは女性達の惜しまれる声を背中に受けた熹一を伴って「目的地」へ足を運んだのだった。

◇◇◇◇◇

「……熹一さん、居ました！ “あの人”ですっ!!」

「よっしやー！ 『写真も撮れなかった』言うんでベルノちゃんの記憶頼りやったが、見つかって良かったわ!! どれ……」

「目的の地付近でターゲットを待ち構えていた二人であつたが、ベルノが指差した人物を熹一も確認すると……喜びに満ちた表情は徐々に「訝し気な物」に変わっていった。

「……ベルノちゃん ホンマに「アイツ」が今回追つとる『盲目の達人』か?」

「はい、そうですけど……もしかして「お知り合い」でしたか?」

「まあ……そうやな 悪いんやが、ちよつとワシが話して来るわ」

熹一はそう言うと言っていた気配を現して無造作に「その人物」へと歩を進めていく。

「んっ? こいつあは何とも懐かしい気配だ……たまに感じていたあつしを観察するウマ

娘みたいな気配、体臭、口臭、髪や服の擦れる音なんかを今の今まで「消して」この距離まで近づけている……随分と腕をあげやしたね、キー坊」

「ホンマ、久しぶりやのオ……話に聞いた時は『ひよつとして』とは思ったが、会えて嬉しいで「帯刀右近」」

帯刀流棒術宗家にして「盲目の奇術師」と呼ばれた達人、帯刀右近。

かつて熹一とハイパー・バトル日本予選で激闘を繰り広げた男は見えずとも正確に熹一の方を向いて再会を喜ぶ笑顔を見せていた。

「実はと言うとね……こうやって待ち伏せされるのも「二度目」なんでやすが、今回は為す術もなく負けそうな気配を感じるんでやんスよ」

「勘違いすんなやオツサン　ワシは別にアンタと闘り合うつもりなんぞ……」

熹一が言葉を使い終える前に彼の眼前には右近が持つていた長杖が繰り出されるも、その攻撃ははまるで幽霊の如き「かわし」の技術を持った熹一には通用せず、躲した本人が呆れたような視線を右近へと向けていた。

「……だから、闘り合うつもりなんぞ無い言うてるやろ？　「本気」の速度」で打ち込んで

来んから躲すだけで済ませたが……これ以上来るようならベルノちゃんが見てる手前、手荒にはやらんが一発で終わらせんぞ」

「いやいや、すいやせん……本当に「以前とは」比べ物にならない位に腕を上げやした

ね 今のは『挨拶代わり』の一撃という事で大目に見てくだせえや」

「ま……ッこういうやり取り」の方がワシ等らしいか 相変わらず、飄々とした態度と裏腹に好戦的な性質タチでむしろ安心したわ」

「そりやそうですとも 盲目だからってバ鹿にして暴力に訴える輩は何時だって現れやスからね そういうのに一番効くのは『それを超える暴力』なんですから、世知辛い世の中やんス」

「せやったら、ウマ娘のレースでも見れば……いや、アンタからすれば『感じる』か……ん？ 待てや？」

「……熹一さん 何か気付いたんですか？」

右近との会話で何かに気付いた熹一は思考状態に入っていたのだが、彼の隣には二人のやり取りに剣？な気配が消えた事を察して近くに来ていたベルノが何時の間にか立っており、熹一に疑問を投げかける。

「おうつ、ベルノちゃんか……この人はワシの昔の知り合いなんやが、回つとる託児所に居る『ウマ娘の指導』をやつとるんやろ？ ちなみに聞くが……指導されたウマ娘の『特徴』って分かるか？」

「えつと……全員は分からないんですが、調べた限りでは『身体的な障害を持っている』子ばかりで……あつ！」

「やっぱり同じ事思ったか！ オツサン、アンタ回った所で身体が不自由な子に『動き方』を教えてんのやろ!」

「ご明察ですよ、お二人さん 目の視えないあつしでもウマ娘のレースは最高の娯楽でやさからね ハンデがあるからって諦めちまつてる子を一人でも見かけると寝覚めが悪くなるんで、『最低限の身体の動かし方』を我流ではありやすが指導してたんですよ」

右近からの答えに二人は納得するも、ベルノはふと疑問に思った事を訊く事にした。「でも…『我流』と言うからにはやっぱり『癖』は付いちやいますよね？ そこは大丈夫なんですか?」

「おや、よくよく『感じて視れば』可愛らしいお嬢さんでやスね…いえ、安心してくだせえや あつしも後天的に盲目になってから動ける様になるまで医学書の内容を頭に叩き込んだんだ…さつきも言った通り、教えるのは『最低限』だけでやんス」

「成程のオ…初めて会った時からワシはアンタを尊敬しとつたが、ますますその念が深まるわ」

「いえ、別にあつしも善意だけでやってるワケじゃなく『社会貢献』ってヤツをやっておくと障碍者の心証が良くなるからなので極論、『自分の為』なんでやんスよ」

「それでも『私達』ウマ娘の力になって貰ってる以上は感謝の念しかありません…本当

に、ありがとうございます」

「…昔、キー坊に『似た様な事』を言われた時は『侮蔑の言葉』に感じてしまいやしたが、今では素直に受け取る事が出来る…あつしも、ちったあ『成長』出来たって事でやんスカねえ……」

「何言つとんのかや　『可愛い女の子』に感謝されれば男やつたら誰だつて嬉しいモンやで」

「ちよつ…！　熹一さん!!」

「はっはっはっ！　違いねえ!!　キー坊だつてカツラを被つておめかしする位の美人さんだ、あつしの気分が悪くならねえ理由がねえや!!」

「ちやうねん…『コレ』は変装で…いや！　ベルノちゃんが『美人さんやない』つて言つとるワケちやうぞで!」

「もうっ！　二人ともいい加減、『美人』つて言うのやめてくださいっ!!」

熹一とベルノのやり取りがツボに入ってしまったのか更に大笑いする右近を見た熹一は困った様に頭を掻き、ベルノは顔を真っ赤にして怒りを表すも彼の笑い声が止む事は暫く無かつた…。

オマケ

“スーパークリーク” 実家の託児所

「おりや！ “フジモン”、スキあり！」

「ボコツ）はうっ！ ず、ずるいぞ！ ワイの “視えん所” から攻撃してくるとは!!」

「こらーっ！ 遊びに来てくれた “藤垣” さんに何てことするの！ 謝りなさいっ!!」

「ええってクリークちゃん ワイも結構、鍛えてるんやから全然平気やし」

「そんな…せつかく柔道の試合の為に上京されたのに子供達の相手をしてくれてるんですから失礼の無い様にしないと……」

視覚障害を持つ柔道家、“藤垣總”…徳島からやって来た彼は以前、鬨いを挑んだ帯刀右近がやっているという『託児所巡り』に参加し、先にスーパークリーク実家の託児所に到着していたのだが…一向に右近は現れず、子供達の襲撃に遭っていた。

「子供言うんは、明るく元気が一番やけん “そう振る舞える” のもクリークちゃん達が此処を安心できる場所として作ってくれとるからや…それがワイは凄い事やと思つとります」

「そう言つて貰えると私達もとっても嬉しいです…いつも来て下さる右近さんもですが、今日は来て頂いて本当に感謝しています」

「いやいや…右近さんと違つてワイは “動きの指導” とかは出来んのやけど、それでもこうやって『自分は十分に動ける』って所を見せて皆に元氣を与えんとなっ！」

「藤垣さんの様な方達って故障が隣り合わせの私達ウマ娘にとつても身近な存在で…仰る通り、〃笑顔で生活されてる姿〃を見れるだけでも元気を貰えていますから」

そう言って笑ったクリークの気配を感じた藤垣は慌てた様にポケットにしまっていた〃ルーペ〃を取り出して弱視となっている右目に当て、彼女の微笑みを確認すると釣られて笑顔になった。

「うーんっ、良い笑顔や！ レースに勝った時のもキレイやが、今のクリークちゃんの顔もええモンやな！」

「あらあら、ありがとうございます…あら？ 藤垣さん、私のレースを〃ご覧になったんですか？」

「流石にワイは右近さんみたいに視覚以外の全てを使って〃視る〃様な真似は出来んが、テレビですら感じられる選手達の〃気迫〃みたいなモンは分かるけん クリークちゃん達が必死にやつとる姿にはワイも元気を貰つとるんや」

「…そうだったんですか でしたら、今日は私達ウマ娘が走る事への意義の一つを新たに発見する事ができて良かったです」

藤垣は笑顔で話すクリークの様子に頬を緩めていたが、ふと彼女の視線が自身の〃脚に向いている事に気付く。

「そやったな…クリークちゃんも〃脚の不調〃を克服して今を頑張つとる娘^こやった

のオ」

「はい…私が今も走れているのは、私の魔法使いさん」に出逢えたからですから」

「ワイも周りに居る友人や応援してくれとる人がおるから今、こうして笑顔で生きていけとる…、”それ”に気付けてるキミならきつと『歴史に名を残す』ウマ娘になれると思っけん」

「藤垣さん…ありがとうございます」

「ナハハっ！ そう言つとるのは『自分にも当て嵌めたかった』からで、”ゲン担ぎ”みたいなモンやけん！ お互いに頑張ろうや!!」

「うふふっ、はいっ！ お互いに頑張りましょう!!」

晴れ渡る空の下で笑いあう二人…そんな彼等をようやく本日目的地である託児所に到着した右近、熹一、ベルノの三人が見つけると一人は”感じて”、残りの二人は”見て”状況を確認する。

「なんや、パラ柔道の”フジモンさん”やん 右近のオツサンの知り合いってあの人やっただんか？」

「ええ、あつしが前にお遍路さんの”逆打ち”やつてる時に勝負を挑まれやしてね それから、ちよくちよく付き合いが続いてるんでやスよ」

「…スーパークリークさんとフジモンさん、ですか 何か笑顔でお話しされてるよう

すけど…内容が気になりますね」

「せやったらベルノちゃん、近付いてみようやないか　そもそもワシ等も今日は予定を変更して『子供の遊び相手』になりに来たんやし、職員さんに挨拶すんのがスジやろうからな」

「はいっ！　今日は　探偵さん”みたいでとつてもワクワクしましたけど、　子供と遊ぶ”のも同じくらいワクワクしますね!!」

「なら、今日の遊び相手はお二人にお任せするとして…あつしは身体が不自由な子達の面倒を見させて貰いましょうかね……」

こうして本日、集まった三人が各々の方法で子供達と触れ合った結果…託児所内の子供達と職員を含めた全員が笑顔で一日を過ごす事が出来たのであった。

お母さんは息子が心配

「熹一、荷物重くない？ 今日には急に〃色々あつて〃疲れたでしょ……やつぱり、私も少し持つ？」

「奥さん、すいませんねエ、オレの荷物まで息子さんキー坊に持たせちまつて……キー坊、オレの荷物だけで良いんで返してくれないかい？ 今日には用事があつて〃手伝えなかつた〃んで、体力は残つてんだヨ」

「かーつ、何言つとんねん おおかん袋は見た目若々しいが何だかんだで年いっとるし、〃オニ平〃のオツサンなんぞ今じや立派なジイさんやないか……若いワシが荷物持ちやるなんぞ気にせんでエエわい」

「……『ジイさん』か そりゃ、そうなんだがネ」

「……熹一？」

「な、なんやもう……そないシヨク受けた顔すんなや二人とも……悪かつたわ」

現在、夕飯の買い出しを終えた宮沢熹一とその母は帰り道に元・壊し屋の経歴を持つ〃オニ平〃こと鬼川平蔵と出会い、途中までの道程を一緒にする事になったのだった。

「いやネ……娘のアヤもすつかり大きくなって安心したのかオレも最近、体の節々に痛み

が走るようになったし、『今の仕事』だって何時まで続けていけるのかねエ……」

「……つたく、『中央の正トレーナー』が何を弱気抜かしとんねん 娘さんの為に『日の当たる仕事やりたい』言うて合格した以上はキツチリ定年まで勤めて貰うで」

「……分かつてるって、キー坊 オレのカミさんも、『仕事』を続けられる年齢じゃなくなつたし、半ば博打気分を受けた中央の試験に受かつたからには最後まで『責任』を果たすつもりさ」

「私もオニ平さんの奥さんや娘のアヤちゃんとはたまにオグリと一緒に食事に行きますけど、『お父さんの頑張ってる姿を見れるのは嬉しい』って話されてましたよ」

「奥さんも……いつもオレの家族を気に掛けてくれて感謝してんですヨ カミさんアイツもいきなり『専業主婦』なんかになつちまつて最初の内は大慌てで……そんな中、奥さんみたいな『ママ友』が居てくれるお蔭で、いつも笑顔でいてくれてんのが嬉しくてネ」

そう言つて頭を下げるオニ平に熹一達は慌てた様子を見せる。

「いえ！ 私がお二人に最初に会つたのは偶然ですし、その後も親交を続けているのは二人とも『良い人』だからなんです！ ですから頭を上げてください!!」

「せやで、オツサン！ お袋はおかんこない優しい見た目しとるが『嫌いな奴』にはエライ辛辣なんや!! 鬼龍辺りにはワシや親父おとんがゾツとする程のガン付けんのやでっ!!」

「……………熹一？」

「……………お袋、スマン」

「…クエクエクエ イヤ本当にありがとうねエ、二人とも」

二人のやり取りを見て気を取り直し、最初の空気を取り戻す為に笑い声を上げたオニ平。

その結果、場の雰囲気再び柔らかくなった三人に対し、少し離れた場所から声を掛ける人物が現れた。

「えっ!? キー坊とオニ平さんじゃない!? うわあ、奇遇だね!!」

「…なんや、〃コミちゃん〃やないか 神戸ごんなんで会うとはホンマ奇遇やの?」

「…ひよつとして、キー坊の道場に用事があつたのかい? それに…隣にいる〃もう一人の女性〃は確か……」

薫一とオニ平の同僚となる〃コミちゃん〃こと小宮山勝美の隣に立つ美女に見覚えがあつたのか、オニ平は〃その人物〃を指差す。

「お久しぶりね、キー坊 最後に会つたのは〃ジャパンカップ後〃の帰りの空港だったかな?」

「……………ん? アンタまさか…〃オベイユアマスター〃か!? なんや、日本に居た時は随分と『アメリカンな演技』しとるな』とは思つとつたが〃今の状態〃が素か!! 見違えるモンやのオ……」

かつて、オグリやタマとの激戦を制したアメリカからの刺客“オベイユアマスター”
。その時の派手な格好とは裏腹に現在の彼女は口調も髪型も服装も“落ち着いた”様子であった。

「まあね……自分を含めて『皆を騙しきれた』ってある意味満足してたのに、最後の最後で……少なくとも、アナタに見透かされていたと気付いた時は帰りの飛行機で随分と悔しい思いをしたわ」

「……なんや、ワシが尊鷹の指導法を訊いた時……逆に尊鷹の昔話をマシガントークでねだつたんは『意趣返し』やったんか……アンタ、エエ性格しとんな」

「格闘技の話とは言え、私の恩師を打ち破つた男だもの ハイパー・バトルでその存在を知っていたというのに、『見た目』でアナタを過小評価してしまつた事に対しての自責の念も勿論あつたわ」

「ワシが舐められるんは『天然の擬態』らしいからのオ 『騙したアイツに騙された』ゆうなら……確かに悔しいやろな」

「そんなワケで、休暇を利用して折角だから『私を騙した相手を育んだ土地』でも見てやろうかと中央に案内をお願いしたのよ そうしたら……」

「タマちゃんも引退して丁度ヒマしてた私が指名されてたつてワケ 気分としては色々

と複雑なんだけど、『レースが終わればノーサイド』の精神で神戸の街を女二人で楽しもうと思つてねっ!」

そう言つてカラッと笑う小宮山にその場に居た全員が笑顔になった。

「あつ! 勿論、静虎さんや鉄山さんの道場には先に顔出したよ。でも、アポ無しとはいへどつちも人が居なかつたから観光に切り替える事にしたけど明日なら大丈夫?」

「あー…スマンのオ。今日は街のヤクザ者が暴れとつたんで、火消し」にそこから中回つとつたんじや。全部片付いたんで明日にでも顔出してくれや」

「えつ、そうだったんだ…まあいいや。今日、タマちゃん達もハワイから帰つて来るんでしょ? 明日は出来れば都合付けて貰いたいんだけど…大丈夫?」

「おうつ、任しとけや! オグリにもタマにも話はしといたる! それに、今度ハワイ行く時はコミちゃん達トレーナーの皆やワシも行けるよう頼んでみるかのオ?」

「ホント!? それって最高じゃないっ! やっぱキー坊は頼りになるなあ、このこのっ! (ペチペチ)」

「いやあ、コミちゃん…もつと言つてくれやつ!!」

小宮山からの遠慮ないボディタッチに熹一は満更でもない顔を見せるも、それを咎める様な視線が母から送られる。

「熹一、あんまりデレデレしないの。息子の、そういう姿、って恥ずかしいんだから」

「お、おうっ…お袋おかん、スマン」

「いやー…お母さん、すいません キー坊あのパ鹿って話しやすくついで、距離感間違えちゃうんですよ」

「気にしなくても良いですよ、小宮山さん 熹この子一の精神鍛錬がまだまだ未熟というだけですから」

「クエクエ！ 最強の男”も”母親”には形無しだねエ」

「早速、”弱点”を見つけられて得した気分ね…観光の続きをしましょうか Miss. 小宮山 キー坊が”火消し”をしてくれたのなら、この街は安全なんでしょうし」

「あっ…そうだね！ それじゃ、皆さん失礼しました!!」

その言葉と共に二人の美女は夕陽が傾きを見せる神戸の街へと消えて行ったのだった。



「今日はゴメンね、ヤエノちゃん せっかく研修の為に本道場まで足を運んでくれたのにキー坊『急な用事ができた』ってこんなカワイイ子をほったらかしにするんだもの」

「押忍っ！ 大丈夫です、和香”先輩”!! 代わりに万次さんを含めた本道場の皆さんには大変お世話になりましたので!!」

「ヤエノちゃん…なんで和香さんの事『先輩』って呼ぶの？ 他の道場生には基本、『さ

ん付け』じゃない?」

「い、いえ…優希さん 昔から『キー坊の力になってる年上の女性』ですので、『先輩呼び』こそ相応しいと思ひまして……」

「やめてつて、もう…その条件ならオグリやタマちゃんの方が私より適任でしょ?」

「いえ、彼女等は私の『同世代』である以上、その呼び方は不適切…何より、私が和香さんから感じる『大人の女性としての魅力』に中てられて自然とそう呼んでしまうのです」

「小声） どうしよう優希ちゃん…ヤエノこの子、メンドクサイ」

「小声） 和香ちゃん、懐かれてるならまだ良い方だよ…『お姉さま役』やってあげなつて」

「ヤエノムテキ」、『宮下和香』、『小倉優希』の三名が日も沈みかけた宮沢家の道場前に集まり、女子トーク(?)を行っていた。

其処にオニ平と別れて帰宅した熹一と母が現れ、脱兎と言った勢いで和香と優希が熹一に詰め寄る。

「帰ってきた! 今日『本道場に顔出す』つて言つてたのに何があつたの!?!」

「来てくれたヤエノちゃんほつたらかしにして! たまたま来てた私も含めて道場の皆があの子の精神的フオーと送り迎え担当したんだ! 何か言う事は!?!」

「…ホンマにスマン ヤクザ者が人死にが出かねん状況にまで神戸を引つ掻き回しよつたんで放つておけんでな…道場の者と知り合いで闘れるヤツ等総動員して事に当たつとつたんや ヤエノちゃんには悪い事したと思つとる」

「…くっつ！」

熹一から聞かされた事情を聞き、状況を飲み込んだ二人はそれ以上の追及を口にする事が出来なくなった。

そんな二人に対し、前に出た母が少し離れた場所に居たヤエノを呼び寄せた後、三人が揃つた所で頭を下げて謝罪した。

「三人とも…静虎さんも居ない中、私が熹一を急に呼び出してしまったから今日は皆に苦勞を掛けてしまった様で…本当にごめんなさい」

「あ、頭なんか下げんなや、お袋!! そもそも、今日はワシが急な呼び出しに慌てて皆に連絡するのを今の今まで忘れ取つたのが悪いんじゃない!!」

「そうですよ、お母さん! 落ち込んでいたヤエノちゃんも万次さん達 “道場生” の皆との交流で最後は笑顔になったので大丈夫ですつて!」

「いや、むしろ仲良くなり過ぎちゃつて! 夕飯は和香ちゃんと一緒に『由美子オバさんの所で食べない?』つて話になった位なんで、ホンット気にしなくて良いですから!!」

「お母様…本日は私の心が未熟なばかりに皆様に迷惑をお掛けしてしまい、誠に申し

訳ありませんでした。ですが、今は皆様のお蔭で充実した時間を過ごさせて満足しております。何卒、お顔を上げてください……」

慌てた四人による必死さすら感じられるフォローにずっと頭を下げていた母がようやく顔を上げる。

「ありがとう……皆、本当に優しい子ばかりで、私も静虎さんもいつも助けられているわね」

「何言ってるんですか、皆、宮沢家の人達が大好きだから力になりたいって思ってるんですよ」

「そうそう、和香ちゃん言う通り、私も含めてお母さんやオジさん、オグリやキー坊に助けられた人達が恩返ししてるだけなんだから、そんな気にしなくても大丈夫だって！」

「キー坊とオグリキャップの『強さ』を形作った人にお会い出来て、本日はこちらに足を運んで本当に良かったです」

「……三人とも、今日の『詫び』ってワケやないんやが……由美子おばちゃんの所まで送らせてくれや、皆、『強い女の子』ってのは分かっとなるが心配でな……お袋、エエか？」

「当たり前でしょう、むしろ『送らない』なんて言い出したらお説教コースだったわよ」
「ハハハっ！ それでこそお袋やで!! ほな、三人ともエスコートは任せろや!!」

「いやー…女性の扱い方へタクソなキー坊が、エスコート」 ってき……」

「まあまあ、優希ちゃん…せっかくキー坊が気分良く『守ってくれる』って言うならお言葉に甘えちやいましょう?」

「押忍つ!! キー坊の立ち振る舞い、勉強させて頂きます!!」

◇◇◇◇◇

こうして熹一が三人の美女を送って行った為、宮沢家には母一人が残る事になり彼女は現在、夕食の準備を行っていた。

「トントントントン」…本当に「色々あった日」だったわね　これからオグリ達もハワイから帰って来るんだし、今日はそれで最後かしら?」

「長年の経験」から手際良く準備を進めていた彼女であったが、今日起きた事を思い返して僅かながら包丁の動きが鈍っていた。

「…それにしても、熹一ったら随分と女性の知り合いが多いわね『ワシはモテへんねん』って昔は泣きながら言ってたけど…この前、親しそうにしてたベルノちゃんといひ…今は」 どうなのかしら?」

以前、息子に『結婚する予定は無いの?』と聞いた事はあったが、返された答えは『モテへんから無理やろ、最悪「気の通じ合った者」^{モン}を養子にするわ』という親としては頭の痛くなる物であり…それでもしつこく『気になる人は居ないの?』と問えば『…オグ

りが嫁に行ったら考えるわ』と言われたのだった。

「オグリに『それ』を話したらあの子はあの子で……」

『えっ？ それは困るな……私もキー坊がお嫁さんを見つけたら『そういう事』は考えるつもりだったんだけど……』という答えが返って来て、あまりの『似た物兄妹』振りに夫である静虎と共に頭を抱えたのである。

「あれだけ波長が合うんだから、血が繋がらなくても仲が良いんだろうけど……『合い過ぎる』のも考え物ね」

思考を終える頃には調理は完了しており、それと同時に家のドアをノックする音が聞こえる。

時間帯も考えて『家族が帰って来た』事を確信し、母が急いで扉を開けると――

「お母さん、ただいま！ お土産をお父さん達といっぱい買って来たんだ!! (グウー)」

「なんや、オグリ……来る前にも腹いっぱい食って来たのに、もう腹が減ったんかい お母さんも料理作ってくれとるし、食べたら土産物モノを開けるか」

『予想通り』、彼女の大切な家族が笑顔で帰って来たのであった。

「はいはい……夕食の準備は出来てるし、オグリは先に手を洗って来なさい」

「うんっ！ 分かったよー！」

「それと静虎さん……お帰りなさい 本日も、お疲れ様でした」

「はい…只今、戻りました 熨一と共に留守を守つて頂き、本当にありがとうございま
す」

多くを語らず見つめ合う、夫婦の絆が垣間見える空気が出来上がっていたが、
れ”を壊したのは突如帰宅した息子の一言であった。

「うおっ！ エエ年した夫婦が玄関でイチャコラしとるやん 何年経つてもお熱いのオ
…」

「き、熨一!? 居たんかい!?」

「おうつ 親父、お帰り お袋、三人送り終わつてワシも腹減つたんで手洗つてくるわ…
洗面所、オグリが使つとる?」

「え、ええ…今、戻つて来るとは思うけど…」

「あつ！ キー坊、ただいま!!」

「おうつ、久しぶりやなオグリ ハワイで何か変わった事あつたか?」

「実はそうなんだ ハワイで帰る前にアイアン木場が亡くなつたビーチへ手を合わせに
行つたら、なんと…そこで“レムコ”が屋台をやっていたんだ!」

「レムコつて…昔、ワシと鬩つた“レムコ・ヤーロブ”か!? なんや懐かしいのオ…元気
しとつたか?」

「うん 『薬はもうコリゴリだネ』 って苦笑いしながらだけど、お母さんと一緒に元気そ

うに働いていたよ」

「そうか…猶更、ハワイに行くべき。理由」が出来たようやのオ…」

「…？ キー坊もハワイに行きたかったのか？」

「いや、それがのオ…今日の昼間なんやが…」

「ほら、玄関でいつまでも長話しない！ オグリはテーブルに、熨一は早く洗面所へっ
!!」

「…分かったっ！」

「…アカン、早よ手え洗わんとなっ！」

思った以上に話し込んでしまった兄妹は母からのお叱りに慌てた様子で、それぞれの持ち場へ移動する。

「まったく…あの二人は時間が許す限り、いつまでも喋ってるんだから」

「幾つになっても仲が良いのはエエ事です。そんなあの子等の幸せそうな顔を間近で見れるのは私にとって、何よりの「幸せ」ですから」

「あら？ 静虎さん、それは私も一緒ですよ」

「特別」な様で「何処にでも居る」家族である宮沢一家は本日、この時を持って普段通りの賑やかさを取り戻した。

父と娘が持つて来た土産物の包みを開けては一喜一憂し、身振り手振りで行う土産話

に耳を傾けながら時には家族皆が笑いあう…暖かい雰囲気宮沢家を包み、夜が更けていったのであった。

アクマ・オウジ・オグリ

これはオグリキャップがまだカサマツに在籍していた頃、担当である北原穰と親友となったベルノライトと共に休暇を利用して都内の動物園に遊びに行った時の出来事である。

「見て、オグリちゃん！ “サイ” が赤ちゃんと一緒に歩いてる、可愛いね！」

「うん、あれだけ強い足運びなんだ…突進を受けたらトラックなんてひとたまりもないな」

「…オグリ、何か例えが物騒じゃないか？」

「うおっ！ コイツが “オオアナコンダ” …こんなでかいヤツに締め付けられたら人間なんて一巻の終わりだな…」

「いえいえ、トレーナーさん…ウマ娘だつて無理ですつて、こんな力強そうな生き物」

「そうなのか？ 大蛇相手でも、圧倒的な脚力を使えば逆に関節技を極められると私は教わったんだが…」

「あれは “イタチ” か…初めて実物を見たが、小さくて可愛らしいな」

「そうだったんだ…私も動物図鑑でしか見る機会が無かったけど、オグリちゃんも？」

「いや、私が初めて見たのは鼬イタチを名乗る『小さいおじさん』だったんだ。身体の重さを自由に変えられる特技を持ってて、話してみれば気の良い人だったよ」

「なんだよ、その『ビツクリ人間』。オグリの交友関係って何気に謎だな……」

様々な場所で、多くの動物を鑑賞…時には触れ合いを行い、三人は笑顔を見せる。

更には特別に開かれた動物の絵画展に展示されている菱田『春草』の【黒猫】に感銘を受け、オグリ達は晴れやかな気分再び園内を回る事となったのだった。

「…次は『ゴリラ』か。実は私はゴリラが大好きなんだ」

「へえ、そうだったのか…なら、此処には長めに居るとするか。何か軽食買ってくるよ」
 「だったら、私も行きます。オグリちゃんの分を考えるとトレーナーさんだけじゃ持ちきれないと思うので」

「いや、だったら私も行くよ……」

「なに、オグリはそのままゴリラ鑑賞を続けてくれよ」

「そうだよ、だって…オグリちゃんさつきから『早く見たいな』ってうずうずしてるんだもの。買い出しなら私達に任せて！」

二人に内心を見透かされていた事に少しだけ気恥ずかしさを覚えた物の、その厚意に甘える事にしたオグリは一人でゴリラの観賞に向かう事にしたのだった。



「二人には氣を遣わせてしまつて申し訳なかつたな…でも、ようやくゴリラ“さん”を見れるぞ」

二人から離れた途端にまるで幼い子供の様に目を輝かせながらゴリラが待つ柵へと移動したオグリはそこに居た“お目当ての相手”に対し、羨望の眼差しを向ける。

「…やっぱり格好良いな、ゴリラさんは 落ち着いた佇まいといい、動きの一つとっても優しく…頭が良さそうでまるで『お父さんみたい』だ」

「…へえ？ アンタの親父さんは随分と『情けない男』なんだな？」

「…何だと？」

突然ゴリラを…延いては自身の父を侮辱する言葉を吐いたであろう、
横に居た男“をオグリは睨みつける。

「おつと…氣に障つちまつたか？ でも考えてもみなよ、
“靈長類最強”のスペックを持つてても “賢く争い事を好まない” 性格の所為で野蛮な獣達から自分の子供を守れない残念な生き物なんだ そんなのと同列扱いするのはむしろ可哀そうじゃないか？」

「あまり私の家族を侮辱するな…君が何者かは知らないが、それ以上は本気で怒るぞ」

オグリの視線にたじろぐでもなく、むしろ “楽しそうに” 煽つて来た男。

その容姿は被っていたフードに隠れていた為、判別する事は出来なかつたが…それでも全体的に伝わる『全てをバ鹿にする』雰囲気に対し、オグリにしては珍しく苛立ちを

感じていた。

「そもそも：同じ理由で俺はウマ娘って種族も嫌いなんだよ 『人を超越した身体能力を持ち、高い知性のある生き物が人にへりくだってる』 って時点で欺瞞でしかない」

「：私達ウマ娘は人から生まれた 『人の一形態』 に過ぎないんだ 授業でもそう習うし、事実これまでの歴史でも “人の良き隣人” として大きな問題もなく生活出来ている」

「そんなのウマ娘側の “優しさ” に甘えて利権を手放さない小狡い連中が掲げた都合の良い歴史だろ？ ウマ娘アンタ達の優しさはハッキリ言って “罪” だと思ってるよ」

「だからと言ってウマ娘私達は今更生き方を変えられないぞ？ 確かに酷い事を平気で行って笑う様な人達は知っているが、そうじゃない人達も確かに居る 少なくとも、私は『その人達の笑顔の為に』 走りたいと思ってるんだ」

「“純粋” ではあるが “無垢” じゃないってか：つくづく難儀な生き物だよ、ウマ娘アンタ達は」
「：君は多分、『悪いヤツが嫌いな悪いヤツ』なんだな 私の親戚にも似た様な人が居るよ」

「へえ：？ 似てるとは光栄だね、良かったらソイツの名前を聞かせてくれよ……」
『子供が落ちたぞーっ!!』

フードの男の態度が少しだけ軟化し、次の話題に移ろうかというその時であった。

ゴリラを見るのに夢中になり過ぎた為、柵から身を乗り出してそのまま落ちてしまっ

た男の子に周りの観客が騒ぎ出したのである。

「あらら、こりや大変だ どうするかね…?」

「ゴリラさんは基本的に優しいんだ 落ちた子供を助けたって事例も聞いた事がある

……が、”あの子”はマズイな」

オグリが危惧した通り、落ちた子供に対してこのゴリラが抱いたのは”優しさ”ではなく”好奇心”であつたからだ。

「きつとストレスが溜まつていたんだらう 『新しい玩具が降つて来た』と認識している」

「つまり”ジャチの遊び相手”みたいな結末になるワケだ と、なれば…?」

「ああつ！ 私が”遊び相手”になる!!」

言うや否やオグリの身体は柵を飛び越えて次の瞬間、ゴリラと男の子の間に着地する。

「済まない、安全な場所まで放り投げるぞ 少しの間、口と目を閉じて我慢していてくれ」

「えっ!?! う、うんっ!」

突如現れたオグリに対して驚いていた男の子であつたが彼女の自信と優しさに満ちた表情に安心したのか大人しく指示に従う。

「よし、では投げる場所だが……」

オグリは自分の周囲を瞬時に見回す……すると騒ぎを聞きつけて来たのか北原とベルノの慌てた姿も確認する。

結果として彼女の『投擲すべき場所』は決まり、そこへ向けて男の子を放り投げた。

「頼んだぞっ！ 受け止めてくれ!! (ブンッ!」

「ん……? おっと! (トスッ 正気かよオグリ……よりによって『俺に』任せやがった」

放り投げられた男の子を危なげなく受け止めた物の『納得できない』と言わんばかりの表情を見せたフードの男が洩々といった様子で男の子を親元へと帰す。

「あ、ありがとうございます……本当に……本当にありがとうございます!」

「……礼なら俺の所に放り投げたあのウマ娘に言う事だな ま、『この後』礼を受け取れる状況になるのかは見物だけどね」

フードの男の興味はすっかり柵の向こう側に居るオグリの『その後』に移った様で、隠れている目元には爛々とした輝きが覗いていた。

「……よし、ゴリラさん 私と『遊ぼう』か?」

「ホアッ! ホアッ! ホオオオッ! (ドンドンドンドン)」

オグリの言葉に胸を叩く『ドラミング』で『遊んで欲しい』と意思を示すゴリラ。

その思いを汲み取って笑顔を見せたオグリとの『じゃれ合い』が今、始まったのであ

る。

「ホアアーツ!! (ブンツ!!)」

「(正面からのストレート… 受けたら) 折れる… ならっ! (ギュルンツ!)」

「へえ、スリッピング・アウエイ… 灘で言う『弾丸たますべり』か 俺程じゃないけど中々の練度じゃん」

「ホアツ!? ホオオーツ! (ブンブンツ!)」

「『当たると思った物が当たらない』から混乱して雑な手振りだ… この程度だったら (フワツ… ゴツ!)」

「脱力… 『変水』で効かない感触を刷り込んで軽くパニック状態にし、その後来る雑な打撃には『硬筋術』で問題無く対応か… ウマ娘の身体能力を差し引いても見事なモンだ… ちゃんと防御のイロハは学んでるんだな」

フードの男はオグリが相手に対してどう立ち回ってるのかを正確に把握し、その後の動きも決して致命打を受けない様に徹底しているのを確認して感嘆の声を上げるも… ふと、違和感を覚える。

「何だ? オグリ… ウマ娘らしい温さを発揮して『攻撃せずに捌いてる』のは見てりや分かるが、まるで踊る… いや、『走っている』様な動きに見えて来やがった…」

「ホッ? ホオ!? ホオアーツ!! (ダツ!)」

「そうだった！ 殴り合う遊び〴〵なんかより 駆けっこ〴〵の方が楽しいぞ！！ 私と一緒に走ろうっ！！」

「ホアアアアー！！（ダッダッダッ）」

オグリは相手に対してずっと誘っていたのだ、『走り合いがしたい』という事を。

そして、オグリ^{遊び相手}の心情を理解したゴリラは嬉しそうな声を上げて彼女と 並走する遊び〴〵に心を切り替えたのだった。

「…マジかよ、荒ぶってたゴリラを宥めやがった いや、周りの連中も… この俺でさえも 遠巻きで見えてたつてのに何故かこの光景に 高揚感〴〵を感じてやがる オグリ^{アイツ}の足運びが『走り』を意識した途端にだ、コイツ〴〵はまさか…」

「ホッホッホッホアアアー！！（ダッダッダッ）」

「流石、力強い走りだなっ！ 小さい頃にお父さんと並走していた頃を思い出すぞ！！」

自身の中で 一つの結論〴〵を導いたフードの男が感情の見えない瞳を向け、楽しそうに走る彼女達の体力が尽きるまで、その光景を凝視し続けていたのだった…。

◇◇◇◇◇

「いや、楽しかったな ゴリラさんと一緒に走れるなんて今日は本当に動物園どうぶつえんに来て良かったよ」

「もうっ、オグリちゃん！ 心配掛けさせないで！！」

「そうだけ、オグリ！　大きな怪我がなくて良かったが、一歩間違えば大変な事態になってただからな!!」

ゴリラの心を見事に鎮めて戻って来たオグリに周囲の観客は惜しめない拍手を送ったがフードの男の姿は消えており、代わりに居たのは心配と怒りが無い交ぜになった表情を見せる担当トレーナーと友人、そして動物園の職員の方々の姿であった…。

「済まない…二人とも　辛そうなゴリラさんを見てたら放っておけなくて……」

「職員さん達も『何とも言えない表情』してたがお叱りは無しだったな　まあ…これに懲りたら今後、無茶はしないでくれよ？」

「うん…ごめん、キタハラ　帰ったらお母さん達にも今日の事を話してちゃんと叱られなきゃだな……」

「オグリちゃん…走る前は結構殴られてたけど、本当に大丈夫?」

「ベルノ、それは大丈夫だ　受ける技術は宮沢家の人達の闘いを見て覚えてたし、最近は幽玄つて武術家の人達に『かわし』つて技術^{ワザ}を習つてたから骨も筋も問題無いよ」

「そ、そうなんだ…でも、確かに『目立った外傷』は見当たらないし、オグリちゃんのお兄さん達がやつてる『灘神陰流』つて凄いなだね…」

「いや、ベルノ…今は『灘・真・神影流』なんだぜ　キー坊が若くして新たに興した流派でな……」

「ベルノ…キタハラはこの前、キー坊と会って意気投合したみたいだな 色々教えて貰ったから誰かに伝えたくてしようがないらしいんだ、付き合ってやってくれ」（グウー）

少年の様に目を輝かせて、*“新たな友人”*の紹介を行う担当トレーナーの姿に嬉しさを覚えたオグリは隣に居たベルノに話し掛けると共に豪快に腹の音を響かせた。

「えっ!? オグリちゃん…さつき私達が持つて来た食べ物、全部食べちゃったけど…またお腹が空いたの?」

「…すまない 予想外の運動をしてしまったからか、思った以上に体力を消耗してしまったようだ（グルルル）」

「……ベルノ、もう一回何か買いに行くか」

「はい、トレーナーさん! 今度はもっとお腹に溜まる物にしましょう!!」

悲しそうな顔でお腹を擦る担当、親友の姿を見て二人はいたたまれない気持ちになり、オグリに『そのテーブルで待つていて欲しい』と伝えると大急ぎでフードコーナーへと向かったのだった。

「…二人には本当に申し訳ないな 心配を掛けたばかりか、私のお腹の音で慌てさせてしまうとは……」

「『あれだけの動き』をやつてのけた後で『腹が減った』だけで済ませるのは流石、*“灘*

のウマ娘”だな やつぱりお前は面白いヤツだよ」

続く醜態を大切な人達に見せてしまった事により、流石にシヨックを受けてしまったオグリは下を向いていたのだが：突如、自分に掛けられた聞き覚えのある声に反応して顔を上げると：自分のテーブルの向かい側には何時の間にか何処かへ消えた筈の”フードの男”が座っていたのである。

「…また出たか 君は何者だ？ 何故、私が”灘の人間”だと知っているんだ？」

「個人的な事情でね：俺は灘神影流の技や使う連中を今、調べてる最中なのさ」

「お父さんやキー坊を狙い：その為に私を”人質”にでもするつもりか？」

「おいおい、俺がそんなクズに見えるつてのか？ 今日、お前に話し掛けたのは故意だが

…見掛けたのは偶然さ 俺の”心臓を”賭けてやつてもいい」

「”そんな物”は別にいらぬ…それで？ 君が私に話し掛けた理由はなんだ？」

オグリの言葉に男の口からは『クツクツ』と押し殺したような笑い声が漏れ出す。

最初は『バ鹿にされているのだろうか？』という思いがあったが、よくよく見て見ればその姿はどこか『哀しみ』すら感じられる様子だった。

「俺の心臓の”価値”を知らないとはおめでたい…いや、『話し掛けた理由』だったな

最初は『灘の男達全てに愛される娘』ってヤツがどれだけ能天気な顔をして生きてるのか一度、拝んでみたかっただけさ」

「宮沢家の人達はみんな優しく、私もみんなの事が大好きだ。みんなが私を愛してくれているのなら、私もその思いに相応しい存在でありたいと思っている」

「…正直、腹立たしいよ。お前は『愛されるべくして生まれた存在』だ。訪れる艱難辛苦すらもお前が『更に輝きを放つ為の越えるべき試練』でしかないだろうよ」

「…君は、今まで『報われない事ばかり』だったのか?」

「お前と違って俺が他人から受けた評価なんて『犬畜生以下』だ。そんな奴等の評価なんて、それこそクソ食らえさ。俺は俺自身の手で『存在していい価値』を作ってやるんだ」
相変わらず男の表情はフードで隠れて見えないが、オグリは対面する彼から『今にも泣き出しそうな小さな男の子』に近い雰囲気を感じ取っていた。

「そもそも、今日は『俺の幻魔拳』が霊長類最強にも通用するのか試しに来たってのに…まさか『お前に先を越される』とは思わなかったよ」

「『幻魔拳』…? 何だその技は…私は知らないぞ?」

「…まさか、知らないで使ったのか? お前の父親である宮沢静虎が得意とする『当てずして相手に幻覚を打ち込む』という、俺からすれば温い技だ」

「当てずして…あれか! 昔、お父さんが幻舟とかいうイヤな奴に放った『寸止めの蹴り技』だな!」

かつて、兄である熹一と闘った『葵新吾』の師匠であった『茨幻舟』、人間的には外

道と言っても差し支えない彼の仕打ちに怒った父である静虎が繰り出した『幻魔脚』……この時の事をオグリは思い出していた。

「『蹴り』……？ 幻魔を脚でも打てるのか、流石は静虎さんだ……ともかく、お前はあのゴリラ相手に幻魔を使って『魅了』を行い、大人しくさせたのさ」

「だから待ってくれ、私はあのゴリラさんと一緒に走りたかっただけで、お父さんの技を使った覚えなんて無いんだ」

「ハツ……だつたらお前は『走る時に無意識で幻魔を使ってる』つて事だろ？ やつぱり、お前はズルいよ 相手を傷つけずイメージを植え付けるだけでも温いのに、折角闘う意思を持った獣の戦意を奪う幻魔なんて欺瞞もいい所だ」

「……本当に意識した覚えは無いんだが、もし『そうだった』としたら……私は『嬉しい』な」

「えっ?」

「そうじゃないか? 君は『優しさを罪』と言った……私はそうは思わないが、優しさの所為で傷付く人も居るのは重々承知だ それは『優しくできない』人が居るからで、そんな人達が私の走りを見て『優しい気持ちを思い出してくれる』なら、それはとても意義のある事だと思う」

「……………」

「私は今まで自分の為にだけ走っていたんだが……君との会話で『新たな目標』を見つけられる事が出来た 本当にありがとう」

オグリの言葉に男はフードを更に目深に被り、下を向いていた。

僅かに震える彼の身体から感じるその感情の正体は果たして『憤怒』か『歓喜』か……はたまたその『両方』であったのか、オグリは読み取る事が出来なかつた。

しばらくすると、男は顔を上げて『何ともない』といった雰囲気をおグリに対して向ける。

「……話を通じないな 多分だが、俺とお前は『相性が悪い』 お前の言葉に俺が共感する事は無い上、今だってイラついてしょうがないんだからね」

「そうか？ 私は最初、君の事を『イヤな奴だな』と思っていたが……話している内に『仲良くなれるんじゃないか』くらいには思えて来たぞ？」

「ハッ、下らない 『幻魔の実験』は必要なくなつたし、場も白けたんで俺はもう帰るよ……そうだ 最後に一つだけ聞かせろよ」

「？ どうした？」

「ゴリラから子供^{ガキ}を助けた時……何で『俺に向かつて』投げたんだ？」

「それは……あの場ではきつと『君が一番強い人』だと思つたからだ それに……さつきも言つたと思うが、君は私の親戚の叔父さんに似ているんだ その人も悪い人ではあるん

だが：『女子供に危害を加える真似はしない』を美学ホリシにしているから多分、大丈夫だろうなと思つてな」

「ハッ！ まさかの『勘』とは恐れ入つたよ それと、俺もさつき言つたが：鬼龍あの男に似ているのは『光栄』な事と思つてるんだ 同時に、凄く『ムカつき』もするがね」

「その反応からするに、君は鬼龍おじさんの『息子の一人』なんだな？」

「なに、いずれは『唯一の息子』になつてやるさ 何故なら、俺の名前は——」
その言葉と共に男は遂にオグリの前で被つていたフードを取る。

すると、其処にあつた顔は——

◇◇◇◇◇

「オグリちゃん、ごめん！ 時間も時間だからどこも混んじやつてて：：待つた？」

「いや、大丈夫だよベルノ むしろ並ばせてしまつて悪かつたな」

「何言つてんだよ オグリは今日、この動物園で一番の『目立つ動物』になつちまつたんだ 動き回つちやあ、見に来たお客さんも混乱しちまうぜ？ ほら、飲み物」

「ふふつ、それもそうだな ありがとうキタハラ、喉もちょうど渴いていたし頂くとするよ」

笑顔で戻つて来たベルノと北原に同じく笑顔を返すオグリであつたが時折、空席となつている自分の前の席に目をやる様子があつた。

「ん？ どうしたオグリ…前の席が何か気になるのか？」

「……『残気』がはつきりと見えるんだ 帰り際にわざわざ残していくなんて、随分と『目立ちたがり屋』なヤツだと思つてな」

「えつ…『気』？ 確かに…言われてみればオグリちゃんの前の席、何か『イヤな感じ』はするけど……」

「ウマ娘のベルノでもその程度しか分からないんじや、俺にはサツパリだな……」

「済まない、二人とも…変な事を言つてしまつて じゃあ、せつかくテーブルに食べ物を持つて来てくれたんだ 皆で食べてしまおうか」

「お！ そうだなっ!!」

「えつと…それじゃあ、私はどれに手を付けようかな……」

オグリが話題を変えて食事を始める三人であつたが、当のオグリは食事に集中出来なかつた。

何故ならば彼女の脳裏には相手から受けた言葉による『幻魔』がこびり付いていたからであつた。

《俺の名前は『悪魔王子』だ オグリ、お前は女だから『ターゲツト』から特別に外してやるが…灘の男連中はその限りじゃない 奴等には俺という存在を嫌と言うほど刻

み付けてやるよ》

《その顔は…『ガルシア』か!? でも、その『髪の色』は…》

《似合ってるだろ? 『パパ』を意識して染めてるんだ》

《パパ…『鬼龍おじさん』の事か》

《その通り、俺がこれから行うのは『世界に俺の存在を認めさせる事』だ 方法は…まだ

考え中だけどね》

《『その行い』で無関係の人や私の家族に迷惑を掛けると言うのなら…私はお前を許さないぞ》

《そこなんだよ、基本的に『他人なんかどうだっていい』って思ってる俺が何故かオグリおを悲しませる様な真似をしたら『負けた』って気がするんでね…『直接的な暴力』はナシの方向で考えなくちゃならなくなったんだ》

《それなら別に良い、だったら私もお前を『親戚の一人』として…》

《だからと言って、お前と仲良くなるとゴメンだぜ? 悲しませはしないが…『嫌がる事』はしてやろうと思ってるね》

《…なっ!?!》

《ハハハッ! 『その顔』、傑作だねっ!! いや、いいぜ…今の俺は最高に『生きてる』って感じがするよ…決めた! やっぱお前『だけ』を『ターゲット』にしよう!! そ

うと決まれば今後の事を考えないと……じゃあなオグリ、 “また” 会おうぜ!”

そう言うのと瞬く間に消えた悪魔王子の『心底楽しそうな笑顔』を思い返し、オグリは食事の手を一旦止めて軽く痛んだこめかみを揉む事にした。

「オグリ、どうしたんだ？ 食事のペースが遅いなんてお前らしくないが……やっぱ、どこか傷めてたのか!？」

「そ、そうなのオグリちゃん!? 大丈夫!？」

「いや、違うんだ二人とも……ただ、私にしては珍しく『親戚付き合いの難しさ』を考えてしまっただけな」

心配する二人に問題無い事を伝えると気を取り直して食事を再開し、帰ったら『今日の事を家族に伝えなければ』と深く心に誓ったオグリであった……。

かしまし! カサマツガールズ登場

「ズズツ）…なんやこのブレンド、イケるやん この喫茶店は「アタリ」やな」

「成程…どれ、私も（クイツ）……本当だ 甘味と併せるよりも、『単品で完成してる』印象を受けますね」

「おっ！ 分かるか？ 「マーチ」ちゃん!! オグリのヤツもグルメなんやけど、コーヒーに関して『如何に食事に合うか』しか判断せんからな」

「フフツ…オグリらしいですね しかし、宮沢さんがコーヒーに「こだわり」を持つ方とは思いませんでしたよ」

「ワシはオグリと違て、基本的に食事を『栄養補給』としてしか見とらんのが…お袋の作ってくれた物や健康オタクの親父から教わった物には敬意を払つとるんや」

「『最強』になる為に必要なのは『ストイックさ』と『度量の深さ』…という事でしょうか？ 久しぶりにお会いしましたが、勉強になります」

「相変わらずカツタイ娘っ子やのオ、マーチちゃんは…まあ、変わつとらんで安心したわ」

宮沢熹一とカサマツ時代のオグリキャップの好敵手であった「フジマサマーチ」は

現在、カサマツの喫茶店にて席を向かい合わせで座り、久しぶりの再会を懐かしんでいた。

「イヤ……よく見たら『髪切つとつた』な 走りを追及する為にか?」

「いえ、これは本当に……『色々』あつてです 宮沢さんこそ、髪を伸ばしたんですね?」

「ちやうで、ワシのは『ヅラ』や 外出るにも中央行つてからは更に野次ウマ、野蛮人がぎょうさん押し掛けて来てのオ……鬱陶しいから変装しとんねん」

「そ、そうだったんですね……」

不服そうに語る熹一の姿は『NEO宮沢熹一』の物であり、マーチは『普段の姿』とのあまりの雰囲気の違いに驚いていた。

「まあ、ワシの事はエエねん それより今日はワシ等兄妹とベルノちゃんが中央行つてから久し振りの『呼び出し』や しかも、御指名はワシ『一人だけ』……理由を聞かせて貰つてもいいか?」

「はい、その……何と言えば良いか……『オグリの近況』を聞きたかつたんです」

「んつ? なんや、オグリとは今でも連絡取り合つとんのやろ? わざわざワシを呼び出す必要無いんやないか?」

「確かに……オグリとは今でも電話で話したり、この前は『これからどうすべきか』を相談されたのでアドバイスをした事もありましたか……」

「それ、ワシも聞かされたで 『日本一のウマ娘になれ』…やろ? あの日はワシも夜回りしとったが、オグリアイツが良い笑顔しとったのは良く覚えとるわ…。」

「お恥ずかしい限りです あの時は『頼られた』という嬉しさもあり、好敵手ライバルと認められた相手の見せた『弱み』に滾あってしまつた事もあつてつい、あんな事を言つてしまつて…」

「トレーナーだつた北原さんや、家族ワシ等にも言えん事を相談出来たのがカサマツでの好敵手ライバルやつたマーチちゃんや…:そんで『百点の答え』をやれたんなら上等やん お蔭さんで今のオグリアイツは『やる気十分』や、本当に感謝しとんのやで?」

当時を思い出して気恥はずかしさを見せていたマーチに対し、熹一は穏やかな笑顔で礼を述べる。

「御家族からそう言つて貰あけると、大変ありがたいです そもそも…:私も最初から最後までオグリに対しては他の皆の様に『友好的』とは言えない態度でしたので、競うべき相手に対し『失礼』だつたのではないかと…」

「何言つとんねん、マーチちゃんが『真正面から』バチバチにぶつかつて来てくれたお蔭でオグリはアスリートとして一皮?けたんや ワシから見れば立派な『盟友』の一人やぞ」

「…:ありがとうございます」

「それに何や、『失礼』言うなら『カサマツ三人娘』のが相当やつたで 特に『ノルン』

のヤツはオグリを物置に寝かせようとしたってな、『シンデレラの継母』かつちゅうの
 ！」

「…『ノルンエース』の仕打ちか オグリ本人は気にして無いようで…むしろ『広い部屋で嬉しかった』と言つてたそうですよ」

「知つとる知つとる、そんなんオグリから『ワシ等の神戸の実家が狭い』言われてるみたいでシヨックやつたわ…実際、狭いんやけどな？」

「ああ、ノルンと初めて会つた時に『何とも言えない』表情をしてたのはその所為だったんですね」

「まあのお…今じゃヤンキー娘の『ルディレモーン』…イタズラつ娘の『ミニーザレディ』共々、オグリの大切な友人^{ダチ}でワシに勉強を教えてくれる『先生』みたいなモンやからな 昔の事は大目に見といたるわ」

そう言つてため息を溢す薫一に『気になるワード』を拾つたマーチは質問を行う。

「…『先生』？ あの三人から何か習つてるんですか？」

「マーチちゃんも教わつとるやる？ 『イマドキの女の子』がやつとる流行りの遊びつちゅうヤツや」

「…確かに…そうですね この前も『プリ』とやらに誘われたのですが、正直『写メで十分じゃないか？』と思つて必要性は感じませんでした」

「やっぱそう思うか!? ワシもこの前、試しにやらされたんやが…目をデカくされたり、周りをキラキラされた挙句に出来上がったモンに『キモイ、怖い、新手的クリーチャー』とか言われたんやぞ! オグリの友人ダチやなかつたら怒鳴つとったわ!!」

「…見事に『玩具』にされてますね、お疲れ様です」

「…皆、『根がエエ娘』なのはそこそこ付き合っても長いから分かつとるし、ワシも修行一筋で女の子とマトモに遊んだ事が無かつたからのオ…何だかんだで『社会勉強』出来とるからあの娘等にも一応、感謝はしとる」

「私も『似た様な物』です 自分でも少々『世間ズレしている』という自覚はあつたのですが…あの三人と関わっていると思つた以上にそのズレが大きかつたのだという事に気付けて…正直、有難いとは思っています」

「薫一の今までの経歴に共感を覚えたマーチは彼の言葉にシンパシーを感じて同意を示す。

「ベルノちゃん辺りとも買い出しなんかでたまに出掛けるんやが、あの娘こは逆に気い使つてくれるお蔭かあんまりワシに指摘してくれんし、オグリに至つては家族の中で一番の『天然さん』やからな……」

「世界最強の称号を持つ男に物を教えられる『先生方』か……大切にしないといけませんね」

「おうっ…不本意ながらやけどな…って、『噂をすれば影』やんか」

マーチが熹一の言葉に反応し、入り口付近を見ると其処には確かに『噂の三人』が来店しており、二人を見かけるとテーブルに近づいて来た。

「やつほー、マーチじゃん？　こんなトコで『イケメンとお茶』なんてスミに置けないねー、このこのっ！」

「イヤ、待てよノルン　まさか『コイツ』…霧囲気違うけど、キー坊かつ!？」

「えっ？　ルデイ、なに冗談…ってマジじゃん！　うわー、『変装しての密会』なんて超スクープ！　写メ撮って週刊誌にリークしよ（ピロンピロン）」

熹一と共に居るマーチへ気さくに話し掛けながら茶化す『ノルンエース』と隣に居た男が熹一と気付き驚く『ルデイレモーン』、彼女の言葉でイタズラ心に火が付いた『ミニーザレデイ』が楽しそうに二人を撮影する。

「ちよっ、やめなつてミニー！　キー坊のヤツ、あーし達が見た中で未だかつてない位『不機嫌な顔』してんだけど!」

「お前等は『相変わらさず』やのオ…ミニーは今すぐ撮った画像消せや　マーチちゃんに迷惑も掛かるし、何よりワシは『今の姿茶化されんのが』一番嫌いだな　万が一、写真が記者の手に渡るとなったらその記者と『話し合い』せなアカンねん…分かってくれるな…?」

「…ウス、分かりました ホラ、この通り消したんで機嫌直してよ…ねっ?」

「それでエエ…前にタマにも『今みたいなの』迷惑掛けたしな、メディア関係っちゆうんは思った以上にシヤレにならんねん」

「しっかし、なんだあ? キー坊も変装…だよな? そんな恰好してマーチと何話してたんだ?」

「おうつ、『オグリの近況』をちよつとな…折角や、お前等にも話しとくか 練習帰りなんやし時間あるやろ?」

「えっ、そうだったん? なら…ちよつとだけ、あーし達もお邪魔しちやおつかな」

「そうと決まればマーチ、ちよつと席詰めなっ! 今のキー坊の隣って何か威圧感あつし、女子同士で座るぞ!」

「あ、ああ…分かった」

「えー、ルデイそんな事言つてたら『いつも通り』キー坊に奢つて貰えないよー」

「気にすんなやミニー、お前等の遠慮ない物言いこそ『いつもの通り』やろがい オグりに比べりや、お前等に奢るなんぞ文字通り『お釣りが来る』わ 残さんのやったら、何頼んでも構わんぞ」

「一」 さつすがキー坊、太つ腹! 「二」

若干、呆れの色が見える熹一の微笑に三人娘は黄色い声を上げ、嬉々としてメニュー

を開くのであった。

「宮沢さん……良いんですか？」

「構へん、構へん　ワシ等兄妹が普段世話になつとる　『授業料』　みたいなモンや……マーチちゃんも制限設けとらんかったら、好きな物モノ頼むとエエわ」

「そ、それでしたら……来店してから気になつていた　『女子力アップゼリー』　という物を頼んでみたいです」

「ほお、コラーゲン豊富なヤツか……『若い内にケア怠ると年取った後キツイ』　つてお袋おかんも言つとつたしな　ワシもキミ等の　『将来』　に貢献させて貰おうかのオ……」

こうして三人の女子が加わり、　『姦しさ』　と　『華やかさ』　が増した店内で熹一達は笑顔でオグリ関連の話に花を咲かせるのであった。

オマケ１

「そういや今更だけどキー坊つてさ、何であーし達は呼び捨てでマーチやベルノには　『ちゃん付け』　なの？」

「そんなん、　『悪友』　と　『友人』^{ダチ}　で使い分けとるに決まつとるからやるが……せや、マーチちゃんの場合はトレーナーにもタメ口やのに、何でワシには敬語なんや？」

「いえ……それは、そのですね……」

「それはさー、あーし達がキー坊に会う前にオグリのトレーナーを交えて…つてか主催の『格闘技の鑑賞会』やったからなんだ」

「ああ、『アレ』な!? アタシ達は『人間が空中を飛びながら闘うとかありえねー!』とか笑いながら見てただけだよ…」

「ファンだった北原のオッサンが急に熱弁して来たと思ったら、何かマーチまで乗っかって来てさ……」

「いや、みんな! 宮沢さん達の『あの動き』は決してトリックでは無かったぞ!? あれこそが『鍛え上げたヒトが到達する境地』に他ならない! 若くして、そこまでストイックにトレーニングを重ねたであろう宮沢さんを私は心から尊敬しているんだ!!」

三人娘の意見とは逆に自分の闘いを熱く語るマーチに照れが入ったのか、熹一は頬を掻いて視線を逸らす。

「まあ…アレやな あの時はワシも相手に引つ張られたつちゆうか…ワシを格闘家として成長させてくれた『親父』あの人には感謝しとんのや」

「はい、私もです…競い合いで成長したのはオグリだけじゃない、私も一緒ですから! お陰で『新たな目標』を定める事が出来たんです!!」

「んっ? 『新たな目標』言う事はマーチちゃん、まさか……」

晴れやかな顔で迷いの無い瞳のマーチに熹一が何かを察して声を掛けようとした時

である……ノルン達が二人の間に屈託の無い笑顔で割り込んできたのだ。

「イヤイヤ、二人ともさー そんなマジメな顔やめて笑顔でコツチ寄ってよ?」

「そうそう、今からオグリ達に『アタシ等元気してっから!』って写メ送ってやんなきゃだからよ キー坊も今回は特別に入れてやつから」

「ただし、近づき過ぎたらここの支払いとは別に料金発生するから注意しなよ……?」

「……おうつ、せやったらワシも参加させて貰おうかのオ ホレ、マーチちゃんも笑って行こうやないか」

「……はい! ところでみんな……どういう風に並べば良いんだ……?」

語るべき事は『次の機会まで』と心を切り替えた二人は三人娘からの提案に応じ、笑顔で写真撮影に臨むのであった。

オマケ2

同時刻・都内のファミレスにて――

「……あの、先程は危ない所を助けて頂いてありがとうございます」

「……拳句、こうやってご飯まで奢ってくれるのは有難いが……『今回は』何を企んでいるんだ?」

「おいおい、『親戚』が友達共々ピンチだったら助けてやるのは当たり前だろ? お前

の中で俺はどういう立ち位置なんだ？」

「ケツ…… 偶に現れたらオグリんに嫌がらせかます “メンドクサイ弟” みたいなモンやんか! 今回、ウチ等にちよっかい掛けて来た野蛮人をとっちめてくれたのには感謝しといたるが……お前の事を信用したワケやないからな!!」

「おいコラツ、タマモクロス 口の利き方には気を付けるんだな ファミレスの支払いをお前だけ自腹にする事だつてできるんだぞ」

「上等やんつ! ちいーと金持つてるからつてウチに対してそう簡単にマウント取れるとは思うんやないぞ?! おうつ、コラ! “悪魔王子” サンよお!!」

オグリキヤップ、ベルノライト、タマモクロスの三名の前に座るのはオグリが中央に移籍してから度々出没する “親戚”、悪魔王子であった。

初めは余裕を持った表情でオグリ達に向き合っていたが、タマに喧嘩腰で話し掛ければとすぐにバ脚を現して食って掛かる姿勢をみせるも、それをオグリに咎められたのである。

「タマも悪魔王子もお店の中でケンカはやめるんだ “キー坊の時” みたいにまた、何も食べれずに追い出されるのは私はイヤだぞ?」

「……チツ これ以上はオグリが『悲しむ』からここまでにしてやるか」

「……しやーない、オグリんに免じて今回は鉾取めといたるわ」

「ありがとう、二人とも」

「(やつぱり、オグリちゃんつてすごいなあ…)あの…悪魔王子さん、ですか？ 今日の格好なんです、私が、私が、知ってる姿」とは違って…イメチェンしたんですか？」

悪魔王子とは今回が初対面となるベルノであったが、以前からオグリ達によつてその容姿や性格は聞かされていた物の、*「実物との差異」*に戸惑つて本人に理由を尋ねる事にした。

「ベルノライト…ベルノでいいか 今日、の格好だが、似合うだろ？ *「この姿」*こそ俺の名前に相応しいと思つて今回は着替えて来たのさ」

「うん…見れば見る程『若い頃はこんな感じだったのかな？』と思えるな」

「ホンマ、*「鬼龍のオッサン」*によお似とるわ…まじまじ見んかったら本人と見間違うくらいやな」

悪魔王子の遺伝子提供者…*「父親」*である宮沢鬼龍の格好をした彼はオグリ達の感想に『*「ご満悦」*』といった表情を見せる。

「この格好でお前等を助けてやつたのも俺が『パパの息子である事』をアピールする一環さ 悔しいが俺の評判はまだパパに比べて下なんでね、むやみやたらに悪党共を支配下に置くよりも効率が良い方法を選んでいるんだ」

「今回オグリんにちよつかい掛けて来たんは『鬼龍のオッサンに潰された裏カジノの報

「復」やったか…わざわざ姪っ子狙うとはしよーもない連中やで」

「珍しいなタマモクロス、同意見だぜ そんなクス共を恐れてるパパの姿でぶちのめすと躰けられた犬ツコロみたいに従順になって支配しやすくなるんだ 今回の連中は少なくともお前等ウマ娘には手を出さない様に再教育しといてやるよ」

「……『暴力で回っている世の中』っていうのも真理なのかもしれないけど、なんだか悲しいですね」

「ベルノ、お前みたいなの『優しいヤツ』は俺等の領分に近づくんじやないぞ 精々、力ある弱者」の陰にでも隠れて過ごすんだな」

「…えっ?」

「小声）ベルノ…つまり、『キー坊やお父さん見たいな強くて優しい人達に守って貰うと良い』と言ってるらしい 会って話すと分かるんだが、悪魔王子は鬼龍おじさんみたい」

「聞こえてるぜ、オグリ 俺もウマ娘程じゃないが耳は良い方だね…とんだ風評被害だ俺は別にウマ娘がお前等どんな目に遭おうが知ったこっちゃやない その事を忘れるんじゃないぞ」

悪魔王子の発言にベルノは『困惑』、タマは『胡乱気』、オグリは『諦観』の表情を見せるも本人は気にしない態度を崩さなかった。

そんな「ガキ大将」振りを發揮する男にどう話題を振るべきか彼女達が考えているとオグリとベルノの携帯にメールの着信が鳴り、開くとカサマツの友人四名と熹一が一緒に写った写真が添付されていた。

「オグリちゃん、「コレ」って…」

「ああ、ベルノ……コレは「羨ましい」な みんなキー坊と楽しそうにしてるし、テーブルには美味しそうな物でいっぱいじゃないか」

「…えっ!? 「そっち」!?」

「ベルちゃん、オグリんは昔っからズレとる所あるんでそない気にする事ないで…って！ キー坊のヤツ「NEO宮沢熹一」やんっ!? アツハツハツ！ こらウケるわあ！」

「何だ？ 俺にも見せてみるよ……ふうん、今日の「遊び」は決まったな おい、お前等…俺達も写真を撮って送り返してやるぞ」

「「えっ!?」」

送られて来た写真を確認すると突如として「遊びの提案」をして来た悪魔王子に驚きの表情を見せる三人であったが、提案者はどこ吹く風で遊びの理由を説明し始める。「折角、「可愛い妹達」が居るつてのに他所の女達とヨロシクしてる兄貴にお灸つてヤツを据えてやろうと思つてな どうだ、やってみないか？」

「小声）ベルちゃん…どないする？」

「小声）写真を送る位なら問題ないと思いますけど…オグリちゃんが何て言うか」

「…よし、分かった 私達も写真撮影をしよう」

「!？」

「何だ、てつきり『兄貴が心配するからイヤだ』位の事は言うかと思つたが…構わないんだな？」

「ああ、構わない キー坊が私達抜きでみんなと遊んでるのもちよつとだけ悔しくはあるが、それ以上に悪魔王子…『お前と一緒に写真を撮つてみたい』と思つたんだ」

「…何だと？」

オグリのまさかの参加理由に高い知能を有する筈の悪魔王子の脳内は処理落ちを経験し、返答に若干の遅れを見せてしまった。

「お前の言葉の端々から『家族写真』なんて撮った事が無さそうだったし、お前の言う通り『せっかく』だから記念撮影をしよう タマ…ベルノも構わないか？」

「…オグリんの『そういう所』、ウチも嫌いやないし…エエわ、付き合つたる！」

「オグリちゃんが良いつて言うなら、私は別に構わないよ」

「…二人から許可は貰えたから、後はお前だけだ 私達と一緒に写真を撮つてくれないか？」

提案する立場が何時の間にか『逆転』している事に気付いた悪魔王子は苦虫を噛み

潰した様な表情を見せるも、渋々と言った様子でオグリからの提案を飲む事にした。

「…いいぜ、〃特別に〃許可してやるよ」

「そうか、ありがとう」

「やっぱりお前は〃面白い女〃だが…同時に〃腹が立つ女〃でもあるな」

「なんだ、そんな事か カサマツに居た頃から私は『似た様な事』を言われてたんだ…もう慣れたよ」

こうして四人の不格好ながらも初めての〃記念写真〃は無事撮られ、兄である熹一の元へと送られたのであった。

その後、写真を見た熹一がカサマツから大急ぎで都内へ戻り、悪魔王子との激闘を繰り広げる事になるのだが…その話は割愛させて頂く。

オグリ・ラッシュの謎を追え

中央、生徒会室——

「宮沢熹一さん……本日はこちらにお呼び立てして申し訳ありません」

「構わへんよ、会長さん　ワシも今日はアンタに用事があつたんやしな……けど、ワシは親父おとんと違ちがて、〃礼儀正しく〃すると直ぐにボロが出るんで普段通りで失礼するで」

「ええ、構いません　貴方は私よりも年長者である上、畑違いとは言え、頂点に立つ者の一人ですので……畏まった態度を取られても逆にこちらが委縮してしまいますよ」

「せやったら、会長さんも敬語を取って『キー坊呼び』で頼むわ　ワシもアンタと固つ苦しい雰囲気はゴメンやし、オグリと話しとる時の少しだけ砕けた感じや、〃ピリツ〃とした感じが好きなんや（ニツ）」

「であれば……『キー坊』　今日は、〃相談〃があつての呼び出しだが、個人的に君との会話を心待ちにしていたんだ　有意義な時間となる様、宜しく頼むよ……これで良いだろうか？（ニコツ）」

「おうっ！　〃それでこそ〃　会長さんやで！　こつちこそ今日はヨロシク頼むわ!!」

生徒会室に招かれ、現在はソファに座る熹一とテーブルに置かれたコーヒーから立ち

昇る湯氣にの向こうにいるのは今回の呼び出し人であり、中央の生徒会長である。『シンボリルドルフ』。

当初、彼女が客人を招いた側：女主人^{ホステス}としての態度を一巻する心積もりであった事に気付いた熹一は『肩の力を抜いて欲しい』事を遠回しに伝えると彼女はそれに応え、礼の意味を込めて笑顔を送り、熹一も人懐っこい笑顔を返すのであった。

そして、そんな二人の間：厳密には熹一の両隣に腰掛ける二人が感嘆の息を漏らす。

「やっぱ『師匠』のコミュカつて半端ねえな……氣い使わせねえ雰囲気にするのが上手えし、それでいて無駄に空気を緩ませねえんだからよ。『龍星』もそう思うだろ？」

「それは俺も思うけど……『姫次』はもうちよつと会長さんに敬意を払えよ。立場的に『俺達みたいな人間』を受け入れてくれてる側の一人なんだからさ」

熹一の叔父に当たる宮沢鬼龍の息子である鬼塚姫次と長岡龍星：中央のトレーナー資格を持つ彼等が熹一を挟んでの談笑を始めようとしていたので熹一から呆れた様な声音で指摘が入る。

「つたく……お前等まで気を緩ませんのに加担してどないすんねん。会長さんを見てみたい、『坊主頭三人が並んでバ鹿やつとる』って笑いを堪えとるわ」

「げっ。あ……何か、スンマセン」

「いやっ。本当に申し訳ありませんでした！。ほぼ『身内だけの空気』に当てられてと

んだ失礼を……」

「フフフツ……いや、気にしないでくれ 君達のように『強い者』がいがみ合う事も無く、仲良くやれている姿を見れるのは私としても嬉しいんだ」

「んな事ねえって会長さんよ 良い子ちゃんの龍星はともかく、俺は隙あれば武術家として『打倒、宮沢熹一』を狙ってたんだからな」

「何言ってるんだよ姫次、俺だって目標は同じさ……けど、今日みたいに熹一さんのトレーニング中に『仕掛ける』のはナシだろ？ お陰で普段以上に顔を腫らす羽目になったんだからさ」

「…オグリが『バーベル500キロ上げられた』なんて聞いたら兄貴としてせめて『半分でも』と気合入れとる最中に襲い掛かって来たんじや、今日一日マトモに飯は食えんと思うからそれで反省しなさい」

「フツ…フフフ…ハハハツハツハツ!!」

親戚関係である『坊主頭三人組』の物騒ながらも気の置けない会話、特に腫れあがって四谷怪談の『お岩さん』を思わせる容貌になった姫次の顔にルドルフは耐え切れず、遂に彼等の前で大声で笑いだしてしまった。

「イテテ…そんな笑うこたあねえだろ？ 会長さん」

「いや、『問題行動』として扱わずに笑うだけで済ませてくれてるんだから姫次はもつ

と感謝しろつて……」

「スマンのオ……会長さん 男……特に『格闘家』というのはこの通りバ鹿ばかりで、アスリートとしては理解できん所もあるとは思うが……指導したワシも含めて勘弁してくれや……なつ？」

「……いや、笑つてしまつて済まないな姬次 確かに『暴力沙汰』ではあるのだがキーク坊、君達にとつての『コミュニティション』であるという事は我々も理解しているんだ最早、中央の『日常風景』となつているし……他の者の迷惑にならないか、外部の目に入らなければこちらとしても君達にとやかに言うつもりはないから安心して欲しい」

「ふーっ……会長さんの器が大きくて助かつたわ」

「……誓つて、大きな騒ぎにはしねえよ 悪かつたな、会長さん」

「……中央の寛大な処置に心から、感謝します」

「龍星は相も変わらざるの見た目に反した礼儀正しきさだな 時には慇懃無礼な面も目立つが、それも『敵の前』でだけだ 君のデータ型の指導法で助けられている者達が居るのは聞いているが……まだ担当を持つ気は無いのかい？」

「はい、俺もまだ学びの途中ですので……今は『その時』の為に勉強を続ける事にします」

「……そうか、分かつた さて……三人とも話が逸れてしまつて済まなかつたな 今日の

“本題”に入るとしようか”

雑談の空気が切り替わり、若干身体を固くした三人にルドルフは穏やかに微笑みかける。

「何、目の前に出された珈琲でも飲んでリラククスして聞いてくれて良い……とは言っても『内容も内容』でね、ある種の“専門家”である君達の意見を聞きたいんだ”

「会長さん、この面子で“専門家”つてえと……“荒事”の話かい？」

「姫次 だったら静虎さんや鬼龍、呼べれば尊鷹さんもまとめて呼んだ方が良い……それに『ある種の』と前置きも付いてるんだ、そこから分かる“俺達の共通点”と言えは……」

「成程のオ……『裏の事情を知つとる』面子つて事か 今は縁をキレイサツパリ切つとるが、ワシ等も少し前までは“そういう連中”と関わりを持つとつたからな”

「あれ？ 薫一さんこの前、俺やオグリさんと一緒に“ダンプ松木”さんと一緒に焼肉に行きましたよね……って、ダンプさんはもう“堅気”だったか”

「娘さんの治療も終わったのにもう裏稼業に居る理由も無いやろ 連れ戻しに来たバ鹿タレ共もワシ等で片付けたし、今のアイツは全力で『優しいパパさん』をやつとるからエエねん”

「オイオイ、だから二人とも話を脱線させんたって……で、会長さんは『裏稼業の話』が聞

きたいのか？ だったら、鬼龍に聞いた方が手っ取り早いぜ 何せアイツは俺等と違つて“現役”だからな」

「…聞きたいのは正しく“そういう話”なのだが…鬼龍あの人に直接訊くのはリスクがあつてね」

姫次の指摘に同意を示すルドルフであつたがその言葉の歯切れは彼女にしては珍しく悪く、三人は頭に疑問符を浮かべていた。

「…私もまだ『仮説』の段階ではあるのだが、取り敢えずは“この映像”を見て欲しい話し合いはそれからしよう」

そう言つて彼女は立ち上がると部屋のカーテンを閉めてプロジェクターとスクリーンの準備を行う。

「なんだ、動画でも観るのか？」

「そうらしいけど…どんな内容だろう？」

「会長さん、コレ『喋つたらアカン』ヤツか？」

「大丈夫だ 音声を遮らないのであれば好きに喋つてくれて構わないよ」

全ての準備が終わつて遂に映し出される映像、その内容とは――

【私は“キャプテン・マッスル” このメールを受け取り、開いた君は選ばれし者 〃 100万ドル〃を掴むチャンスを与えられた速きウマ娘だ】

「…何や、この『ムキムキのホラーマスクマン』は？」

「マスクの出来はともかく、デザインセンスはパーティーズグッズレベルなんですけど…」

「冒頭からして明らかかなスパム・メールだろ…」

【単刀直入に言うのと、日本に居るとあるウマ娘と戦って欲しい 名はオグリキャップ
通称オグリと呼ばれ、『怪物』の異名を持つ葦毛の少女だ もちろんめちやくちや速
い】

「…こりやあ、オグリを的にした『嫌がらせ』か？」

「それで本当に100万ドル(約1億円)出せるんだったら結構な資産家なんでしょうが
…気に入らないな」

「せやな 特に今の説明でオグリの『カワイさ』を抜かしとる所がいっちゃん一番気に入らんわ」

「(そつちか(よ)……)」

【オグリと戦うといってもウマ娘らしく当然勝敗を決めるのは『レース』でだ 万が一
にも表のスター選手である彼女を傷付ける行為はNGだぞ ぶつちやけ今後の活動に
支障をきたす様なハードなヤツはこつちだつて見たくないからなあ！】

「何だコイツ…いきなり日和った事言い出しやがったぞ？」

「……いや、怪我とかを考慮してくれるならこつちとしては別に構わないんだけど」

「……………」

「さあ、走りに自信のある者は今すぐ日本に行け！ オグリを打ち破れ！ 乗り遅れるな、100万ドルを掴むんだ！ “オグリ・ラツシュ”だ!!」

その言葉を最後にマスクの男：“キャプテン・マッスル”と名乗るその人物がポーズを決めた後、動画は終了した。

そしてルドルフは部屋の明かりを点け直した後、一息ついてから三人へと向き合う。

「……以上で“私が手に入れた分”の映像は終了だ」

「ちなみに……会長さんはどうやって今の映像を手に入れたんや?」

「それは勿論、この“オグリ・ラツシュ”とやらの参加者から頂いたのさ」

「……なっ!?!」

「……今の動画の内容からしても主に海外の“金が要る”ウマ娘へ発信してるのは明らかやしな 大方、会長さんはその中の一人に『案内』でも頼まれたんやろ?」

ルドルフからの情報源の入手方法に他の二人は驚いた様子であったが、熹一は『納得した』という表情で続きを促す。

「正しく、その通り 私に話し掛けて来た彼女の言い分では『学も無い、国では立場も無い……それでも“走り”だったら誰にも負けない』と豪語していてね……その様な身の上で単身オグリ探していたんだ 『私に勝てたのなら会わせよう』とつい、約束してしまったよ」

「…で？ 会長さんの性格や 当然……」

「ああ、意気込みは立派であったが『日本に居る私の事を知らなかった』以上は『井の中の蛙』にしか過ぎない 然るべき運動場へ案内した後、完勝させて貰ったよ」

笑顔で語る彼女の風格は正しく日本に君臨する『皇帝』に相応しい物であり、その身から漏れ出す覇気に話を聞く三人の身体は高揚感を伴った震えを感じていた。

「フツツ…やはり有難い物だな、私に対して『委縮しない存在』というのは 私だつて出来ればキー坊の様な『他者を威圧しない』立ち振る舞いを身に付けたいのだがね……」

「いえいえ、会長さんは熹一さんみたいにフラフラ出来る立場じゃありませんからね
『今くらい』が丁度良いですよ」

「そうだけ それに熹一この人の場合、天然で『舐められる雰囲気』出してるからな 身に付けようと思つて身に付けられる物じゃねーつて」

「お前等、言いたい放題言い腐りおつて…話を戻すぞ 会長さん、さつきは『私が手に入れた』とか言ううとつたが他にも『案内』を頼まれた娘が居るつて事か？」

「そうだな 『マルゼンスキー』に『ミスターシービー』…『暇を持て余した強者』に關わつてしまつたお蔭でオグリまで辿り着けなかつた者達は何人か居た様だ」

「制服を着てるつてというのが外国の人から見れば『同じに見える』つて事なんでしょうか？」

「中央は会長さんを始めとした強者達が集まる『武装国家』みてえな所あるしな 金目当てを主軸にしてるお上りさんが迂闊に近づいて良い場所じゃねーって事だな」

「オグリ・ラツシユ」に集まった者達の行き当たりばったりとも言える行動に龍星と姫次の二人は溜息を付くが熹一の方は何かを考えている様子であり、ルドルフもそれに気付いたのか声を掛ける。

「そう言えばキー坊…君も私に『用事』があつたのだつたな 良ければそれと併せて『君の考え』を聞かせてくれないか？」

「せやな…実は最近、オグリのヤツを学園の外で見かけると『戦つた気配』を感じる時があんのかや ワシが理由を訊いても『危ない事じゃないから心配しないで欲しい』の一点張りだな 今日の会長さんの話を聞いて『何をやつとるのか』は分かつたが腑に落ちん事があつてのオ……」

「それは…正直者のオグリさんが何故『理由を話してくれないのか』って事ですか？」
 「せや、オグリは基本的に後ろめたい事も正直に話す…と言うか、直ぐにバレんねん ワシ等家族にも伝えんって事は『何か』を隠してるとして事でのオ、それが分からんのかや」
 「…『走る事自体』は後ろめたくねえと思つても『走る理由』に後ろめたさがあるんじゃないのか？ 例えば…『身内の不始末』とかだよ」

姫次の唱えた説にそれまで三人の会話に加わらなかつたルドルフは頷いて肯定の意

を示した。

「うむ、今回の『オグリ・ラッシュ』という名の騒動だが…私は宮沢鬼龍が『主催者』ではないかと考えているんだ」

「成程ねえ…そりや、鬼龍あのみに『直接尋ねる』には色々リスクがあるわな」

「確かにオグリさんに…『女性に怪我をさせない配慮』や『100万ドルを気軽に出せる財力』なんかは鬼龍アイツらしいと思いますけど何だつてそんなマネを？」

「……これもあくまで予想でしかないが、私は『中央のレベルを上げる為』ではないかと考えているんだ」

「いや、中央こじのレベル自体は選手も職員も相当な物モンだろ？ さっきも言ったが、ただの

『金目当て』で来る連中じやオグリはおろか中堅選手でも相手にならねえよ」

「いや、それなんだが…私達も圧勝こそ出来た物の競ったウマ娘達が見せた『独特な気迫』には感じ入る所があつてね 『純粋』に走る事こそ強さ』と信じて来た価値感に『不純』を極めた先に得られる強さ』を加えられたと言えば良いか…視野を広げる機会を与えられたんだ」

「まあ…ウマ娘には、特にトップ層には馴染みねえ感覚かもな 人間の格闘家なんか『強いヤツは大体悪いヤツ』なんて言われるくらい『欲』が直結してモチベーションになつてるからよ」

「姫次……それ」って俺も言われたけど鬼龍からの受け売りだろ？ 何か……ますます疑惑が深まって来た感じだな」

ルドルフの感想に鬼龍の息子二人が意見を出す事で『鬼龍黒幕説』が補強される中、熹一は瞼を閉じて思考状態に入っており、その姿からは『今まで自身に起きた出来事を思い返している』様子であった。

そして、それが終わったのか熹一は瞼を開くと話し合っていた三人に自身の意見を述べる。

「……皆、今回の件」やが　ワシは『鬼龍は関わってない』と思つとる」

「キー坊……理由を聞いても良いか？」

「いやな、ワシも若い頃……最近までか、詳しい理由は会長さんの前では伏せるが鬼龍のヤツに粘着されとつたんじや　で、経験から言わせて貰うと今回の^{ガキ}はまるで子供^{ガキ}みたいなの

「幼稚さ」が見え隠れしとんねん」

「オイオイ、何言つてんだよ？　鬼龍^{アイツ}はいい年こいて情緒面が子供^{ガキ}みてーな所があんだろ」

「……つまり、熹一さんは意識改革としての『中央のレベルの底上げ』なんか考えていない子供がやる様な『場当たりの悪戯』だと考えてるんですね？」

「強いて言えばその『両方』やと考えると　そもそも、あのオツサンはワシには兎も角オ

グリに対して試練を自主的に与える様なマネはせんし、オグリ自身が望んだのならお互いが身近な者^{モシ}に最低でも事後報告位はするやろうしな」

「言われてみれば確かにそうだな…キーク坊、他に根拠は？」

「実はのオ、心当たりがあんねん 最近になつてオグリ^{アイツ}に粘着しとる “鬼龍に似たヤツ”にはな」

「！ 熹一さん、 “そいつ” って……………」

龍星が今回の “首謀者” が誰かを理解すると熹一が彼の言おうとした人物の名をうんざりとした表情で続ける。

「おうつ… “悪魔王子” やろうな 会長さん…そいつはワシ等 “灘の親戚” に当たる男でな、現在はオグリにご執心なんや 大方、ちよつかい掛けるついでにオグリの『遊び場』のレベルを上げてやろう』とかゲーム感覚で中央^{ココ}にも金ちらつかせて人を呼んでんのやろ」

「…………十分、考えられるな 悪魔王子^{アイツ}の “幼稚さ” は鬼龍以上だ それでいて頭脳と暴力も老いている今の鬼龍以上だからタチが悪い 大方、『世間を知らない中央に “悪” を植え付けてやる』とでも思っているんでしようね」

「…なあ二人とも 俺はまだ会った事ねえんだが、そんなにヤバイ奴なのか？ その悪魔王子ってのは」

「俺が初めて会ったのはオグリさんと一緒に散歩してる時で『お前如きにオグリの隣を歩くだけの価値があるのか?』っていきなりアイアンクロー極めてきたんだ:オグリさんが止めてくれなかったら頭を本気で割られてたね」

「悪魔王子はオグリの『悲しむ顔』を嫌って自重する時もあるが、基本的にオグリの『困った顔』が見たくて暗躍しとる迷惑な男や それでいてワシが成敗しようと思っても『そこそこ』強いんでいつも逃げられるんでな:つたく、思い返しても忌々しいやつちゃ」

「:聞けば聞く程『お近づきになりたくないヤツ筆頭』って感じだな 俺としては今後とも会わない事を祈ってるぜ」

「成程:悪魔王子、か」

熹一の口から語られた悪魔王子という存在にルドルフが『今後、どのように対応すべきか』を考えているとそれに気付いた三人から各々の意見が出る。

「俺個人としては『清濁併せ持つのが健全』って考えではあるが:放っておくかどうかは中央の連中の判断に任せるわ これ以上、学生さんに『悪影響』が出んのもリスクがあるだろうしな」

「俺は純粹に競技に打ち込んでいる者達に対して半端に『ノイズ』を入れるなんて言語道断だと思っています 少なくとも今回の件に悪魔王子が関わっているのであれば曲

「がりなりにも身内に当たる俺達が動くべきではないでしょうか？」

「『そこ』なんや龍星……オグリが今回の件を誰にも相談しとらんって事は間違ひ無く悪魔王子が関わってるっちゆう信憑性が増す　つまりオグリが現状、『自分だけで対応するのがベスト』と考えとんのや」

「…何故、その様な判断をオグリが下したのか聞いても？」

「おうつ、会長さん　前にオグリから聞いたんじや、『悪魔王子は『寂しがりやの子供』みたいなんだ』つてのオ…そんなヤツが『オキニの子』と遊んでる最中に親が引き離そうと動いてきたらどうなると思う？」

「…間違いなく、『癩癩』を起こすだろうな　私も経験があるから分かるよ」

自身の幼少期…『ルナ』と呼ばれていた頃を思い返してルドルフは熹一の問い掛けに答える。

「なんや、会長さんにもカワイイ頃があつたんやな？　まあ…そんな癩癩持ちにオグリは真剣に向き合おうとしてんのやろ　親父に昔から聞かされてた『自己満足の精神』つてヤツでな」

「『静虎さんの教え』を守ろうとしてか……困つたな、尊敬する彼の話を持ち出されると甘い判断を下してしまいそうだ」

「悪魔王子の事は正直、『イケ好かんヤツ』とは思つとるがそれでも『灘の人間』やから

な オグリのヤツが『見捨てたくない』いう覚悟なら、ワシも最後まで付き合つてやりたいんじゃないや 頼む『ルドルフ』さん：しばらくの間でエエ、オグリの好きにやらせてくれんか」

「…ここで私を『名前呼び』しての懇願と来たか キー坊、やはり君は『ズルい男』だな 認めている人間からそこまで言われれば、首を縦に振らざる負えないじゃないか」

「…ホンマかつ!? 恩に着るで!!」

「何、聞けばその悪魔王子なる人物は居場所無き者達の扱いに長けている様だ 学園内では『シリウスシンボリ』がその役を自主的に担っているが、外に：外国にまで『その役割』を担う者が居てくれるとこちらとしても助かると思つていたんだ」

「…お言葉なんですが会長さん 悪魔王子はそう簡単にコントロール出来るヤツじゃないですよ?」

「龍星…恐らくは、そうなのだろうな だから私もキー坊の言う『しばらくの間』という条件で首を縦にした これ以上看過できない所まで影響が出るのであれば勿論、それに比した対応をこちらとしても取らざる得ないのでね」

「…会長さん、アンタやつぱりイイね 普通に生きてちやまず出ない判断を『さも当然の様に』ルールに組み込みやがる 『タダの良い子ちゃん』じゃない所に好感持てるよ」
「フツ…姫次はやはり『シリウス』に近い雰囲気を感じるな 多様性の獲得の為だが、

君を選考段階で推したのはやはり正解だった様だ」

「なんや、やつぱり姫次お前が中央に居れんのは会長さんのお蔭やん 感謝しとくんやで？」
「おっと、キー坊 濟まないのだが君が提示した条件だが…私の方から『追加』をさせ
てくれないかい？」

「…んっ!?! 何や、会長さん」

ルドルフからの新たな条件の提示に熹一は一瞬身構えかけたが、彼女の表情は『イタ
ズラを思い付いた』物であり、安心感を覚えて話を聞く態勢に入る。

「何、『呼び方』の事さ 先程の『ルドルフ呼び』は『対等感』があつて中々に気分が良
かつたのでね 今後は出来ればで良いのだが妹のオグリ共々、敬称を抜いた呼び方で頼
めないか？」

「…ま、ワシが最初に『キー坊呼び』を振つたからのオ アンタが良ければ構わんよ ほ
な、今後もヨロシク頼むで、『ルドルフ』」

「ああ こちらこそ宜しく頼むよ、キー坊」

最初に互いが感じていた『固さ』はすっかり消え去り、周囲から『最強』と呼ばれな
がらも高みを目指す研鑽を怠らない『求道者』二人はしばらくの間見つめ合うと、どち
らともなく笑顔を見せていた。

そんな二人の横ですっかり冷めてしまったコーヒーに口を付ける龍星と姫次は揃つ

て渋面を作る。

「うえっ！ 香りからして『コナコーヒー』ってのは分かってたけど……やっぱ、冷めたら台無しだな」

「ハワイでマナちゃん達が淹れてくれたのが美味しかったからお土産で買って来たけど、流石にここまで時間が経つとなあ……」

「どれ（ズズツ……確かに、栄養面的には問題無いが味的にはかなり劣化してるな」

「いや……長話で静虎さんから頂いたハワイ土産を台無しにして悪かったね 詫びと言つてはなんだが私の手でもう一度淹れ直しても構わないだろうか？」

「せやったらドルフ、ワシも淹れるんでどっちが美味いか『勝負』と行こうやないか
これでも親父おとんに淹れ方習ってお袋おかんから『美味しい』と言われた事があるんや」

「ほう……？ それは面白い試みだ 私も昔から嗜みとして習得していた技術だが『競い合い』となれば一層の気合も入るからな 龍星、姫次もだが審査員として参加してくれ
私とキー坊のどちらが『パリスタとして上か』判断して貰おうじゃないか」

「（め、メンドクセー）……ウツス」

「……別に構いませんが、二人とも負けず嫌いなんだから『熱』を入れ過ぎないでくださいよっ！」

その後、思った以上に技量が伯仲した事により審査員の……龍星の危惧した通り『熱』

が入った二人の“コーヒー勝負”は長引き、それに比例して審査員二人の腹内がその後の飲食を受け付けない状態にまで追い込まれる事になったのだった…。



その日の深夜 某運動場——

「……………(グツグツ)」

「“ストレッチ”に余念が無いのは結構だが、今回は随分と機嫌が良いな…何か“良い事”でもあったか？」

「“悪魔王子”か…今日は姿を現すのが早いな。なに、昼間にキー坊から『頑張つて来い』って言われてな…今、“私がしている事”を見抜かれた上で応援してくれたんだ。気合を入れなければと思つてね」

夜中に寮から“幽玄の技”を用いて抜け出した後、悪魔王子からの指定された運動場ぼしよへ向かつてストレッチを行うのは“怪物”と呼ばれた少女、オグリキャップ。

そんな彼女に声を掛けた悪魔王子であったが、深夜にも関わらず“晴れやかな表情”を見せる“怪物”に言いようの無い不快感を感じ、皮肉気に言葉を投げかける。

「今回は“いつものヤツ等”とは気合もレベルも違うぜ。懸賞金も相当上げたし、境遇

だつて悲惨で『勝てなきや人生終わりだ』つて顔してゐる連中ばかりだからね」

「…そうか、だつたらその子達の後の事は、いつも通り、鬼龍おじさんに任せざる事になるな」

「えっ？ 何だ、此処に『パパ』が來てるのか？」

「ああ、お前とは『顔を合わせる気は無い』つて気配を消してゐるけど、お前の後始末の為に近くに潜んでる筈だ」

「何だ…『息子』である俺よりも『姪』のおグリのおねだりを優先かあ…まあ、いいさ
今はオグリお前との『遊び』が何よりも重要なんだから、クズ親父の所在なんて気にしない事にするよ」

「…その『遊び』でお前が満足するならいくらでも付き合つてやる 私としてもこの『オグリ・ラッシュ』とやらに参加する意義はあるからな」

「…そういうや、毎度律儀に乗つて來るんで理由なんて聞いた事が無かつたな 聞かせろよ、オグリお前は何故この『遊び』に付き合うんだ？」

「この世の中には巡り合わせが悪くて不幸になつたウマ娘が数多く居るんだつて事を今回で『身を以て』実感した だつたら、私がすべき事はそんな彼女達にせめて『走る事の楽しさ』を思い出して欲しいと思つたんだ」

「…下らない 『走りこそ人生だ』なんて考えはそれこそ選ばれし者だけが持てる 『傲慢

“だ 大抵の脱落者はそんな事忘れて死ぬまで生きて行くんだろうが”

「私達ウマ娘の幸せは、自分の脚で走れる事”だ 小さい頃の私は、”それ”を実感出来なかつたけど……周りの皆のお蔭で今は知る事が出来た なら、今度は私が皆に与えられた物を返さなくちゃならないんだ”

そう言つて悪魔王子の目を真つ直ぐに見据えるオグリ。

その瞳は『お前にも私が与えられた物を分けてやりたいんだ』と訴えている様に感じられ、猛烈な居心地の悪さを感じて悪魔王子が思わずその視線を切つた。

「……やつぱりお前は、”傲慢”だ そんな事が言えるのも『今回も自分が勝つ』つて確信を持っているからに決まつている……おいつ！ とつとと出て来いよつ!! 挑戦者お前等がご

所望の ”金の生る木” は準備万端らしいぞ!!」

悪魔王子の言葉を皮切りに多くのウマ娘が運動場戦いの場に姿を現す。

その眼はどこまでも疲れ切っているが、泣いて詫びても徹底的に踏みにじられて来た人生をやり直してやるという覚悟を持つ ”強さ” を伴つた強者ばかりだった。

「今回は随分と数が多いな 勝負の形式はどうするんだ?」

「折角、今日は奮発して夜の運動場を貸し切つたんだ……”実際の試合形式”でやろうぜ 集まつた面子の適正距離はバラバラだがオールラウンダーのお前なら、いつも通り

”対応できるだろ?」

「何だ、悪魔王子も私の事を良く分かっているじゃないか…ああ、構わない！　いつも通り〃全力で走るだけだ!!」

オグリの宣誓と共にその場の〃熱〃は一気に高まり、本日のオグリ・ラツシユが開催されたのであった。

二人の瞳が白いキャンバスに写す物

現在、私の目の前には一枚の『真つ白な絵』があつた。

一見すると何も描かれていない様に見えるその絵は白を何重にも重ねた物で『見た者の心を映す』という説明を受けたのだが、私には何も『見えなかつた』のだ。

私の心に何か問題があるのだろうかと疑問を感じて隣で一緒に見ていた『人物』に質問をしようとした所：驚くべき物を見る結果となつた。

何故ならば、『彼』のその時の表情は――

◇◇◇◇◇

時は少し遡り：中央のボランティアで近場の教会の掃除手伝いを募っていたのだが、予定していたメンバーに急用が入ってしまったので参加者が私一人しか残らなかつた。

それを聞いた神父さんやシスターのお姉さんは申し訳なさそうに『また後日に』と言つてくれたのだが、私としても『せっかく参加すると決めたのだから』と周辺の掃除を手伝わせて貰い、それが終わると神父さんが『お札になるかは分からないが…』と前置きした上で礼拝堂で待つ様に言われたのだ。

そして、本来は私一人しか居ないであろうその空間に、いつの間にか叔父である宮沢

鬼龍が一人席に腰掛けているのを見かけたのだった。

「…何だ、オグリか？　“こんな所”でお前一人と会うとは奇遇だな」

「鬼龍おじさん…そうだな　まさか私も神様嫌いなおじさんと“教会”で会うとは思わなかったよ」

「…別に俺は神に祈りなんて捧げるつもりは毛頭無いし、今までの罪を懺悔しに来た訳でもない　今日から教会此処に展示すると言われた絵画の『噂』を確かめに来たのだが…肝心の絵が時間になっても来ないから中で勝手に待つ事にしていただけだ」

「そうだったんだな　私はそんな事聞かされずただ待つように言われたんだが、良ければその『噂』の内容を聞かせて貰っても良いか？」

「突如としてこの世に現れた“真つ白な絵画”、それを見た者は写し出された己の心を突き付けられてどんな極悪人であろうとも涙を流して自身の罪を懺悔するという下らない話だ」

「…おじさんは別に懺悔したい訳じゃないんだろ？」

「フンッ、当たり前だろう　静虎との鬪いで俺は己の“殺意”や“業”と向き合っても生き方を変えなかった男だぞ？　その噂も鼻で嗤ってやろうと今回は来てやったのさ」

　　こういう事を平気で言うのだ、鬼龍おじさんという人は。

　　おじさんとの鬪いでお父さんが一時的にでも“廃人”になった事は私としても未だ

に心に棘を残す出来事ではあったが、お父さんを復活させたのもまた、おじさんの活法のお蔭でもあったので今は何も言うつもりはない。

何より、今の私はおじさんに「頼りつきり」という状況なのだ、そんな相手の心に波風を立てる気は起きなかった。

「…この前のオグリ・ラツシユの『後始末』だけど、ありがとう 鬼龍おじさん」

「お前の判断は正解だったぞ、オグリ 何せ静虎は勿論の事、尊鷹ですらも行き場を失った外国のウマ娘の抱える面倒事を合法、非合法を含めて片付けられるのは俺以外居ないのだからな」

「うん そういうのは鬼龍おじさんが一番上手だって知っていたから、『自分がやるべき』って考えを改めて相談する事にしたんだ」

「ふんっ、それで良いんだ お前の一歩の強みは他者に『頼る』事を『弱み』と考えていない所だからな 見ず知らずの他人に対し盲目、無差別的に縋るような奴らは俺にとつて唾棄すべき存在だが、お前の様に適材適所を考え抜いた上で自身の目的の為に利用出来る者を使う選択が出来る奴こそ評価されるべきだ」

「…私は別におじさんを『利用』しようなんて思っていないぞ」

「何、あくまで『見方と言い回しの違い』に過ぎない お前が望む結果を得る為に俺に『頼み』、俺はお前の望みを叶える事によって得られる利の為にそれを『受けた』 これで立

派な「利害關係」が発生しているのさ」

相変わらずの持つて回った言い回しをするおじさんであったが、つまりは『私が困っているから助けてやろう』と言っているに過ぎない。

素直に言ってくれないのに少しばかりの不満はある物の、出会った頃から変わらない私やお母さんに対する「氣遣い」に嬉しさが込み上げて来る。

「言い方の違い……そういう物か」

「それに今回、保護する形になつたウマ娘にしたつて慈善事業で手を貸してやる訳じゃない。あくまで俺が行うのは「釈迦が垂らした蜘蛛の糸」の様な物だ。与えられたチャンスを物に出来ない愚か者はその後の人生でも堕ちて行くしかないのだからな」

「おじさん……その言い方はなんか嫌だな」

「まあ……お前と戦つて敗れた連中はどいつもこいつも『憑き物が落ちた』顔をしていたし、最低でも俺の「損」にはならないだろう。その点は褒めてやっても良いぞ」

「そうか……お願いしてるばかりの立場で申し訳無いとは思つていたが、私のワガママでおじさんにも「利」があつたのなら良かったよ」

おじさんには迷惑を掛けられる事は何度かあるも、迷惑を掛けるのは望んでは無かつたからその言葉に対して素直に感謝を伝えるも、おじさんは何故か私の方を見ずに教会のステンドグラスを見ていた。

…何故だ？

「……それに、『悪魔王子』と名乗る奴に一泡吹かせる事にもなるからな オグリが、撒き餌』の役割を果たす事で行動の予測も立てやすくなるんだ、今後もその調子で頼むぞ」

「…おじさんはまだ悪魔王子の事を『家族』として見られないのか？」

「考えてもみる 遺伝子提供して生まれた存在から一方的に『父親』と呼ばれた所でお前は納得出来るのか？ 熹一とお前の関係性として血の繋がりなど関係無い、時間が育んだ結果生まれた『情』によつて成り立っているんだ 俺と『奴』との間にそんな物は存在しないのだから家族と呼ぶなぞ欺瞞にしか過ぎない」

「…『性格』はとても似てると思うんだけどな」

「それこそ熹一とお前の相性の真逆だ 『似通っているからこそ反発し合う』 向こうだって大方、俺と似ている事への嫌悪感を抱いているんだろう」

「それは……」

正しく、おじさんの言う通りだった。

悪魔王子はおじさんを『パパ』と呼ぶが、初めて会った時から自分の『宮沢鬼龍に似ている部分』を『忌々しく』思っている事は感じていたのだ。

それでも直接的に血の繋がった肉親がおじさんしかいないから執着を見せるのも分

かっていたし、二人に『仲良くなって欲しい』と私が思ってもそれが『自己満足』ではない事も分かっていたからそれ以上は言葉が続ける事が出来なかった。

そんな私を見て目を細めていたおじさんだったが、しばらくすると溜息を吐いて話し掛けて来る。

「…少し話を変えるぞ 今日この教会に展示される予定の絵画の『噂』に尾ひれが付いた部分だが、本来の描かれた目的は『病気の母親の延命』の為らしい」

「…絵を見て人の寿命って延びる物なのか？」

「見た者に影響を与える “力を持った絵画” というのもオカルト染みた話ではあるがプ
ラシーボ効果… “思い込みの効果” は決してバ鹿にした物じゃない 作者の母親は息
子を一流の芸術家にする為に傍から見れば “虐待” としか言えない所業を繰り返す『極
悪人』と呼んで差し支えない女だったそうだ」

「それは…：本人にとつての息子さんに対する『愛情』だったのかな？」

「さあな、そんなものは当事者にしか分からん そもそも、あくまで『噂話』なんだ 絵
画に感情移入させる為に話を盛った可能性だって十分考えられるが…つまり息子はそ
んな悪党である『母親の心を救いたい』という一心で作品を描き上げたという話だ」

「心を救う事が延命に繋がる…：か」

「フンツ 俺なぞ自他共に認める悪党であるし、“この心臓” だって最近ではゴアが

作つた薬で安定してるが急に止まる危険性は消えちやいない 点欠ツボに打ち込む為の針だつて未だに手放せない身体だというのに、しぶとく今でも生きていられるんだから心… “生きる気力” っつてヤツは人間にとって何より重要なんだ”

…おじさんの心臓は急に止まってしまふ可能性を秘めた “バースト・ハート” と呼ばれる疾患があり、それは龍星達子供にも引き継がれてしまつてゐる。

最近になつて中央のサポート科に来たおじさんの知り合いである “ゴア博士” という人が作つてくれた薬でみんな安定した生活を送れている物の、それでも『自分の心臓が何時止まってしまうのか』という焦りを抱えてみんなは常に『自分の命の使い方』を考へて生きてゐるのだった。

「つまりはだ、自身の罪を悔い改めようが改めまいが…善人だろうが悪人だろうが人間の寿命は変わらない ただ作者は生きる為に必要な道程から『余計な小石を省く』為の作品に仕上げたという事なんだろうな」

「それは…生きて行く上でなるべく “転ばないように” っつて事なんだな？」

「逆に言えばこの先にある道程に待つ “破滅” を防ぐ為に『余分な石を置いて』方向転換させる為なのかもな それが『噂』における “改心” の正体かもしれないぞ？」

「その人の生き方に対する “杖” になつてあげる絵か…そんな絵をお母さんの為に描けるんだからその作者はきつと……」

「ああ、母親を愛していたんだろう。この世の中では『愛』が最強だからな。そう言った意味では今のオグリ前が悪魔王子に付き合っただけで、『愛』は大した物だ。間違いない。悪魔王子の心に変化をもたらしているんだからな」

…びつくりした。急におじさんが絵の話から私の話に切り替えるんだから。

「…そ、そうなのか？」

「悪魔奴王子が呼び寄せたウマ娘の『後始末』をやって気付いたが、奴は回を重ねる毎に悲惨な状況の娘程『元凶を排除してから』お前の元へ送るスタンスへと変化している。それが奴の生来の『美学』から来る物なのか、あくまで俺の『模倣』に過ぎないのか。興味も無いがお前へのストレスを配慮する形で『遊び』に誘う情緒は身に付けている様だな」

「そう聞くと、悪魔い王子はますますおじさんに似て来るな」

「フンッ！ オグリ、下らない話はやめろ！ …要はお前が悪魔奴王子に『愛』を与えてやって俺が表裏一体である『憎しみ』を与える事で国から『兵器』として使い捨てられるだけの存在だった奴を『人間』として成長させてやろうという話だ」

「鬼龍おじさん…本当にありがとう」

多分、私が『悪魔王子と関わりたい』と言ったからおじさんはここまで協力してくれているんだろう。

そうでなければ……この人はきつとこんな配慮はしないんだろうなという事は長い付き合いで分かっていたからだ。

どこまでも面倒な性格で、ちよつとだけ寂しがりやで、イジワルな事ばかり言うけどたまに優しい私の叔父である宮沢鬼龍の見せた気遣いに自然と頬が緩んでしまうのを止められなかったのだが、そんな時に外から車を止める音が聞こえたのでそちらの方を向くことにした。

「……『絵画』が届いたようだな 話も終わったし丁度良いタイミングだ」

「……そう言えばおじさん ちゃんと聞いた事がなかったが、今日展示される絵ってどんな題名なんだ？」

「知らん 更に言うとな作者の名前も不明だ」

「えっ?」

「『ブラック・オークション』とかいう裏取引の場で誰が、何時描いたのかも分からないというのに『噂』ばかりが広がって何が真実なのかも分からない中で『罪を悔い改めた』とかほざく連中の存在だけは確認できたんでな 今日だって三流ゴシップ並みの信憑性の無い情報から駄目元で来ただけにオグリ前を見掛けなかつたらさっさと帰っていた所だ」

……あれだけの情報を私に与えておいて結局は全部不確かな『噂』でしかないって……

いや、確かにおじさんは「それ」を『本当の事だ』なんて一貫して嘘は言っていないのだ
が…。

「…なんだか、納得できないな」

「まあ、そう言うな 出自も何もかもが不明なのに突如、まるで「別の世界」からこの世に現れた名画なんて龍星の言葉を借りれば『刺激的でファンタスティック』というヤツだ 折角だから鑑賞してみようじゃないか」

こうして…未だに納得が行かない表情の私を面白そうに見下ろす鬼龍おじさんと共に、私達は車から降りた業者の人達が教会に絵を飾り付けるの静かに見守る事にしたのだった。

◇◇◇◇◇

——と、いう事があって私達は現在、目の前にある「真っ白な絵」の前に立っているのだが、何も『見えない』私と違っておじさんには何かが『見えている』様なのだ。

何故なら今のおじさんの「表情」は——

「おじさんは…何で「楽しそうに笑って」いるんだ？」

人から『悪魔を超えた悪魔』と呼ばれるに相応しい、自信に満ちあふれた「悪そうな笑顔」を浮かべていたからだ。

「「コイツ」は愉快だぞ、オグリ 何せ俺の目の前には「悪魔」としか言いようが無い

化け物が他の化け物共から「天使」を守ってるんだからな…ククククク 認めてやるよ、この絵は「名画」であるとな」

「おじさんにはそういう風に『見えてる』のか…「悪魔」っていうのはおじさんの事なんだろうけど、「天使」っていうのは分からないな…「誰」を指しているんだ？」

「…言つてやつても良いが、聞けば「オグリ^前」は絶対に微妙な顔をするだろうからな 教えてはやらんぞ」

「えっ？ そんな事を言われると逆に気になってくるんだが…」

頭に疑問符を浮かべる私をおじさんはどことなく優し気な表情で見ていたのだが、それが私を更に混乱させて頭が少しだけ痛くなってくる。

「確かにこの絵を見ると『もう少しだけ生きてやろう』という活力が湧いて来るな 少し前まで『龍の終活』を考えていた自分を完全にぶち殺して新たに生き返った気分になさせてくれる」

「…それなら、良かった でも…おじさんと違って私には何も『見えない』んだ 薄っすらと何かは「感じる」んだけど…」

「ほう…「感じる」か ならオグリよ、「少し離れて」見てみる 絵画の種類に依るが作品にもお前等ウマ娘と同じく適正距離が存在する 俯瞰とも違うが物理的に距離を置く事で見え方も違うからな」

「うん、分かった」

おじさんのアドバイス通り私は徐々に、徐々に距離を離して絵を見る。

すると、薄っすらとだけ感じていた物の「正体」が遂に分かつて私は驚きの声を上げた。

「凄いな！ 何だ、この『真つ白で四本足の動物』は!?! 絵から離れたお蔭で『全体像

』がはつきりと見える！ とつても大きくて優しそうな子なんだな!!」

子供の頃に見せて貰った動物図鑑にも載っていない、初めて見た『珍しい動物』に私の心は不思議と騒ぎ出す。

所々で私達ウマ娘に似ている『耳』や『尻尾』に親近感を感じ、力強い脚はきつと速く走る為に洗練された物であろう事が見て取れ、何より『彼』の優しそうな瞳には理由の分からない安心感を覚える位だ。

「…俺にはお前に何が『見えてる』のかは分からんが お前が動物を見てここまでしゃぐのはゴリラ以来だな」

「いや、おじさん…『彼』はある意味ゴリラさん以上に私の心を揺さぶってくるよ 故だか分からないんだが、彼を見てるとこれまでよりも強く『元気で楽しく走ろう』って気分させてくれるんだ！」

「そうか…これで『噂』の真偽は『改心』よりも『延命』の説が有力である事が分かった

訳だ」

おじさんの言う通り、今の私には説明が出来ない。『活力』に満ち溢れていた。

早く走りたい、競い合いたい、ご飯をお腹いっぱい食べたいという心が抑えきれず、思わずおじさんをお願いをしてしまう。

「鬼龍おじさん！ 申し訳ないんだが私はこれからご飯を食べに行くよ!! 近場で美味しいお店があったら紹介してくれないか!？」

「ふんつ、紹介と言わず奢つてやるよ 何故だか今日は俺もオグリ前に 真つ当に 奢つてやれそうな気がするんでな」

こうして私達は教会の人達にお礼と挨拶を済ませた後、ご飯を食べに外へと出る事にしたのだったが、教会から出て行く前に何故だか『彼』が私に対して笑顔を見せてくれた様な気がして、負けじと笑顔を返し、教会の扉を閉めたのだった。

◇◇◇◇◇

——後日、もう一度『彼』に会いたいと思つて教会を尋ねたのだが、展示されていた絵は私達が見たその日の内に教会から『消えてしまった』との事らしい。

神父さんは『その日の内に盗まれるとは』と頭を抱えていたので鬼龍おじさんに相談すると『絵画なんて物は人から人へ移つて価値を高めるんだ』と探してくれる気が毛頭無い返事が返つて来たので少し落ち込んでいます『あの日、あの絵は俺とお前に見ら

れるのが運命だったんだ』とロマンティックな事を言いだしたので『そういう物か』と取り敢えずは納得し、彼との「またの再会」を願って私は本日の練習へと向かうのだった。

盆の暮れに戻る者達

午後を回って日も高く昇り、夏の日差しが照り付けるアスファルトを熨一とオグリは額から流れ出る汗を拭いながら歩いていった。

「熱い……あつついのオ……ホンマ、お天道さんもワシ等が『墓参り』行く時に限ってこない照り付けんでもええやろがい……」

「仕方がないだろう、キー坊……私達の用事がようやく片付いて今日になったんだ。今を逃せばお盆休みを過ぎてしまうぞ……」

「じゃあけど、今日は猛暑も猛暑過ぎてこのままやと熱中症になってまうわ。ちよつと涼んで行かんか？」

「キー坊……そう言つて『2回も』休憩を挟んだから現在の気温が最高潮なんだ。もうすぐお寺も近いんだし、『コレ』でも舐めて手持ちの水分で我慢してくれ」

そう言つてオグリが熨一の口に放り込んだのは『塩飴』で熨一も不承不承といった様子で飴を噛み砕き、腰に下げていたミネラルウォーターで流し込む。

「ポリポリ……なんや、こんな飴持つとったんか。準備が工工な」

「タマから『外出る時は気いつけや』って貰つてたんだ。私も舐めてみたが中々の効果

「だつたぞぞ？」

「なんや…頭がスッキリしてきた氣いするのオ　タマには今度何か礼でもしてやらんとアカンな」

「そうしてくれ　タマはきつと『氣にすんな』と言うだろうけど、氷屋さんのかき氷でも目の前に置けば喜んでくれるだろう」

「それ、お前が今食いたい物モノやろ？　ま、機会があつたら呼べる連中集めて　〃かき氷パーテイー〃　つちゆうのものも悪くないか…」

「本当かつ!?　何だ…今から楽しみになつて来たぞ」

自分達に降りかかる熱さを忘れる様に涼し気な話題を行う兄妹であつたが、遂にはその足が宮沢家の墓が待つ寺へと到着したのだつた。

◇◇◇◇◇

「オグリ、線香に火い付けたか？」

「ああ、バツチリだ　キー坊もバケツに水は入れたか？」

「おうつ！　雑巾も家から持つて来とるし準備万端やな、ほな……」

「うん　〃おジイちゃん達〃に会いに行こう」

墓参りへの準備が終わつた事をダブルチェックで確認した二人は先祖達の待つ墓へ手向かう事にした。

「しつかし…ジイちゃんもワシが『灘・真・神影流』興す前に逝くんやから、タイミングが悪かったのオ」

「きつと、おジイちゃんも『もうワシが居なくても大丈夫や』って気持ちで旅立ったんだらうけど、正直…寂しかったな」

「…オグリ、今更聞くんやが お前つてジイちゃんの事『どう』思つとつたんや?」
「そうだな……」

「『オグリ、コレ買^こうたるわ お母ちゃんと一緒に食べるんやで?』」

「『うわあ、いっぱいのお饅頭だ! おジイちゃん、ありがとう!』」

「『オグリ! 銃を持つとるヤツはワシが引き付けておくからお前は回り込んで首を極めて一瞬で落とせ! お前にもお前のお袋^{おかん}にも指一本触れさせんから安心せえ!!』」

「『分かった! おジイちゃんも気を付けてくれ!!』」

「たまにちよつとだけ冗談が過ぎる時があつたけど、基本的に私やお母さんに優しくしてくれて…うん、大好きだったよ」

「……そうか」

「『熹一、落ち込んだんのか…? ホレ! ジイちゃんの『セクシーポーズ』で元気出せや! (プリッ)』」

「『目の前で『ケツ』出すなヤクソ爺! お袋おかんやオグリが居らんとホンマにブレーキがぶつ壊れとんな!』」

「『熹一: お前もエエ年なんや 『コレ』でも読んで発散せえ』」

「『当たり前のように孫に『エロ本』を勧めるんやない!! 万が一でもこんな物がモンワシのやとオグリに勘違いされたら兄貴の威厳が台無しやろうがっ!! えーっ!!』」

「…良かったのオ オグリお前がそう思えとるなら、それが一番や」

「うんっ! 今日だってお母さんがおジイちゃんの為に綺麗な花や美味しい物を用意してくれたんだ 喜んでくれると良いな」

祖父である宮沢金時の『下品さ』を言及せずに思い出を語るオグリに対して思う所は多々ある物の、妹の笑顔が曇る事を良しとせず熹一は余計な言及なく彼女の話に笑顔で相槌を打つ。

そして、そんな会話を続けている内に二人が宮沢家の墓まで到着すると其処には二人の『参拝者』が彼等に先んじて墓の前で手を合わせていたのだった。

「…こんにちは 『君達二人』をこのお墓の前で見るのは初めてになるな」

「…せやな しつかし…変な感じやろ？ 目の前に “自分の墓” があるつちゆうのもな」

「…：…：気にはしてはいない 私はキー坊、君と闘った “あの日” に一度死んだんだからなむしろ、 “人間” として自分の今まで生きた証を静虎さんに刻んで貰ったんだ…この墓の存在には喜びしかない」

「 “ガルシア” が今日は『自分の墓に寄りた』と言われたのでワタシは着いて来た形になるが…墓の前で手を合わせる彼の姿には正直… “羨望” を感じている」

「 “28号” もお疲れ様だな 身体がいくら頑丈だからってこんな炎天下だと汗もかいてしまっただろ？ 二人とも塩飴でも食べて日陰で休もう、冷たい水もあるからな」

「ありがとう、オグリ 今日日は日差しが強くて正直、 “辛かった” んだ」

「シ…：オ…：アメ…：？ それが何なのかは分からないが、オグリが勧める物なら美味しいのだろう…頂こうか」

かつて熹一とTDKの決勝で闘い、優勝を果たすもバースト・ハートと長年の投薬実験、過酷な訓練により若くしてその命を散らした “笈の” エドガード・C・ガルシアとガルシアのクローンとしてこの世に生を受け、バースト・ハートを克服した超個体…米国の忠実な “兵器” として数多の戦場を渡り歩くもNEO宮沢熹一との闘いの後に身柄を保護された『識別番号28号』、ガルシア28号が笑顔で休憩を勧めるオグリに対し

て“人間味”を感じさせる微笑みを返してその誘いに乗ったのであった。



「良いのか、キー坊？ 今日はおグリと二人で墓参りに来ていたのだろうに私と二人で話して……」

「こやつてお前と二人きりになる機会なんぞ滅多に無いからのオ オグリには悪いが28号の相手して貰うわ」

「そうか……しかし不思議なものだな 私は一度間違ひ無く死んだ身であるというのに今はこうしてキー坊、君と普通に話す事が出来るんだからな」

「ワシもじゃ……お前が死んだ“あの時は”心底後悔しとつたし、お前の胸に蠢蟹掌を打ち込んだこの手を潰そうとも考えた 止めようとしたオグリに泣きながらビンタされんのもアレが初めてでな……ホンマ、”苦い経験” っつてヤツやで……」

「しかし、私は“蘇生”された 君の……私の叔父でもある宮沢尊鷹の手によつてだ」
 「当時は『ガルシアの遺体が消えた』って病院中が大騒ぎになつてな 皆で大捜索したつちゆうに見つかからんで途方に暮れとつたが、まさかの尊鷹の手による“持ち出し”や大分後から本人に聞かされて心臓が飛び出るかと思つたわい」

当時の事を思い返して熹一は深い溜息を吐くもガルシアはそれを苦笑して眺める。

「……あの人は自由な人ではあるが、あの時は私と『米国の繋がりを切る為』、秘密裏に身

柄を匿う必要があったんだ 許して欲しい」

「…済んだ事やし、それはもうエエわい で、蘇生されたお前が尊鷹に連れて行かれた場所がまさかの……」

「『米国のネバダ州』だな 日本の諺にある『木を隠すなら森の中』を地で行く大胆さだったよ そこでの尊鷹は『ナバホ族のチャベス』を名乗って私を同じ部族の仲間として生活させていたのだが…何とも不思議な体験だったな」

「あのオッサンはコロコロ顔や名前変えて生活しとるから今でも見つけるとなると一苦労やからな……いや、スマン お前の話がまだ途中やったわ」

「ああ、原住民としての生活だったけど…ビルや機械から距離を置いた『広大な自然』や部族の者達がただ在るがまま流れを受け入れる『死生観』に私の心だけに留まらず、ロボロであった筈の身体すらも癒されて自分がこの地球上に存在する『一人の人間』でしかないという事を思い、知る事が出来たんだ」

「そう言ったガルシアの表情はとても晴れやかな物であり、それを見た熹一は釣られて笑顔を返す。

「…それ、良かったわ でも驚いたで、そんなお前と再会する事になったのがワシと鬼龍の息子である『ジエツト』との『ハイパー・バトル決勝戦後』やったんやからな」

「尊鷹に連れられて赴いた試合会場だったが、銃撃戦が始まるとなればつい身体が動い

てしまい……気付けばキー坊達や鬼龍父の前に姿を現してしまっていたよ」

「結果としてやが、お前が乱入してくれたお蔭で鬼龍を庇って撃たれたジェットも“軽症”で死ぬのは免れたが……来てくれなかったらと思うと、今でもゾツとするわ」

「私もキー坊に恩を返せて良かったと思えたし、鬼龍……“父”の驚いた顔も見れたからハツキリ言つて『痛快』の一言だったな」

「今の言葉もそうやが、オグリの誘いにも『辛いから』つて正直に口に出せる様になつたお前は誰が何と言おうが“人間”や 辛い事や苦しい事ばかりやりつた人生が終わつて、ようやく人間として生きる事が出来たんやな」

瞳には僅かに涙を浮かべ、破顔する熹一にガルシアは照れくさそうな表情を浮かべて補足の説明を入れる。

「いや……実はと言うとな 私“それ”を実感出来るようになったのはキー坊のお母さんのお蔭なんだ」

「んっ? 『お袋のお蔭』つてどういう事や?」

「キー坊達の助けに入つた後一人で居た時の事なんだが……私の姿を見掛けたお母さんが私の事を泣きながら抱きしめてくれてな 『生きていてくれて良かった』と耳元で言われた瞬間、“心を抱きしめられた”事を……私が母の様に想っていた“ドクター・クリス”の事を思い出してしまつて、彼女の前だというのに大声で泣いてしまつたんだ」

「…ドクター・クリスって言うとかガルシアを担当してくれた女性ヒトで朝昇やと闘り合う前に亡くなったつちゆう……」

「ああ、誰もが私の事を『兵器』としてしか見ていなかった中で唯一、『人間』として見ていてくれた女性ヒトだったが、米国による私への精神的負荷を試す為だけに殺害され：最後に私の心を抱きしめながら逝った彼女の存在を君のお母さんが強く思い出させてくれたんだ 本当に、感謝しているよ」

「ズズッ）…流石はお袋おかんや ワシや親父おとんの “強さ” なんぞまだまだお袋おかんの足元にも及ばんのオ……」

自身の母が持つ “愛の強さ” に感極まった熹一の瞳からは遂に涙が零れ、鼻をすすつているとガルシアが『仕方がないな』といった表情でポケットから取り出したハンカチを彼に差し出す。

「……相変わらずの情深さだな ほら、オグリ妹に見られる前に早く汗と一緒に拭いてしまえ」

「…ガルシアはホンマ “氣遣い” が出来る様になったのオ “中央” でもその調子でモテモテなんちやうか？」

「いや…尊鷹の勧めにより日本である種の “治外法権” を確立している中央に籍を移したのだが、あの場所は実に興味深い 人間を遥かに超える能力を有しながらも人権を

持って生活している「ウマ娘」と深く関わる事によって主に資料でしかその概要を知らなかった私に新たな気付きを与えてくれるのだからな」

「実はな、ワシが『中央に施術師として入ろう』って思った理由の一つはお前等が居るからってのもあるんやで？」

「よく言うよ……一番は『可愛い妹の活躍を近くで見たい』って理由だろうに」

「ハツハツハ！ それはそうやろ！ オグリの晴れ舞台やぞ？ 兄貴として傍で見たいと思うのは当然やん!! それとな、聞いてくれや！ この前、オグリのヤツがレースでな……」

自信の言った皮肉な言葉にも一切気にする様子を見せず、後ろめたさの欠片もない爽やかな笑顔で妹への想いを語る熹一をガルシアは満足そうな顔で何時までも見続けていたのだった…。

◇◇◇◇◇

「どうだ、28号 塩飴は美味しいか？」

「コロ……」悪くない 体外へと流れていた塩分が補充されるのを味覚的にも実感できる合理的な食物であると推察される」

「そうだろう、私もタマから貰って食べてみたんだが効果がスゴイんだ 冷たい水と併せるとまるで生き返った気分だな……練習の後は最近、この組み合わせにしてるよ」

「…それでは脳が満足感を与えているに過ぎないので後から他の栄養素を追加で摂る事を勧めるぞ」

「うん、分かった 28号は相変わらずトダーみたいな固い喋り方をするんだな？ 中央に居るトダーともそんな感じで他のウマ娘に“指導”してるのか？ ちゃんとみんなと馴染めてるのか？」

「…そうだな 尊鷹に連れて来られた中央での生活は不思議な物だ 『機械の様な人間』と呼ばれたワタシが『人間の様な機械』と評されたトダーのサポートという形でウマ娘達の指導に入っているが… 『オリジナル』のガルシア、龍星、姫次が気を遣ってくれているので何とかやれている…と、思う」

「そうか、それなら良いんだ 今まで生きて来て『色々あった』とは思いますが28号がみんなに『必要とされる人間』として中央に居られるなら私は嬉しいよ」

そう言って屈託なく笑うオグリを28号は変わらぬ表情ではある物の優しい気な瞳で見つめている。

「ワタシと闘った後身柄を匿ってくれた『灘の男達』には勿論だが、その後にワタシに関わってくれたオグリ、キミのお母さん、優希… 『灘の女性達』にも感謝している キミ達のお蔭でワタシは今の生活を送れているんだ」

「キー坊が『NEO宮沢熹』なんて変わった名前にしてまで頑張つて助けようとした

人なんだ 私たち家族が君に優しくするのは当たり前だよ」

「…礼になるのかは分からなかったが、弱視になっていた龍星の右目にワタシの角膜を移植したのだが…その後の経過はどうだ？」

「それは大丈夫だ むしろ…龍星曰く『今まで視えなかった物まで見える様になった』とか言っていたが、尊鷹おじさんと『同じ物』が見えてるようだし多分、大丈夫だろう」

「……そうか」

『それは本当に大丈夫なのだろうか？』という思いはある物のオグリが気にしている様子が無いので28号はそれ以上の言葉は不要と判断して話題を変更する事にした。

「…後、オグリ これは最近になって気付いたのだが、ワタシはキミに詫びなければならぬ事がある」

「……『悪魔王子』の事か？」

「ああ…『11号』は米国によつて廃棄処分されたワタシ達『ガルシア・シリーズ』の生き残りだ ヤツが抱えている『世界に対する恨み』を一身に背負わせてしまった事と同じ『兄弟』の一人として深く謝罪したい…」

「気にしなくて良いよ 悪魔王子は私達『灘の身内』なんだから、私に興味を向けてる内は…いや、興味を向けなくても全力で関わるって決めてるんだ」

「しかし…」

「それに、『オグリ・ラツシユ』も別に悪い物だと思つてないんだ。最近では世の中の不幸になつてゐるウマ娘を悪魔王子アが集めて私が『走る楽しさを思い出させる』つて流れになつてゐるし、鬼龍おじさんがその後のフォローはやつてくれるから、前に授業で習つた『社会貢献』にもなつてゐると思うしな」

「そうか、鬼龍あの人が……」

オグリの口から出た『鬼龍』というワードに28号の声が自然と沈む。

彼が今まで米国からどんな非人道的な扱いを受けて来ても『人間性』を失わずに居られた要因の一つとして鬼龍から受けた『優しい言葉』があり、それらが全てが『嘘』であつた事を知つた時には自身のアイデンティティが崩れる程のショックを受けた事は彼の記憶にまだ癒えずに燻つていたのだつた。

「……済まない、28号。鬼龍おじさんの話題を出してしまつて……私だつて流石におじさんのガルシア君への扱いはあんまりだとは思つてるんだ。今度おじさんに会つたら嫌われる覚悟でその事をガツンと言つておくから……」

「いや、構わない。実は……最近の私には鬼龍あの人から掛けられた『言葉』が徐々にだが、聞こえなくなつて来ているんだ」

「……そうなのか？」

「ああ、代わりに聞こえるのはこうやつてワタシに話し掛けてくれるオグリキの『言葉』や

中央での『感謝の言葉』の割合が増え、最近になってようやくワタシも自分が役に立つ
“人間”であると自覚出来る様になって来たんだ」

「…だったら、良いんだけど」

「オグリ…キミの存在はワタシ達にとつての“光”だ　11号だつてきつとそれを分か
つてくれるとワタシは信じている」

「…うんっ！　私が“光”だなんて自覚は無いけど、君がそう言つてくれるなら信じる
事にするよ！」

「…そう思つてくれると助かる　もう不用意に“暴力”には頼らないと戒めているワタ
シだがオグリ…キミに何かあれば全力を以つてこの力を振るうと約束しよう」

「いや、それは危ないからやめて欲しいんだが」

未だに“兵器気分”が抜け切つていない28号の発言に真顔で拒否するオグリで
あつたが、彼の瞳には“からかいの色”が覗いており『冗談』であつた事を察したオグ
リは苦笑を返すのであつた…。

◇◇◇◇◇

その後、合流して墓参りを終えた四人は帰り道を一緒に歩いていたが、今度は互いに
話し相手を変えての道中となつていた。

「済まなかつたな、オグリ　お兄さんを独り占めしてしまつて」

「良いんだ、ガルシア キー坊は私とはいつでも話せるけど君とは中々時間が取れないからな」

「28号もオグリと二人つきりにさせて悪かったのオ：なんぞ、会話は弾んだんか？」

「ああ、とても ある意味では熹^キ一^ミと闘うよりも有意義な時間だったと言えるだろう」
「なぬっ!? 言う様になつたやん……ま、楽しかったならそれでエエわい」

「私達はこれから家でお母さんのご飯が待つてるけど、二人も良かったら一緒にどうだ？」

オグリからの夕飯の誘いに微笑みを返すも、二人のガルシアは首を横に振った。

「いや、気持ちは嬉しいのだが今度中央に来る予定のマーシオ “ジェット” 内藤の為の書類を作成しないといけないからな 私達はこれから職員寮に戻らなければいけないんだ」

「…ジェットが中央に来るんかい!? アイツ “耳が聞こえん” やろ、大丈夫か!」

「鬼龍^{あの人}からファイターとして超一流であると同時に指導者としての才能も問題無いと聞いている 気にする事は無いだろう」

「鬼龍おじさんから…ガルシアと28号は大丈夫なのか?」

「心配してくれてありがとう、オグリ だが “仕事” をする上でプライベートの問題など些末な事だ 気にしてなんかいられないさ」

「私も同じ気持ちだ それに、今日はキミ達二人と偶然会えた事で気分が高揚している
何の問題も無い」

「そうか…なら二人とも、気張つて来るんやでっ!!」

「暇が出来たら由美子おばさんの所にも寄つてくれ おばさん達も…デゴイチも二人に
会いたがつていたからな」

「ああ 今の仕事が片付けば纏まった休みも貰えるだろうし…その時にでも寄らせて貰
うよ」

「D-51…デゴイチにもそう伝えておいてくれ、オグリ」

こうして、盆の暮れに出逢つた二人のガルシアは現在の“自分たちの居場所”である
中央へと戻つて行つた。

残されたオグリと熹一はすっかり温くなった夏の空気の中で再びタマから貰つた塩
飴を口に入れて家族が待つ宮沢家へと足を運ぶ。

「ジェットが中央に来るんだつたら…キー坊、また闘つてあげたらどうだ?」

「オグリ、冗談言うなや ワシはジェットとは『二度と闘りたくない』つて前にも言うた
やろ?」

「ふふつ、そうだった ジェットは本当に強い人だったからな」

帰り道で今度から中央に来るであろう従兄のジェットの話に花を咲かせ、二人は笑顔

でその歩を進めるのであった。

皇帝とジンギスカン

都内 ジンギスカン料理店——

其処には目の前の鉄板に野菜を敷き詰める宮沢熹一と彼の向かい側で羊肉マトンの準備を行うシンボリルドルフの姿があった。

「ルドルフ、野菜が丁度良くなってきたから上に肉置いてくれや」

「分かった だがキー坊：前から疑問だったのだがこれでは肉の油が落ち切らないのではないか？」

「いや：直に塩かけて焼く方法も勿論あるんやが、こつちの方が“匂い”がマシって聞いたんでな 店に入った時点でそこら辺は気にしとらんかった様やが念の為にや」

「：確かに、付き合いで何度か食べた事はあつたが匂いは気にならなかつたな 代わりに帰りは服に匂いが染み付いてしまうのが難点ではあつたが」

「ワハハツ、ワシと違つてルドルフは上等な服着とるからな 焼肉の匂いは結構なダメーシやろ？」

「フツ： “友人付き合い”で来る場にその様な事を気にしてはいないさ それよりキー坊の方こそ大丈夫か？ “今日の格好”は一張羅じゃないのか？」

ルドルフの指摘する通り、現在の熹一の格好は“NEO宮沢熹一”の物であり、それを聞いた熹一は『何でもない』とばかりに手を振った。

「あー、構へん構へん 最近はこの格好する機会も多かつたんでな、そろそろクリーニング頼もうと思うとつたんじや グラサンやら他にも変装グッズはあるし気にせんでエエよ」

「…前に一度見たが、あの“可笑しなサングラス”か できれば今の姿より“不審者”に見えるから少なくとも中央ではやめて貰いたいな」

「んなつ!? ルドルフも中々言うのオ…」

自身のファツションセンスを直球で否定されて苦笑を浮かべる熹一にルドルフは申し訳なさはありつつもほんの少しのからかいの色が覗く微笑で返す。

「いや、済まないな あのサングラスは君のお気に入りなのだろうが“アレ”を付けて意気揚々と中央を練り歩かれると生徒の中には笑いを堪え切れない者が出て来るのでね なるべく控えてくれると助かるんだ」

「そ、そうか…そないな事になつとるなら、今後は気を付けるわ」

「ああ、そうしてくれるとこちらも…いや、“私の表情筋”も助かるよ」

「何や、“一番笑つとる”のはルドルフつてオチやつたんかい…つたく、そろそろ肉も焼きあがつたし皿に取り分けるで」

「ん？ キー坊がよそつてくれるのか？ 私としても助かるが……」

「“こういう場”ではレディに気を遣うんが男の役目やろ ホレ、皿出しいや 食えん野菜があつたら今の内に言うてくれ」

「いや、大丈夫だ しかし…可笑しな物だな 私と君がこうやつて一緒に食事をする仲になるとは」

「そこまで可笑しな物でも無いやろ たまたまお互いフリーな時間が出来たんで飯に誘つたらルドルフがOK出してくれたんで、こうやつてワシがオススメのジンギスカン屋に来れたつてだけやぞ？」

「関係性の問題、とでも言えば良いか…私とこうやつて『二人で食事をしよう』と誘う者も中々居なくてね “異性の友人” もあまり居ない為か、何だろうな…今は立場も忘れて『ワクワク』してしまっているよ」

「ワシからすれば妹とそう年も変わらんお嬢さんや しゃあけど、 “立場” つて物もあるからこうやつてワシも変装して『周りの事にせんと羽でも伸ばそうや』思つて誘つたんじゃ…：：：良し、羊肉のジンギスカン一丁上がりや 熱いから気を付けるんやで？」

「…ありがとう 君のその氣遣いと共に喜んで頂くとするよ」

熹一から受け取つたジンギスカンは彼の言葉通りかなりの熱を持っていたが、それと同時に彼が持つ人間的な “温かさ” を感じたルドルフは満足気な表情で箸に手を付け

る。

「モグモグ」…ふむ、これは驚いた ジンギスカンと言えば子羊^{ラム}しか食べた事がなかったが成羊^{マトン}の方が味がしつかりしているな 栄養素はこちらの方が上と言つても臭みが強いと聞いて今まで敬遠していたのだがこれは……」

「どや、中々の物^{モノ}やろ？ この店では脂の下処理に力を入れとつてな、タレも果物をベアスにして肉の臭みを消す努力をしとるんで連日盛況なんや」

「いや、見事だ これ程の物を^ゴ馳走になるとは…心から感謝だな」

「それ聞いたらワシも嬉しいで なんせ、この店はワシが出資しとる所の一つやからな」
「なっ?! そうだったのか……」

「いやな ワシも昔に『食べるサブリ』や聞いて成羊^{マトン}食わせて貰ったんやが、噂と違つて臭みが無いヤツだったんでな、これは『近場で食いたい』思つてのオ…出資者になつて都内に店構えて貰ったんや」

熹一の思つた以上のバイタリテイに驚いたルドルフは一旦箸を止めて質問する事にした。

「それは『税金対策』の一環か？ 漠然とだが、そういう事は他人に任せているタイプだと思つていたよ」

「『それ』も勿論あるんやが…一番は『オグリ^妹の為』や オグリもぎようさん食うんや

が、お蔭で初見の店には『喜ばれる』か『イヤな顔』されるかの二択でな…身内の店なら遠慮せずに食べるんやないかと思つて食い物屋の出資を始めたんじや」

「……大した物だな、『妹を想う兄の気持ち』というのは」

「神戸、都内、カサマツと手を広げてるがタイでも出資をしとるんや ルドルフも行く機会あつたら店長さんの旦那がムエタイのトレーナーやつとる屋台に寄つてみるとエエわい 美味しい物モンご馳走してくれるぞ」

「そうだな…機会があれば是非、立ち寄らせて貰おうか」

友人のあまりのシスコン振りに若干引き気味になるも、本人は気にする素振り一つ見せずに自身にもお勧めの店を紹介するのに対して段々と『仕方が無いな』という気分になつたルドルフは止まっていた箸を動かす事にした。

「モグモグ）…うん、本当に美味しいな これなら『ホゲツト』と呼ばれる肉も試してみたくなつて来る」

「ラムとマトンの『中間』のヤツやな？ メニューには載つとるから食い終わつたら頼んでみるか？」

「それは有難い、是非頼むよ しかしキー坊…随分と羊肉に詳しいがそれも出資の為に勉強したのか？」

「いや…昔、『羊みたいに従順』なんて評されたヤツがおつてな 人間と羊は違ふと思ひ

ながら、なんとなしに調べただけや 毛の刈り方やら食い方やらの… 『利用方法』 について はな」

「…そうか」

熹一の纏った雰囲気が少しだけ暗さを帯びた事によって『語るべき話題』では無かつた事を察したルドルフは目の前の皿を片付けると別の話題を振る事にした。

「それにしても、今のキー坊の格好は普段と違って強さを全面に押し出しているな まるで『百獣の王』を想起させるよ」

「…ライオンアも人間が付けた勝手なイメージやが、それ故に『近い姿』ならイメージを相手に植え付けられる ワシが前にこの格好をしとつた理由の一つやな」

「そうだったか…だが、やはり私は普段のキー坊の方が落ち着くな 『強者である事をひけらかさない』、普段通りの君がな」

「…スマン、氣い使わせた 内心の乱れを見透かされるとはワシも精神修行をやり直さんとアカンな」

「店にはお弟子さん達も『妹』も居ないのだから構わないだろう それに私としても最強の男の『そんな姿』を見れるのは友人として役得と思っているよ」

「…男つちゆうのは『そういう姿』 見られるのが『恥』と思つとる所があるから、あんまりイジラんとしてくれや」

「フフツ、承知した。私も男性との付き合いがあれば今の言葉を肝に銘じておくとしよ
うか」

◇◇◇◇◇

「ふむ…久しぶりに量を食べたな。後に頼んだホゲツトの食べ応えもだが、デザートも
充実していて成程…確かにこの店は『オグリ向き』だな」

「やっぱり、ルドルフも『ウマ娘』やな。オグリ程やないが人よりガツツリ食えとる
羊肉はカルニチンが多く入つとるから『太りにくい』と女性にも評判やし、気に入つて
くれて嬉しいわ」

「ああ、大変満足したよ。場所も中央に近いし、今後も機会があればこの店を利用させて
貰おうかな」

その後テーブルにはデザートとドリンクしか残っておらず、片付けた二人は会話をし
ていたのだが、その空気は和やかな物であった。

「しかし…羊肉が如何に脂肪を燃焼すると言つても今日はいささか食べ過ぎたな。戻つ
たら何か運動メニューを考えなければ……」

「せやったら、『あの連中』にメニュー考えて貰つたらどうや？　ホレ、最近親父の伝手
で外部指導員として採用された……」

「『元・チームD』の方々か。そう言えばキー坊もこの前、『秋川清風』さんと一緒に

ロッククライミングへ行つたと聞いたが……」

「おうっ！ 裸足のアキちゃん」とは今でも飯食いに行つたり乱取り付き合つて貰つたりと付き合ひ続けるからな この前はルドルフの言う通り、尊鷹も交えての「命綱ナシ」のロッククライミングやって来たわ」

「命綱無し」とはこれまた剛毅な……万が一の事があればご家族が悲しむから程々にしてくれよ？」

「金貸し道元」という男がハイパー・バトルの為に発足した「チームD」、オーナーが決勝後に米国の黒幕共々破滅した事によりフリーとなつてしまつた彼等だが、熹一の父である静虎の勧めで中央の外部指導員として採用される事となつた。

その中の一人と共に荒行染みた山登りを行つたと笑う熹一の姿は『豪放磊落』を体現する物であるとルドルフは感じ、付き合ひは短い物の友人の性格を理解していた故に『程々』という言葉を用いて戒めを贈る事にする。

「わーつとるつて で、話を戻すんやが……体調管理やつたらリーダーの「キクさん」に頼むのはどうや？ あの人、ハイパー・バトル後はエライ健康に氣い使うようになったからのオ」

「ハイパー・キクタ」……菊多サナエさんか 過去に薬物に頼つてしまつたのも生来の生真面目さ故で今は猛省しているし、私としても彼の様な愚直に「弱さを乗り越えよう

としている人”には好感が持てる キー坊の言う通り、明日にでもトレーニングメニューを考えて貰おうか」

「そうしてくれ キクさんも未だに昔の事をウジウジ考える所あるんでな、ルドルフみたいなの自信持った人”に頼られればそんな忘れられる位、やる気になつて働いてくれる筈や」

「外部指導員のメンタル調整も考えなければならぬか…君も私も望んでやっている事とは言え、やる事が多いな」

「ワシ等も他人^{ヒト}から何言われようがお節介焼くのが変わらん性分なんやし、しようがないわ きつと、この『自己満足』は死ぬまで続くんやろなあ……」

「自分一人がこの性分を抱えていると思えば嫌になる時もあるが…幸いにも私の周りには目の前の君を始めとして多くの心根を同じくする者が居るからな そう考えると、今の私はとても恵まれているよ」

「何や、若いのに年寄りクサイ事言うのオ…今後、競技者を完全に引退しても人生は続くんやぞ? んな枯れた事言つたらんと未来の話をしようや」

「ふむ…『未来』か……」

熹一からの言葉に感じ入る物があつたのかルドルフは口元に手を当てて思考状態に入るが、しばらくするとそれが終わり熹一の目を真つ直ぐに見据える。

「私の望む『夢』は恐らく私の代では出来ても基盤作りが精々だろう。夢を託す子供を作る為のパートナー選び、引いては『結婚』を考えている」

「…女の子やったらまず考える事なんやろうが、言い方が固い上に重いのは親父を思い出させるのオ…」

「フツ、女性であれば大抵はショックを受ける発言なのだろうが…『静虎さんに似ている』と言われるのは思った以上に嬉しい物だな」

「ま、ワシも親父を好き言うてくれる者は無条件で高評価やけどな…で？ そないな事言うなら『相手』の目星は付いとんのか？」

「…残念な事にその様な相手には未だ出会えてはいないが、人生は長いんだ。それこそ中央を去った後にも世界中を回って相応しい相手を見定めてみるさ」

「ルドルフのお眼鏡に適うなんて、それこそ『立派な男』に違いないんやろな？」

「いや…能力ではなく、ただ『私を受け入れて信じてくれる人』が居ればそれが最良なのだが…これも高望みなのだろうか？ キー坊とオグリの関係性を見てみるとそれが『理想像』になってしまっていてね」

「…ソイツは光栄やな。ワシとオグリは『兄妹』やが『家族』や。結婚となると家族になるって事やし、そう思える人と一緒になるってのは確かに理想やろな。ワシは応援しとるで」

「ありがとう 私の好みからは外れる物の、君の様な “立派な男性” から応援されると自信が湧いて来るよ」

「いや、そりや良かったが『好みからは外れる』って前置きはいらんやろ…?」

ルドルフの言葉に熹一が渋面を作ると彼女は年頃の少女だと実感させる鈴の鳴る様な笑い声を上げた。

「アハハッ！ 私も気心知れた相手に嘘を吐くのは苦手な性分ではあるのだが、キー坊があまりにも『打てば響く』反応を返してくれる物でね…今日は君をからかう生徒達の気持ち解出来たよ」

「…そりやあ、良かったのオ」

「いや、申し訳ない 君の事は “得難い友人の一人” と思っっているのは本当なんだ 故に…という訳でもないのだが、キー坊…君の方こそ結婚の予定は無いのかい？」

「何や…悲しい位に予定は無いが、んな事聞いてどないすんのや？」

「何、私にウマ娘の子供が生まれて走れる様になったら切磋琢磨出来る “ライバル” が欲しいと思つてね 君の子がウマ娘であれば相応しいと思つたんだが、気が早すぎたな」

「相手も見つけないとそんな事考えんのは、それこそ『取らぬ狸の皮算用』ってヤツやでそないな事やったら何ぞ、 “名前” まで考えてそうやのオ……」

「まあ、漠然とだが……心身共に『強い者』であって欲しいし、皇帝と異名を付けられた私を超える『帝王』になって欲しいと思っっているよ」

「……エエ感じやん よしっ！ ワシに子供が出来たららの話やが、ルドルフの子供とは『友達』付き合ひさせたる！ 相性悪くて疎遠になっても恨むなや？」

「おお、それは嬉しいな！ 何、大丈夫さ 君が育てた子供ならばきつと仲良くやれるとも」

客もまばらになり始めたジンギスカン店で二人の『最強』は未来の話に花を咲かせ、それからしばらくの間笑顔で語り続けたのであった。

オマケ

同時刻、ラーメン屋『幽玄』にて――

「ゾバツ！）……この気配は？」

「どうしたの、オグリちゃん？」

「モグモグ）……いやベルノ、何やら漠然とキー坊が『結婚を考えている気配』を感じてしまったんだ」

「……何それ？」

店内に居た客のリクエストに応えたオグリキャップによる『手を動かさずにラーメ

ンを食べる芸”を披露していた所、突如動きが止まった友人に理由を尋ねた結果『兄の結婚の気配を感じる』という訳の分からない答えが返って来たベルノライトは思った事をそのまま口に出してしまふ。

そして、そんなオグリに反応したのは彼女の目の前に居たもう一人の男――

「…オグリ、今の話は本当かい？」

幽玄の店主にて宮沢熹一の“血の繋がった”父である日下部覚吾であった。

「いや、覚吾さん…私が何となくそう感じたただけなんだ　混乱させる様な事を言つてしまつて済まない」

「そうか…いやしかし、熹一も良い年なのだ…そういう相手が居ても可笑しくは…だがしかし……」

与えられた情報により自己崩壊を起こしそうになっている店主の姿に不安感を覚えたベルノは咄嗟にとある提案を試みる。

「か、覚吾さんの“手を動かさずにパンチするの”見てみたいです！　前にネットで拝見してから凄いなーってずっと思つてて！　宜しかったらで良いので、ぜひっ！」

「“幻突”の事か…だがベルノ、前にキー坊から実演して貰ったから目新しさは無いんじゃないか？」

「そ、その…覚吾さんのも見なくなつたの！　営業時間中にこんな事言うのは迷惑です

けど、ダメですか…?」

「…ああ、別に人に見せても真似出来る技術ワザでは無いから構わないが…待っていないさい、余った巻き藁があつたと思うので店の外で披露しよう 他の皆さんも構わないでしようか?」

ベルノの突然の要求に驚きの表情を見せるも真剣な様子に覚吾は他の客の了承を取り、店外での演武の為に一旦、その場を離れるのであつた。

「…良かった 落ち着いてくれたみたいで」

「ベルノは凄いな 私は覚吾さんが混乱してるのは分かつたがどうやって治めるのか分からなかつたんだが、直ぐに正解を引き当ててしまふんだからな」

「アスリートつて『普段通りの行動』をやろうと思うと落ち着く所があつたから、武術家の人達も同じなのかなつて提案してみたんだけど…成功して良かったよ」

「やるもんだな、ベルノちゃん 俺が未だに役所勤めだったら是非ともスカウトしてたぜ」

「だ、誰ですか!?!」

「『犀の大観』さんだ そう言えばベルノは裏に居る彼等と会つた事がなかつたな」

「見せて貰つたぜ…オグリの友人をやれてる所以をな」

「『大蛇の武山』さん 表情はあまり変わらないけど、とっても真面目な人なんだ」

「覚吾さんもどことなく嬉しそうにしてたし、俺等も久々に幻突を見れるんで楽しみなんだ ありがとよ」

「『鼬の観山』さん 前に動物園に行った時に話したのがこの人なんだ」

「覚吾さんを前にしてビビりながらも自分の意見を言える…実に『良い女』じゃないか」

「『疾風の春草』さん この人だけ四人の中で動物の二つ名じゃないんだ」

続々とベルノの前に集結する 『幽玄死天王』であつたが、未だに出て来ない人物が居た事に気付いたオグリが彼等のリーダーに質問する。

「春草さん、『ジョー』はどうしたんだ？」

「あー、『金城剣史』だが今日は灘・真・神影流の道場に行くつて事で休みだ 和香ちゃんと万次から様子は動画で送られてたけど真面目にやってるんで安心してくれ」

「そうか むやみやたらに『悪人退治』をやってなければ別に良いんだ」

「アイツは幽玄の中で一番の格下だつてのに好き勝手やり過ぎなんだよ ま、今は俺等が迷惑掛けない様に目を光らせてるから安心してくれ」

「あの…『好き勝手』つて、具体的にはどんな…」

「何、オグリやベルノちゃんみたいなの『優しい子』には一切関係ない話さ」

「そ、そうですか……」

春草の発言に物騒な響きが混じったベルノは質問を試みるも相手が笑顔ではぐらかす様子を見せたので『触れない方が良い話題』である事を察し、それ以上の質問は止める事にした。

「そんな事より覚吾さんの『幻突披露会』だ 馳がさつき言った通り、俺達も久々に見れるのは嬉しいんでね 君には感謝してるのさ」

「そうだな さつきはベルノに『目新しさは無い』とは言ったが私も覚吾さんの幻突はキー坊のより凄いと思ってるから見れるのであればもう一回見たいな」

「確かに…覚吾さんの『足を踏み込んだ音』って凄かったもんね…あつ！ 近所迷惑になっちゃうわないかな…?」

「流石に全力ではやらないから大丈夫だとは思うが…ベルノ、準備が出来た様だぞ 私達も外に行こう」

「う、うん！ 分かったよ！」

こうしてベルノの機転から始まった『拳聖』日下部覚吾による幻突披露会は店内に居た客のみならず店外を歩いていた者にも好評でラーメン屋『幽玄』の新たなリピーター確保に繋がる結果となったのであった。

しだれた桜とコンプリート・ファイター

「やっぱり、まだ『違和感』あるなあ……」

中央の中庭のベンチに座り、自身の脚を擦っている彼女の名は『サクラチヨノオー』。

かつて日本ダービーの激戦を制した物の限界を超えた事によって多大な負荷が掛かった彼女の脚は療養を余儀なくされ、最近になって包帯も取れてリハビリを開始するも本調子を取り戻せずに頭を抱える日々を過ごしていた。

「みんなから評判の宮沢さん親子の施術も受けてみたけど、『ほぼ完治してるけど心が追いついていない』って事だったし……どうすれば調子を取り戻せるんだろう……」

現在の中庭に居るのは幸か不幸か彼女一人しか居らず、そんな悩める少女を眺める者は噴水に設置され、ウマ娘の始祖と呼ばれた『三女神像』のみであったのだが……気付くとチヨノオーの視界の端には『周囲を見回す男の姿』が確認出来た。

「あれ……？ あの人、中央では見た事が無かったけど……記者さんかな？」

「キヨロキヨロ）…………」

「その割には辺りを見回し過ぎだし……ひよっとして不審者？」

最低限の荷物を背負って殆ど表情を変えずに周囲の状況を把握しようとしている男にチヨノオーは不審者の線を疑うも、よくよく見ればその男の雰囲気は『困っている』様子が見て取れたので生来の気質が『良い子』であった彼女は僅かばかり逡巡した後、意を決してその男に話し掛ける事を決めた。

「あ、あの！ お困りでしようか!？」

「……………（コクツ）」

「……………は中庭ですので、宜しかったら私のご案内しますが……………」

「……………」

チヨノオーに話し掛けられた事によって男は反応を見せるも、それはまるで『耳が聞こえていない』様子であり、途方に暮れかけていた彼女の表情を見た男が荷物の中からタブレットを取り出して『文章』を打ち込んだ後、それを目の前に見せて来た。

「困らせてしまつて済まない 俺の名はマーシオ・ジェット・内藤 耳は聞こえない身の上だが本日付けでこの中央で世話になる事になった 君は此処の生徒だな？ 宜しく頼む」

「マーシオさん…新しいトレーナーさんですね!？ 私はサクラチヨノオーって言います……………つて！ 『耳が聞こえない』 なんだつたら今の自己紹介じゃダメでしたね えつと…私の『チヨノート』は確か……………」

【問題無い 君の口の動きで何を話しているかは理解出来ている それと俺の事は『ジエツト』と呼んでくれ 世話になった人達からはそう呼ばれているからな】

「は、はいっ！ ジエツトさん、宜しくお願いします!!」

タブレットで会話するジエツトという不思議な男から感じるどこか「悲し気」で「優し気」な雰囲気にはチヨノオーは初めの内に抱いていた警戒心が薄れ、彼女本来が持つ元気さと礼儀正しさを備えた挨拶を行った。

そんな彼女をどこか「眩しい物」を見る目で見ていたジエツトであったが、彼女の立ち方に違和感を感じてタブレットに打ち込んだ質問を見せる。

【チヨノオー 君の脚だが、不調を抱えているのか?】

「えっ!? そ、そうなんです…施術師さん曰くもう殆ど治ってるらしいんですけど、『心が追い付いていない』らしくて…お恥ずかしい限りです」

【君が許可してくれるなら俺が按摩を施しても良いか? これでも地元では名の知れた施術師だったんだ】

「…わ、分かりましたジエツトさん お願いします」

こうして始まったジエツトによる按摩であったが、施術中の彼の表情は真剣そのものであり、その様子と宣言通りの高い腕前にチヨノオーは脚に溜まっていた疲れが抜けて行くのを感じ、施術が終わると自身の脚が新品になったと錯覚する程であった。

「うわあ…スゴイ、スゴイです！ ジェットさん！ こんなに脚が軽いのは初めてです！！」

【あくまで俺がやったのは溜まっていた疲労を取り除いただけで、君の脚がほぼ完治しているのは事実だ 中央の施術師の判断には何の間違いも無い】

「そうなんです…宮沢さん達だけじゃなくジェットさんみたいなスゴイ人が中央に入ってくれるなんて、とつても嬉しいです！」

「……………」

「あ、あれ？ どうしました？ ジェットさん…」

自分の口から出た『宮沢』というワードを目にした瞬間にジェットの反応が鈍くなつた事に気付いたチヨノオーは『何かまずかったのか』と思い、彼に質問を行ったがしばらくすると本人が首を横に振って再び持っていたタブレットに文章を打ち込み始めた。

【済まない、心配を掛けた 宮沢家の者は俺にとって親戚で、それこそ命を救ってくれた恩がある 当時の事を思い出してただけだ】

「そ、そうだったんですね…そんな壮絶な過去があつたとは露知らず、気を悪くさせたのなら申し訳ないです」

【本当に気にしないでくれて良い 母を失つてからは天涯孤独だと思つていた自分に突然降つて湧いた家族の存在は俺にとつても救いだ 話をされて気分が悪くなる事はな

いさ]

「…ジエツトさん 今は“幸せ”なんですね？」

【ああ、そうだ そもそもこの中央に来る事になったのも家族の勧めだからな 格闘家として闘いを通じた相互理解を学べたが、今度は君達ウマ娘を通じて競技者としての心構えを学ばせて貰おうと思っっているんだ】

「格闘家…ジエツトさんって “闘う人” だったんですね」

「…… (カタカタ)」

【キー坊とはハイパー・バトル決勝で闘ったが、知らないか 女性で畑違いの競技であればそれも仕方ない】

「あ、あの強いキー坊さん?! それは失礼しました!!」

チヨノオーが自身の浅学を謝罪するとジエツトの方も『気にするな』という旨の文面を見せる。

【俺だって今更ながら君が日本ダービーを制したウマ娘だと気付いたんだ 失礼はお互い様さ】

「い、いえ私は…当時の事もただ必死に『負けたくない』って思いが先行して最後の方はあまり覚えていない状況でして……」

【その思いが君の限界を超えて自身の潜在能力を引き上げたんだろう 現在の心が追い

付いていないという不調もそのズレが引き起こしているのだろうか」

「…そうなんですか？」

「俺も父の指導を受けて経験がある。壁を越えた後に新たな壁に直面した時、『越えられないんじゃないか』という思いは感じたが、既に自分にはそれを越える力が備わっていたという事を実感出来た経験がな」

「……な、成程」

「だから今は焦る必要は無い。休養期間中であるなら、その間にズレは自然と矯正されるだろうからな」

「…ありがとうございますっ！ ジェットさんって名トレーナーさんなんですね!」

ジェットの自分の経験から来るアドバイスを目にしたチヨノオーが目を輝かせながら礼を言った事に対しての本人の反応は「首を横に倒す」という「疑問を感じた物」であった。

「分からない。俺はトレーナーとしては未熟だから自分の経験則でしか君にアドバイスが出来なかった。今の君の不調だつて別の要因なのかもしれないのだから全面的に信用されるのも困るぞ」

「いえっ！ ジェットさんの言葉…文章には「力」を感じます！ 私の心のモヤモヤが吹っ飛んじやったんですから、きつと今のアドバイスは「正しかった」んです!!」

「…（カタカタ）」

【そう言ってくれるなら、助かる。俺もウマ娘のトレーナーなんて初めての経験だったから君の言葉で少しだけ自信が持てたよ】

「はいっ！ 自信持つてください！ よおしっ、今日の事は『チヨノート』に残しちゃおう!!」

【チヨノート？ 君はノートに日記を書くのか？】

「いえ…日記というよりはアドバイスを格言の様に書いた物でして…例えば、今日の事なんかは『格闘家の金言、道にも通ず』みたいな感じですね」

「……（カタカタ）」

【具体的なアドバイスは記載されていないが、それで君が分かるのであれば別に問題はないか】

「はいっ！ 大丈夫です！ 今日頂いたアドバイスと共に『目指せ、憧れの人へ』ですな!!」

そう言つて更に目を輝かせたチヨノオーを眩し気に見ていたジェットであったが、気になる事があつたのか彼女に質問をする事にした。

【憧れの人、という事は君は明確な目標を持って競技者をやっているんだな？】

「そうなんです 私が子供の頃に見た憧れ、『スーパーカー』『マルゼンスキーさん！』

彼女を目標にし、いつか超える事が今の私の「夢」なんです!!」

「そういう気持ちなら俺にも分かる。幼い頃から俺を育ててくれた父の存在だ。鍛え上げてくれた彼への恩返しとして彼を超える事こそが現在の俺の目標なんだ。今回、中央のトレーナーをやる事になった理由の一つもそこにある」

「そう言えばジエツトさんは『家族の紹介で中央へ来た』って仰ってましたもんね。宮沢さんの親戚という事は「お父さん」は……」

「ジエツト、こんな所に居たのか。何時まで油を売ってるつもりだ、早く必要書類を書きに来い」

チヨノオーとジエツトの前に現れたのは中央で『敏腕』と名の知れてはいる物の、殆どの女生徒から怖がられている存在である「宮沢鬼龍」であった。

そんな存在がジエツトへ「彼の基準からすれば親し気に」話し掛けるのを見たチヨノオーは二人の関係を察したが、その時にはジエツトは鬼龍の所へ向かおうとしていた。

「あ、あの……」

「チヨノオー、今日はありがとう。この中央で最初に会えたのが君の様なウマ娘で本当に良かった」

「い、いえ……それなら良かったです」

「来て早々に有望な娘に現を抜かすのも結構だが手続きが済んでいない以上はお前はまだ『部外者』なんだ さっさと事務室へ行くぞ」

「コクツ）……」

こうして本日、宮沢鬼龍の息子の一人であるマーシオ『ジェット』内藤が中央へ赴任する事になった。

彼が来た事によつて中央はどういった変化見せるのかをチヨノオーは一抹の不安とそれ以上の期待を持つて事務室へと向かう二人の：『親子』の後ろ姿を見送るのであった。

オマケ

「ジェットよ、どうだ『中央の雰囲気』は？ 人知を超えた能力を備えた存在が『俗世の争いなど興味が無い』といった様子で己の本能である『走る事』を追求しているんだ『美しさ』を感じるだろうか？」

【地元でもウマ娘の按摩はやつた事があつたが、少なくとも今日出会つたチヨノオーはモノが違う それは生まれ持つた脚質に加えて、この環境のお蔭で育まれた物なのだろうな】

「その通りだ 競技者としての敗北は上位層になるにつれ：『全てを懸けた者』になる

につれ『己を殺された』と錯覚させる程の屈辱感が襲う。それを乗り越えて来た者達を凡百と比べるなぞ烏滸がましい事だ」

【あくまでやっているのは競い合いだが、彼女達はそれにより心から分かり合っている。俺とキー坊が体験した事を血を流さずに出来ているんだ。あなたから誘われなくても興味自体は前からあつたよ】

「それは結構な事だ…それで？ お前は中央こで上手くやれると思うか？」

【それは分からない。だけど】

父である鬼龍の問い掛けにジェットは今日出会ったチヨノオーの“眩い笑顔”を思い出し、この場所には他にも『彼女の様な輝かしい存在が数多く居るのだろうか』という期待に胸が膨らむと自然と口角が上がるのを感じながらタブレットを叩く。

「……………（カタカタ）」

【楽しくなりそうだとは思っているよ。父さん】

拳術館とタマモクロス

明石市 拳術館道場——

「師匠」っ！ お久しぶりですっ!! タマモクロス、道場への顔出しに参りました!!」

「鉄山」さん、小宮山です！ 今日私は私も来ちゃいました！」

「おお、タマにコミちゃんか！ 有馬での活躍は見とったで！ よお来たのオ!!
(グイッ)」

「師匠：今日は生徒がおらん言うても、タマちゃん達が折角来たんですからお酒飲みながらの歓迎はやめましょうや……」

引退したタマモクロスと彼女の元トレーナーであった小宮山勝美、二人の美女を道場にて胡坐をかいて出迎えたのはかつて『超人』と呼ばれた空手家「倉本鉄山」と彼の弟子である「金田長英」であるも、相も変わらず一升瓶が手放せていない師匠の姿に弟子が苦言を呈していた。

「ダアホー！ 道場の主はお前に移してワシはもう「半隠居」の身イヤ！ お前を慕って集まって来た生徒等も居らんのお手本の様な教育者面する必要も無いやろがいッ!!」
「…いえ そりゃあ、そうなんですがね」

「師匠も年取ってちいっとは丸くなつたが、相変わらずやな 飲みたいだけ飲んでアル中でポツクリなんてウチは勘弁やで?」

「心配いらん、ワシの肝臓はまだまだ音を上げとらんからな! しっかしタマ、お前も競技者やってから益々エエ女に磨きを掛けて来たのオ: 肝つ玉母ちゃんみたいな風格やぞ?」

「誰がオカンやねん!? ……つてやり取りも懐かしいなあ ウチ等がヒートアップすると金田の兄さんがオロオロスんのが面白かつたわ」

「…二人とも ボクだつて師匠に道場任されてからは色々頑張つて来たんですから昔みたいにイジんのやめてくださいよ」

「分かつてるよー、キンちゃんが頑張つて鉄山さんやタマちゃんの事支えてくれてたつてのは私がよーつく、分かつてるからね」

「こ、小宮山さん位ですよ…:ボクの事真つ当に扱つてくれんのは…:」

「コミちゃん、あんま金田を甘やかすんやないぞ 『男は叩いて強くなる物』^{モシ}やからな」
「せやでコミちゃん、師匠の言う通りや あんま優しく過ぎると金田の兄さんがコミちゃんに恋してしまう可能性だつてあるんやからな?」

「…え? それは…:遠慮しとこうかな」

「そこでガチ目に引かんで下さいよ、小宮山さん! もう、師匠とタマちゃんが揃うとい

つもこの流れになるの勘弁して欲しいわ!!」

そう言つて金田が大げさに天を仰いで嘆く様子を見てその場に居た三人が大笑いするも、結局「何時もの流れ」になつた事に本人は口で言う程の悲壯感はなく、苦笑を返すばかりであつた。

「いや、悪かつたつて 今日にはちゃんと美味しい土産物モト持つて来たし、師匠や生徒さん達とこれでも食べて機嫌直してや?」

「まあ、エエけど…で? 今日にはタマちゃんが引退してから初めて『お邪魔したいです』つて連絡が来たから師匠と二人で道場に待つてたけど、何の用で来たの?」

「それは私から…本日は改めて、タマちゃん…タマモクロスを育んでくれたお二人にお礼をと思つて参りました」

突如、居住まいを正して鉄山、金田へと頭を下げた小宮山に対して二人もそれに応える様に雰囲気を見目な物へと変える。

「小宮山さん…タマモクロスがこの拳術館道場の門を叩いた理由の一つとして、古くからの友人であるオグリキャップと『対等に競う為』言うのがありました」

「はい…タマモクロスは『武術家の下で育つた』オグリキャップに立場でも負けない様に自分の『負けん気』を伸ばせる場所として拳術館こぶしを選んだ事は本人から聞いています」

「ワシもその思いに応えられる様に女の身であろうとも一切の妥協無く指導をしましたが、彼女は弱音や泣き言を吐かずにそれらをやり遂げた、立派な弟子であると思うております」

「…幼い頃に走りを教えて貰った『恩人』、体格のハンデを物ともしない身体を作り上げてくれた『師匠』、そんな彼女を傍で支えて下さった『兄弟子』の存在のお蔭でタマモクロスというウマ娘は一流のアスリートとして大成した事を彼女を担当したトレーナーとして深い感謝を……本当に、ありがとうございます」

一時は『日本一』の称号を得たウマ娘、タマモクロス。

彼女を引退まで支え続けた小宮山勝美という中央の若きトレーナーは体格や環境に決して屈しなかった『相棒』を形作ってくれた者達への感謝を伝える為にこの場へと姿を現したという事を痛感した目の前の男達は天を仰いだ。

師匠は当時、愛弟子に与えた修行の数々を思い出し…弟子は師匠から受けたシゴキから決して逃げる様子を見せない『強さ』を持った姿を思い出していた。

「…タマちゃんはボクと違って『強い娘』です 昔のボクはイジメられても身体を丸めて縮こまつただけやったけど、タマちゃんは『貧乏』や『体格の無さ』をバ鹿にされたらどんな相手やろうと絶対に噛み付いとった しかも家族をバ鹿にされたらその勢いは『倍』や…そんなタマちゃんが、ボクにとっては何時だって憧れやったんです」

「……金田の兄さん」

「更には……ウマ娘の競技者人生はボク等、格闘家よりもはるかに短い。その短い時の中でタマちゃんは『栄光』勝ち取り、『戦友』との後悔が無い決着まで付けられたんやホンマ、羨ましすぎて嫉妬してまうわ」

「二人とも、ホンマに……本当に、ありがとうございましたっ!!」

自身の目の前で微笑む『恩人二人』にタマモクロスは感謝と共に深く頭を下げる。

その瞳からは大粒の涙が零れ落ちそうになるも、『感謝の念も一緒に流れ出そうだ』という思いから彼女はそれを堪える為に道場の神棚の方へと向き直る。

「競技者人生は終わったけど後を託したオグリんだって頑張つとるんやし、ウチの人生はまだまだこれからや!! 今後もみんなには世話になる事もあると思うけど、そんな時はどうか! よろしくお願いします!!」

「当たり前前の事抜かすなや! タマみたいなエエ女、『放っておけ』言われても構いに行つたるからな!!」

「タマちゃん……偶には拳術館にも顔出してな 生徒達の中にはボクみたいにタマちゃんに憧れてる子も大勢おるんやからね」

「タマちゃんが引退しても私達との縁が切れるってワケじゃないし、何でも相談してね! その時は他の担当の子が居ても一緒に助けに行っちゃうんだから!!」

「イヤイヤ、コミちゃん！　＼＼＼＼はダメやろっ!?」

自身が放ったツツコミに笑う三人に釣られて笑うタマであったが、そんな彼女の携帯に着信が入ったので取ってみると其処から聞こえて来たのは、彼女の友人達の声であった。

「クロちゃん、この肉はやたら値段が高いんだがどんな感じだ？　『口の中でとろける』と書いているんだが…」

「うん　俺も何度か食べた事あるけど正直、食べ応えは無いからオグリちゃんには物足りないんじゃないかな？　この『高級ヒレ肉の5キロ盛り合わせ』とかのウマ娘向けのヤツの方が良いと思うよ」

「そうか！　塩で食べるのも良いし、ニンニクをカリカリに焼いたのを乗せるのも良いな…楽しみだ」

「おいっ！　二人とも静かにせえ!!　…タマ、今お前何処におんのや？　都内か？」
 「キー坊…いや、今はコミちゃんと一緒に明石の拳術館道場やけど…何や飯でも食つとんのか？」

「なら丁度エエわい　ワシな…今クロちゃん、オグリと一緒に神戸で出資したステーキハウスのオープンに参加しとんのや　今だけ『食い放題飲み放題』って事でキンちゃん達、皆も誘ってくれんか？」

「……ステーキハウスの『食い放題飲み放題』とはそら、太っ腹やな…分かった みんなには声掛けとくんで決まったら折り返すわ」

「おうつ、なるべく早めに決めてくれや 早よせんとオグリに肉を食い尽くされるからな（ブツツ…）」

電話の主である宮沢熹一による食事への誘いは周りの妹であるオグリキャップと戦友である黒田光秀の楽し気なやり取りに負けない様に張り上げた声で伝えられ、電話を切った瞬間にタマが道場内の三人の顔を確認すると内容が聞こえていたのであろう、その表情は全員が「期待に胸を膨らませる物」であった。

それを分かりながらもタマは口角を上げながら三人に声を掛ける。

「…って、事らしいんやけど みんな…どないする？」

「決まり切った事抜かすなや、タマ！ 『飲み放題』も付く言うならワシが参加せん理由なんぞ無いわ!!」

「黒田クンも来とるんやったら、ボクも是非とも参加したいな 道場経営の先輩として色々聞きたい事もあるしね」

「キー坊出資のお店って私も何度か連れて行って貰えたけど、どこも美味しくて落ち着く雰囲気ばかりなんだよね 奢りつて言うならここは行っちゃおうよ、タマちゃん！」

「よおし！ 全員参加で決まりやなっ!! ほな、早速折り返しの連絡すんで!!」
 自身の「大切な人達」の乗り気な返事に太陽の様な笑顔を見せたタマは熹一に参加を伝える為に再び携帯を構えるのであった。

オマケ

数時間後、神戸 ステーキハウス店――

「だあくから、タマは『男前』なんじやい！ ワシのシゴキに耐えるあの『気構え』は並の男なんぞ裸足で逃げ出す言うとるやろがア…ボケエ（ヒック）」

「分かってないですつてえ、鉄山さん（ヒック） タマちゃんの一推し所は『カワイさ』なんですよお…よくナーバスになつてもみんなの期待に応えようと持ち直す姿つてホント、カワイイんですからあ…（グビグビ）」

「そおいう所がむしろ『格好エエ』言うとんじやあ（グイッ） コミちゃんとはホンマに話が平行線になるのオ…（ウイー）」

「ならあ、今日はせっかくなんですから徹底的に語り合おうじやあないですか…（グイッ）
 どっちの意見が正しいのか白黒つけましょうよお（ヒック）」

初めの内は互いが愛弟子と担当の良い所を語り合うだけであったのだが、酒が入って行く事で議論は熱を帯び始めて現在の二人は如何に『格好良い』か『可愛い』かを大声

で語り合う場となつてしまい、その様子を他の客が見世物感覚で彼等の周りを取り囲む状況となつてしまつていた。

そしてそんな二人から離れて現在、頭を抱えて居るのは勿論――

「二度と行かん……ウチ、この店には二度と行かへんぞ……」

話題の中心であるタマモクロスであつた。

「タマ、災難だつたな 良かったらこの高い肉でも食べて気を紛らわせてくれ 本当に口の中で溶けてしまふんだぞ？」

「……いらん ウチの腹にそんなん入れたら調子悪くなるの確實やもん」

「なら、このハーブティー……中国茶でも飲んどけ 気分が落ち着くらしいで」

「……それなら飲む（グイッ 何でや、何でこないな事になつとんのや……?）」

「仕方がないだろ 本来なら “こういう時” 頼りになるキンちゃんもクロちゃんも……」

そう言つたオグリの視線の先ではすつかり “出来上がつて” しまつた当の二人の姿があつた。

「いやあ! 黒田クウン!! 久しぶりに会うたけど益々男前が上がつたんやないか!」

「金田も道場経営が上手く行つてゐるからか自信に満ちた顔をしてゐるね! 戦友がそんな顔をしてゐると俺も本当に嬉しいよ!」

普段では見られないテンションの二人を未成年であるタマとオグリは若干引いた目で見ていたが、成人男性として熹一の方からフォローが入る事になった。

「タマもオグリも勘弁したってくれや あのと二人も若い頃に闘り合つてから立派な戦友になつたからな…キンちゃんやクロちゃんが道場経営のイロハ聞く名目で飯に行く頻度はワシよりも多い位やし、今日は特別羽目外してしまふんもしゃあないわ」

「それは分かっているんだが…やつぱり『お酒の力』つて凄いな」

「金田の兄さんもクロちゃんもあんな『赤ら顔』でハシヤぐんは初めて見たんでな…ビックリしとんねん」

「ま、ワシは『ああなつたら』いざつて時に反応できん思うて人前では酒を入れん様にしとるんや お前等も飲める年になつたら、ちゃんと節制するんやで？」

普段よりも『出来る大人感』を出してアドバイスをする熹一に二人の未成年アスリートは思わず首を縦に振り、再び辺りを見回して『酒におぼれてしまった大人達』に軽く溜息を吐くのであった…。

神戸の夜景に煌めく二つ名

神戸 ホテル最上階のレストラン——

「今日はありがとう、宮沢さん 急な集まりで神戸に来る事になったが、終わった後の観光プラン等は考えていなかった物でね…生家がある貴方に案内を頼めて僕も助かったよ」

「気にすんなや、奈瀬ちゃん アンタが最近中央でマスコミの対応に疲れとつたのは知ってたし今日はワシも偶々ヒマしとつたからな、息抜きに協力出来たなら良かったわ」

「貴方も父である静虎さんと共に数多くのウマ娘を担当している様な物だというのに、こちらの体調まで把握して貰っているんだ 本当に頭が上がらないと思っているよ…」
 「それが中央でのワシ等の “仕事” やし気にせんでエエ それよか乾杯しようや、早うせんと前菜オードブルが来てまうからな」

「おっと、それもそうだな では、本日の感謝を込めて…乾杯」

「おうつ、お疲れさん 乾杯」

そうして『カチン』とグラスを鳴らす二人の姿は絵になる物であった。

片や中性的な美貌を持ち、普段はパンツスタイルのスーツで通している物の現在はレストランの雰囲気に合わせて女性的なドレスコートに身を包んだ中央のトレーナー、奈瀬文乃。

片や彼女と向かい合っている中央の施術師、宮沢熹一の姿も普段のTシャツ姿とは異なり、普段通りの坊主頭は変わらない物のスマートカジュアルをその身に包んでおり、彼が生来持つ野性味が僅かに漂う装いとなっていた。

その様な二人が穏やかな表情で話し合う様は彼等を見る者にとって良い意味で『美女と野獣』を想像させる事だろう。

向かい合って座る彼等の横に控えていた “二人のウマ娘の存在” が居なければの話ではあるが…。

「グイツ）…キー坊、このリングジュースは絶品だな 良い感じにお腹が空いてくるぞ」
「オグリ…せやろ？ ワシも前に此処に卸してる業者さんに飲まして貰ったが、ホンマ美味いねん」

「あら、そうなんですな では私も（クイツ）…本当 トレーナーさんも飲んでみて下さい、ほつぺたが落ちちやいそうになるくらい美味しいですよ」

「クリーク、済まないが僕の飲み物は君等と違ってリングの果実酒… “シードル” なんだ だが（クイツ）…うん、確かに美味しいな この味はリング農家の方々の熱意の証な

のだろうね」

オグリキャップとスーパーパークリーク、互いの相方が持つ素朴さに和やかさが増して今回の集まりに「アットホームな空気」が形成されていた。

「キー坊さん この前はベルノさんと一緒に私の実家のお手伝いをして貰ったのもありがたかったのに、今日はトレーナーさんと一緒に神戸の街並みを案内してくれてありがとうございます」

「いや、ホンマに気にすんなやクリークちゃん ワシかて子供は嫌いやないし、今日だつてワシ等の地元が『エエ所なんや』つて事を二人にも分かつて欲しかっただけやからな」
「オグリキャップも折角の休みだというのに付き合わせて済まなかつたね 英国館」
は楽しませて貰つたし「ハーブ園」には癒しを貰えたよ」

「英国館では二人とも「ホームズの格好」がとても似合つていたぞ キー坊もそう思うだろう？」

「二人の別嬪さんが探偵の格好しとるのは壯観やつたな 特に奈瀬ちゃんは普段の格好も格好やし、嵌まり過ぎやつたわ」

「…そうかい？ 宮沢さん達も似合いそうだったし、仮装してみれば良かっただろうに」
「オグリがやつたら『カワイイ』で済むやろうけど、ワシがやつたら『キツツイ』の一言やん？ 気遣いは嬉しいがエンリョしとくわ」

「そうなんですか？ 昔にテレビで観たホームズ映画だと『闘う人』だったのでキー坊さんには似合うと思うんですけど」

「それなら私も観たぞ、確か武術の名前は『バリツ』だったか…柔術をベースにした実戦派だったな」

「…相手の心理も汲んだ上で攻撃手順を正確に把握すれば『効率的に壊せる』ってヤツやろ？ ワシかてバトルIQというのは天才やから同じ事出来る自信はあるが…しゃあけど、悲しい位に『推理力』は足りてへんから名探偵役なんて似合わんて」

「そうだった キー坊と推理物を観ていても犯人役を当てる事は滅多に無いんだつたな」

「せやせや ワシが出来るんは精々、探偵さんのボディーガードやろうな」

そう言つて笑い合ひ、会話の弾む兄妹の普段の関係性を感じとれるやり取りを見た奈瀬とクリークが頬を緩ませているとウエイターが前菜を持ってこちらへ近付いてくるのが目に入ったので奈瀬の方から二人へ声を掛ける。

「二人とも、仲が良いのは結構だが…オードブルが到着したようだよ」

「アカン！ ウエイターさんに舐められん様、ビシツとした態度取んぞ！ オグリ!!（ビシツ！）」

「むっ！ そうだな、キー坊!!（ビシツ！）」

そうしてテーブルに前菜を並べる際にキメ顔で待機していた熹一とオグリの姿にウェイターが笑いを堪えている事に当の二人が気付かなかった様を見て思わず吹き出しそうになった奈瀬とクリークであったが出された野菜料理に舌鼓を打つと場の空気はすっかり落ち着き、それを感じ取った熹一が申し訳なさそうな顔と共に頭を下げる。

「悪いのオ……二人の美人さんを放つておいて妹と話し込むなんて本日のガイド失格やな勘弁したつてや」

「キー坊の言う通りだ 今日には二人に楽しんで貰うのが目的だというのに私達だけで盛り上がったしまつてすまない」

「いえいえ、私は仲良しの兄妹さんって見て嬉しくなるから構いませんよ?」

「僕もクリークと同じ意見さ 片や『怪物』と呼ばれたウマ娘であるオグリキャップと片や『ナチュラル・ボーン・ファイター』と呼ばれた格闘家、宮沢熹一の見せる貴重なオキシトタンだ ファンであればお金を出しても見たい光景だろうね」

「……………」

「? どうしたんだ? キー坊」

奈瀬の言葉に突如黙ってしまった熹一に『何か失言があったか』という思いを感じた彼女は熹一にフォローを入れるべく口を開いた。

「いや、済まない 僕が何か気に障る事を言ってしまったのなら謝罪するが……………」

「ちやうねん、奈瀬ちゃん 気に障ったとかやなくてな……ワシの “二つ名” って他に何か無いんかと思つてな？」

「……え？」

「確かに……お父さんは名前そのままの『静かなる虎』だし、『史上最強のモラリスト』なんかもあるな 尊鷹おじさんに至っては『高潔なる鷹』、『バトル・キング』、『ナバホ族のチャベス』、『土竜甚五郎』と様々な呼び名がある」

「お、オグリさん……それって最後の方は二つ名じゃなくて “偽名” だと思っただけ……？」

「せやな あのオッサンは顔と名前コロコロ変えすぎて今じゃ自分が『宮沢尊鷹』って自覚があんのかどうかも分からんからのオ……」

「僕の父や六平さん、昔の知り合いの前では流石に “変装” をしないモラルは残っているようだが……それに君達や君達の父である静虎さん、叔父である鬼龍さんには流石に “家族” として振る舞っているだろう？」

「そう言えば鬼龍も『怪物を超えた怪物』やら『悪魔を超えた悪魔』やら呼ばれとんのやつだな そのクセ、ワシ等が今日の観光案内するのを何処から聞きつけたのか自分が出資しとるホテルの招待券送ってオグリと一緒にドレスコードの為に半ば監禁しよつたんやからワシからしたら『厄介を超えた厄介』ってヤツやで」

現在、自分達が居るホテルが中央で恐れられている男である宮沢鬼龍の厚意に依る物である事を知った奈瀬が驚きの声を上げる。

「なっ！ このホテルは“あの人”が出資しているのかい!？」

「あの不良中年には『男には試練を、女には愛を』って信条があるからな 『女性のエスコートで最後に回るホテルは最高クラスを用意しているんだろな?』なんて言われて言葉に詰まっとなると小バ鹿にした顔でホテルの招待券と一緒に採寸の為の監禁コースや 本音を言えば、感謝はしとるが普段から迷惑掛けられとるから気持ちも半減やな」
「お金は鬼龍おじさん持ちだったからな ドレスコードも『今後中央で使う機会もあるだろう』と言われて払って貰ったから採寸は窮屈だったけど有難く頂く事にしたよ 二人の服も気に入ったら持って帰って良いそうぞ?」

「あらあら、そこまで気を遣って頂いたんですね…本当、何て感謝すれば良いのか」
「…デザイン的にも幅広く使える一品の様だね こちらに気を遣わせ過ぎない配慮には有難いが……」

「借りを作りたくないんやったら返却してくれて構わんから気にせんでエエよ んな事より…ワシの“二つ名の話”についてや 『ナチュラル・ボーン・ファイター』以外に何かないんか?」

話題が意外と気遣いの出来る男、宮沢鬼龍の話へと移行しそうになっていたのを軌道

修正した熹一が己の二つ名候補を尋ねるも周りの美女三人は首を傾げるばかりであった。

「…僕も宮沢熹一の名を知ったのはハイパー・バトルだったからね その時の『ナチュラル・ボーン・ファイター』が記憶に焼き付いてるんだ 『生まれついで格闘家』というシンプルスは良いと思うが……」

「シンプルスやったらオグリの『怪物』が一いちちゃん番分かりやすいやん？ ワシもそれ位がエエねん」

「私も自分の異名は強そうで気に入っているが……昔、東京に行った時に由美子おばさんからは『スポンジの様な吸収力』と言われていたし『スポンジ』と言うのはどうだ？」

「いや…『スポンジ』宮沢熹一って格闘家としてはどないやねん…？ これまで以上に対戦相手から舐められそうなんやが……」

「確か、TDKでは『技のデパート』と呼ばれていたのも以前に映像で観たので知っているが…それだと不服かい？」

「奈瀬ちゃん、それもワシが今より未熟な時やったしもうちよいイ感じのないかのオ…？」

「…あつ！ 前に私の実家で子供達に披露してくれた武術は『カッコイイ』、『アクションスターみたい』ってとーっても盛況だったんですよ えっと、あの武術の名前は……」

「それだクリーク！ 〃灘・真・神影流宗家〃 宮沢喜一……うん、とつても格好良いぞ」

「いやのオ、それも堅苦しい思つとんねん……要はな、ワシも二つ名に拘つとんのはオグリと並んだ時に 〃収まりが良い〃 のがエエんや タマの 〃白い稲妻〃 みたいな感じだな」

一向に決まらずに候補を出す面々に申し訳なさを覚えた喜一が僅かに恥ずかしさを滲ませた表情で己の内心を吐露すると、初めの内は呆けた様子であった三人が口元に手を添えて笑い出してしまったので喜一は益々居心地が悪そうに頬を搔いた。

「……ま、そうなるわな 悪いのオ、エエ年こいてこない子供ガキみたいな事言つてしもうて……忘れてくれや」

「ハハハッ……いや、笑つてしまつて申し訳ないね だが、そういう理由なら 〃相応しい二つ名〃 が思い付いたよ クリークもそう思うだろ？」

「うふふ……はい、トレーナーさん キー坊さんはオグリさんのお兄さんなんですから、〃怪物の兄〃 ……これがピッタリだと思いますよ」

「そうか……怪物の兄〃 宮沢喜一、か」

「良いんじゃないか？ 私はこれからキー坊が人にそう呼ばれると思うとすごく嬉しいよ」

「そ、そうか!? いや、今日はホンマにありがとな！ 良い二つ名貰えてワシもメツチャ

嬉しいわ!!」

「何、今日の観光ガイドの礼になったのなら僕等としても助かるね」

「はいっ! 案内してくれたお二人が笑顔になって貰えて本当に良かったです!」

その後は次々に来るコース料理に舌鼓を打ちながら四人は世間話やレースの事、今日起きた出来事を語り合い、デザートを食べ終わる頃には来た時以上の穏やかな空気感でレストランを後にした。

◇◇◇◇◇

「お、オグリキャップさんとスーパークリークさんですよね!」

「私達ファンなんです! サイン頂いても良いでしょうか!」

「…ああ、構わないぞ! いつも応援してくれてありがとう!」

「…はい! 私達が走る今度のレースも応援よろしくお願いします!」

レストランを出て少しすると食事中には自粛していたであろうファンに囲まれたオグリとクリークは僅かばかり困惑の表情を見せていたが、互いの相方にアイコンタクトを取つて了承を得ると直ぐに笑顔を見せてファン達に向き合っていた。

「…二人とも今日は疲れただろうに、流石のタフさだな」

「クリークちゃんも見事なモンや 前に子供の世話しとつた姿は見たが最後までニコニコしてんのは精神的にも肉体的にも頑丈って事やからな オグリに負けんタフな娘で

ワクワクしとるわ」

妹、オグリキャップの新たな宿敵ライバルになりえるであろうウマ娘、スーパークリークの潜在能力ポテンシャルに胸の高鳴りを感じる熹一に対し、彼女のトレーナーである奈瀬は不敵な笑みを見せる。

「今度の出走、クリークは京都だから当たる事は無いというのに気が早いね それ以前に今度のレースではオグリキャップには注意しなければいけない相手が居るんじゃないかい？」

「…『メジロアルダン』は流石、名門の娘だけあって試合運びが上手いな けど…何やろな、あの子を見とるとワシと鬪り合った時のガルシアやジェットみたいな『命を燃やしとる』感覚を思い出すんや」

「…そうか 中央で彼女を見た時には宮沢さんに対して『熱』を感じる視線を向けていたが…案外ファンなのかもしれないよ？」

「それはどうか分かんが、ワシが前に感じた『舐めとらん視線』があの子からの物モノなのは間違い無いわ そう意味でも要注意人物なんやが、それ以上にワシが気にしとんのは……」

「『イナリワン』か…確かに彼女の爆発力は周りを見ても抜きん出ているが、宮沢さんの様な『鬪う人』から見ても気になる所があるのかい？」

「前に練習を見せて貰った時やが、アイツの脚からチラツと『炎』が見えたんや 親父おとんの使う幻魔、『飛炎地獄』みたいな直接脳内に映り込む様な感じでな ありやあ、本人が意識しとるか分からんが、『領域』に入っとるわ」

「…それは驚いたな 彼女の狐面に併せた、さながら『狐火』と言った所か…だったら今度のレース、決着はまるで予想が出来ないね」

大井からの刺客、イナリワンが『領域』に入っている事を知らされた事によつて今後の展開を考える為に顎に手を添える奈瀬に熹一が先程の彼女を真似する様に不敵な笑みを向けた。

「ワシかて尊鷹と鬨り合つた時、お互いに『領域』ゾインに入つたが地力が上の相手だろうと勝ちを拾えたんや 結局、勝負事は今まで積み重ねた物モノの他に、『不確定要素』が入り込むからな…その中の一つに『見守ってくれる人』の存在おが居る 精々、お互いハラハラしながら『見守ろう』やないか？」

「…それもそうか 結局、勝負の場では孤独だからな…送り出した以上は信じて見守るしかない 当たり前前の事だが、改めて言語化されると色々と考えてしまふね」

「クリークちゃんも奈瀬ちゃんがそう思つてくれとるのが分かつとるから一途に信じてくれとるんやろ？ トレーナー冥利に尽きてハッピーハッピーやん」

「…そうだね であれば、お互いの『シンデレラ』の行く末を見守ろうじゃないか」

怪物の兄”、宮沢熹一さん」

新たに付けられた”二つ名”を呼ばれた熹一は満面の笑みを見せたが、それはホテル最上階の夜景と相まって『絵になる姿』であつたと奈瀬は感じていた。

そしてファンの対応を終えて戻つて来たオグリとクリークが熹一の姿を見掛けると奈瀬と同じく感嘆の息を吐く。

「何だキー坊、夜景が似合つて格好良いじゃないか」

「はい、そうですね〜 これなら女の子の子にもモテモテじゃないですか?」

「ほ、ホンマか!? いや、こない年でもそういう褒め方されると照れるのオ!!」

「…どれ、そろそろ僕達も部屋へ戻ろうか」

褒められた途端に”三枚目”に戻つてしまった熹一に三人の美女は呆れた様な表情を見せるも彼を伴つて今度こそ戻る為にエレベーターへと足を運んだ。

「二人とも、私とキー坊はこれで帰るが明日は温泉にでも浸かつてゆっくり身体を休めてくれ」

「有馬、みなと、白川と色々あるが泉質の一覧はメールで送つておくから好きなトコ回るとエエわ」

「分かつた 度重なる気遣いに痛み入るよ」

「オグリさん 今日的事は本当に感謝してますけど、今後のレースでは全力でお相手お

願いますね?」

「当然だ! その時は万全の状態で競い合おう、クリーク!」

こうして本日の熹一とオグリ神戸案内は終了し、帰り道でも様々な話をした奈瀬とクリークの二人は満足気な表情でホテルの部屋へと戻って行ったのだった。

オマケ

部屋までの帰り道にて――

「そーいや、『四大幻獣』って奈瀬ちゃんのチームの世話になつとるのは聞いてたが……迷惑掛けてへんか?」

「サポートに入ってくれている『四大幻獣』か……彼等四人もクリークを始めとしたチームメンバーの事を想ってよく面倒を見てくれ……いや、偶に面倒を掛けられる事もあるかな」

「……四人共悪いヤツってワケでもないんやが、アイツ等は前職が前職やから全体的に『雑』やもんな マトモに人前に出せんのはシャノンとかチコ位やろ?」

「バツキーは体が大きすぎるし、ジョニーは顔が怖すぎるからな……私も初めて見た時は圧倒されてしまったがクリークは大丈夫だったのか?」

「いえ、初めて見た時見た時はビックリしたけどすぐに慣れちゃいましたよ むしろ最

近はバッキーさんやジョニーさんのドジな所が可愛く思えて来ちゃいましたね〜」

「…マジか クリークちゃんは器がデツカイのオ……」

「“それ”が彼女の強みの一つだと思つてはいるが…時折、不安に感じる時もあるよ」

オマケ2

「“領域”の入り方…?」

「一流と呼ばれたウマ娘が持ち得る“領域”だが、それこそ発動方法は人それぞれだからね 個人差を知りたかったからこの際と思ひ質問させて貰ったが…構わないかい?」

「うん、いいよ そうだな…私の場合は走っている最中に接戦になると『負けたくない』って思いが溢れて来て…何時の間にか入っている、らしい」

「…『らしい』と言うのは自覚が無いという事かな?」

「オグリは尊鷹と同じく自己催眠を掛けて“領域”を発現させてるらしいからな 本人からしたら知らん間に入つて気付いたら勝つてるパターンが多いらしいで」

「…尊鷹さんとキー坊さんも確か“領域”^ソつて似た様な状態に入れるんですよね? それ私達ウマ娘の物とはどう違うんですか?」

「ワシ等の場合、入った時は『心が幽体離脱しとる』つて言えばエエんかのオ…空に居る自分が地上に居る自分を見下ろして尚且つ自分でも動かせるつて感じなんで、ウマ娘の

言う『必勝の感覚』とは多分見え方が違うわな」

「格闘家の言う『領域』の感想は初めて聞けたね…それも発現方法は追い詰められる事が条件なのかい？」

「尊鷹は自由に入れる様やが、ワシは死にかけるとボコされんと発現せんな 最近が生身の相手だとそこまでのピンチにならないから支部道場に居る戸田亜相手のスパーリングで自分を追い詰めて発現頻度を上げる練習しとるわ」

「『ロボット相手』でないし練習にもならないか…最強になった格闘家の悲哀を感じるね」

「終わりの見えない道を誰に強制された訳でもなく突き進むんですから、キー坊さんつてやっぱり凄いなんですね」

「キー坊は誰もが夢見る『最強』と言う称号が色褪せない様に日夜頑張ってるんだ でも、無茶が過ぎると私達も心配だから程々にして欲しいとは思っているよ」

「流石に若い頃と違って死にかける程の無茶はやらんわい けどな…己の強さを錆び付かせたら、いざって時に大切な家族を守れんからのオ…その為には日々精進せなアカンねん」

『領域の入り方』から始まった話が『最強である理由』に変わり、話を終えた『怪物の兄』にその場に居た三人は家族として、アスリートとして、求道者として尊敬の眼差し

を向け、それを受けた本人は照れくさそうに人懐っこい笑顔を浮かべるのであった。

オグリキャップ 灘を回る

現在、正午を回ろうという頃に中央で「怪物」と呼ばれたアスリートであるウマ娘、オグリキャップは自身の実家でもある「灘・真・神影流」の道場、神戸支部を訪れていた。

目的らしい目的こそ持ち合わせていなかったが本道場に顔を出す理由と同じで頑張っている者達の姿を見る事は彼女にとって力を分けて貰えるような感覚があり、暇が出来ると中央の寮から外出して様子を見て来たのだった。

「…ん？ 龍星、姫次、もう来てたんだな」

「…アタタ 内臓と関節がマズイな いえ…オグリさん、お邪魔してます」

「殴られ過ぎて体中がイテエ…こりや明日まで引きずるぜ…」

「来て早々にボロボロだな…今日は道場に「三人」が来てくれるというから君達も来るのは分かってたけど、早速手合わせを頼んだのか？」

道場内のマットに横たわって屈辱に顔を歪ませながら腹や体の節々を擦っていた長岡龍星。

『顔を傷付けられるのはプライドを傷付けられるも同然』と宣言していた顔は見事に

腫れ上がり、氷嚢で部分部分を冷やしていた鬼塚姫次。

オグリが二人の親戚の状態を把握した上で原因となった現在、道場中央でスパークリングを終えて此方へ向かってくる三人に視線を移した。

「来ていたか、オグリ 君のお母さんには来る時に挨拶を済ませて道場を使わせて貰ったが…龍星と姫次には悪い事をしたな」

「…二人共、ワタシ達の想像以上に強い上に何度倒しても向かって来るのでこの様な事になった…済まない」

「……………（コクツ）」

本日の来客であるエドガード・C・ガルシアとガルシア28号が状況説明と共に謝罪を行い、彼らの横に居たマーシオ「ジェット」内藤が肯定の意味を込めて頷いた。

「気にしなくて良いよ 龍星と姫次は鬼龍おじさんの息子だけあって『負けず嫌い』だからな 三人が手加減してくれてこの程度で済んでいるんだし、明日にはご飯も食べられるだろう」

「いや、オグリさん…確かに言う通りなんです、ガルシアさん達の『ボーン・コントロール』は反則ですよ 俺が掛けた関節技を無効化したばかりかあつさり抜け出して逆に『ボーン・トルネード』を仕掛けられたんですから…手加減されて無かったら普通に死んでましたね」

「で、手加減されたと分かれば腹が立つから何度も向かって行くワケだ……俺もそのタイプなんだけどね」

「姫次もキー坊から習った。『幽玄のかわし』という不思議な回避方法を見せたが、ジェットも直ぐに対応して灘の霞突きの応用……『ステルス・コンビネーション』での滅多打ちだからな、アレは痛かったろう」

「鬼龍あの人から直接指導を受けた男が放つ連撃……ワタシ達もスパーリングは行つたがガードが遅れる速度だつた……大した物だ」

「そうだったのか、やっぱりジェットは相変わらず強いんだな」

「強者」であるガルシア達からの評価を聞いたオグリの賞賛を受けるジェットは彼女の目を見据えて自分の意思を示す。

「……二人のガルシアと闘つて分かつたが、彼等の反応速度は人間を超えているな。俺もつい、本気になつた」

「分かるよ、ジェットに負けない位ガルシア達も強いんだ。私はその場に居なかつたけど、ジェットが楽しそうにしているんだからきつと『分かり合えた』んだろ？」

「（オグリにはお見通しなんだな……ああ、そうだ。キー坊程の理解は得る事が出来なかつたが、彼等の人柄を……『良い人間』だというのは伝わつたよ）」

「うん、そうだろう。でもな……龍星と姫次だつて『良い人』なんだ。ジェットにもそれは

分かって欲しいな」

「(安心してくれ、それも分かっているさ。俺がまともな敗北したのはキー坊との闘いが初めてだったが、その時の悔しさは相当な物だった。龍星と姫次もそれぞれ同じ気持ちで俺達に向かって来たんだ。腹違いの兄弟。らしさに嬉しさを感じたよ)」

「ジェット達の関係も複雑だからな……今日がまともな顔合わせになるんだが、みんなが仲良くなれそうで私も嬉しいよ」

傍から見ればオグリがジェットに一方的に話しかけているという「奇怪な状況」ではあるのだが、ジェットの方も彼女の目を見て時折頷くというコミュニケーションが成り立っており、それを疑問に感じた龍星が疑問を投げかけた。

「あの……オグリさん？ ジェットさんが読唇術を出来るのは俺達も分かっているんですが、喋れないジェットさんの伝えたい事をオグリさんが分かるのは何でなんですか？」

「……思えば、ジェットと初めて会った時から目を見れば何となくだが言いたい事が分かるんだ。それが顕著になったのはキー坊と闘ったハイパー・バトル決勝後だったな」

「……………(カタカタ)」

オグリの言葉の補強を行う様にジェットが近くに置いてあったタブレットを手にとって文章を打ち込み、皆の前にそれを見せる。

「あの時俺は鬼龍に迫る弾丸によって死にかけ、地獄門を見た。そこから戻って来た後

はオグリを初めとした「勘の良い人達」には俺の言いたい事が伝わるようになったんだ 臨死体験というものも一度は経験してみる物だな」

「サラつと言つて…書いてるが、トンデモねえな 鬼龍おれたちの息子の中でもこの人、結構な天然」だろ……」

「実は…私も拳を交えなくても何となくだが、ジェットジェットの伝えたい事が分かるんだ 一度死んで甦つたからなのか…28号はどうだ？」

「…ワタシも死にかけて事は多々あれど、死亡した経験は無いが……ジェットジェットの拳から常を感じる 『純粹さ』には好感を抱いている」

「……（カタカタ）」

「28号も俺と同じで表情をあまり変えないが拳に乗せる感情は多彩だ ある意味で一番親近感を感じているよ」

ジェットの文章を見て『そうなのか？』と首を横に倒す28号と『その筈だ』と同じ動作をするジェットに周りが思わず吹き出してしまい、その場を和やかな空気が包んだ。

その空気感を変えるように道場へ山盛りのおにぎりを大皿に乗せたオグリの母親が来訪する。

「おまたせ、皆！ オグリも来るって言うし、沢山握ったから遠慮せずに食べてね…っ

て、オグリ アンタ来てたのね？」

「ごめん、お母さん 先に道場に来てたんだ」

「まあ良いわ 来たつていうなら皆と食べて行きなさい この後は都内の道場に顔を出
すんでしょ？」

「うん 今日は本道場に戻つてる “ネルドリップ” から『都内の皆が元気にしてるか聞
いて来てね』つて言われてたし、キー坊も居るらしいから顔を出して来るよ」

「ネルドリップ：静虎さん達がブラジルから連れて来て、今は由美子さんの所に居る子
ね だったら、なおさら腹ごしらえはして行きなさい 皆も遠慮しないでね、お代わり
もあるし冷たいお茶も用意してるからたくさん食べていつて」

「は、ハイ！ お母さん、有難くいただきますね！」

「貰えるつてんならエンリヨなく……その、いつもありがとうっス」

「ありがとうございます お母さんのお気遣いに感謝して頂きます」

「……久しぶりにアナタの料理を食べるのは嬉しい 味わわせて貰う」

「……（カタカタ）」

「オグリや鬼龍からあなたの料理は絶品だと聞いている 日本食は食べ慣れていない
が、逆に楽しみだ」

「こうして、身体や顔の痛みをしかめつつもおにぎりを口にする者、食べ方が独特

でそれを指摘されて交流を深める者、瞬く間に皿を空にして周りから呆れた視線を向けられて恥ずかしそうにする者がそれぞれ笑顔を見せて昼の時間が過ぎて行くのであった。

◇◇◇◇◇

神戸の道場に集まっていた母と鬼龍の息子達に別れを告げたオグリは新幹線に乗り込み都内を目指す。

約二時間半という道程の中で彼女のお腹は母からのおにぎりでは足りなかったのか音を鳴らし、カートが通る度に運ばれていた駅弁を購入しては変わりゆく景色と共にそれを楽しむ。

そんな「怪物」の姿を目の前に居た男は興味深そうに眺めていた。

「ハッ、相変わらず良く食うね 見てるだけで腹一杯になっちまいそうだ」

「そうなのか…『悪魔王子』も新幹線に乗ってから何も食べてないけど、私の所為でお腹が空いてないのか?」

そう言っておグリが積んでいた駅弁を差し出そうとした相手は彼女の叔父である宮沢鬼龍の遺伝子を使った「人間兵器ガルシアー号」として誕生したが自らの意志でその立場を脱却し、現在は『悪魔王子』を自称する男であった。

「遠慮させて貰おうか 俺がお前に施す事はあつても、お前が俺に施すなんてのはプラ

イドが許さないんでね」

「そうか、なら仕方ないな……ところで、今日は何の用なんだ？ わざわざ私が乗る座席の前を指定して待つていたんだ、新しい『オグリ・ラツシユ』の予告でもしに来たのか？」

オグリが予約した座席に辿り着くと其処には悪魔王子が向かい側の席に腰掛けており、人によつては『ストーカー』と嫌悪感を示す行動力を見せるも、オグリからすれば『またか』といった慣れ切つた態度で今回の目的を尋ねた。

「いや、今日は都内に個人的な用があつたから丁度お前が乗る新幹線に座席を合わせただけだ それに……今度からレースが始まるお前に対してちよつかい掛ける様なマネを俺がやるとでも思つたのか？ 見くびらないでくれよ」

「何だ、私を心配してくれるのか？」

「ハッ！ 勘違いするなよ 俺との『遊び』でお前が本領を發揮出来ないなんて結果になれば、灘の男共が本腰を入れて俺を狙つて来るだろうからな……まあ、それはそれで面白そうだけどね」

「それは……嫌だな お前は相手に深い後遺症を残す『幻魔』を使うんだろ？ お父さんから詳細は聞いたよ」

「俺が使うのはお前のお花畑みたいな物でも、静虎さんの様な相手に当てない温い物でもない『真・幻魔拳』さ 直接拳と幻覚を打ち込まれた相手はその後、再び俺を前にし

た時に恐怖で心を縛られる事は確實だ」

「…それはどうだろうな？」

「ふうん…それはどういう意味だ？」

「お父さんからは『幻魔の抜き方は心得てる』と聞いたし、最近では見込みがあるキー坊や龍星に幻魔の指導を行ってるんだ みんなと闘う事があつたとしてもお前の思い通りにはならないと思うぞ」

オグリからのある種、挑発にも思える言葉に悪魔王子は皮肉気な笑みを返す。

「ハッ！ 不思議だね！ 普段なら俺にそんな舐めた口を聞く奴は例外無くブチのめすと決めてるが…オグリは別さ」

「“家族”を信じてるんだろ？ お前に愛されてる奴等はホント鬱陶しいなあ…やっぱ、遊びのルールを変えて灘の男達を標的にするか」

「“それ”をしたら私はお前を軽蔑する、とも前に言ったぞ」

「…なーんてね、冗談冗談 お前の “その顔”を引き出したくて言っただけさ」

悪魔王子が指差すオグリの顔は “焦り”と “悲しさ”が入り混じっており、それを見た事で彼は逆に満足気な表情を見せる。

「あんな連中を相手にするよりオグリで遊んだ方が楽しいに決まってる 何せ、 “偽善者度合い” で言えばお前が灘の中で一番なんだからな」

「…私に暴力なしでちよつかいを掛けて来るならそれで良い 私はお父さん達や “お前

にも〃無駄に傷付いて欲しくなんか無いんだからな」

「……〃そういう所〃なんだぜ？ 俺がお前の神経を逆撫でしてやりたくするのはな」
 「別にそれは気にして無いよ 私にだって未だに自覚出来ない感情はあるんだ それをお前が教えてくれると言うのなら望む所さ」

「…またこのパターンか お前と話すとうどうにも調子が狂うな…これ以上は〃ムカつき度合い〃が増しそうだから、そろそろお暇するかな」

僅かながらも毒気を抜かれた悪魔王子はつまらなそうな顔をオグリに見せると丁度良く到着間近を伝えるアナウンスが新幹線内に鳴り響いたのもあり、座席から立ち上がる。

そんな彼に対し、オグリは最後の機会とばかりに今まではぐらかされていた事を尋ねる事にした。

「そう言えばなんだが悪魔王子…お前は今日、何の目的で都内に足を運ぶんだ？」

「決まってるだろ、〃ゴミ掃除〃さ オグリ前の周りを調べると吐き気を催すクズ共が兵隊を使って悪さをしてるんだ 強いだけの〃偽善者共〃は兵隊しか片付けられないが〃パパ〃なんかは根元から対処してるからね、それでも寄る年波には勝てないのか根絶は出来てない様子だし…孝行息子の俺が出張って来たんだよ」

「鬼龍おじさん…そんな事をしてくれたのか 悪魔王子もありがとう、おじさんを手

伝つてくれて」

「ハッ！ 俺は『龍を継ぐ男』だぜ？ パパのやつてる事を引き継ぐのは当然さ 『幻魔拳の試し打ち』にもなつて丁度良いしね」

「…『殴られないと分からない』って人達が居るのは私も重々承知しているが、やり過ぎるのはダメだぞ？ 私はお前の事も心配しているんだからな」

「…俺はこの世の誰よりも強い『悪』なんだ お前みたいな『甘ちゃん』が心配なんて烏漕がましいんだよ」

悪魔王子はそう言つてオグリに背を向けた後に降車口へと歩き出す。

表情こそ見えない物の悪魔王子の背中から迸る『やる気』を感じて安心したのかオグリのお腹は再び音を鳴らし、新幹線の速度も落ちて来た事もあつて積んでいた弁当の残りを急いで片付けるのであつた。

◇◇◇◇◇

「イクヨ キー坊」

「うっし！ 来いや!! 戸田亜ツ!!」

「イキマース（ボツ！）」

「しゃあつ！（ピタツ！）」

オグリが都内の支部道場に到着した頃…丁度兄である宮沢熹一と叔母の家の居候で

あるロボット、宮沢戸田亜とのスパーリングを行っていたが戸田亜の放つ超音速パンチに対し、見事に寸止めのカウンターを決めている最中であつた。

「おっし！ やっぱ慣れたらヘッドギア無しの方が調子出るのオ!!」

「昔、クロちゃんをやつたピッチングマシンの時と同じでキー坊は慣れたら直ぐにハードルを上げるんだな…心配になるからやめて欲しいんだが？」

「げっ!? お、オグリ…来とつたんか」

「オグリ、良ク来タナ 歓迎スルゾ」

「戸田亜もありがとう、キー坊に付き合つてくれて キー坊がヘッドギアを外したから『本気』で打ち込まなかつたんだろ？」

「…(コクツ)」

オグリの言葉に戸田亜は肯定の意味で首を縦に振り、それを見た熹一は驚きの声を上げる。

「んなっ!! 製作者のゴアから聞いてたMAXスピードは間違いなく出とつたやん! どころ辺が手加減しとつたんや!!」

「そのゴア博士から中央で聞いてたんだ、『この前OSと可動域をバージョンアップした』とな キー坊が物足りなくなるだろうからという配慮らしいが…伝わってなかったのか？」

「いや、ワシは聞いとらんぞ ちゆう事はや……戸田^{お前}亜は『本気で来い』って言うたワシを騙しとつたんかい!! (ガツ!)」

「アイツ」

「こらキー坊! 八つ当たりで戸田亜を叩くな! 悪い事もしていないのに叩くなんて可哀そうだろ!!」

己の無知と達成感がフィになつた悔しきで戸田亜の頭を小突く熹^兄一の行動にオグ^妹リは腰に手を当てて説教をすると兄は途端に縮こまり、それを見た妹は溜息を吐くと戸田亜に近づいて彼の頭を撫でた。

「すまないな、戸田亜……ロボットだから痛みを感じなくても君は氣遣いが出る子なんだ 叩かれて嫌な気分はしなかつたか? (ナデナデ)」

「大丈夫ダ、オグリ キー坊モ手加減シテ殴ツテイタカラ、オアイコダヨ」

「あー…濟まんかつた 練習に付き合つてくれとる相手にやる態度やなかつたな、勘弁してくれや」

「細カイ事ハ気ニスルナ」

「まったく…それで? 今日^はは神戸の道場にガルシア達やジェットも来てたというのに何で戸田亜にスパーリングを頼んだんだ?」

「…しゃーないやん 前にアイツ等とスパーリングやつてたら段々と楽しく…熱が入つ

て「ガチ」で闘りたくなって来たんじや そうなりや下手したらお互いに入院コースで最悪、中央をクビになりかねんわい」

「相変わらず厄介なんだな、 〃闘う人〃 っていうのは…だからって戸田亜とのスパarringだって危険なのは変わりないんだ 出来る事なら程々にしてくれ」

「分かった 〃程々に〃…やな？」

「オグリ キー坊ノ奴、アマリ反省シテナイゾ」

「戸田亜！ 余計な事言わんでエエ!!」

「フフツ…何だ二人とも、良いコンビじゃないか」

薫一と戸田亜の漫才めいた掛け合いにオグリが笑顔を見せていると道場のドアが開き、親戚である小倉優希が愛犬デゴイチと共に現れた。

「キー坊、スパarring終わった…:…ってオグリ、来てたんなら先にこっちに顔出してよ」

「バウツ！（タツタツタツ）」

「ごめん、優希 先に寄ろうと思っただが何やら台所で忙しそうにしていたから声が掛けづらくて…:うわっ！ デゴイチ、顔を舐めないでくれ!! くすぐりたいぞ!!」

「ワフツ！（ペロペロ）」

「相変わらずデゴイチはオグリが大好きやのオ…で、優希ちゃん？ オグリが言ったた

台所で作つてた言うんは手に持つてる「ソレ」の事か？」

薫一が指差す優希の手に持つているジョッキの中身は形容しがたい色と臭いを放つており、距離を取っていたオグリも眉を顰める代物であった。

「そ、小倉優希特製ドリンク」だよ 見た目はちよつと悪いけど身体に良い物しか入つてないし、一気に飲んじやつて」

「ホンマか…？ オグリやデゴイチがジリジリ距離取つてるがホンマに大丈夫なんか…？」

「いいからさつさと飲めよッ！」

「……見とけやオグリ、宮沢薫一の男気見せたるわ せいっ！（グイッ ……うおつぷ！（バタツ）」

特製ドリンクを一気に呷つた兄が次の瞬間、のたうち回る姿にオグリは尊敬と共に恐怖を覚えて無意識の内に傍に居たデゴイチを抱きしめ、生まれたての小鹿の様に震えていた。

「ちよつと大丈夫!! やつぱり…もうちよつと甘くした方が良かったかな？ 今晚のカレーもオグリが居るし、思い切つて今日は甘口にチャレンジしようか」

「! ……今日の夕飯は優希が作るのか？ 由美子おばさんはどうしたんだ？」

「オバさん？ 今日には尊鷹さんが来たからせつかくだし、『兄妹水入らずでご飯でも行つ

て来たら』って送り出したんだ。だから夕飯の献立は私が考える事になったんだけど……二人とも、カレーで良いよね？」

以前に優希に振る舞われた辛さしか感じないカレーの味を思い出したオグリとドリノクの後遺症が抜けた熹一は同時に身体を震わせ、兄妹間でのアイコンタクトを済ませると本日の夕食の変更の為に動き出すのであった。

「優希、君が良ければ私が今日の夕食を作っても良いだろうか？」

「いやいや、今日は二人ともお客さんなんだしゆっくりしてて良いんだよ」

「そ、それは……そうなんだが……」

「いやー！ 二人共、スマンのオ！ 実は今日の礼にワシが出資しとる店に予約を頼んでたんじゃー！ ワシの顔を立てると思ってそこで飯を食わんか？」

「……まだ材料も買ってなかったし、そっちの方が良いか 分かった、キー坊のご馳走になるよ」

「流石、準備が良いなキー坊！（…場所は大丈夫か？）」

「ナハハ！ ワシに任せとけやオグリ！（今からならジングスカン屋がイけるで）」

「そうか、それは楽しみなな！」

「二人共、遠慮せんと腹一杯食べるんやぞー！」

こうして、会話をする度にアイコンタクトを交わす兄妹に訝し気な視線を向けるも外

食の誘いに乗った優希を連れて道場を出る事になった熹一とオグリであったが、店へ向かう途中で珍しく並んで歩いていた鬼龍と静虎：宮沢兄弟と会ったので合流して店に入ると店内には尊鷹と由美子が来店して食事を行っており、結局は宮沢一族が揃った食事会となったがその場に居た全員が和やかな雰囲気です肉や野菜を楽しむ空間になったのであった。

ウマ娘の歴史を聞こう

「…邪魔すんぞ」

とある日の昼下がり、普段よりも腰を庇った動きをしながら施術室に来訪したのは中央でオグリキャップの担当を務めるベテラントレーナーである六平銀次郎。

そんな彼を椅子に座って出迎えたのは現役の格闘家であり現在、中央の施術師を務める宮沢熹一であった。

「おっ！ 六平のオツチャンやん、何や腰でも『いわし』たんか？」

「まったく…ご明察だ、バカタレ 静虎は居ないのか？ 施術の腕で言えばキ―坊およりアイツの方が上だろう？」

「……痛いトコ突くのオ 生憎やが今、親父おとんは外で怪我した娘この所に行つとるわ ま、コ

コは親父おとん以下の腕前のワシに任せろや」

「何、それでもそこ等の連中よりも腕は確かなんだ この際 『女連れでヘラヘラしてるヤツ』で妥協してやるよ」

「えっ!? いえ、六平トレーナー！ こ、これは…その……」

そう言つて六平がからかう様に視線を向けたのは熹一の近くに居た自身の知り合い

でもあるウマ娘、ベルノライトであった。

視線に慌てるベルノを手で制した熹一は妹の担当である目の前の「ベテラン」にうんざりとした溜息を吐く。

「オツチャン：ベルノちゃんは「気の施術」に興味があつたんで話聞きに來ただけやし、あんまからかつてやんなや それに：ワシがヘラヘラしとんのは「普段通り」やしな」

「んな事だろうとは思つてたよ だったら：折角だしベルノのヤツにも気の施術つてのを「実演」して見せてくれ」

「おうつ、そうさせて貰うとするかのオ：ベルノちゃんもそれでエエか？」

「は、はい！ お二人共、よろしくお願ひします！」

こうして始まった灘の活法である「気の施術」であつたが、一見するとただの指圧に見えるそれはゆっくりとだが確実に六平の患部を癒していくのをベルノは見て感じ取っていた。

そして施術が終わると軽く体を伸ばす六平は己の身体から痛みが消え、軽さすら覚える感覚に満足そうに笑みを見せる。

「グググ」：相変わらず、見事なモンだな 昔、尊鷹がやつてたのを見てる立場だったのが、まさか自分が体験するとは……俺も年を取つたつて事か」

「へっ、そんなん腰が曲がるまでウマ娘を輝かせる為に働いたって証拠やん 自虐しとる割にまだまだ身体の『芯』には活力が漲つとったで？」

「…お前は口が軽くていけねえな 『秘すれば花』って言葉を知らねえのか？」

「ナハハッ！ ワシは生憎、低学歴でな！ 戦友ダチもベルノちゃんみたいに頭エエのとはあんまり話は合わんで、アホなんは勘弁してくれや！」

「ふふっ…熹一さんって感覚でお話する時が多いですけど、本質を突く時も多くて…それで人を怒らせちゃう事が結構ありますもんね」

「つまり、『デリカシー』ってのが無えんだよ 俺が今まで関わった宮沢家の連中にも…オグリのヤツにも多かれ少なかれそういう所があつたし、格闘家ってのはそういうもんなのか？」

「まあ…灘の男つてのはベクトルが違うが皆、『正直』に生きとるしな オグリもそんな環境で育つたからある意味、申し訳ないとは思つとんのやで？」

ほんの少しの気まずさを含んだ表情を見せた熹一にベルノが慌てた様子でフオローを入れる。

「い、いえ！ 別にそれが悪いというワケでは無く、そんなオグリちゃんや熹一さんの性格が私は好きなんですよ」

「…確かにな 勝負事において『気遣い』ってのは時に邪魔になる時がある その上で

ねじ伏せた相手への敬意を忘れないお前等兄妹の事は俺も嫌いじゃねえさ」

「……何や二人とも、ワシ等の事そないストレートに褒めてくれるとメツチャ嬉しいやん ちよつと待つてな！ 確かこの前、岩手に行つて来た時の土産物モトあつたんや！」

二人の言葉に感動した熹一は笑顔で奥へ移動し、お茶請けを探し出すとお茶の用意を始める。

そんな熹一の姿を見ると釣られて笑顔になる二人であつたが六平の方は何処か寂しげな様子であり、それに気付いたベルノが恐る恐るといった様子で声を掛けた。

「あの……何かありました？」

「……ん？ いや、顔に出ちまつたか 別に大した事じゃねえさ ただキー坊のヤツから『岩手』つ言葉が出てよ……昔に先輩トレーナーから聞いた『戦場帰りのウマ娘』の話を思い出しちまつた」

自身の若い頃に聞かされた逸話を思い出して目を細める六平に人数分のお茶を淹れて戻つて来た熹一が神妙な顔をしてそのウマ娘の話題を続ける。

「実はな、ワシのご先祖……当時の灘神陰流モシの者がそのヒトと交流があつたらしくてのオ、ワシも流れを汲む者としてこの前墓参りに行つて来たんや」

「何だよ、そうだったのか……そういや、昔に尊鷹が言つてたな『私の使う武術は本を正せば軍の裏仕事に使う物だった』つてな」

「軍……という事は『彼女』は軍人さんだったんですか？」

「……まあのお、ワシもジイちゃんからの又聞きでしかないが、そのヒトはウマ娘らしく気性は穏やかで争いなんぞ好まなかったらしいがお国からの徴兵は断れんし、放っておけば故郷が火に包まれると聞けば黙ってられんかったんやろ。大勢の兵隊さんと一緒に戦地に向かったんじゃ」

「……結果はヒデエ物でな。敵軍が優先的にウマ娘を狙って来た所為で若いのも含めて大勢が亡くなったらしい。理由が『敵地にウマ娘という労働力を残す訳にはいかない』って理由でな」

「そんな……」

六平の語る戦争の歴史に思わず口元に手を当てるベルノであったが、そんな彼女に烹一が淹れたお茶を差し出す。

「戦争……争う事の『才能』はウマ娘よりもワシ等人間の方が圧倒的に上や。しゃあけど、下手に共生しとる関係の所為で巻き込まれるウマ娘側からすればたまったもんやない。そのヒトもそんな地獄を生き延びた結果、『たった一人』で故郷の土を踏む事になったんや」

「……ただ『走れて』、『家族の傍に居たい』だけ』って娘が周りの熱気に煽られて戦場に行ったんだ。それが『時代』だと言えばそれまでだったが、俺にその話をした先輩

の目は納得なんて欠片もしちやいなえのは見てりやあ分かったよ」

「ワシのご先祖も同じ気持ちだったんやろうな 〃軍の暗殺者〃 って立ち位置でありながらも戦場で亡くなるウマ娘の姿に心を痛めたのか、その後の技の開発では〃殺法〃よりも〃活法〃に力を入れる様になった：特に、ウマ娘関係のが戦後に増えたのがその証 抛やな」

「…熹一さんのご先祖様って〃彼女〃とはどういう関係だったんですか？」

「ジイちゃんの話では『戦場でたまたま顔を合わせただけの関係』だったらしいわ 故郷の事をどんな時でも楽しそうに語るヒトだったようだな その姿に救われてたらしく、終戦後に彼女が故郷に帰るって話になると護衛とかこつけて着いて行ったそうなんや」

「…俺の先輩もその一人らしいな 彼女のファンは軍内でも結構居たようで、生き延びた以上は何としても故郷の土を踏ませたいと何人かの兵士が里帰りへ着いて行ったそうだ」

「そうだったんですね…」

〃彼女〃が故郷に帰れた話に胸を撫で下ろすベルノに対し、六平と熹一は互いに視線を合わせて言い辛そうに〃その後〃の顛末を語る。

「結果としてだが…彼女はその後、暫くして亡くなっちゃった 主に補給部隊として戦地を駆けまわっていたが、その時の幾度かの負傷がもとになってな……」

「そ、そんな……」

「ワシのご先祖も当時の活法技術で手を尽くしたそうなんやが、思った以上に傷が深かつたらしいんや。徐々に衰弱していく中でこっちの心が折れそうになる所を逆に励まされるなんて話を聞いた時には心底『強い女性』^{ヒト}だったんやなと思わされたわ」

「……最後の言葉は『戦争も終わって、これからはウマ娘^私が自由^運に走れて、皆がそれをただ喜んでくれる世界になりますように』だったらしい……戦後、俺の先輩はそれでトレーナーを志して業界を盛り上げようと最期まで尽力していたよ」

「そんな事があったからなんやろな……ワシ等、灘^{モン}の者も戦後に『活殺自在』を掲げて殺法をみだりに使わん様に己を戒める道に切り替えたんや。まあ……それでもその後には色々とゴタゴタはあったんやけどな」

二人がかつて聞いた昔話を語り終えてすっかり温くなったお茶に口を付けるとその場は何とも重苦しい空気が包み始める。

暫く黙っていたベルノであったが、突如手元のお茶を一気に呷ってカップを置くとその様子に驚いていた二人に真っ直ぐな視線を向けて質問をする。

「つまり……お二人は『先人の志』に感じ入って今の立ち位置に居るって事なんですよね？」

「……まあ、それもあるな。勿論それが全てじゃねえが、心の片隅に置いとかなきゃいけ

ねえ話ではあると思ってるさ」

「……親父おとんが中央に居る理由としてはそれもあるやろうし、ワシも活法を真面目に学ぶ切っ掛けになった話ではあるしのオ。活法が大手を振って必要とされる時代になったんやから、灘モノの者として……」
 「新たな時代の当主」として出来る限り、ウマ娘の力にはなるつもりでやつとるわ」

熹一と六平が僅かな思考状態に入った後に出された答えにベルノは目に涙を浮かべると座つていた椅子から立ち上がり、二人の手を取った。

「私……嬉しいです！ 今の時代が平和になったというのもありますけど、その時代で志を受け継いだ人達」がこの中央に居てくれるのがとっても嬉しいんですっ！」

「おお、そうか……小声）おいキー坊、ベルノのヤツこういう話で目を輝かせるタイプだったのか？ オフでの付き合いはオグリに次いでお前が多いんだから分かんדר？」

「小声）イヤ、オツチャン……ワシもベルノちゃんの『こんな姿』初めて見たわい けど……他人のサポートを嫌な顔一つせず出来る優しい娘っ子なんやし、この反応にも別段驚きは無いのオ」

「小声）……そうか」

小声で会話する二人に気付いたベルノは今の状況に恥ずかしさが勝ったのか、慌てて掴んでいた手を離す。

「あつ！ い、いえ…申し訳ないです……」

「何、気にすんな 大概、年寄りの昔話なんぞ退屈なモンだと相場が決まつてる中でそこまで感じ入ってくれるなら、"当時を生きた連中"もちったあ、報われんだろ」

「中央にはベルノちゃんみたいなのに今の昔話を聞かんでも自然と"助けるヒト"も現れるからな ワシ等みたいなの"闘う人"は競技者を含めたそんな連中を…皆を守るつもりなんで安心してくれや」

「…お二人共、ありがとうございます」

「暴力を学んでる人間が良識を忘れん為には"守るヒト"が必要不可欠やからな そういった意味では中央は力になりたいヤツ等が大勢居るんで感謝しとる位やで」

「歴史の授業なんざ本来は教師の領分だが、今日は一トレーナーとしての"課外授業"だ 生徒が真面目なんで思った以上に話し込んじゃったな」

「腰を治しに来て若者に長話なんぞ如何にも年寄りクサイからな ワシが話題に付いて来れてベルノちゃんが良い聞き役で良かったのオ、六平のオツチャン？」

「ウルセエぞ、キー坊 喧嘩の腕は家族の中で"最強"なんだろうが施術の腕はまだまだなんだ、そのすぐに軽口言う癖も含めて早く精進するこつたな」

そう言つてその後も軽口を叩き合う"怪物の兄"と"魔術師"にベルノは微笑ましい目を向けていたが、それに気付いた二人は氣まづげに咳払いをする。

「…まあ、何だ おいきー坊、茶がすっかり温くなつてんだ 淹れ直してくれや」

「…せやな 折角やし、親父おとんが土産に持つて来たコナコーヒーでも淹れたるわ」

「あつ…でしたら、私も何かお手伝いしますね」

「せやつたらベルノちゃん、すっかり菓子を出し忘れたんで用意してくれんか？ そこのテーブルに岩手の土産は用意したんで、好きな物モノ選んでくれや」

「はいっ！ 分かりました！」

熹一からの指示を受けて彼が指差す方のテーブルへ向かうベルノ。

其処には「サルナシの加工品」や「雑穀を使ったバームクーヘン」等の様々な種類の菓子が用意されており、『この中には「彼女」の好む物もあつたのかな？』という思いと共に彼女のお菓子選びが始まつたのであつた。

オマケ

「ズズツ」…そういやだがきー坊、宮沢家の中で『活法が一番得意なヤツ』って誰なんだ？ 尊鷹や静虎からは『鬼龍は私よりは下手だ』って話は聞いた事があるが、マジなのか…お前も含めるとどうなのかが気になつてな」

「ズズツ」…「下手さ」は明確に比べた事は無いから分らんが、多分ワシ等の中で一番活法の才能があんのは「オグリ」で…次いで「龍星」やろな」

「えっ?! オグリちゃんと龍星さんも『気の施術』って出来たんですか?」

熹一の淹れたコーヒーを口にしての会話であつたが、ベルノは熹一の答えに口元に當てていたコーヒーカップを離してしまふ。

「オグリは何となく分かるが…次が龍星か 前にアイツと少し会話しての感想だが、結構な『理屈屋』だつたな…『氣』なんて傍から聞けば胡散臭い物を科学的に解析でもしてんのか?」

「…らしいで? 氣の『総量』はオグリが圧倒的に上やつたが『応用』は龍星の方が上手い 親父おとんから話を聞いたその日に學術書を読み耽つて実戦の繰り返しやつとるから、龍星は根つからの『研究者側』やな」

「…確かに 龍星さんって最初は見た目で怖がつていたんですけど、よくよくお話ししてみると『私達側』なのかなつて思えて親近感が湧いたんですけど」

「T大の理科III主席合格なオツムしとつたらしいが、本人のそういう『知りたがり』な氣質が評価に繋がつとんのやろな オグリなんかは『何となく』で大体を理解しとるからそういう意味でも真逆な二人やのオ」

妹と従弟の氣性の違いを語る熹一に氣になつていた事を思い出した六平はコーヒーカップをテーブルに置き、目の前の男に質問をする事にした。

「所でキー坊よ、今日はそのオグリが休暇なんだが…何処に行つたか聞いてねえか?」

休暇前に『タマと一緒に旅をして来る』とは言われたんだが、メンタルに問題があったとは思えねえし…本当にただの旅行なんだよな？」

「…オグリはまた最低限な言い方しておつて 気にせんでエエ、『学生の内に』青春〇〇きつぷ」を使つてみたい』つて理由で出掛けただけや」

「はい、間違いないです 私も先日、購入するのを手伝いましたから」

「…何だよ、オイ 俺のチームにはマイペースなヤツも多いが、オグリはその中でも一二を争うポーカーフェイスだから分かり辛えんだよな」

「オグリちゃん、何でもない事も真顔でよく言いますからね……」

「それと『強さ』を取つ払うと何処にでも居る純朴娘やからの…そういう姿にファンが惹かれるんやろ、『ワシ等』みたいにな」

そう言つて快活な笑みを浮かべた熹一に六平もベルノも肯定の微笑を返し、その後も『怪物』の話に花を咲かせるのであった。

電車で旅してみよう

「オグリん、〃それ〃どうなん？ 美味しいんか？」

「うん、〃ご当地限定の饅頭〃だがクルミが入っていて美味しいぞ タマも良かったら食べるか？」

「ええって……さっきからその調子でお裾分けするんでウチのお腹はもうパンパンなんや
量はあるけど 〃電車の次の時間〃までは食い切れるやろ？ ウチの事は気にせず食べ
ててええよ」

「むっ……分かった しかし済まないなタマ、今日は私の遠出の誘いに乗ってくれて」
そう言つて次の饅頭を口にしたのは 〃怪物〃 オグリキャップとその姿を眺めていた
彼女の親友でもあり宿敵でもあつた 〃白い稲妻〃 タマモクロス。

身長差の為か凸凹に見えるも妙に絵になる二人が現在腰掛けていたのは 〃駅構内の小
ベンチ〃であり、長期休みに入った際に購入出来る乗り放題の切符を使って日帰りの小
旅行を行っていたのである。

「イヤ、かまへんって ウチもなんやかんやでヒマしとつたし、切符代も『娘に付き合っ
てくれるなら』って静虎のオツチャンが出してくれたからな こうやってたまには何も

考えず景色を眺めんのも「オツ」ってもんやで」

「…そうか 私としては気ままに電車で移動して立ち寄った先で美味しい物を食べるのが楽しかったのだが…タマも楽しんでくれていたのなら良かったよ」

「しっかし…タイミングとしてはそろそろ『大勝負』も近いのに『小旅行へ行こう』言うんやから、オグリんは相変わらずのマイペースやなあ……」

「私も別に気を抜いているという訳ではないんだが…『青春1〇きつぷ』もそろそろ購入期限が近かったから折角だし、タマと『青春したいな』って思ったんだ」

「…気持ちはまあ、嬉しいんやけどな オグリんは『青春』言うても、この切符に年齢制限ない事は分かっどる？」

「勿論だ いくつになっても青春が出来る様に制限が無い事は分かっているが、学生時代に味わえる青春は『今だけ』だからな それを他でもないタマと一緒に味わいたかったんだ」

「…ウチも引退して厳密には学生やないんやけど、確かに走る事ばかりが青春やないしな そういう気遣いしてくれとるんやったら、今日は有難く楽しませて貰うわ」

付き合いの浅い他人からは『何を考えているのか分からない』と言われていた親友の気遣いを感じられた事に口角が緩むのを止められなかったタマは気恥ずかしさもあつて無言でオグリの持つていた饅頭をひったくるとそのまま自分の口へ放り込んだ。

「あつ?! 何をするんだタマ! さっきは『いらぬ』って言ったじゃないか!」

「モグモグ」急に食いたくなつたんでしやあないやん……うん、確かにクルミがアクセントになつてイケるわ」

「全く……(モグモグ)」

「…悪かつたな せやけどそろそろ次の電車が来る時間やし、数減らそうと氣い使つたつて事で勘弁してや」

タマの言う通り構内に設置されている時計は次の電車が来る時間を指しており、それに氣付いたオグリは慌てた様に残りの饅頭を口に始めた。

「本当だ、これはいけないな……(モグモグ)」

「だからつて今のタイミングで全部食べる必要はないんやけどな……ホイ、そないリスみたいにホッペ膨らませんとお茶でも飲み?」

そう言つてタマが放つて寄越したペットボトルを受け取つたオグリが口の中の饅頭をお茶で流し込むと丁度と言つたタイミングで次の電車が見えて来たのであつた。

◇◇◇◇◇

手ぶらとなつた二人が到着した電車へ乗り込むと中は閑散としており、車両に居た人数は数人といった様子であつたがその中の一人は“長物を持った若い男”が居り、タマがなるべくその人物から距離を取ろうとした所、逆にオグリは近付いて行く。

初めは止めようとしたタマであったが親友の迷いの無い足取りに「知り合い」である事を察してそれ以上は何も言わずにオグリに付いて行くことを決めた。

そして自分の意を汲んでくれたタマの対応にオグリは彼女の方を向いて笑みを見せた後に「目の前の男」に向き直り、向かい合わせになるように座席へと腰掛けたのであった。

「…ウマ娘が「快速列車」に乗る 別段、可笑しい事でもないのに自然と笑みが零れてしまいますね」

「…久しぶりになるのかな 私の手を覚えているか？」

「ええ、覚えてますよ 最近では隣のお嬢さんを含めてテレビや新聞で目にしない日は無い程の有名人ですからね 世間の評判で言えばキー坊よりも上なんじゃないですか？」

「世間の評判なんて直ぐに移り変わっていく物だから別段、興味は無いな それよりも私と競った相手の心に残る方がずっと良いよ 「薔薇丸」：君がキー坊の事を忘れていない様にな」

オグリの言葉に彼女の兄である宮沢熹一との闘いを思い出したのか苦笑交じりの微笑みを浮かべたのは「九条薔薇丸」、円月流剣術師範を務める彼はかつてハイパー・バトル日本予選終了後に熹一と一戦交えた結果、己の中に燻っていた劣等感と歪みが打ち

払われたという経験を持つ。

オグリの隣に腰掛け、目の前の男がその様な事情を持つとは知らないタマは彼女に対して説明を求めていた。

「…オグリん、そろそろ説明してくれへんか この兄さんって何者モシなん？」

「お初にお目に掛かります、タマモクロスさん 私の名は九条薔薇丸と申しまして、かつては……」

「キー坊がハイパー・バトル日本予選を終えて帰りの電車に乗ってた時、日本刀を超えた『超日本刀』…だったか？ それを電車内で振り回してキー坊を斬ろうとした人なんだ」

「…イヤイヤイヤ、そんなん『辻斬り』やん」

オグリから語られた薔薇丸の所業にタマの顔は青ざめ、身体は自然と何時でも逃げられるように距離を取り始める。

「い、いえ…違うんですよ？ あの時はむしろキー坊が挑んで来たのを受けた形であつて……」

「私も当時はビックリしたんだ 和香ちゃんから『予選が終わったから迎えに来て』と言われたから指定された駅で待っていたんだが、次の連絡では『電車内で刺されたから病院に来て』だからな…思わず全速力で病院へ向かったよ」

「…改めて、心配されたご家族であるオグリ^{あなた}へは申し訳ない事をしたと心から謝罪致します」

「別に薔薇丸には怒ってないよ キー坊が君と鬩いたかつたから喧嘩を売って、君がそれを買ったという形だったから…私が怒っているのはキー坊に対してだけだ 病院に着いたら『こんなん何時もの事やん』なんて笑っていたから思わず、本気で睨んでしまつた」

「…あの時、オグリさんには初めてお会いしましたが『庄』が本当に凄かつたですよ隣に居た帯刀右近さんからは『キー坊と同じ『信心』と『慈悲』のオーラを纏えど怒っているのか攻撃性を意味する『赤色』の割合が多い娘でやんスね』との評価を受けて思わず二人でこの身を震わせてしまいましたからね」

「あー…静虎のオツチャンが退院する直前にキー坊^{あのアホ}がオグリんに対してミヨーに腰が低いんはそんな事があつたからなんやな」

「あの時私が怒つたのは今でも間違いだとは思っていないが唯一失敗だと思つたのはあの後、和香ちゃんからは『本気で怒らせたら恐い子なんだ』と思われてしまつた事くらいだな」

「いえ、それは…」

「せやな、そら…」

『間違つてはいないな』という感想をお互いに胸に秘める事にした薔薇丸とタマであつたが思いを共有した事によつて「初見の相手」という壁が取り払われ、二人の間には妙な連帯感が生まれていた。

「…事情は理解したわ　で、薔薇丸サン　今日はそない「長物」持つて何処へ行つとつたん？」

「ええ、今日は円月流の師範としての出稽古で遠出をしていたんですよ　勿論、今持つてゐるのは木刀で「超日本刀」なんて物騒な物では無いのでご安心を」

「確かに…竹刀袋で中身は見えないけれど「それ」には危険は感じないな　だから私も近付けたんだけど……」

「ある意味で、今日は話し掛けて貰えて助かりましたよ　ウマ娘という生まれながらの「強者」とこうやつて会話出来るのは得難い経験ですからね」

「…薔薇丸はまだ「弱い人」が嫌いなのか？」

「勿論です　私は変わらず「弱さ」を嫌います…が、それは「強さ」を得る為には必要な存在ですので、傍に置く事は許してはいますがね」

そう言つて笑みを浮かべた薔薇丸にオグリは安堵の表情を見せた。

「そうか…それなら良かった」

「闘う際の切っ掛けは「金銭」でしたが、闘つた事で自身の歪んだ心構えやずっと畏怖

を抱いていた父との関係に変化をもたらしてくれたのです。キー坊からは金銭では得られない良い経験を見せて貰いましたよ」

「なんや、アンタもキー坊のファンなんか。今メツチャ、キラキラした顔してんで？」

「…そうかもしませんね。ただ、人の褒め方が大変下手な男だとも思ってますよ」

「分かる！ 分かるわ！ キー坊あのアホはホンマ、そういうトコが下手クソやからな!!」

「…何だ、思った以上に話が分かる方に出逢えたようですね」

「私だつてキー坊の話題なら尽きないぞ。二人共、混ぜてくれ」

その後も熹一の話題で会話を弾ませた三人であったが電車が次の駅に止まると何人かの入れ替わりがあり、その中には柄の悪い男達の姿も確認できた。

その男達はオグリ達から離れた場所に居ながらも何やら彼等の近くに居た年若い女性に声を掛け始めたのであった。

「い、嫌っ！ —— ください！」

「オイオイ、そんな事 —— 俺達と一緒に ——」

「俺なんて手を使わずに —— を動かす芸を見せてやるよ」

距離があり過ぎる為かウマ娘であるオグリやタマにも会話の全容は聞き取れなかった物の「禄でもない内容」である事は感じられたので男達の横暴を止めるべく、無言で立ち上がるうとした二人を薔薇丸が持っていた長物で制する。

「おやめなさい、二人共 あなた達は世間では有名人に当たるんですよ? あんな連中」に関わるだけでイメーτζダウンに繋がるのは知っているでしょう」

「…知った事じゃない 私は『自己満足』で生きてるんだ あんな横暴を黙って見過ごすなんて出来ないぞ」

「オグリん、アイツ等見た感じ格闘技を『結構』かじつとるで 幸いにも引退した身や、ウチが『お話し』して来たるわ」

自身の指摘に耳を貸す気の無い二人に薔薇丸は静かに息を吐き、落ち着けとばかりに代案を提示する。

「…私とて『放つておけ』なんて言うつもりはありませんよ 昔も今も、変わらぬ『ああいう手合い』は嫌いでしたからね 私のような者が相手をするのがスジというものです」

「薔薇丸…良いのか?」

「剣術道場の師範なんやろ? そつちこそ立場は大丈夫なんか?」

「お気遣い無く、あの程度の相手なら過剰防衛なんて発生しませんよ 私は次の駅に着いたら奴等を駅員さんに突き出しますので、二人はそのまま電車を使った休日を満喫してください」

そう言つて二人の代わりに立ち上がり、男達の所へ向かった薔薇丸は二言三言相手と

話し合うと男達の目的を理解したのか瞬時に持つていた木刀で制圧を始め、それが終わると宣言通り悪漢達と被害者女性を伴つて停車した駅から降りて行くのだった。

「ひゃー…見事なモンやな 確かにアレ位強かつたら口裏合わせて正当防衛で納められそうやん」

「話していて心にも大分余裕が出来ていたからな…薔薇丸みたいに『弱い心』を知つて人ならば是非ともトレーナーになつて欲しいのだが、タマはどう思う？」

「…ええんとちやうか？ 本人の気持ち次第やろうけど、ウチも『ああいう人』がトレーナーやつてくれるんなら面白そうやと思ふけどな」

「タマはキンちゃんみたいに『弱い心を克服した強い人』が好きだからな 薔薇丸の事も気に入つてくれると思つたよ」

「まあ…せやな ウチかて負けん気を皆が評価してくれとるけど、これでもナイーブな乙女心持つとんねん 心を奮い立たせる事の大変さは分かつてるつもりやし、それが出来るヤツはイケ好かんヤツだろうと尊敬に値すると思つてるよ」

「…そんな強いタマが私もキー坊も大好きなんだ 改めて、今日は一緒に出掛ける事が出来て良かったよ」

オグリから向けられた真つ直ぐな親愛に電車へ乗り込む前と同様の気恥ずかしさを覚えたタマは視線を景色に移し、話題を変える事に決めた。

「……オグリん 景色も代り映えせん様になつたし、次は海にでも行つて見んか？」
「えっ!? タマも分かつてるだろ? 私は泳ぎは得意じゃ……」

「分かつとる、海で泳ぎたいワケやないって ただ…何となく“夏の終わりの海”を見
たくなつただけや」

「…分かつた ちよつと待っていてくれ、今から海に行けるルートを探してみよう」

自身の口から出た思い付きに嫌な顔一つせず親友に携帯を使って路線変更のルートを探
すオグリの姿に一抹の申し訳なさを感じながらもそれ以上の喜びに包まれたタマの口
角は再び上がり始め、それを隠すように再び電車から覗く景色に視線を移すのであつ
た。

回転寿司屋へ行こう

「タマ、今から五皿何注文するが：何が食いたい？」

「うーん：光り物頼もうかと思つたけど、今んとこウチは茶碗蒸しだけでええよ」

「分かつた サイドメニュー頼んどくんで適当に摘まんでくれ」

その言葉と共に店内に備え付けられていたタブレットを操作したのは宮沢熹一。

現在、彼は友人である「白い稲妻」タマモクロスと共に回転寿司での食事の最中であったが、そもそも彼らが本日一緒に居た理由とは――

「大体、オグリんといいアンタ等兄妹はウチの事遊びに誘い過ぎなんちゃうん？」『アクション映画の新作見に行こう』なんていきなり言われても普通、こつちにも予定つてモンがあるやん」

「無いから付き合ってくれたんやないんかい ワシもオグリもタマが『行きたくない』言うたら『分かつた』の一言で他のヤツ誘うつちゆうねん」

「それはそれで『ウチ以外のヤツ誘うんかい』つてビミョーな気分になるやんか そういうフクザツな乙女心いうのをアンタ等二人共理解しとらんやろ」

「(メンドクサイのオ)：そうか」

「顔！ その『メンドクサイ』って顔やめろや！ そんなんやから女の子にモテへんのやぞー!!」

「わーっとるわい タマは相変わらずお袋おかんみたいな事言つとんな……」
「誰がオカَنْじャコラア!!」

二人にとつては「何時ものやりとり」を繰り広げているとテーブルから注文したサイドメニューが届く予告音が鳴り、その瞬間に言い争いをやめた二人が手際良く届いた料理をテーブルに並べて手に取り始めた。

「パク……で？ 今日は何で『映画鑑賞』なんや？ 気晴らしに見る分にはええけど、キー坊はあんま映画館行かないタイプやろ」

「タマ、お前映画終わりのクレジットが英語やつたら見いひんタイプやろ……見ろや！
『アクション監修』の一覧に『K I I C H I M I Y A Z A W A』って載つとるやんけ!!」

反応の悪さに業を煮やした熹一が購入していたパンフレットをテーブルに広げて指を指したので食べていた茶碗蒸しを横に置いたタマが覗き込むと、そこには確かに熹一の名が表記されていたのだった。

「うわ……マジやん 昔、『夢はアクションスター』や言うとつたアンタが映画の仕事しとつたんか……まだ諦めとらんかったんやな」

「昔の話は蒸し返さんでエエ 少し前に外国行ってアクション監督と知り合いになつてな…少しの間、撮影に関わったんで名前を載せてくれただけなんやが…どうやった?’」

「…役者さんの中にウマ娘のヒトもおったけど、〃空中でジャンプ〃してたシーン…アレ〃ガチ〃なん?’」

「せやで ワシがやってたの見て『私もやりたいです!』言うたから思わず熱入れて指導したんやが…めっちゃ才能に溢れたヒトでな、コツを掴んでからはワシより高く跳んだとったわ」

「…普通のヒトも映画途中で結構な人数が〃壁走り〃やってたな アレは…」

「日本の俳優も何人か素でやっとなのは知つとったからな ワシが『わざわざワイヤー使うんか?』って〃実例〃を見せて質問したら皆やる気になって出来るまで指導したんで監督から『経費削減できた』って褒めて貰えたんや」

《09番テーブルにご注文の品が届きました》

笑う煮一の声と店内に響く他の客への呼び出し音を聞きながらタマは深い溜息を吐くとテーブルに並べられた唐揚げをつまようじで一つ刺し、それを目の前の男に突き付けながら質問する。

「それは〃灘の動き〃を教えたんか?’」

「いや、あくまで〃身体の使い方〃を教えただけや 下手に〃実戦的〃な動き方を学ん

でも逆にパフォーマンスが落ちるからな」

「…なら、ええわ アンタが考え無しに武術を広めるなんてアホな事やらかしのやつたらウチが静虎のオツチャンの代わりに説教したる思ったけど…杞憂やったな」

《09番テーブルにご注文の品が届きました》

その言葉と共に唐揚げを口にしたタマに熹一は不敵な笑みを見せ、彼女に倣って自身も唐揚げを一つ頬張った。

「ワシかてそないアホな事せんわ 『半端な暴力』を齧ったヤツ等の相手なんぞ、それこそ学生時代に飽きる程相手にして来たからのオ…自分からリスクを振りまくマネなんぞせえへんって」

「分かつとんならええねん 最近じゃアンタもマトモに喧嘩出来る相手が居らんで退屈そうに見えたからな、『魔が差す』って事もありえるかも思つて一応、聞いたんや 氣い悪くさせたら謝るわ」

「氣にすんなや 確かに満足いく喧嘩は最近ご無沙汰やがワシも中央での『今の立ち位置』には満足しとるんで迷惑を掛ける様なマネはせんから安心せえ」

《09番テーブルにご注文の品が届きました》

熹一の答えを聞いたタマは安心した様に再び茶碗蒸しに口を付け始めるも目の前の男は「何か」を求める視線を送っており、ウンザリとした視線を返す。

「…何やねん、ジロジロと」

「んな事より『映画の感想』やろ ほぼCG無しの大迫力アクションやで？ 面白かったやろ？」

「…アクション面は見応え十分やったな 『迫りくる刀を避けてのカウンター』や、燃え盛る炎からの大脱出』なんかをノースタントでやとったんなら、そら驚きやつたで？」

「せやろっ！」

「せやけど、話はオモロくないな よくあるB級ストーリーなんは目を瞑るけど何やねん 『二段ジャンプした後フツに降りて銃乱射』して『私の跳躍力を舐めないでよ』って アンタの話の聞いたたら 『やりたかった感』全開やんか せめて跳んでる時に銃撃つとくべきやん？」

「…せやな あん時はワシも含めて皆アドレナリンドバドバやったから気にせんかったけど、実際見てみるとおかしかったな……」

「後な、壁走りに関してやけど…主演はともかく 『一般人まで壁を走り出す』んはハッキリ言って異常やで？ デート中のカップルまでやりだすんで『いや、忍者ムービーかい？』って心の中で思わずツッコミ入れてしもうたやんか」

「…アレは壁走んのが現場でブームになつてな、誰が一番距離稼げんのか競つとった位

なんや 結果として監督が変なスイッチ入って『折角だから皆でやろう!』とか言い出したんでそのままって流れやったわ……」

「つまり、総評で言えば『笑えるバカ映画』やな」

《09番テーブルにご注文の品が届きました》

乞われた感想を言い終えると喉が渴いたのか茶をすすするタマを横目に熹一は目に見えてテンションが下がっており、それを見たタマは面倒そうに頭を搔くと一つため息を吐いた。

「…ま、役者さんが皆ええ顔で演技しとったのは良かったな キー坊アンタが教えた言う動きも堂に入ったモンやったし、前に稲垣イナナさんやブルさん指導してた時も思ったけど…やっぱアンタは人に物を教える才能がちよつとはあるんやないか?」

「…タマ お前ホンマ、エエ奴やなア」

「当ったり前やろ! せやから、そんなウチに敬意つちゆうモンを持ってココの支払いは頼んだぞ?」

「おうっ! 任しとけ…って、何時もワシはお前に奢ってやつとるやんけ」

「アホウ! いつもはアンタが勝手に『奢ってる』だけでウチが『奢らせる』となつたら心持ちが全然ちやうわ! こういうビミョーな乙女心に氣付かんからアンタは女の子にモテへんねん!!」

「わーっとるわい タマは相変わらずお袋おかんみたいな事言つとんな……つて」

「誰がオカンじゃコラ……つて」

「このやり取り、さつきもやつたな……」

先程と同じやり取りを行ってしまった事に気付いた二人は顔を見合わせて自嘲を込めた笑い声を上げた。

《09番テーブルにご注文の品が届きました》

「……喋つてたら何や、腹減つて来たのオ 今更やけどタマ、折角奢つたるんやしもつと高い物モン頼んでもエエんやぞ？」

「かまへんよ、下手に高い物モンばつか頼んでも腹痛くなんのがオチになりそうやしな キー坊かてそこら辺分かつてるから回転寿司コに連れて来たんやろ？」

「オグリと違つてお前は小食やしな 現役の時はコミちゃんおとんが栄養管理しとつたらしいが引退した今となれば自己管理せなアカンやん？ 親父おとんやお袋おかんも常々気にしとるがお前には栄養ある物食モンつて長生きして欲しいんや」

「……静虎のオツチャンは野菜中心のメニューばつかやし、アレはアレでウンザリするんやけどな……分かった、そこまで言うならキー坊おススメのヤツを注文してくれへん？」

「うっし！ せやつたらまずは低脂肪高タンパクの『タコ』から……いや、消化に悪いか

ら初つ端はマズイか　しゃあけど、タンパク質が多い魚言うと…ブリ、イワシ、ヒラメ…タマ、サーモンはイケるか？」

「勝手に注文してくれてええよ　キー坊アンタが選んだ物モノやつたら腹具合を無視して特別に全部食べたる　せやけど、ウチの事を　〴〵ムキムキにする気モが感じられる物モノやつたらスリッパで張つ倒すから覚悟せえよ？」

「……おうつ、そこは安心しとけや」

《09番テーブルにご注文の品が届きました》

そう言いつつも視線を逸らしながら備え付けのタブレットを操作し始めた熹一に『やれやれ』といった視線を向けて新たに淹れたお茶を啜るタマであったが、先程から〴〵気になっていた事コトを遂に訊く事にした。

《09番テーブルにご注文の品が届きました》

「キー坊…さつきから〴〵この席番マ呼ばれ過ぎなんちゃうん？　なんやスパンも早くなってるし」

「回転寿司言うても食いたい物は注文モンするしかないしな　しゃあけど、頼み過ぎやぞどこの〴〵大食いチャンプン〴〵やねん……あー……」

「……ウチ、〴〵心当たりンあんねん　行つてみるか？」

「…確認するだけ、してみるか」

◇◇◇◇◇

《09番テーブルにご注文の品が届きました》

「…来たか」

「お寿司は取っておくけどテーブルが埋まりそうだし、そろそろ店員さん呼ばないと……大丈夫？」

「ありがとう、ベルノ 私のお腹はまだまだ大丈夫だぞ」

「それは…分かつてる そうじゃなくてオグリちゃん、今度のレースの傾向の説明なんだけど…ちゃんと聞ける？」

「それも大丈夫だ、ちゃんと聞いてるぞ それよりベルノも何か注文しないか？ 私ばかりで申し訳ない気分になるんだが…」

「ううん、私は十分食べたし…それに、オグリちゃんを見てるとそれだけでお腹いっぱいになっちゃうよ」

「そうか？ それなら次の注文も私の食べたい物を頼むか……」

そう言って9番テーブルでタブレットを操作し始めたのは「怪物」と呼ばれたスターウマ娘…オグリキャップであり、共に来店して現在目の前に居た親友であるベルノライトの為に『何か甘い物でも頼もうか』と思案し始めた時であった…彼女等に「二つの人影」が近付いて来たのは――

「相変わらず、気持ちの工食いっぷりですなア：ワシも見てて幸せな気持ちになりま
すよ、タマさん」

「ホンマですねぇ、宮沢熹一サン ウチと違ってぎよーさん食えて体重を気にせんのか
から羨ましい限りですわ」

「イヤ、何でワシの事フルネームで呼ぶねん 壁作られてるみたいで気分が悪いやん」

「イヤイヤ、〃キー坊さん〃 呼んだら可笑しいやないか 〃ア○ネス・チャンさん〃 くら
い違和感バリバリやで？」

「お前、よりにもよってその例え出すんかい：ソレ言われたらワシ何も言えなくなるヤ
ツやんけ……」

「アホ、そこで『誰が 〃坊さん〃 じゃい』くらいの返しは見せんかい 全く、〃最強の男
〃 もギャグセンスはまだまだやな」

宮沢熹一とタマモクロス、オグリにとって大切な兄と友人が 〃漫才染みたやり取り〃
を行いながら現れたのである。

「キー坊にタマ、回^こ転^ん寿^な司^所屋^所で会うとは奇遇だな」

「おうっ！ ワシ等は映画帰りだな オグリとベルノちゃんは：勉強会か？」

「何や、ベルちゃんのタブレットはマジメな事しか書いてへんのにオグリんのは 〃次の
メニュー〃 しか書いてとらんやんか」

「いや、違うんだ二人共！ 私はベルノの話はちゃんと聞いていて……」

「そ、そうなんです！ 私だけ気分が焦っちゃって、オグリちゃんがご飯を食べてるのに勝手に話し始めちゃっただけで……」

「ぷっ……ハツハツハツハ！ 悪いのオ、二人共」

タマからの指摘に焦る二人のウマ娘の姿を熹一は笑い飛ばし、それを見て『からかわれたのだ』と気付いた二人は安心した様に溜息を吐く。

「イヤ、からかってスマンかったな お詫びと言ってはなんやけどさつきまでウチ等が行って来た映画の感想でも教えたるわ “アクション監修のやらかし”も添えてな」

「んなっ!? タマ、お前……」

「え？ 何の話なの？」

「……あれか？ キー坊がこの前『ようやく封切りやー!』と叫んでいた映画の事か？」

「あ、あのなオグリ……それ以上その話は……」

「オラアツ！（バシイン！）話の出来はともかく役者さんはイイ顔してた言うたやんか！ もちっと自信持てや!!」

こうして……まごつく様子を見せる熹一に業を煮やしたタマは彼の尻をスリッパで叩き、悶えるその様子を尻目に先程の映画鑑賞の感想をオグリとベルノの二人に話す事にした。

そしてそれを聞いた二人の驚きと笑い声が店内へ朗らかに響いたのであった。